

平成 26 年度提出
日本語文化学専攻
博士学位請求論文
(指導教授 田中 寛)

逆接構文における接続機能辞の体系的な研究

―「主観性」から見る逆接構文の成立をめぐって―

大東文化大学大学院外国語学研究科
日本語文化学専攻博士課程後期課程

学籍番号 12233102
名前 孫 宇雷

章立て目次

章立て目次.....	i
細目目次.....	iii
表目次.....	ix
図目次.....	ix
凡例.....	xii
序 章.....	2
1. 本研究の背景.....	2
2. 本研究の目的.....	4
3. 本研究の構成.....	4
第1章 先行研究の概観と課題、及び研究方法.....	7
1. 先行研究の概観と課題.....	7
2. 本研究の対象.....	13
3. 本研究の理論的モデル.....	13
第2章 条件系逆接構文成立の諸相	
—「テモ」系構文に見られる連続性—.....	23
1. 逆接を表す「モ」と係助詞の「モ」との連続性	
2. 「テモ」系構文の特徴.....	40
3. 「テモ」系構文の関連形式(1)	
—「トシテモ」「ニシテモ」「ニシロ」「ニセヨ」を中心に—.....	58
4. 「テモ」系構文の関連形式(2)	
—「ト(ハ)イッテモ」「トハイエ(トモ)」「カラトイッテ」を中心に—.....	79
5. 「テモ」系構文の関連形式(3)	
—「トモ・トモ」「Vウ・ヨト(モ)・デアロウト」「Vウ・ヨカガ・デアロウカ」「デアレ」を中心に—.....	94
第3章 事実系逆接構文成立の諸相	
—「ノニ」系構文の特徴—.....	114
1. 〈反期待〉を表す逆接構文	
—「ノニ」文の成立—.....	114
2. 〈不一致〉に対する非難を表す逆接構文	
—「クセニ」文の成立—.....	130
3. 〈共存的逆接〉を表す逆接構文	
—「カガラ(モ)」「ツツ(モ)」文の成立—.....	143

4. 〈反期待・再吟味・場面の切り替え・事態の変化〉を表す逆接構文 —「モノ」「モノヲ」「ヲ」「ガ」文の成立—	156
5. 〈既定価値を崩す〉逆接構文 —「トコロデ」「トコガ」「トコロ」文の成立—	169
6. 〈常識による推論〉との背反関係 —「ニモカワラス」文の成立—	185
第4章 条件系逆接構文と事実系逆接構文の用法と拡張	199
1. 条件系逆接構文の用法と拡張	199
2. 事実系逆接構文の用法と拡張	206
3. 条件系逆接構文と事実系逆接構文のまとめ	209
終章	212
1. 本研究のまとめ	212
2. 本研究の方法論についての成果と今後の研究課題	216
参考文献	218
用例出典一覧	227
論文初出掲載一覧	228
謝辞	229

細目目次

章立て目次.....	i
細目目次.....	iii
表目次.....	ix
図目次.....	ix
凡例.....	xii
序 章.....	2
1. 本研究の背景.....	2
2. 本研究の目的.....	4
3. 本研究の構成.....	4
第1章 先行研究の概観と課題、及び研究方法.....	7
1. 先行研究の概観と課題.....	7
1.1 複文の定義.....	7
1.2 複文の分類.....	7
1.2.1. 構造による分類.....	7
1.2.2. 意味関係による分類.....	8
1.3 逆接構文における先行研究.....	9
1.3.1 論理学からの研究.....	9
1.3.2 記述文法からの研究.....	11
1.3.3 前田(2009)『日本語の複文 条件と原因・理由文の記述的研究』.....	12
2. 本研究の対象.....	13
3. 本研究の理論的モデル.....	13
3.1 参照点モデル.....	16
3.2 Multiple Dominion Model.....	16
3.3 ステージモデル.....	18
3.4 本研究の展開.....	18
第2章 条件系逆接構文成立の諸相	
—「テモ」系構文に見られる連続性—.....	23
1. 逆接を表す「モ」と係助詞の「モ」との連続性.....	23
1.1 はじめに.....	23
1.2 「モ」に関する先行研究の検証.....	24
1.2.1 並列の「モ」.....	27
1.2.2 全面肯定・全面否定.....	28

1.2.3 極端提示.....	28
1.2.4 程度量型の「モ」	29
1.2.5 打ち消しを強める「モ」	31
1.2.6 慣用フレーズに現れる「モ」	31
1.2.7 取り立ての「モ」からの拡張.....	31
1.2.8 接続助詞として用いられる「モ」	32
1.3 実例による考察.....	33
1.3.1 「継起的逆転」	34
1.3.2 「継起的転換」	35
1.3.3 「心的世界」と「現実世界」の対立.....	35
1.3.4 量的表現との共起.....	37
1.4 結語.....	37
2. 「テモ」系構文の特徴.....	40
2.1 はじめに.....	40
2.2 「テモ」に関する先行研究の検証.....	40
2.2.1 「条件づけ」と「対立」	40
2.2.2 「テモ」の論理的分析	42
2.2.3 条件の唯一性を否定する「テモ」	45
2.2.4 「テモ」の記述的な展開.....	46
2.2.5 接続語句成分「ソレデモ」	51
2.3 実例による考察.....	52
2.3.1 慣用表現.....	53
2.3.2 文末モダリティ.....	54
2.3.3 指示詞・不定語との共起.....	54
2.3.4 文末省略用法	55
2.4 結語.....	56
3. 「テモ」系構文の関連形式(1)	
—「トシテモ」「ニシテモ」「ニシロ」「ニセイ」を中心に—	58
3.1 はじめに.....	58
3.2 「トシテモ」に関する先行研究の検証.....	58
3.2.1 反事実的用法	58
3.2.2 仮説的用法.....	60
3.2.3 非仮定的用法	63
3.3 「ニシテモ」に関する先行研究の検証.....	64
3.3.1 認識の再注釈	65
3.3.2 後件の例証.....	65
3.3.3 「ニシテモ」の関連形式.....	67
3.3.4 「ソレニシテモ」	67

3.4 実例による考察.....	68
3.4.1 「トシテモ」の実例による考察.....	68
3.4.2 「Vウ・ヨウトシテモ」.....	69
3.4.3 「ニシテモ」.....	70
3.4.4 接続語句の「ニシテモ」.....	72
3.4.5 「ニシロ」・「ニセヨ」.....	74
3.5 結語.....	76
4. 「テモ」系構文の関連形式 (2)	
—「ト(ハ)イッテモ」「トハイ(トモ)」「カラトイッテ」を中心に—.....	79
4.1 はじめに.....	79
4.2 「ト(ハ)イッテモ」と関連形式に関する先行研究の検証.....	79
4.2.1 「トイッテモ」文の特徴.....	79
4.2.2 「トハイエ」文の特徴.....	81
4.2.3 「カラトイッテ(モ)」文の特徴.....	83
4.2.4 「ト(ハ)イッテモ」「カラトイッテ(モ)」「トハイエ」の連続性.....	85
4.3 実例による考察.....	85
4.3.1 「トイッテモ」の文末に見られる留保的表現.....	86
4.3.2 「カラトイッテ」文に見られる文末否定.....	88
4.3.3 「トハイエ」.....	89
4.4 結語.....	92
5. 「テモ」系構文の関連形式 (3)	
—「トモ・ドモ」「Vウ・ヨウト(モ)・デアウト」「Vウ・ヨウガ・デアウガ」「デアレ」を中心に—.....	94
5.1 はじめに.....	94
5.2 先行研究の検証.....	94
5.2.1 不定語との共起.....	95
5.2.2 反復用法.....	97
5.2.3 非不定語・反復用法の場合.....	100
5.3 実例による考察.....	104
5.3.1 反復表現.....	104
5.3.2 不定語との共起.....	109
5.3.3 「タトエ」との共起.....	110
5.4 結語.....	110

第3章 事実系逆接構文成立の諸相

—「ノニ」系構文の特徴—.....	114
1. 〈反期待〉を表す逆接構文	
—「ニ」文の成立—.....	114
1.1 はじめに.....	114

1.2 先行研究の検証.....	114
1.2.1 逆原因・理由文.....	115
1.2.2 不本意な事態が生み出される状況.....	118
1.2.3 予想外をあらわす場合.....	119
1.2.4 非並列・対照.....	120
1.3 実例による考察.....	121
1.3.1 話者の捉え方への再考察.....	122
1.3.2 言いさしの「ノニ」.....	124
1.3.3 接続語句「ナノニ」、「ソレナノニ」.....	124
1.4 結語.....	128
2. 〈不一致〉に対する非難を表す逆接構文	
—「クセニ」文の成立—.....	130
2.1 はじめに.....	130
2.2 先行研究の検証.....	130
2.2.1 「クセニ」の間主観性.....	130
2.2.2 前件と後件の主語の一致.....	132
2.2.3 対比的逆接を表す「クセニ」.....	133
2.3 実例による考察.....	134
2.3.1 〈不一致〉の多様性.....	134
2.3.2 否定的累加関係.....	139
2.3.3 倒置・省略用法.....	140
2.3.4 「クセシテ」に関する考察.....	141
2.4 結語.....	141
3. 〈共存的逆接〉を表す逆接構文	
—「ナガラ(㊦)」「ツツ(㊦)」文の成立—.....	143
3.1 はじめに.....	143
3.2 先行研究の検証.....	143
3.2.1 「ナガラ」の共存性.....	144
3.2.2 「ナガラ」文に含意される予想.....	144
3.2.3 同時性と不相応性.....	145
3.2.4 「ナガラ A」と「ナガラ B」.....	146
3.3 実例による考察.....	148
3.3.1 対比的逆接に多用される「ナガラ」.....	149
3.3.2 後件を際立たせる「ナガラモ」.....	150
3.3.3 「ナガラ」のほかの関連形式.....	152
3.3.5 「ツツ」と「ツツモ」.....	154
3.4 結語.....	154
4. 〈反期待・再吟味・場面の切り替え・事態の変化〉を表す逆接構文	

—「モノ」「モノヲ」「ノ」「ガ」文の成立—	156
4.1 はじめに	156
4.2 先行研究の検証	156
4.2.1 「モノノ」の意味機能	156
4.2.2 「モノヲ」	158
4.2.3 「ノヲ」	158
4.2.4 「ノガ」	159
4.3 実例による考察	159
4.3.1 「モノノ」	160
4.4.2 「バ」と共起しやすい「モノヲ」	164
4.4.3 場面の切り替えが表せる「ノヲ」	164
4.4.4 場面の対比、転換を表す「ノガ」	165
4.4 結語	166
5. 〈既定価値を崩す〉逆接構文	
—「トコロデ」「トコガ」「トコロ」文の成立—	169
5.1 はじめに	169
5.2 「トコロ節」に関する先行研究の検証	169
5.2.1 「トコロデ」文の特徴	169
5.2.2 「トコロ」の認知言語学的アプローチ	171
5.2.3 田中(1996,2004)による「トコロ節」の連続性について	176
5.3 実例による分析	177
5.3.1 「トコロデ」	178
5.3.2 「トコロガ」	181
5.3.3 「トコロヲ」	182
5.4 結語	183
6. 〈常識による推論〉との背反関係	
—「ニモカカラズ」文の成立—	185
6.1 はじめに	185
6.2 「ニモカカラズ」に関する先行研究の検証	186
6.2.1 〈常識による推論〉に基づいた背反関係	186
6.2.2 複雑文脈における「ニモカカラズ」	187
6.2.3 慣用表現への拡張	188
6.2.4 第三者の期待そのものが前件として現れる場合	188
6.3 実例による考察	190
6.3.1 不利条件の無効	190
6.3.2 常識の顕在化標識	192
6.3.3 事態と事態のつながり	194
6.3.4 接続語句としての用法	194

6.3.5 関連表現「トイウノニモカカワラズ」と「ニモカカワラズ」	196
6.4 結語	196
第4章 条件系逆接構文と事実系逆接構文の用法と拡張	199
1. 条件系逆接構文の用法と拡張	199
1.1 同類を示す「モ」から周辺の用法の「モ」への拡張	199
1.2 「モ」から「テモ」への拡張	200
1.2.1 同類を示す「モ」から同類・同類条件を示す「テモ」への拡張	200
1.2.2 対立、逆条件、並列逆条件、無条件の「テモ」への拡張	201
1.3 反復用法から並列系の「テモ」関連形式への拡張	202
1.4 量的表現と共起する「モ」から注釈系への拡張	203
1.5 「テモ」文における条件IDの拡張	205
2. 事実系逆接構文の用法と拡張	206
2.1 「ノニ」、「クセニ」の用法の関り合い	207
2.2 事実系逆接構文の拡張	208
3. 条件系逆接構文と事実系逆接構文のまとめ	209
終章	212
1. 本研究のまとめ	212
2. 本研究の方法論についての成果と今後の研究課題	216
参考文献	218
用例出典一覧	227
論文初出掲載一覧	228
謝辞	229

表目次

表 1 逆接機能辞に関する先行研究.....	12
表 2 取り立ての「モ」とその拡張用法.....	38
表 3 逆接の「モ」文の多様性.....	38
表 4 田中(2004)による「テモ」の記述的研究（形式は筆者による）.....	47
表 5 「テモ」文とその特徴.....	56
表 6 「トシテモ」文とその特徴.....	77
表 7 「ニシテモ」文と関連形式の特徴.....	78
表 8 「ト（ハ） イッテモ」文と関連形式の特徴.....	93
表 9 「トモ・ドモ」文と関連形式の特徴.....	112
表 10 「ノニ」文とその特徴.....	129
表 11 「クセニ」文とその特徴.....	142
表 12 「ナガラ（モ）」「ツツ（モ）」文とその特徴.....	155
表 13 「モノノ」「モノヲ」「ノヲ」「ノガ」文と関連形式の特徴.....	168
表 14 「トコロデ」文と関連形式の特徴.....	184
表 15 「ニモカカワラズ」文とその特徴.....	197

図目次

図 1 参照点構造(Langacker 1993:6)	16
図 2 Multiple Dominion Model（尾谷 2003:87）.....	17
図 3 「ノデ」のスキーマ.....	17
図 4 「ケド」のスキーマ.....	17
図 5 Langacker のステージモデル.....	18
図 6 「ケド」の主体化過程（尾谷 2003:92）.....	19
図 7 取り立ての「モ」のスキーマ.....	25
図 8 意外の「モ」への拡張.....	26
図 9 並列の「モ」のスキーマ.....	27
図 10 「血モ涙モない男」の図示.....	28
図 11 極端提示の「モ」のスキーマ.....	29
図 12 過大評価への控えの「モ」.....	30
図 13 取り立ての「モ」からの拡張.....	32
図 14 前件 R と後件 T が対立する「モ」文.....	33
図 15 前件 R と後件 T の間接的に対立する「モ」文.....	33
図 16 継起的逆転を表す「モ」.....	34
図 17 継起的転換を表す「モ」.....	35
図 18 「心的世界」と「現実世界」の直接的対立.....	36

図 19 「心的世界」と「現実世界」の間接的対立.....	36
図 20 量的表現と共起する「モ」(逆接の場合)	37
図 21 「テモ」文のステージ・モデル.....	41
図 22 「テモ」文に見られる後件志向性.....	42
図 23 同類を表す「テモ」	43
図 24 同類かつ逆接の「テモ」	44
図 25 同類ではない逆接の「テモ」	44
図 26 同一世界における意味的な肯定・否定の逆接.....	45
図 27 「テモ」文におけるプロトタイプからの拡張.....	46
図 28 条件の競合性.....	49
図 29 「トシテモ」の文例図示.....	49
図 30 「ニシテモ」の文例図示.....	50
図 31 過大評価への控えとしての「トイッテモ」	50
図 32 「ト(ハ) イッテモ」の参照点モデル.....	51
図 33 「テモ」と関連形式の使用調査.....	52
図 34 反事実用法の「トシテモ」	60
図 35 「逆条件→条件→結果」構造(条件の競合性)	62
図 36 「トシテモ」の仮説的用法.....	63
図 37 「トシテモ」のスキーマ.....	64
図 38 「ニシテモ」による〈認識の再注釈〉	65
図 39 無条件例証の「ニシテモ」	66
図 40 「トシテモ」「ニシテモ」と関連形式の使用調査.....	68
図 41 「ニシテモ」文における前後件の程度差($R < T$)	71
図 42 「ニシテモ」文における前後件の程度差($R > T$)	71
図 43 「ト(ハ) イッテモ」のスキーマ.....	80
図 44 追加注釈の場合.....	81
図 45 Rのフレーム(ID)を超過するTの「トハイエ」	82
図 46 「カラトイッテ」のスキーマ.....	84
図 47 「トイッテモ」のスキーマ.....	85
図 48 「トイッテモ」の関連形式の使用調査.....	86
図 49 不定語+「Vウ・ヨウガ」のスキーマ.....	96
図 50 不定語+「Vウ・ヨウト」のスキーマ.....	97
図 51 列挙条件の場合.....	99
図 52 肯定・否定反復条件の場合.....	100
図 53 「ヨウト」「ヨウガ」と関連形式の前後件関係.....	103
図 54 「トモ」関連形式の使用調査.....	104
図 55 継起的事態の逆原因・理由文.....	116
図 56 非継起的事態の逆原因・理由文.....	118

図 57 不本意な事態が生み出される状況.....	119
図 58 顕在化された期待.....	120
図 59 非並列・対照.....	121
図 60 「ノニ」の使用調査.....	121
図 61 「クセニ」の使用調査.....	134
図 62 身分と相応しくない振る舞い.....	135
図 63 内と外の不一致.....	137
図 64 時間軸における前後不一致.....	138
図 65 否定的累加関係を表す「クセニ」.....	140
図 66 「ナガラ」文の継起的前件と後件.....	145
図 67 「ナガラ (モ)」「ツツ (モ)」の使用調査.....	148
図 68 「ナガラ (モ)」「ツツ (モ)」の関連形式の使用調査.....	148
図 69 内と外の対立 (一例).....	149
図 70 「モノノ」「モノヲ」「ノヲ」「ノガ」と関連形式の使用調査.....	159
図 71 逆接の「トコロ」文のステージ・モデル.....	172
図 72 既定価値 (因果関係) の否定.....	173
図 73 既定価値の変化.....	173
図 74 事態の自然な進展が遮られる「トコロヲ」.....	174
図 75 本来の様子から逸脱する結果を表す「トコロヲ」.....	174
図 76 継起的事態 R と T の逆接を表す「トコロガ」.....	175
図 77 予想と現実の異なりを表す「トコロガ」.....	175
図 78 田中(2004)「トコロ」「トコロガ」「トコロデ」.....	176
図 79 田中(2004)「トコロヲ」.....	177
図 80 「トコロデ」「トコロガ」「トコロヲ」と関連形式の使用調査.....	177
図 81 「ニモカカワラズ」文のスキーマ.....	185
図 82 複雑な文脈における「ニモカカワラズ」.....	187
図 83 「ニモカカワラズ」のスキーマ.....	190
図 84 「ニモカカワラズ」の使用調査.....	190
図 85 不利条件の無効を示す「ニモカカワラズ」のステージモデル.....	192
図 86 同類を示す基本用法の「モ」と拡張用法.....	199
図 87 並列系への拡張.....	202
図 88 注釈系への拡張.....	205
図 89 条件 ID の拡張.....	206
図 90 「ノニ」「クセニ」の用法の関り合い.....	207
図 91 事実系逆接構文の拡張.....	209

凡例

- ? 非文ではないが、日本語母語話者から見ると、不自然な文、あるいはおかしい文と見受けられる。
- ?? 非常に不自然な文で、非文に近いもの。
- * 文法的に非文であることをあらわす。
- # 当該文脈から逸脱した意味をあらわす。

~~~~~ 実例、作例を問わず、例文はすべて分析対象となる箇所に波線“~~~~~”を引く

——> 志向性（常識による推論、あるいは期待に沿った結果）

-----> 認知プロセス

R 参照点（複文研究における前件）

T ターゲット（複文研究における後件）

lm ランドマーク（複文研究において先行する文）

tr トラジェクター（複文研究において先行する文と呼応する後件）

MDM Multiple Dominion Model（逆接構文研究に用いる理論モデル）

ID Identity Dominion（領域）

# 序 章

## 序章

### 1. 本研究の背景

文を大局的にとらえた場合、一語文、単文、複文、重文といった分類が一般的に考えられる。文をどのようにとらえるかは、従来から文法研究の一大テーマでもあり、そのなかでそれぞれの文法事象をめぐって多くの研究が営まれている。現代日本語の複文についても、様々な角度から研究がすすめられてきた。たとえば、ある対象を記述、紹介した文章にはさまざまな文の単位の集合とすることができる。次の文章をみてみよう。

植物性乳酸菌は野菜や穀物など植物の醗酵に関わる乳酸菌のことで、生物学的にはヨーグルトなどの動物性乳酸菌と同じです。日本人は昔から漬物や味噌などを日常的に食べており、これらの醗酵食品にいる乳酸菌はすべて植物性乳酸菌です。それゆえ日本人にとって植物性乳酸菌は、なじみの深い乳酸菌といえるでしょう。植物性乳酸菌は、動物性乳酸菌と比べ、苛酷な環境を生き抜いてきた力強い乳酸菌であることも大きな特徴です。植物には乳酸菌の栄養になる成分も含まれていますが、一方で乳酸菌の成育を阻害する成分も含まれています。動物性乳酸菌が存在する牛乳などの環境と比べ、生存する環境としてはとても苛酷です。また、植物の環境は決してひとつではありません。植物の種類が異なれば、含まれる成分も異なり、その環境は多岐にわたります。したがって、醗酵している植物からさまざまな個性ある乳酸菌が見つかるのも植物性乳酸菌の特徴といえます。お米に由来した乳酸菌は、お米の環境に適合して生きてきた乳酸菌です。そのような植物性乳酸菌は、昔からお米を主食とする日本人にとっても相性が良いといえるでしょう。(『世田谷自然食品』より抜粋)

このような文章を理解する大きな手掛かりは、順接か、逆接か、という視点であろう。上例の文では「ており」、「それゆえ」、「が」、「一方で」、「また」、「したがって」などといった接続成分、接続詞句によって、あるいは文の前後の意味関係によって、文は接続という連鎖を多岐可能にし、全体的な意味を構成していく。

本研究は、複文を逆接という大枠でとらえ、前件と後件の意味的關係から生ずる逆接の構造について、主観性という側面から、認知言語学的手法を援用しながら体系的な考察を試みるものである。

「逆接」という定義について、先行研究には、「当然予想される事態の不成立」(渡辺 1971:285)、「ナチュラルなロジックとのズレ」(西原 1985:28)、「前件に対して後件が順当でない結果」(加藤 2001:53)、「何かぶつかるような感じ」(角田 2004:36)などの論点が挙げられる。他にも、加藤(1999:33)は、見解・評価の対立、前件内容に対する批判、主眼点の提示、疑念(未解決意識)などの逆接の表し方を提示し<sup>1</sup>、逆接の多様性を示している。しかし、逆接という用語の内在大きく多様な意味の考察は、視点や角度から、流動的な現状は否めない。逆接の内包する意図、意味機能についてはより詳細な研究が求められる。

本研究は現代日本語の複文のうち逆接構文における接続機能辞を研究する。田中(2014:2)では、機能辞とはそれ自身は実質的な意味を持たず、ある実質的な内容成分に後接して、話者の何等か

の感情、心理、思考判断、伝達などの自他への働きかけを有するものである。田中(2014)は、機能辞の接続成分の中核となる成分に注目し、それを接続機能辞として捉えている。接続機能辞とは、論理の中に潜む意味的關係に現れる接続成分である。

接続機能辞について、石黒(2008:30-31)は、その選択が客観的な論理で決まるものではなく、書き手の主観的な論理で決まることを暗示していると指摘している。加藤(2001:47-48)によれば、接続機能辞は、「intra-sentential な要素ではなく、inter-sentential な、あるいは inter-textual な要素である以上、語用論的な観点から分析することで初めて有効な分析となると考えるべきである」とし、また、「前件と後件の論理關係はそれらの意味關係による制限はあるものの、前件と後件の内在的な、本質的な論理關係は予め定まっているのではなく、両者をどう關係づけるかという話者の認識を反映したものであるということである」としている。

以上のことは、例 1)、2)を以って説明が可能である。

- 1) この商品は質が良いカラ、値段が高い。
- 2) この商品は質が良いケド、値段が高い。 (加藤 2001:53)

例 1)、2)のように、「商品は質が良い」と「値段が高い」との関連づけには、話者の認識を反映されている。例 1)では、一般的なものと質が良いものと比べると、「質が良いものは値段が高い」と理解できる。例 2)では、「質が良いから買いたいけれど、値段が高いから手が出せない」、といったような思考の帰結過程が示されている。

このように、接続機能辞は、前後件の関連づけにおける話者の認識が反映されているといえるだろう。しかし、話者の認識に基づいた関連付けといっても、完全に恣意的なわけではない。例 3)のように、前件と後件とは関連付けられない二つの項目と見受けられる場合、非文となる。

- 3)\* 私は犬が好きダケド、彼女はカレーを食べている。 (尾谷 2003:86)

尾谷(2003:86)は、一つの文として連結する以上、前件と後件で全く無関係なことを述べているような文同士を連結させることはできなく、接続機能辞は、何かしら関連のある話題が展開されるだろう、という想起を助ける機能を持っているとしている。そこで重要になってくるのが、想起關係である。また、想起關係に基づくとっても、接続機能辞はそれぞれ固有の想起關係を有している、とする。

- 4) お腹が痛いノデ、{\*頑張ります／休んでもいいですか？／休みます。}
- 4-a) お腹が痛いケド、{頑張ります／\*休んでもいいですか？/\*休みます。} (尾谷 2003:86)

例 4)のように、「ノデ」から、「休みます」は想起されるが、「頑張ります」は想起されない。例 4-a)では、「ケド」から、「頑張ります」は想起されるが、「休みます」は想起されない。したがって、例 4)と例 4-a)は、話者の認識の反映といっても、完全に恣意的なものではなく、石黒(2008)の「主観的な論理」にも、論理が理解の背景となっていることがわかる。



文接続の論理の記述を体系的に検討している先行研究として、前田(2009)が挙げられる。前田(2009)は、レアリティの考察から、論理文を、条件、原因・理由文の角度で体系的に記述している。逆接を、逆条件と逆原因に分けて、「テモ」、「ノニ」、そして「その他」として、「タッテ」「トシテモ」「トコロデ」「ヨウトモ」「ヨウト」「ヨウガ」「クセニ」を考察している。本研究は、前田(2009)の分類を踏まえ、さらに逆接構文を条件系逆接構文(「テモ」系)と事実系逆接構文(「ノニ」系)に分けて、逆接の論理を主観性の視点から体系化した記述を試みたい。

## 2. 本研究の目的

本研究は逆接構文における接続機能辞を体系的に取り上げ、主観性の角度から逆接の成立を考察し、逆接の論理を究明しようとするものである。具体的な研究の目的は、以下の通りである。

- I. 逆接の成立を検討する。先行研究における「ナチュラルなロジックとのズレ」、「前件に対して後件が順当でない結果」、「何かぶつかるような感じ」といった定義を検討し、逆接が成立する理由、逆接の種類を考察する。
- II. 逆接構文における接続機能辞を体系的に分析する。逆接構文を条件系と事実系に分けて、考察をする。具体的には逆条件の「テモ」とその関連形式、逆原因の「ノニ」とその関連表現を取り上げて検討する。「テモ」文と「ノニ」文の前件・後件の関連づけを明らかにし、文の裏に存在する逆接の論理を分析し、体系化する。
- III. 条件系逆接構文における主観性を考察する。話者の捉え方、話者の認識及び話者の志向性の面から、条件系逆接構文の成立、特徴、前後件関連付けの論理を見出す。
- IV. 事実系逆接構文における主観性を考察する。話者の捉え方、話者の認識及び話者の志向性の面から、事実系逆接構文の成立、特徴、前後件関連付けの論理を見出す。

## 3. 本研究の構成

本研究は全5章から構成される。以下、概略する。

第1章では、先行研究を概観し、逆接構文研究の流れを概観する。逆接構文の記述的研究は数が多いので、表にして要約する。次に、本研究の理論モデルや関連概念を詳細に説明し、さらに実際の例を挙げながら、逆接構文における理論モデルの適用性を証明する。

第2章と第3章は構文分析である。本研究は、論理文の中で逆接機能辞を考察することを目的とし、前田(2009)を参照しながら、逆接論理文を「テモ」系と「ノニ」系に分けて考察する。前田(2009)は、レアリティという観点から、「テモ」は「逆条件」、「ノニ」は「逆原因」を表すとしている。本研究は、この論を踏まえて、「テモ」系の「条件系」、「ノニ」系を「事実系」と見なして分析する。

第2章では、「逆接の成立」という問題を取り上げる。まず、第1節で、古典日本語から発展してきた逆接の「モ」に着目し、「モ」の分析から逆接の論理を問い、逆接の成立を検討し、議論を展開する。第2節では、現代日本語「モ」の拡張用法としての「テモ」文を取り上げて考察する。それから、「テモ」文の関連形式を、第3、4、5節で取り上げて考察する。第3節では、「トシテモ」、「ニシテモ」、「ニシロ」、「ニセヨ」及び関連形式「Vウ・ヨウトシテモ」、接続語句「イズレ

ニシテモ」、「ドチラニシテモ」を分析する。第4節では、「ト(ハ) イッテモ」「カラトイッテ(モ)」「トハイエ」と関連形式「トイエドモ」を取り上げて見る。第5節では、「トモ・ドモ」と関連形式の「Vウ・ヨウト(モ)/デアロウト(モ)」「Vウ・ヨウガ/デアロウガ」、「デアレ」を考察する。

第3章は「ノニ」系の前件と後件の意味的特徴について分析する。「ノニ」系では、前件・後件共に事実となるのが一般的である。第1節では、主観性が現れる「ノニ」文を考察する。また、「ノニ」の接続語句的表現「ナノニ」「ソレナノニ」、「トイウナノニ」も取り上げて分析する。第2節では、「ノニ」から一歩進んで、主観性が強く読み取れる「クセニ」を分析し、「クセニ」と関連して「クセシテ」も考察してみる。第3節で「ナガラ(モ)」「ツツ(モ)」を分析する。関連表現として、「トイイナガラ」も取り上げる。第4節では、「モノノ」「モノヲ」「ノヲ」「ノガ」を取りあげ、関連形式として、「トイウモノノ」も検討する。第5節では形式名詞「トコロ」を用いた語形式「トコロデ」「トコロガ」「トコロヲ」を取り上げる。また、関連形式として、「トシタトコロデ」「ニシタトコロデ」「トイッタトコロデ」も考察する。第6節では、「ニモカカワラズ」を検討する。

第4章では、「テモ」系構文と「ノニ」系構文の全体像を考察し、逆接の成立および逆接機能辞の体系的分析をまとめて説明する。まず、「テモ」系を中核の「モ」からの拡張、「テモ」文から関連形式への拡張を示す。「テモ」文の関連形式を〈並列系〉、〈注釈系〉、〈逆条件ID拡張〉の三部に分け検討する。「ノニ」系構文は、「ノニ」から「クセニ」へ、さらに「ナガラ(モ)/ツツ(モ)」、「モノノ/モノヲ/ノヲ/ノガ」、「トコロデ/トコロガ/トコロヲ」、「ニモカカワラズ」への拡張を示す。そして条件系逆接構文と事実系逆接構文の特徴を明らかにし、まとめる。

終章では、結論と今後の課題を述べる。本研究は「テモ」系、「ノニ」系構文を考察し、関連形式や表現の連鎖性を意味拡張の形式で示した。これに対し、周辺の・個別的な形式は取り上げていなかった。それらについての課題をまとめて別稿準備中であることも示す。

---

[注]

1.見解・評価の対立:事柄と事柄の間自体には相反関係が存在しない。背後にある意味的志向のレベルで両者は対立している。

前件の内容に対する批判:前・後件が対立するというよりも、前件の内容に対する批判が、後件で展開される。

主眼点の提示:前・後件に同一評価を持ち表現が来ている。しかし、筆者がもっとも言いたいものが後に述べられる、などのような場合。

疑念(未解決意識):前件だけでは課題の解決・理解に十分ではないとする、いわば未解決意識がストレートに反映している用法である。

## 第1章

### 先行研究の概観と課題、及び研究方法

## 第1章 先行研究の概観と課題、及び研究方法

### 1. 先行研究の概観と課題

まず、複文の定義、分類、逆接構文における先行研究について概観する。

#### 1.1 複文の定義

寺村(1981)は、「(単)文」を単一の述語(動詞、形容詞、名詞+ダ)を中心にいくつかの補語が結びつきそれにいろいろな補助形式が(任意的に)後接し、活用形で終わって、それ全体が一つのまとまった叙述内容を表しているものと規定し、それらがそこで言いきりならず、いくつかつながっているものを「複文」と呼ぶこととしている。益岡(1997)は簡潔に「複文」を述語中心として組み立てられる構造体が複数個存在する文、即ち、述語を中心としたまとまりが二つ以上集まって構成された文と定義している。森山(2000)はさらに、複文の指示範囲について、複数の出来事によって構成されている文を広く「複文」と呼ぶとして、「彼は泣きながら歩いた」のような文もあるから、複数の述語がある文というべきかもしれない点と、複文には、「昨日は雨も降ったし、雪も降った」のような並列構造のものもある点を指摘している。野田(2002)は「節」を、複文を構成する、述語を中心としたまとまりと再定義して、単文と複文を本質的に違うものではなく、単に、文に近い形をしている部分を含んでいるかどうかが違うだけと述べ、単文と複文の関係はもっとも単文らしい単文から複文らしい複文までさまざまな段階があり、連続していると主張している。高橋(2003)は、「節」という言い方を引用し、二つ以上の節で組み立てられた文を合わせ文(複合文)といい、二つ以上の節が対等に参加していく組み立てられた合わせ文を重文(重ね文、並べ合わせ文)というのに対して、主節(主文)と付添節(付添文、従属節、従属文)とから組み立てられた合わせ文を複文(付添合わせ文)という。その後、日本語記述文法研究会(2008)も単文と複文との連続性を強調している。

これらに対し、前田(2009)は、「複文」を構成する単文にはいわゆる「一語文」が入らないことから、それを単独で文として扱われる「単文」の間には大きな違いがあると指摘し、複文とは「(一語文ではなく)述語を中心に構成される述語文(二語文)という文の一種が複数集合して構成された文」と精密に再定義した。

本研究は、前田(2009)の複文の定義に基づき、複文の範囲で逆接機能辞を取り上げて見る。

#### 1.2 複文の分類

複文の分類には、構造による分類と、意味関係による分類が挙げられる。

##### 1.2.1. 構造による分類

三尾(1974:275)は文の内部における丁寧さ表現の角度から、文の内部述語が現れる複文を「独立部(用言から転成した接続詞)」、「接続部(接続助詞へ続く用言、用言の中止形、用言の仮定形)」、「連体部(連体の用言:連体修飾の用言/準体言も含む)」との三種類に分けて記述している。

寺村(1981:12)は、複文を、「述語の活用形でつなぐ」、「接続助詞でつなぐ」、「文の連体節化」、「文の名詞節化」、「文の引用節化」、「接続詞でつなぐ」の六つの形式に分けている。

南(1997:20-23)は、「文に似た部分」という概念を提出し、それについて、「接続助詞で終わるもの」、「用言(助動詞)の連用形で終わるもの」、「命令形、あるいは已然形で終わるもの」、「(挿入したもの)」、「ある連体修飾語」、「独立語」、「引用文」を分けて記述している。

南(1974)は、従属節の中、述語の現れる要素により、複文をA、B、Cの三類に分けてみたが、田窪(1987)は南(1974)の上、「主格」を対象主格(非意志的動作・過程の主体)と動作主格(意志的動作の主体)に分け、A類をさらに2種に分けて論じていた。具体的には、「A類1:様態・頻度の副詞+動詞」、「A類2:頻度の副詞+対象主格+動詞(否定)」、「B類:制限的修飾句+動作主格+A+(否定)+時制」、「C類:非制限的修飾句+主体+B+モーダル」、「D類:呼びかけ+C+終助詞とある」というように分類される。

### 1.2.2. 意味関係による分類

山田(1936)により、複文は、「重(句)文(二つ以上の句が並立関係で結合したもの)」、「合(句)文(〈一致関係〉によって結合したもの)」、「有属文(付属句を有する文/引用句をもつ文、準体句をもつ文、連体句を持つ文、修飾句をもつ文)」に分類されている。ただし、野田(2002)では、合文と有属文という名称は、現在では使われていないと指摘している。

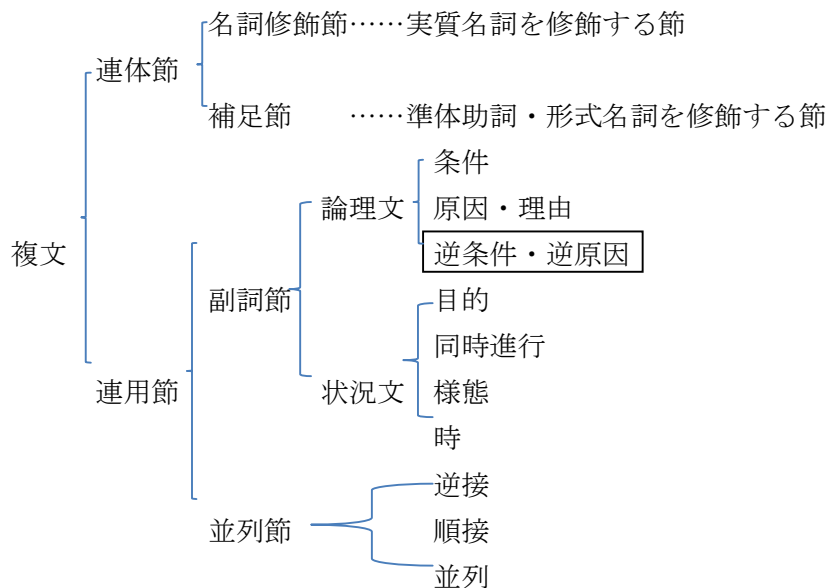
渡辺(1971:296)は典型的連用と典型的並列(二文併置)との間の連続性を説明し、節の関係を並列(継起的並列・典型的並列/二文並置)の中に、接続(時間的接続・論理的接続)を挙げ、さらに論理的接続(条件接続・単純接続)を分析し、条件接続を仮定条件、一般条件、確定条件としている。渡辺(1971:296)では、接続関係は並列関係の分化だと考えられる。

寺村(1981:19)は複文の分類を節と節の意味関係によって、まず大きく並列的關係と主従的關係に分け、さらに主従的關係を「述語の修飾・限定」、「名詞の修飾・限定」、「従属節自体の名詞化」に分類している。また、「述語の修飾・限定」を、「時・前後関係」、「原因・理由」、「仮定・条件」、「程度」、「述語の内容(引用)」に、「名詞の修飾・限定」を「付加情動的」、「内容説明的」に詳しく分類している。

寺村(1982:219)は節の陳述度に着目し、複文を一型(並立節を含む文)、二型(条件節を含む文)、三型(連体節を含む文)、四型(接続節を含む文)、五型(引用節を含む文)という形でランキングしている。寺村(1982:219)は、上から下へ行くと、陳述度が高くなることと指摘している。

益岡・田窪(1989)は、寺村の影響を受け、節の従属度の概念から再分析し、複文を以下四種類に分けて解説している。補足節(「名詞節+格助詞」≠「名詞節」引用節も含まれる)、副詞節(時/原因・理由/条件・譲歩/付帯状況・様態/逆接/目的/程度/そのほか)、名詞修飾節、並列節(「主節に対して対等に並ぶ関係」)の四つに分けている。野田(2002)は、益岡・田窪(1989)の分類の上、遊離節と仮称する主節から遊離した一に置かれた従属節を指摘している。村田(2005:14)は節の種類と役割を簡潔に、並列節、名詞節、従属節(連体節、連用節)に分類している。日本語記述文法研究会(2008)は、従属節には従属関係がないものを等位節と並列節に分けて論じている。等位節は、主節と従属節が意味的に対等である場合を指していて、並列節は節と節と並列するために用いる節を指す。

前田(2009:16-17)は複文を、大きく連体節と連用節に分け、以下のようにまとめている。



本研究は、前田(2009)の分類に基づき、「論理文」の下位概念にある「逆条件」、「逆原因」の逆接構文を中心に考察する。

### 1.3 逆接構文における先行研究

『日本語文法辞典』(2014)によれば、「逆接」は「二個の文、または連文節を、矛盾、対立する要素があるものとして結びつける形式」である。「普通は接続詞、接続助詞によって示される」とある。

森山(2000)は、ある出来事から当然予想されるような展開を順接(「ダカラ」、「ノデ」などの形式)とし、一般には前件から予想できないことを表す関係を逆接(「ケド」、「ガ」などの形式)の関係としている。基本的には、何か不連続な関係を表すものと言え、典型的な逆接のほかにも、様々な使い方(「ニモカカワラズ」、「テモ」など)があると主張している。渡部(2001)は、前件からの推論に介するかどうかで区別し、前件から推論を介さない逆接を対比的逆接と、前件から推論を介する逆接を推論的逆接と呼んでいる。一方、衣畑(2001)は、含意と矛盾している関係を逆接と定義している。田中(2004)によれば、逆接とは、前件で述べた内容を打ち消す或は反する事実を述べる文のことを指している。日本語記述文法研究会(2008)は、二つの事態の間にある予測された因果関係が実現しないことを表す文を逆接条件文といい、その従属節を逆接条件節としている。また、逆接条件節には、おもに仮定的な場合を表す逆条件節と、おもに事実的な場合を表す逆接節があると指摘した。以下、逆接構文に関する先行研究を、論理学からのものと、記述文法からのものに分け、概観してみる。

#### 1.3.1 論理学からの研究

西原(1985:28)は、逆接を「話者が前提概念とする〈信念、通念、常識〉の集積としての〈ナチュラルなロジック〉とずれた表現方法である」と仮定し、前提概念「XならばY」のかたちで捉

え、それと合致しない場合は以下の3パターンにわかれるとしている。

- a) X でなければ Y でない → 表現形式のずれによるパラドックス的逆接
- b) X ではあるが Y でない → 常識、思い込み、期待からのずれという、意味上の意外性
- c) たとえ X であっても Y とは限らない → 常識、思い込み、期待からのずれという、意味上の意外性

西原(1985)の研究は、話者の持つ前提概念を出発点として、論理のあり方を検討した。以上の a)、b)、c)のように、西原(1985)では、非順接の三つのパターンが明らかにされたといえる。

丹羽(1998)では更に一歩進んで、「ガ」、「ケレドモ」、「ノニ」、「ニモカカワラズ」、「テモ」、「ナガラ」、「モノノ」といった逆接を表す接続語(接続助詞)を取り上げて、逆接の種類やそれぞれの論理的特徴への考察が行われた。丹羽(1998)では、 $P \supset Q$  という条件論理のほか、さらに、 $P \supset R$ 、 $Q \supset S$ 、 $P \Leftrightarrow Q$  といった相反関係も取り上げている。また、丹羽(1998)は、逆接関係を肯定と否定の対立を表す「自由対立型」と順接条件関係の不成立を表す「反推量希求型」の二種類に分けて、逆接関係の本質を同一世界内でその事柄の構成要素において肯定否定に対立する場合と、その事柄全体が異なる世界との間で肯定否定に対立する場合があると指摘している。

坂原(1985:124)は、条件文の否定と関連する表現の面から、譲歩文の概念について取り上げている。坂原(1985)は、論理学の視点から、譲歩文は「p であっても q でない」形式を取り、「p と q は関連がある、しかし何か足りなかった」を表すとしている。坂原(1985)では、譲歩は「事実は事実として認め、譲歩しながらも、p と q の関連について信念を捨てるには忍びないという抵抗が現れている」とも指摘している。また、譲歩節の概念について、坂原(1985)は「譲歩節とは、補助仮定の不成立により、期待される結果を実現し損なった仮定節に過ぎず、いふなれば、途中で挫折した前件である」と述べている。さらに、坂原(1985)は、譲歩文を仮定的譲歩文、事実的譲歩文、反事実的譲歩文の三種類に分けて、条件文の論理的意味を扱いながら、譲歩文との関わりを論じている。

小泉(1987:1)は、逆接表現の中で、譲歩文と関連するいくつかの概念(推意、推定、前提)を規定し<sup>1</sup>、譲歩文について検討をしている。小泉(1987:4)は、譲歩文を「前件の条件が満たされたのに期待される結果が得られなかったことを表明する文である」と定義している。また、「ある条件文を予定して、これにしたがって行動したのに逆の結果になってしまったことを遺憾の意をこめて語る文である」とし、「結果的に条件文が成立しない」とも補足している。この「結果的に成立しない」事態に反して、「成立した」事態の場合は、理由文であるとしている。小泉(1987)は、譲歩文を更に、「事実的譲歩文」、「予測的譲歩文」、「反事実的譲歩文」、「反予測的譲歩文」の四種類に分けて、事実的譲歩文では接続助詞「ノニ」が、そのほかの予測的もしくは反事実的譲歩文では「テモ」が用いられている、としている。また、小泉(1987)は、譲歩文の変種である「不定化譲歩文」と「特定化譲歩文」についても説明している。

このように、小泉(1987)は、譲歩文の語用論的性格から、その特徴を検討している点で、坂原(1985)で行われた論理的意味からの譲歩文の研究より、さらに深層的な研究に一歩踏み込んで分析することができたといえよう。

### 1.3.2 記述文法からの研究

田野村(1989:80)は、接続助詞「のに」を取り上げ、「不適条件表現」という概念を打ち出し説明している。田野村(1989:164)は、一種の述語句の省略と見える現象を問題として、従来の接続助詞「のに」に使用する制約として指摘されてきた現象について、より包括的な視点から再考した。

今尾(1994a)は、逆接確定条件をあらわす接続助詞「ガ」「ケレド」「ノニ」「クセニ」「テモ」を取り上げ、その異同、談話語用論を方法論<sup>2</sup>として、これらの異同について考察を行った。今尾(1994:98)は、「ノニ」文は「前件が後件成立の十分条件」であるのに対し、「テモ」文は「前件が後件成立の十分条件でない」ことを指摘していて、それぞれ「反期待」と「反論」を表すとしている。今尾(1994a)は談話レベルで考察を行い、焦点と前提の概念を応用し、語用論の面から、逆接文の研究を大いに進展させたといえるだろう。

中里(1996)では、逆接確定条件の接続助詞の中から「ガ/ケレド」「ノニ」「モノノ」「テモ」「ナガラ」を取り上げ、これらの用法の比較、検討が行われている。中里(1996)は、条件づけが必要かどうか、対比を表せるかどうかの二点を中心に、考察が行われているという点で、非常に価値のある研究である。

池上(1997)は、逆接確定条件を表す接続助詞「ノニ」「ナガラ」「モノノ」「ケレドモ」の四種を取り上げ、使い分けの条件を述べ、焦点化という基準で四つの助詞の相互関係を明らかにしている。

原田(1998)は、逆接確定条件を表す接続助詞の「ケド」「ノニ」「クセニ」を取り上げ、前件と後件の意味関係・論理関係における異同や、話者の事柄に対する心的態度と文の関わりへの考察を行っている。原田(1998)は「ケド」は典型的には二つの事柄の順当な共存が否定されるものとして話者に関係付けられる場合に用いられるのに対し、「ノニ」「クセニ」は、前後件の推論的条件関係が不成立に終わったという話者の判断が述べられ、自己の論理性が否定された無念さが文脈の上で不満や非難と言った含意となって表出する場合に用いられると述べている。

衣畑(2001)は、「ノニ」文を取り上げ、語用論的意味を検討し、人間の経験的側面から「ノニ」が意味を取り入れていると述べている。また、衣畑(2003)は、「ノニ」のほかに、「クセニ」、「ニモカカワラズ」の記述を同じ枠組みで分析を行っている。

以上のほか、戸村(1988)、佐藤(1997)、陳(1999)、小林(2000)、楠本(2000)、安(2001)、加藤(2003)、宮城(2006)などがあげられるが、表1に要約する。



表 1 逆接機能辞に関する先行研究

| 著者 (年代)  | 研究対象           | 考察の角度      | 特徴                                 |
|----------|----------------|------------|------------------------------------|
| 戸村(1988) | 「ノニ」<br>「テモ」   | 前提から生じる制約  | 「ノニ」譲歩文:前提となっている条件と実際の状況のずれを表現する   |
|          |                |            | 「テモ」譲歩文:後件は前提の一部、即ち話者が事実として認めていること |
| 佐藤(1997) | 「ナガラ」節         | 意味と位置の関係性  | VP・NegP 付加位置による意味の決定               |
| 陳(1999)  | 「ナガラ」<br>「テモ」  | 意味と用法の異同   | 「ナガラ」:同時性・不相応性                     |
|          |                |            | 「テモ」:帰結に導かる可能性の低い条件                |
| 小林(2000) | 「トコロ」節         | 意味・用法・統語機能 | 従属接続・副詞節的用法                        |
| 楠本(2000) | 「トコロ」節         | 認知的意味考察    | 状況性を喚起することで、話者の心理的投影が具現化される        |
| 安(2001)  | 「テモ」<br>「ノニ」   | 論理構造・論理式   |                                    |
| 加藤(2003) | 「トコロデ」<br>「テモ」 | 意味記述・事態の段階 | 「テモ」:並列・累加                         |
|          |                |            | 「トコロデ」:事態の段階を表す                    |
| 宮城(2006) | 「ナガラ」節         | 意味論的制約     | 「ナガラ節」:過程の重視                       |

### 1.3.3 前田(2009)『日本語の複文 条件と原因・理由文の記述的研究』

以上見られたように、論理学からの研究が理論にこだわり、記述的文法からの研究は個別的に止まっている。先行研究は、網羅的なものが観察されてないが、前田(2009)『日本語の複文 条件と原因・理由文の記述的研究』が初めて、「論理文」を網羅的な記述をしてきた。

前田(2009)では、「論理文」は「条件」、「原因・理由」、「逆条件」と「逆原因」に分けられている。前田(2009)は、副詞節の中から「論理文」を「状況文」と切り離している妥当性を、2点にまとめている。第一は、論理文の共通に表すとされる「条件付け」である。「条件」、「原因・理由」、「逆条件・逆原因」という文は、基本的に「因果関係」、すなわち、ある結果を引き起こす原因と、原因によって発生する結果という関係にあることは、伝統的にあるいは習慣的に認められてきたが、このような立場を保持しつつも、「条件付けを表す文」を、どのように分類するのが適切であるかということである。第二は、それぞれの条件付けを表すと考えられる具体的な形式には、どのようなものがあり、それぞれの具体的な形式がどのような用法を持ち、相互にどのように異なるのかということ記述することである。前田(2009)は、「論理文」を4種に分け、もっとも重要な概念を、「レアリティー」であるとしている。

## 2. 本研究の対象

本研究が対象として取り上げるものは、逆接構文における接続機能辞である。全部取り上げるわけではなく、逆接、とくに推論的逆接における接続機能辞を研究対象とする。以下、接続機能辞の定義から、対象取りの仕分けについて詳述する。森田(1985)は、接続表現は機能上、先行する表現(前件)を受けて、後続する表現(後件)を展開する働きを持つ語であると定義している。野田(2002)はその上、接続表現の機能面の分析の不十分さや、意味・用法・機能の定義があいまいなことから、文脈展開と前後の要素が混在したような分類もありと指摘し、「接続表現とは、文章・談話論における接続機能を有する語句の総称であり、品詞論の接続詞、接続助詞や構文論の接続後、接続句に対する概念である」と再定義をした。本研究が取り扱う接続機能辞とは、接続助詞や接続詞、ないし接続の辞的機能を果たしている複合辞のことを指している。本研究は、田中(2014)の定義に基づき、接続機能辞を捉えている。

本研究は推論的逆接構文を大きく、「テモ」系と「ノニ」系に分けて論じていこうとする。前田(2009:185)では、「テモ」と「ノニ」について、「この両者は同じ文脈で交換可能な場合もあるが、大きな違いもある。それは、リアリティーに関する点である。〈ノニ〉は事実的なリアリティーの逆接を表すのみであるのに対して、〈テモ〉は仮定的な出来事の逆接的な関係を表せる」と述べている。本研究は、この論を受け、「テモ」系(条件系逆接構文)、「ノニ」系(事実系逆接構文)に分けて、考察を行う。「テモ」系では、逆接の「モ」の考察をはじめ、「テモ」の関連形式(1)「スル」+「テモ」(「トシテモ」、「ニシテモ」)、(2)「トイウ」+「テモ」(「ト(ハ) イッテモ」、「トハイエ(ドモ)」、「カラトイッテ(モ)」)、(3)「トモ・ドモ」(「Vウ・ヨウト(モ)/ガ」、「デアロウガト(モ)」、「デアレ」)に分けて考察を展開する。「ノニ」系は、反期待の「ノニ」、不一致に対する非難を表す「クセニ」、共存的逆接を表す「ナガラ/ツツ(モ)」、既定価値を崩す「トコロデ」、常識による推論との背反関係を示す「ニモカカワラズ」を取り上げる。

一方、〈前置き〉などの機能がある「ガ/ケド」は、逆接論理文の考察範囲から離れていることから、考察対象外のものとする。さらに、「ニツケテモ」、「ニタイシテ」、「カトオモウト」、「ノワリニハ」、「ニヒキカエ」などの個別的形式及び逆接論理文における主観性を分析しづらい部分は、本研究では考察対象外のものとする。

## 3. 本研究の理論的モデル

認知言語学では、言語が人間の認知機構と深く関わりを持つという立場をとっており、言葉の意味を捉える際、主体の主観的な意味づけのプロセスが必要であると考えられている。つまり、日常言語の概念は、外部世界という絶対的な客観の反映ではなく、言語主体の身体的経験と想像的能力などの主体的認知プロセスを通じて構築されたものである。それゆえ外部世界の客観的な存在は、言語主体から切り離されて独立しているものではなく、主体の捉え方によって解釈されている。

主観的、客観的という人間の基本的な認識は、あらゆる言語の特徴の記述に反映される。だが、主観性、客観性の尺度は一樣ではない。そこでさまざまな概念操作が必要になる。

Langacker の認知文法の主張の一つに、意味とは概念化(conceptualization) (すなわち、心的過程)

であるということがある（この場合の「概念化」とは、概念内容(**concept**)だけではなく、感覚的(**sensory**)・情緒的(**emotive**)な経験、あるいは（社会的、物理的、言語的）コンテクストを心的形成することに他ならない(Langacker(1991:2,2002:3))。概念化は、話者が状況をどの視座・視点からとらえるかということと深く関わっており、客観的には同一事物でも、視点や捉え方（もしくは、把握）が違えば表現も違ってくる。

言語と主観の関わりについて日本で最初に打ち出したのは、時枝誠記である。時枝(1955)のいう「言語過程説」は、聞き手に対して話者は常にいずれかの主体的感情を持って相対し、場面には、聞き手だけではなく聞き手を含む周囲の志向的対象となるものがすべて含まれていて、その素材は同じでも、聞き手をはじめとする使用場面が異なっている例がある。この点において、場面は、主客が融合した世界であると主張している。

「主観性」とは、「自然言語が、その構造と通常の働き方の中に言語行為者による自己ならびに自らの態度・信念の表出に備えているさま」（澤田 2011:27 訳）と説明している。澤田(2011:4-6)では、主観性は、文の命題的意味、モダリティの意味、発話場面的意味、社会・文化的意味のなかで、モダリティの意味のうちの問題として扱われていると指摘した。一方、澤田(2006:2)により、モダリティは事柄（すなわち、状況・世界）に関して、単にそれがある（もしくは真である）と述べるのではなく、どのようにあるのか、あるいは、あるべきなのかということを表したり、その事柄に対する知覚や感情を表したりする意味論的カテゴリーと定義されている。

「主観化」とは、「意味が命題に対する話者の主観的信念/態度に根ざすようになるプロセス」である(Traugott1982)。また、Traugott は、「共時的研究から見る主観化は、実質的な意味から、語用的な意味への文法化過程であり、それによりテキストにおける上下文関係が重要になり、話者の語用的推論（含意）が強調されている」、と付け加えている。さらに、Traugott(2010)は、表現は主観化、間主観化へ漸次的に推移性に沿って組織できると指摘し、主観化から間主観化へと推移するメカニズムを、「主観化」と「間主観化」にわけている。「主観化」は、「内容」が表す意味が話者の主観的な信念状態・態度を表すようになることであり、「間主観化」は、話者の主観的な信念状態・態度を表す意味が聞き手志向的な意味を表すようになることとされ、上記のメカニズムを「(より) 主観的⇒主観的⇒間主観的」のように一般化できるとされている。

Traugott では、主観性(**subjectivity**)と主観化(**subjectification**)という用語は、ある状況が存在する領域(**domain**)と関係している（概念内容(**conceptual content**)の問題)。Langacker(2006:17-18)によれば、主体性(**subjectivity**)と主体化(**subjectification**)という用語は、視点と関係している（捉え方の問題)。ある特定の要素がその場面全体の中でどう捉えられているのかについて云々することこそが重要なのである、とある。

上記から見てもわかるように、「主観性・主観化」（「主体性・主体化」および「間主観性」ということは、話者の認識から（捉え方など）、聞き手に対する志向性まで大きい範囲を網羅していることがわかった。本研究は「主観性」の角度から、逆接構文における接続機能辞を考察し、体系化を試みる。具体的には、参照点モデル及びその複合した形式 **Multiple Dominion Model**、さらに、ステージモデルを活用する。

まず、上掲の三つのモデルが逆接構文の主観性についての研究に用いられる理由を述べていく。尾谷(2003)は、逆接関係では、前件と後件は全く無関係なことを述べている文同士を連結させる

ことはできず、両節の間に、いずれかの関連性をつけなければならないとし、前件と後件は、いずれかの関連性とは、前件と後件が同じ領域にあるということである。ここでいう領域とは、認知言語学用語における ID (領域) のことである。これは「フレーム」<sup>4</sup>と同様に、ある領域を理解するのに必要な前提的・背景的知識のことである。これらは、ラネカーの「認知領域」<sup>5</sup>、レイコフの「経験領域」及び「起点領域/目標領域」という用語の中で用いられる。また、静態的な場面に含まれる物体の形状等を捉える際に、われわれ概念化者(概念主体)はその形状を心的にたどっている。この作用は、「心的走査(本研究では心的スキャンニングと言う)」と呼ばれている、と述べている。Langacker(1987)によれば心的走査は、「主観的移動」とも言われている。心的走査は、表現の意味側面が客体性を失い、概念化者の主体的な操作のみを残存させることによる意味変化であり、主体化/主観化の一つの要因になるものである、と指摘している<sup>6</sup>。

Talmy(1978)は、複文において従属節で述べられている事態は、主節で述べる事態にとって〈描写の土台〉ともいうべき機能を持っているとしている。また、Talmy(1978)は、ゲシュタルト<sup>7</sup>心理学の用語を借りて、主節と従属節の関係は、Figure と Ground<sup>8</sup>の関係になっていると指摘している。この論を受け、尾谷(2003)は、Figure と Ground の関係とは、Figure を認識するのを容易にするために、Ground があるという一種の想起関係が存在していると述べている。さらに、「接続辞で連結されている限り、何かしら関連のある話題が展開されるだろう、という想起を助ける機能こそ接続辞のもっとも根源的な機能といえよう」と付け加えている。

Langacker(1993:5)は、「ある事物との心的接触を果たす目的で、別の事物の概念を想起する」行為において、最初に想起される構造を「参照点(reference point)」と名付けている。認知主体(Conceptualizer)は、まず何らかの要因で際立っている要素である参照点(Referencepoint)に注意を向け、参照点によって喚起される潜在的な目標の集合である支配域(Dominion)の中から目標(Target、本研究ではターゲットと言う)がひとつ選択され、そこに注意の焦点が移行する。

さらに、Langacker(1987)によれば、ターゲット(目標/Target)の定義について、二つの事物 A と B を順に心的にスキャンニング(走査)し、その差異を検出する「比較」は、人間の備わった基本能力の一つであるとしている。この時、比較の基盤となる A は基準(standard)、比較の対象となる B を標的(標点)である。標的(標点)は、ターゲットともいわれ、隠喩的写像においては、基準とそれぞれ目標領域と起点領域に対応することになる。

こうした参照点の関係を、河上(1996:136)は、「参照点構造」と呼んでいる。また、実際に参照点によって指し示されるターゲットが、目印である参照点から離れすぎても適切に支持することができないため、ターゲットは参照点の支配域に存在するものでなくてはならない、と付け加えている。さらに、河上(1996:135)は、「繰り上げ構文では、補文に表される事態の参加者が特別認知的際立ちを与えられ、トラジェクターあるいはランドマークとして機能することになる。しかし、述語が表す関係に直接参与しているのは、基本的な意味と同じく「事態」なのである。このように、認定的に際立つ者(参加者)と実際に関係に参加するもの(事態)とが食い違っているが、この違いは参照点と呼ばれる認知モデルで説明される」と述べている。

「志向性」についても説明しておきたい。ここでいう「志向性」とは、一方が、もう一方に関して何かしらの方向性を持っている性質を指していることをいう。人間の心の働きにおける「意識」も、その経験に当たりその対象を同定する指向的性質を持つと考えられている。言いかえれ

ば対象を記述する際、何らかの指示から指向、つまり思考や感情の働きかけが内在するが、その「志向性」こそが話者主体の主観の背景と考える。

### 3.1 参照点モデル

ここでは、本研究が応用する理論モデルを列挙していく。ここで、参照点構造を示す。次頁を参照されたい。

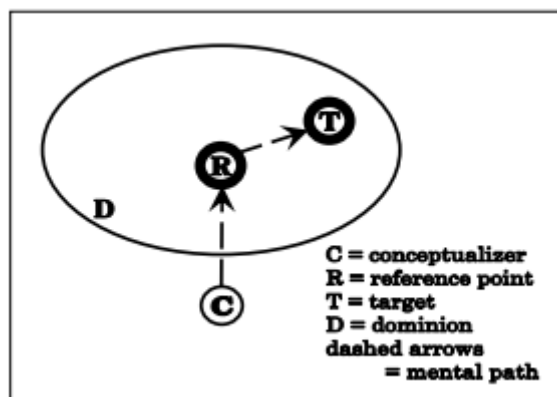


図 1 参照点構造(Langacker 1993:6)

図 1 で示されるように、第 1 段階では、概念主体 (図の C) は、アクセスのしやすい事物である参照点 (図の R) と心的接触<sup>9</sup> (点線矢印) をする。第 2 段階では、参照点を経由して、支配領域(D)内に存在するアクセスの難しい事物であるターゲット(T)と心的接触を果たす。ここで言う支配領域は、物理的な空間ではなく、参照点を手がかりにしてアクセスすることが可能な事物の集合体として認識されているものである。

### 3.2 Multiple Dominion Model

参照点モデルの論を受け、尾谷(2003)はさらに Langacker(1993)の「Multiple Dominion Model」を応用し、「ノデ」と「ケド」のスキーマを図式化した。ドミニオンは、潜在的なターゲットの集合とされているが、それだけではどうも漠然としていると、尾谷(2003)は指摘している。尾谷(2003:89)は、「太郎の本」を例に、この「太郎の本」という表現は、ターゲットである「本」の認識、同定を容易にするために、「太郎」という参照点が用いられた表現であるとしている。「太郎」という参照点を通じて「本」を認識するといっても、「太郎」と「本」の間に成り立つ関係というのは、想像力の尽きない限り、例えば「太郎が好きな本」「太郎の記事が載っている本」など、解釈も尽きないとしている。したがって、ターゲットの探索領域であるドミニオンは、単純な一つの円だけで表記できるものではなく、複数の下位ドミニオンが存在しており、しかもそれらの下位ドミニオンは想起しやすいものから想起しにくいものまでさまざま存在するのである、と尾谷(2003)は述べている。Langacker(1993)で述べられているドミニオンは、Maximal Dominion(MD)に相当する。その下位に複数の Immediate Dominion(ID)が存在するとされている。また、尾谷(2003)は、「ここでいう Immediate Dominion とは、メタファー理論などで使用されている ID という概念とほぼ同義であると想定している」と付け加えている。

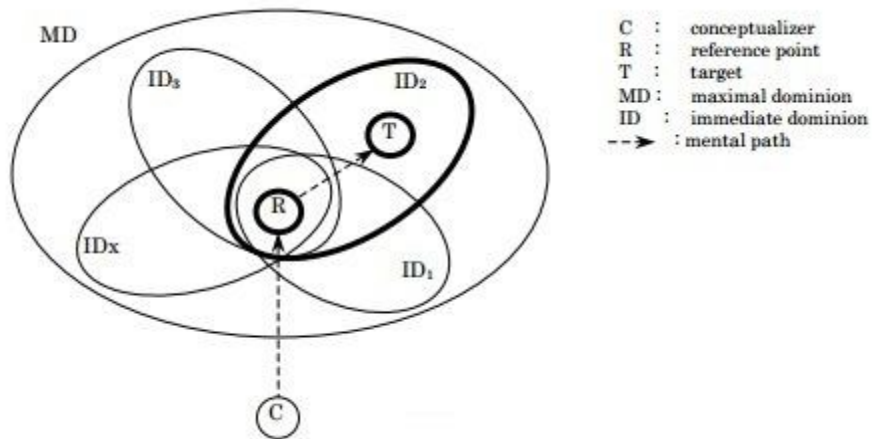


図 2 Multiple Dominion Model (尾谷 2003:87)

尾谷(2003)は、典型的な ID は「作成」、「題材」などが存在すると指摘している。さらに、尾谷(2003:90)は、接続詞は前節を参照点として経由し、ターゲットである後節の理解を助けるという参照点構造をベースになっているとしている。これは、Talmy の「従属節は主節 Figure を位置づけるための Ground として機能している」という説を参考にしたものと思われる。接続詞はそれぞれ固有の想起関係を有していると主張し、尾谷(2003)は「ノデ」と比較し、「ケド」の参照点関係を明らかにしている。尾谷(2003)は、典型的な「ケド」の機能とは従属節の事態から因果関係によって一般的に想起しやすい事態ではなく、その予想を裏切るような事態が続くことを明示するというものであり、これがいわゆる「逆接」と呼ばれる用法であると指摘している。尾谷(2003)は、「ノデ」と「ケド」という二つの接続詞機能を参照点モデルによって、逆接をスキーマとして図式化している。

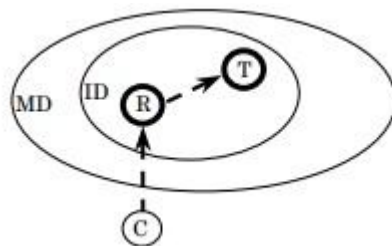


図 3 「ノデ」のスキーマ

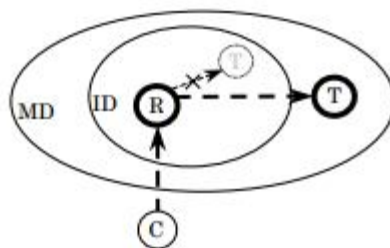


図 4 「ケド」のスキーマ

ID:因果関係 MD:想起関係 (尾谷 2003:89)

図3は、「ノデ」のスキーマを示している。「ノデ」の場合、因果関係に基づいた推論によって想起されるID内で探索可能であり、なんらかの特殊な参照点関係ではない。しかし、「ケド」の場合、主節事態（参照点）から誰も一般的に想起しやすいような事態ではなく、その外側でターゲット（主節の内容）を探索しなければならないことを示す。ただし、IDの外とは言っても、やはり従属節（参照点）と全く無関係な事柄ではないため、MDから外れることはなく、前節の表す事柄によって何かしらの推論が働いている、と尾谷(2003)が指摘している。しかしながら、「対比的逆接」と「推論的逆接」の分類では、「ケド」は普通、「対比的逆接」のほうに属しているが、「対比的逆接」と「推論的逆接」に連続性があることが予想される。

図4は、「ケド」のスキーマを示している。図4では、「ケド」構文の場合、順接ID「ノデ」の中にあるターゲットを指している心的走査は否定され、IDの外にあるターゲットを指すようにシフトしていくのである。「X」がつけられた点線矢印は、「志向性」そのものも表されると考えられる。尾谷(2003)の論は、逆接の成立をスキーマ化しており、これは本研究の大きな基盤である。本研究では、この尾谷のスキーマ化した図に、さらに「主観性」という観点を加えた上で、各逆接機能辞のMDには、どのように主観が反映されているのか、MDには、どのような特徴があるかを明らかにする。

### 3.3 ステージモデル

尾谷(2003:91)は、主体化の観点から考察するため、Langackerのステージモデルを使用し、逆接構文を以下のように示している。

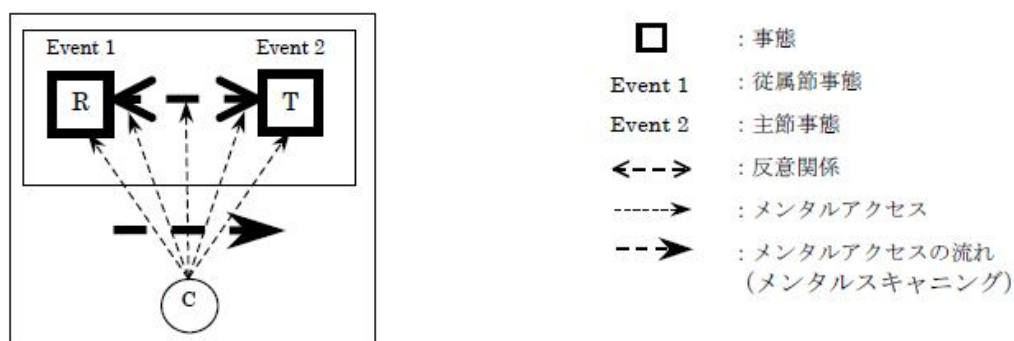


図 5 Langacker のステージモデル

図5について、尾谷(2003)は以下のように述べている。

「ケド」に反映される認知構造の中には二つの認知プロセス<sup>10</sup>が存在する。一つは Event1（従属節）を参照点として経由することで、ターゲットである Event2（主節）にアクセスする（主体的な意味）、もう一つは、その認知プロセスを通じてメンタルアクセス（いわゆる認識）される対象は、何であれ全てが相対的に（客体的な意味）ということになる。つまり、もう一つの意味とは、Event1 と Event2 の間に成立している概念形成者が認識した範囲の関係である。これら二つの意味のなかで、〈客体的意味〉だけが薄れてゆき、残っ

た〈主体的な意味〉が相対的に顕在化するプロセスこそ、Langacker のいう主体化 (Subjectification)である。

さらに、尾谷(2003:92)は、以下の例 1)、2)、3)、4)、5)を挙げて、「ケド」の主観化 (主体化)過程を図 6 のように示している。

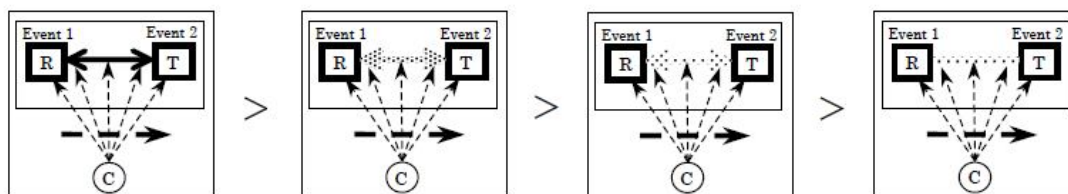


図 6 「ケド」の主体化過程 (尾谷 2003:92)

- 1) 日本で太陽といえば赤色だけど、アメリカは赤色じゃない。
- 2) 日本で太陽といえば赤色だけど、アメリカは黄色だ。
- 3) 日本で太陽といえば赤色だけど、アメリカは何色なの？
- 4) 日本で太陽といえば赤色だけど、赤色もいろいろある。
- 5) 日本で太陽といえば赤色だけど、唇も赤色で描く。

(尾谷 2003:92)

1)の「赤色」と「赤色じゃない」は、肯定・否定という語彙的な反意関係 (二項対立) を有しており、これは最も基本的な「逆接」用法であるとしている (図 6 一番左)。2)では、「赤色」と「黄色」は、前件と後件は「肯定」「否定」のように相反する関係ではなく、「日本で太陽は赤色 ⇔ アメリカは黄色」という多項対立になっている。複数概念の対立では、反意性が希薄化されていると、尾谷(2003:92)は述べている。3)の場合、「何色」という疑問表現は、「赤色」に対立するものは何かという相反関係が見られるものの、対立意識は2)よりも希薄化されている。したがって、3)の「日本では赤色だ」という従属節は、後ろに続く話題の背景づくりをする機能がより優勢になり、その話題をきっかけに想起された次なる話題を談話に導入するという機能がより一層表面化している。4)、5)では、反意関係はほぼ背景化され、前節から後節への想起関係、つまり参照点構造のみが残った「ケド」の用法になっている。この参照点構造は、実際には1)、2)の根底にも存在しているとあるが、それらは反意関係や対比関係という〈より客体的な意味〉のほうに際立って認識されているため、参照点構造にもとづくメンタルスキャンという〈より主体的な意味〉が意識されていないだけなのである。

### 3.4 本研究の展開

これまでの研究では、記述研究が中心に行われてきており、用法と分類は、かなり詳細に行われている。しかしながら、「ではなぜ逆接構文が成立するのか」という理論面からの説明が十分ではないように思われる。そこで、本研究では、単に言語事実のみを挙げ、特徴を述べるのではな



く、認知言語学の観点から逆接の成立条件について説明することを試みる。逆接構文の研究はこれまで様々な角度からアプローチされ、論理学や語用論、意味論からの研究などその数は少なくないが、体系的な研究は、管見の限りないようである。そこで本研究では、認知言語学における「主観性」という視点から、逆接機能辞を体系化することを試みる。いわゆる体系化は、各接続機能辞の連続性を考察し、さらにネットワーク的な構図を示し、「テモ」系と「ノニ」系逆接構文の成立の関わり合いを明確することである。

前掲したように、我々は、接続機能辞を見れば、前件と後件の意味関係が読み取れる。尾谷(2003)によれば、逆接構文の前件と後件の関係は、因果関係の範疇を超過してはいるが、まだ何等かの関連づけがあると判断される。尾谷(2003)は、逆接の論理を全部因果関係のずれと判断しているが、MDの領域(尾谷の言う「何等かの関連づけ」)はどのような領域であるか、まだはっきり言及していない。本研究は、逆接論理文における接続機能辞を取り上げ、前件Rと後件Tの関係を考察し、各逆接機能辞のMDを明らかにしたい。

本研究は、前田(2009)の意味的、記述文法的に整理した逆接表現に、尾谷の認知言語学のモデルをあてはめ、逆接の成立を考察し、逆接機能辞の体系化を試みる。

基本的には、構文分析を、各節で以下の流れで行うことにする。

- I. 先行研究の記述の検討
- II. スキーマの提示
- III. コーパスによる用例との対照
- IV. 構文特徴のまとめ

最後に、プロトタイプの逆接から、その周辺の用法には一つ一つ動機付けがあることを証明し、逆接機能辞のネットワークを構築することを試みる。これによって、これまでの研究ではされてこなかった逆接機能辞を体系的にまとめることが望まれる。

なお、本研究で用いる言語データは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を主にして、『日中対訳コーパス』、『新潮文庫100冊』(KWICにより分析したもの)である。また、個別な文例(例えば逆接の「モ」に関して)は、『朝日新聞』、『日刊スポーツ』や『Sports Watch』などの新聞資料を用いる。

-----  
[注]

1. 語用的含意(implicature):強調の原則に基づき、発話の形式から引き出される含意。  
論理的含意(entailment):二つの文において、一方の文の真が他方の文の真から必然的に導き出される関係。推定による文の意味
2. 談話語用論的手法とは、談話レベルにおける言語の使用を、文の前後関係、談話レベルにおける言語の使用を、文の前後関係、情報の流れといった言語的文脈と、談話の場面、話者・聞き手の認知状態などといった非言語的文脈から観察・分析する方法のことである。

3. 「主観性」(英語の原文): Subjectivity is the way in which natural languages, in their structure and their normal manner of operation, provide for the locution aryagent's expression of himself fand his own attitudes and beliefs.(Lyons,1982:102)
4. 「フレーム」は概略「ある概念を理解するのに必要となるような背景的知識構造」と定義され、語はフレームを喚起し、その意味はフレームを背景にしてはじめて理解されると言える。
5. 認知文法では、言語表現はその意味の基盤となる概念内容として認知領域の集合を喚起すると考える。言語表現が喚起する領域は対等ではなく、中心的なものから周縁的なものまで差がある。クロフトは認知文法における「領域」を「少なくとも一つ(典型的には複数)のプロファイルをベース(ある特定の認知領域においても、すべての構造が等しく扱われるのではなく、焦点化され、際立ちの大きいプロファイルと呼ぶ部分と、そのプロファイルの背景的要素として機能する「ベース」に分かれる。)として機能する意味構造」と解釈する。
6. 以上の記述は、『認知言語学キーワード辞典』より引用したものである。
7. ゲシュタルト:視野にある対象を一つのまとまりのあるものとして知覚する心的作用を「体制下」と言い、「体制下」によって形成されるひとまとまり(構造体)を「ゲシュタルト」(Gestalt)という。通常、形態、姿などに対峙して、知覚対象や認識概念を説明する手段となる。部分の総和として把握・捕捉できない全体的構造に備わっている全体的構造を指す。
8. 図と地(Figure と Ground):人は近くにおいて刺激や情報を均等に見るのではなく、相対的に重要なものとそうでない物とに、ほぼ自動的に振り分ける。知覚した対象の内、前者を「図」と言い、後者を「地」という。地は、図に対して背景を与えるものであるが、地の姿によって図の解釈も変わりうるので、消極的ながら図の解釈に影響を与える。ある特定の認知領域においても、すべての構造が等しく扱われるのではなく、焦点化され、際立ちの大きいプロファイルと呼ぶ部分と、そのプロファイルの背景的要素として機能スル「ベース」に分かれる。認知言語学では、この原理的な概念を文法構造の分析に積極的に使用しており、ラネカー(1987)はランドマーク、トラジェクターの設定に図と地を根拠づけている。
9. 心的接触(メンタルコンタクト):あるものに注意や意識を向けること。(河上 1996:135)
10. 認知プロセス(認知過程):概念主体ないし概念化者(生体)が、把握事態を理解し、解釈を与え、分節・構造化し、コード化し、行動や発話につながる一連の過程を言う。

## 第2章

### 条件系逆接構文成立の諸相 —「テモ」系構文に見られる連続性—

## 第2章 条件系逆接構文成立の諸相

### —「テモ」系構文に見られる連続性—

#### 1. 逆接を表す「モ」と係助詞の「モ」との連続性

「テモ」系構文の中心となる「テモ」は、接続助詞「テ」に係助詞「モ」が付いたもので、「モ」の意味の違いによって、「テモ」にも微妙な違いがある。(cf.『日本国語大辞典』:720)「テモ」系逆接構文研究する際、係助詞の「モ」との関わりには、興味深い問題の一つといえるだろう。本節ではまず、古文の残存表現としての逆接を表す「モ」を考察する。逆接を表す「モ」と係助詞の「モ」との連続性を明らかにし、順接と逆接の接点を見出す。

##### 1.1 はじめに

現代日本語では、「モ」は係助詞としてよく用いられ、接続助詞としての「モ」は、逆接を表すとされている。この逆接を表す「モ」は、古典文法の残存用法として見受けられる。例 1)と 2)を見てみよう。

- 1) 善戦するモ惜敗。 (『日刊スポーツ』2013.4.28.)
- 2) 2008年5月の阪神—巨人戦で、頭部にヘルメットが割れるほどのデッドボールを受けるモ、退場することなく、次の打席ではホームランを放っている元阪神タイガース・金本知憲氏。彼の鉄人伝説では、有名なエピソードの一つだ。 (『Sport Watch』2013.3.10.)

例 1)、2)における「モ」は、動詞ル形に接続し、逆接を表す接続助詞として機能している。また、例 1)、2)と同じく、動詞のル形に接続し、「Vウ・ヨウトシテモ」「Vテイテモ」「～デアリナガラ」に相当する逆接の「モ」の文型も見られる。動詞のル形に接続した「モ」文は、意志や状態、及び同時進行が表せる。古典文法において、沖森(2012:55)は、逆接の「モ」は動詞の活用形には接続しないとしている。「モ」が接続する動詞はル形ですが、表現できる範囲は、意志形、テイル形、デアル形など、さまざまある。この点で、逆接の「モ」は、古典文法から現代日本語に残存しているとわかる。

『新明解国語辞典』(第七版)は、現代日本語における「モ」の接続助詞的な用法は、「やや古風な表現で前件から予測される事態とは相反する結果と結びつけることを表す」としている。この記述に基づけば、例 1)では、前件「善戦する」ことから、「勝利」の可能性が高いと予測されるが、実際の結果は「惜敗」であり、予測された事態と対立している。例 2)では、前件「頭部に割れるほどのデッドボールを受ける」ことから、「退場する」という結果が予測されるが、実際は退場しなかった。例 1)や例 2)は、ル形に接続するが、それぞれの前件は既定事実であり、新聞などでは現在形で過去のことを述べられるが、単純に過去のことを述べる場合「善戦した」、「頭部にデッドボールを受けた」のような、タ形で現れると思われる。前件をタ形にしたら、前掲例 1)、2)は「ノニ」、「ニモカカワラズ」と置き換えられる。

- 1-a) 善戦したノニ、惜敗だった。 (作例)

2-a) …頭部にヘルメットが割れるほどのデッドボールを受けたニモカカワラズ、退場しなかった。(作例)

『全訳古語辞典』(大修館)は、古典文法における接続助詞の「モ」について、「逆接の確定条件を表し、既にそうになっている前提条件を示し、逆の関係で後ろに続ける」としている。古くは、例3)のような例文がある。

3) 心ひとつにいとど物思はしき添いて「内裏へ参らむ」と思しつるモ出で立たれず。

3-a) 心の限りにますます、絶えない物思いがつのって、「宮中に参内しよう」と思いになったケレドモ、お出かけになれない。(『源氏物語・橋姫』/訳:『全訳古語辞典』)

原文では「モ」が用いられているが、現代日本語では「ケレドモ」が用いられている。また、例1-a)、2-a)、3-a)のように、逆接の「モ」は現代日本語のあらゆる逆接機能辞と置き換えられる。本研究では、この古典文法に由来した逆接を表す「モ」をはじめ、条件系逆接構文への考察する。古典文法においては、沖森(2012)は、接続助詞の働きをする「モ」は、係助詞の「モ」から転成したものであるとしている。そこで本節は、係助詞との連続性から、逆接構文における主観性について考察する。

## 1.2 「モ」に関する先行研究の検証

次に、「モ」に関する辞書を含む先行研究を見てみよう。

『大辞林』(第三版)によれば、係助詞の「モ」には、〈並列〉、〈取り立て〉、〈全面肯定・全面否定〉、〈打消し〉、〈詠嘆〉の用法があるという。『新明解国語辞典』(第七版)では、「モ」は副助詞として取り上げられ、〈極端提示〉、〈予期超過や限界到達〉を表すとされている。『岩波国語辞典』は、限度を表す「モ」の量的表現と共に使う傾向を示している。また、ある範囲の中のある部分を取り上げてみる場合、「モ」が用いられるとしている。『日本国語大辞典』はさらに、慣用フレーズの形式を取り上げ、説明している。

辞書を含む先行研究では、「モ」の取り立て機能を中心にする考察が多くあるが、本節では認知言語学の観点から、見解を加える。

助詞「モ」の基本的な定義や理解について、田野村(1991:80)は、山田孝雄氏の「基本的に、類似した事物の存在を暗示するものである」という定義を引用し、これを「事実、議論の余地のないこと」としている。寺村(1991:75)は、「〈モ〉により取立てられたものは、連想できる影のようなものとの比較も行われている」と付け加えている。

中俣(2008:153)は、とりたて助詞は一般的に明示的に述べられた要素に加えて、パラディグマティック(範例的)な要素が存在し、明示された要素と暗示されたパラディグマティックな要素は無関係ではなく、ある集合の構成員(メンバー)であると述べている。岡野(2010:214)は、取り立ての「モ」の機能を〈集合を暗示する〉としている。岡野(2010:213)は、これらの集合は〈暗示〉とされているので、特定の他者の想定が意味を持たない、あるいは特定の他者の想定が難しいとしている。

これらの先行研究に基づき、さらに認知言語学の観点を加えると、取り立ての「モ」は、取り立てられたものとの〈同類の集合〉という ID を示していることが考えられる。図 7 にあるように、取り立てられたものは R である。そして、R と同類である T1、T2、T3、T4 などが暗示されている。ID は〈同類の集合〉を示している。R と、T1、T2、T3、T4 は、同類であることから、同じ ID に集合されている。岡野(2010:213)で指摘されているように、T1、T2、T3、T4 は文の中で特定されているわけではなく、暗示されたメンバーの集合である。以上の考察から、以下に取り立ての「モ」スキーマを示す。

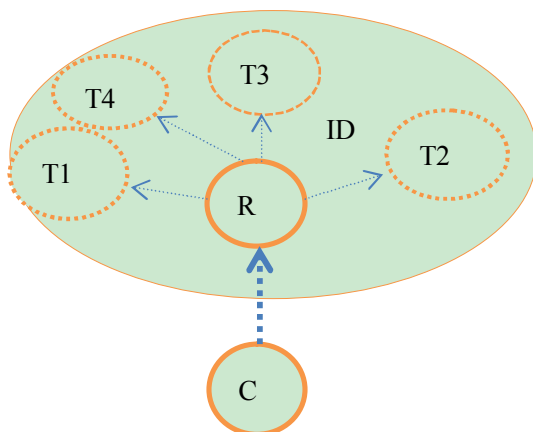


図 7 取り立ての「モ」のスキーマ

図 7 のように、取り立ての「モ」は、〈同類を示す〉機能を持っている。つぎに、取り立ての「モ」のプロトタイプの用法から、係助詞や副助詞としての「モ」への拡張を見てみる。まず、「モ」の取り立て用法から、〈意外〉や〈詠嘆〉の用法への動機づけを分析する。

沼田(1986:106)は「モ」の取立て機能を、モ 1 〈単純他者肯定〉、モ 2 〈意外〉、モ 3 〈やわらげ・不定他者肯定〉を表すとしている。例 4)、5)、6)はそれぞれ、モ 1、モ 2、モ 3 の例である。

- 4) 人生の季節をモ、自然の季節と同じように受け入れる。
- 5) とても楽しい気分で、話すつもりのないことモつい話してしまった。
- 6) その年モ押し詰まった:2月24日の夕方、彼は突然やってきた。 (沼田 1986:106)

例 4)は、人生を自然の季節に例えて、その共通性を示している。元来、人生という概念には、季節は存在しないが、メタファーにより(少年期、青年期、中年期、老年期を春夏秋冬に例えて)、自然の季節との共通性が抽出される。5)は〈意外〉を表す「モ」の文例である。

例 5)では、ID は「話した」内容である。「話すつもりのないこと」は、論理上、ID に集合されるはずはない。話者が調子に乗って、「つい話した」ことから、元来 ID のメンバーではないもの R「話すつもりのないこと」が ID に集合され、〈意外〉のニュアンスが生じている。〈意外〉への拡張は図 8 のように示すことができる。

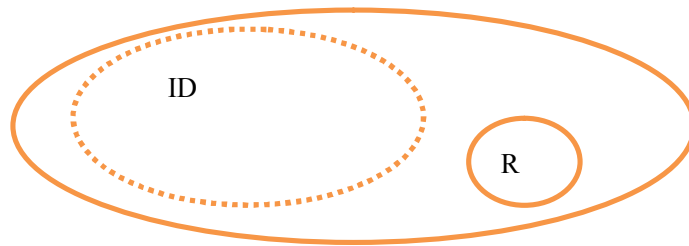


図 8 意外の「モ」への拡張

図 8 で示したように、意外の「モ」文では、本来 ID のメンバーと同類ではない R が ID に集合され、同類を示す ID が拡張される。

ちなみに、例 6)における「モ」について、沼田(1986)は〈やわらげ〉、寺村(1991)は〈詠嘆〉、田野村(1991:80)は〈周辺の用法〉と定義している。例 7)、8)、9)を足して説明する。

- |                                |               |
|--------------------------------|---------------|
| 7) その財布 <b>モ</b> ずいぶん古くなりましたね。 | (沼田 1986:106) |
| 8) 夜 <b>モ</b> 更けてまいりました。       | (寺村 1991)     |
| 9) 君 <b>モ</b> しつこいな。           | (田野村 1991:80) |

例 6)における「押し詰まる」は「年の暮れに近くなる、期限が近づく」という意味で、「年」が「押し詰まる」のは、当然なことに見受けられる。話者は「その年」を取り立てて特別視しているが、「その年」も意外なくやってきた。

例 7)では、まず世間万物が自然に「古くなる」ことが前提である。これは、世間万物の共通性と考えられる。ID は、この共通性を示している。「その財布」は持ち主（話者）にとって、どのような思い出があっても、いくら特別であっても、「古くなる」のは自然の摂理だと判断できる。

例 8)は、例 6)と類似し、「夜が更けてまいる」ことは、「年が押し詰まる」ことのように、当然なことに見受けられる。したがって、「夜」や、「年」という R は、「更けてまいる」や「押し詰まる」の一般性を有していることがわかる。

例 6)、7)、8)では、同類の ID は一般性を示しているが、例 9)は前掲の例とは異なる。例 9)の「君」と「しつこい」は、同じような包含関係が常に成立するわけではない。「君」の性格や人格には、いろいろな側面があるが、「しつこい」ということは、君の全人格を一概に代表することはできない。「しつこい」という ID に「君」が入ると、話者の困惑した心情が読み取れる。

〈やわらげ〉(〈詠嘆〉、〈周辺の用法〉)への拡張は、図 8 と類似している構図で示すことができるが、R というものは、同類の ID から取り出されて、特別視されているが、それでも ID から実際離れることができなく、ID に属していることが判断できる。

以上のように、認知言語学の角度から先行研究を再検討し、取り立ての「モ」のプロトタイプから〈意外〉、〈やわらげ〉(〈詠嘆〉〈周辺の用法〉)への拡張を分析してみた。〈並列〉、〈全面肯定・全面否定〉、〈打ち消し〉、〈予期超過や限界到達〉、量的表現との共起や、〈慣用フレーズ〉の「モ」についての分析は先行研究では観察されていないようである。以下に、国語辞典の解説と用例を用いながら分析を行う。

### 1.2.1 並列の「モ」

『大辞林』（第三版）は、並列の「モ」は例示した事物を幾つか取り出して並べて提示する、としている。

- 10) 野にモ山にモ春が来た。 (『大辞林』)  
11) 王さんモ李さんモ一年生です。  
12) 中国モ日本モアメリカモ、人権を重視する国です。 (作例)

「A モ B モ～」、あるいは「A モ B モ C モ…～」の文型では、「～」の部分は、A や B や C などの共通性を示している。例 10)における ID は、「春が来た」で、「山」にも「野」にも「春が来た」と理解できる。それだけでなく、様々な場所に春が訪れたと考えられる。並列の「モ」のスキーマは、図 9 のように示すことができる。

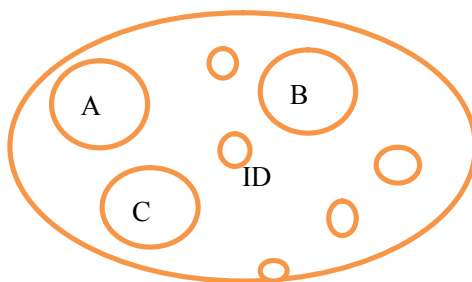


図 9 並列の「モ」のスキーマ

図 9 にあるように A、B、C は同類であり、同じ ID に属する。

例 11)では、同類の ID は「一年生」で、例 12)では、同類の ID は「人権を重視する国」である。それぞれの ID の中に、例 11)では「王さん」と「李さん」が、例 12)では「中国」、「日本」、「アメリカ」が入っており、それぞれの ID のメンバーの際立ちがある。このことから、並列の「モ」は、共通性を提示する機能があるとわかる。

次に、否定が現れる例を見てほしい。

- 13) 血モ涙モない男。 (『大辞林』)

例 13)では、「A モ B モ…～ない」という文型が現れている。A は「血」で、B は「涙」である。人間には、「血」や「涙」がある。特に「血」がないと、生きることさえできなくなる。実は、「血も涙もない男」は、「この男は冷酷だ」という意味を表している。「血」も「涙」も「男」の〈人間性〉という ID のメンバーと考えられる。「血」と「涙」が取られてしまうと、「男」の〈人間性〉も見られなくなる。



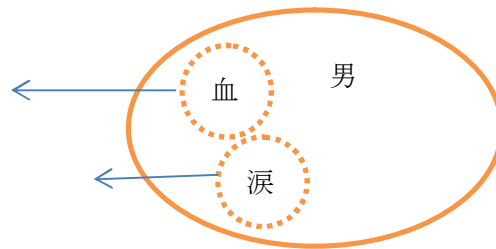


図 10 「血も涙もない男」の図示

図 10 のように、「男」にも、その概念を理解するためのフレームがあり、それによって「男」という ID が構成されている。「男」という ID の中に「人間である」、「血がある」、「涙がある」といったメンバーが入っている。「血も涙もない」場合、「血」も「涙」も、その ID から取り外されている。したがって、人間に必要な「血」も「涙」もないという表現は、人間味がないという冷酷さが際立たされるものであるといえる。

### 1.2.2 全面肯定・全面否定

『大辞林』（第三版）は、「モ」の〈全面肯定・全面否定〉を「不定指示詞に付き、全面的否定または、全面的肯定を表す」としている。例 14)、15)を見てみよう。

14) どこのお店モいっぱいだ。

15) 疑わしいものは何モない。

(『大辞林』)

例 14)では、「モ」は「どこ」と共起していて、例 15)では、「モ」は「何」と共起している。「どこモいっぱいだ」の場合、「いっぱい」という同類の ID の中に、メンバーが「どこ」によって無限に拡張される。この文から、「いくら探しても空席がある店が見あたらない」という情報が読み取れる。

例 15)の文構造は前掲の文例と比べると、複雑に見られる。「疑わしいものは何モない」から、「疑わしいもの」という ID には何もない、ということが読み取れる。同類の ID は、「何モない」という表現により、失われる。

### 1.2.3 極端提示

『大辞林』（第三版）は、極端提示の「モ」を「極端な事物を提示し、強調する」としている。例 16)、17)を見てみよう。

16) 太っ腹の社長モ、今回はまいったようだ。

17) サルモ木から落ちる。

(『大辞林』)

このカテゴリーからは、沼田(1986)のいう〈意外〉のニュアンスが読み取れる。この〈意外〉は、常識的推論から読み取れる。つまり、「社長は太っ腹」→「お金のことには特に気にしない」

と、我々は常識に沿って推論する。「太っ腹」が属する ID からは、結果の「まいった」とは想起関係によって関連付けるのが困難である。

例 17)では、「サルも木から落ちる」は諺であるが、「サル」は、「木登りが上手」と我々は常識に沿って考えている。したがって、「サル」が「木から落ちる」という ID に入る可能性が低く思われる。「木登り」に非常に長けている「サル」も「木から落ちる」と、〈意外〉のニュアンスが読み取れる。したがって、極端提示の「モ」のスキーマは以下のように示すことができる。

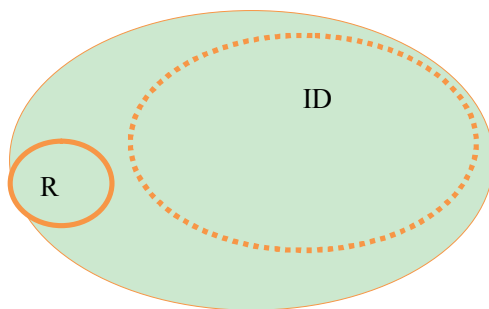


図 11 極端提示の「モ」のスキーマ

図 11 の〈極端提示〉のスキーマは、〈意外〉の「モ」のスキーマと類似している。

例 16)も 17)も、「太っ腹の社長」が「まいった」、「サル」が「木から落ちる」ことは通常、発生する可能性の低いことだと考えられる。以上のような極端例が起こった場合、それらが ID に集合され、ID も極端に拡張される。一方、〈極端提示〉の「モ」と〈意外〉を表す「モ」とは、異なる点もある。極端提示は、極端の例を提示し、後件発生 of 必然性や、ある道理を説得しているようにも見られる。「太っ腹の社長モ今回はまいったようだ」から、「今回は相当難しい状況に遭遇している」と、聞き手に連想させているのである。また、「サルモ木から落ちる」から、「油断大敵」という説教的な効果があると思われる。

#### 1.2.4 程度量型の「モ」

『新明解国語辞典』(第七版)は、量的表現と共起する副助詞の「モ」を「予期される程度を超えていたり、限界に達していたりすることを表す」(以下に、〈予期超過〉、〈限界到達〉と略す)、「限界的な状況であったと捉えることを表す」(以下に、〈限界状況の明示〉と略す)、「その中が、さらに幾つかの部分(程度・段階)に分かれていることを表す」としている。本研究では、量的表現と共起する「モ」を〈程度量型〉と名付ける。まず、〈予期超過〉や〈限界到達〉の場合について、例 18)、19)を挙げながら分析する。

18) 雨は三日モ降り続いて、ようやくやんだ。

19) 何を思ったか、私に十万円モくれた。

(『新明解国語辞典』)

例 18)、19)では、「モ」は量的表現「三日」、「十万円」と共起している。例 18)では、「三日」は、話者にとって、〈限界に達している〉量である。また、例 19)では、「十万円モくれた」場合、

「十万円」は話者の予期を超えた、〈限界〉金額に達している。さらに、「ようやく」、「何を思ったか」から、話者の〈予期超過〉というニュアンスが読み取れる。副助詞としての「モ」は、いわゆる最大値を提示する機能を持っていると言えるだろう。

また、〈限界状況の明示〉に対応する例を、20)、21)のように挙げて説明する。

20) 運悪くモ見つかってしまった。

21) 惜しくモ敗れた。

(『新明解国語辞典』)

例 20)、例 21)の「見つかってしまった」、「敗れた」という表現によって、「運が悪い」、「惜しい」の限界的な状況が明示されている。

さらに、『明鏡国語辞典』は、「接続助詞〈バ〉を伴う条件句に使って上限を示して数量の少なさを表す」というような例も挙げている。

22) 五分モすれば帰ってくる。

23) 一万モあれば買える。

(『明鏡国語辞典』)

『明鏡国語辞典』は「モ」について、「その中が、さらに幾つかの部分(程度・段階)に分かれていることを表す」場合についての例も挙げている。

24) 東京モ西の外れ。

25) 二十世紀モ初めのころ。

(『新明解国語辞典』)

例 24)、25)における「モ」が「ノ」に言い換えられることから、「モ」の前件と後件が、包含関係にあると考えられる。例 24)、25)は、以下のように図示できる。

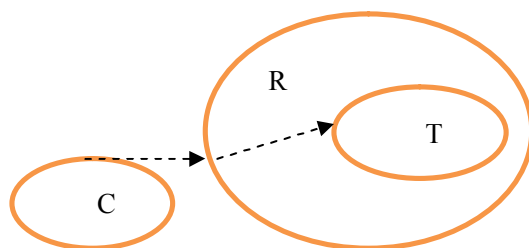


図 12 過大評価への控えの「モ」

図 12 は、R と T が包含関係であることを示している。話者はまず R に心的接触し、それから T に到達する。T によって、話者は認識を修正しようと働きかけている。例 24)、25)では、先ず「東京」、「二十世紀」という、大きい範囲の R へ心的接触をし、その後、認識が「西の外れ」、「初めのころ」という過大評価への控えによって修正されている。

以上のように、予想と実際の結果と程度の差がある場合、程度量型の「モ」が用いられる。

### 1.2.5 打ち消しを強める「モ」

『大辞林』は、打ち消しの「モ」の機能を「動詞の連用形や動作性名詞に付いて、下に否定の語を伴い、打ち消しの意を強めて表す」としている。また、『明鏡国語辞典』（第二版）は、打ち消しの「モ」を「少ない数量や小さな動きを表す語に付き、下に打ち消しを伴って全面的な否定を表す」としている。

26) 振り向きモしない。

27) いちべつモしてくれない。

(『大辞林』)

28) 少しモ待てない。

29) 一つモない。

30) 一步モ譲らない。

(『明鏡国語辞典』)

例 26)~30)では、「モ」の前は、最小限的な出来事が表される。例 26) では、「別れる時は、振り向く」という、一般的に考えられることを背景としているが、文中では、それも否定されている。仮定された「別れる時」という ID は、最小限が否定されることによって、失われる。例 27)、28)、29)、30)は、量的表現と共起している。話者の考える少量と否定表現が共起する場合、「モ」は、全面否定と似た機能を持っていることがわかる。また、打ち消しの「モ」には、前後の成分と共に、副詞節として用言を修飾する機能もある。

31) 予想モしなかった事件が起こった。

32) 働きモしないでごろごろしている。

33) 読みモしないで論評するな。

(『明鏡国語辞典』)

『明鏡国語辞典』によれば、例 31)~33)では、「モ」は、「動詞の実質的意味を表す部分を取り立てて、否定の意を強める」という機能を持っている、とある。

### 1.2.6 慣用フレーズに現れる「モ」

以上のほか、「A モ A なら、B モ B だ」や、「A モ A だが、～」のような慣用的なフレーズがある。前者は「B に同じまたは同類の意を表す語をとって、二つの事柄が同時に成り立つ意を表す」(『明鏡国語辞典』)、後者は「そのものの場合を一応肯定することを表す」(『新明解国語辞典』)とされている。「A モ A なら、B モ B だ」は A、B の同時成立を示し、「A モ A だが、～」は A の成立に別の話題や追加注釈が現れやすい。

### 1.2.7 取り立ての「モ」からの拡張

取り立ての「モ」のスキーマをもとに、各拡張的な用法が図 13 のように示される。

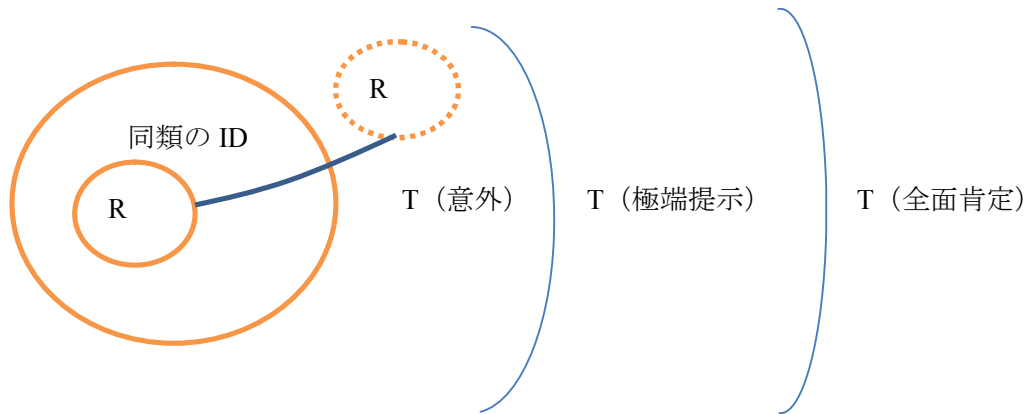


図 13 取り立ての「モ」からの拡張

図 13 のように、取り立てられた R と類似しているメンバーが同類の ID を構成している。もともと非同類である T が ID に集合されて、〈意外〉のニュアンスが生じていることがわかる。また、極端提示の場合では、R と対立している T が ID に集合されることから、同類の ID が極端に拡張される。〈やわらげ〉の場合、特別視された R は、取り出されても、やはりもとの ID に属すると話者が認識している。

全面肯定の場合では、すべてのものが同類の ID に集合されることから、同類の ID が無限に拡張される。その反面、全面否定の場合では、同類の ID が失われる。

量的表現と共起する場合、同類の ID の範囲は量的表現によって再確認できる。この場合は、〈程度量型〉と定義し、量的表現と共起する場合、「モ」は、〈予期超過や限界達成〉、〈限界状況の明示〉、〈過大評価への控え〉などの用法が挙げられる。〈打消し〉の場合、R が動詞の形で現れるが、最小限のものに見なされる。R の否定から、全面否定と類似する〈打消し〉が読み取れる。

以上のように、取り立ての「モ」のスキーマから、係助詞の周辺の用法や副助詞用法へ拡張は、図 13 で示すことができる。次に、逆接をあらわす「モ」を考察する。

### 1.2.8 接続助詞として用いられる「モ」

引き続き、前掲 1)、2) を例に、現代日本語における接続助詞の「モ」文を検討する。「善戦」は、「十分に力を発揮して戦うこと」(『大辞林』)、「(非力なものが) 全力を尽して戦うこと」(『新明解国語辞典』)と説明されている。「惜敗」は、「惜しいところで試合(勝負)に負けること」(『新明解国語辞典』)、「競技・試合などにおしくも負けること」(『大辞林』)と説明がされている。この文では、前掲で説明したように、「善戦」という前提があることから、「勝つ」可能性が高く想定されるが、「惜敗」という表現は、話者の「惜しい」という主観を示している。例 1)、2) は共に以下の図 14 で図示することができる。

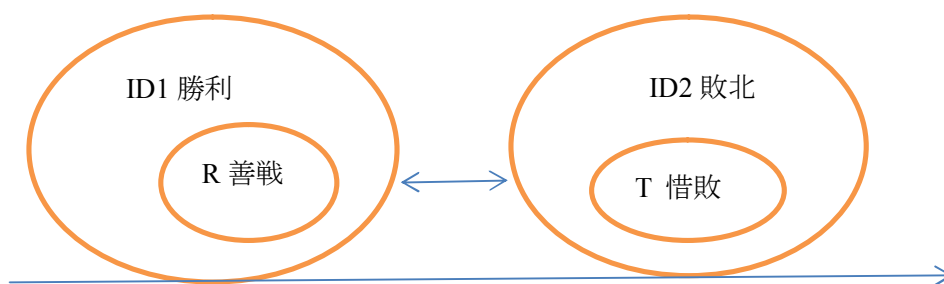


図 14 前件 R と後件 T が対立する「モ」文

例 1)では、「善戦」という R の取り立ては、「勝利」という ID を示している。結果の「惜敗」は、「敗北」という ID を示している。ID1 と ID2 は対立している。対立している ID のメンバーが接続助詞「モ」によって結合されている。R から T への事態の進展は、逆接関係となっている。下の「→」は、時間軸を示している。「善戦」から、「惜敗」への繋がりから、意外のニュアンスが読み取れる。

前掲例 2)の場合、T と R の対立は、含意と現実結果の対立として現れている。これは、以下の図 15 を用いて説明ができる。「デッドボールを受けた」という前提から、「退場すること」が予想される。実際は、「退場しなかった」。「退場する」と「退場しない」は肯定・否定の関係で対立している。時間軸において、事態の発展は、「モ」によって前件予想と相反する後件が成立することから、〈意外〉の拡張した用法、「逆接」が成立すると言えるだろう。

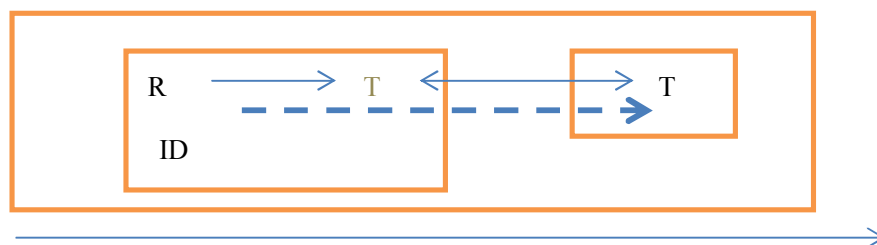


図 15 前件 R と後件 T の間接的に対立する「モ」文

図 15 のように、ID は R 「デッドボールを受ける」ことと、予想した結果 T 「退場する」という因果関係を示している。この因果関係は、常識による推論に基づいたものである。また、実際の結果 T は「退場することなく、…」であり、予想した結果と対立している。したがって、R と T は間接的に相反関係となっている。

以上のように、異なる ID のメンバーと時間的に結びつけられ、〈意外な展開〉という形式で現れるのが逆接の「モ」の特徴を示しているといえるだろう。以下に、多くの実例から逆接を表す「モ」について分析する。

### 1.3 実例による考察

実例（中納言）を調べたところ、逆接の「モ」文は、全部で 258 件しかなく、動詞のル形に接続する場合は圧倒的に多かった。係助詞としての「モ」と比較すると、逆接としての使用が少な

いことがわかる。上記したように、逆接の「モ」が現れるのは、スポーツ新聞の見出しや、Yahoo! ブログなどであり、この「モ」は古典文法の名残であるとも言える。接続の面から見てみると、「モ」は名詞に接続する場合と形容詞に接続する場合もあるが、名詞に接続する逆接構文は少ないのに対し、形容詞に接続する場合、慣用表現が多く見られる。そこで、本節から、動詞に接続する文例を中心に分析する。本研究における逆接を表す「モ」文には、その特徴から以下のように分けられる。

### 1.3.1 「継起的逆転」

逆接を表す「モ」文では、前件と後件が「継起的逆転」を表す文例がある。このような「モ」文は、スポーツ報道に多用されている。例 1)も類似しているが、スポーツ報道の文例では、「勝ち」か「負け」に関する表現が頻繁に見られる。「勝ち」には、「勝ち」の ID があり、「負け」にも、「負け」の ID がある。時間軸において、発生する順序は常に、「優勢→劣勢」、「劣勢→優勢」の形になる。以下に実例を用いて説明する。

- 34) 虎の先発エースの安藤司令官は初回を 3 者凡退で抑え、快調な立ち上がり。4 回に犠牲フライで 1 点失うモ、要所をしっかりと締め追加点を許しません。(Yahoo! ブログ:スポーツ)
- 35) 勝ち星は 6 勝止まりモ防御率はリーグ 9 位と復活。(『sabara』)

例 34)では、前件 R「1 点を失う」は、「劣勢」であるが、「要所をしっかりと締め追加点を許しません」という後件 T から、「優勢」が読み取れる。例 35)では、前件 R「6 勝止まり」は優勢とはいえない状況を示しているが、後件 T は「復活」という「優勢」を示している。例 34)、35)を見てもわかるように、「優勢→劣勢」、「劣勢→優勢」の流れが観察される。スポーツ報道以外、物語文にも、「継起的逆転」を表す文例が見られる。

- 36) 運命の恋人セルビー (クリスティーナ・リッチ) と出会うモ、ある殺人事件を犯する。(『MORE』)

例 36)における、「恋人と出会う」と「殺人事件を犯する」は、それぞれ「幸せなこと」、「悲惨なこと」と同じ ID に属している。相反する ID のメンバーが相次いで起こり、(下の矢印は時間軸のイメージである)、逆接関係が成り立っている。

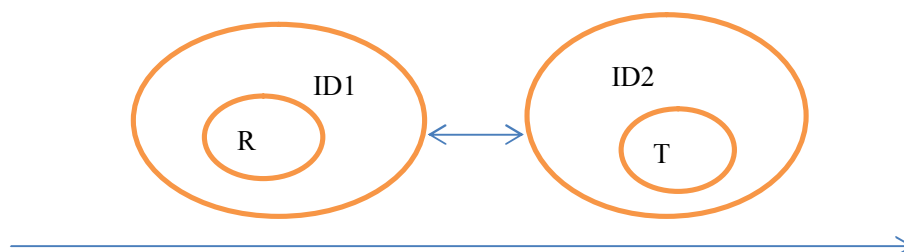


図 16 継起的逆転を表す「モ」

図 16 は、前掲図 14 と類似しているが、対立の関係が異なっていることにより、その図もいささか異なる。図 14 では、R と T の相反関係が顕在的に現れているが、図 16 では、前件 R と後件 T の対立は、潜在的であるといえる。

### 1.3.2 「継起的転換」

継起的逆転のもう一つは、「継起的転換」である。ここでは、異なる ID の間で、メンバーの物理的移動が起こっている。もともと ID1 に入っているメンバーが ID2 に集合されることになっている。

- 37) 千九百三十九年、上海マリア女学校から香港大学に進学し、一度は上海に戻るモ、解放後は再度香港に脱出、さらに米国に移住している。 (『上海』)

例 37) では、「彼女」の行動が、上海から香港へ、また上海に戻ってさらに香港へ、最後に米国に移住するという順序が見られる。「モ」のスコープは、「一度上海に戻るモ、解放後は再度香港に脱出した」という部分に当てられている。「上海」の ID には、彼女はもう脱出している。そして、彼女は、「香港」の ID に入っている。図 17 のように、前件 ID のメンバーが、後件 ID のメンバーとなっている。→前件 ID のメンバーは、後件 ID のメンバーへと移っている。このような文例は、「継起的転換」と名づけておくことにする。

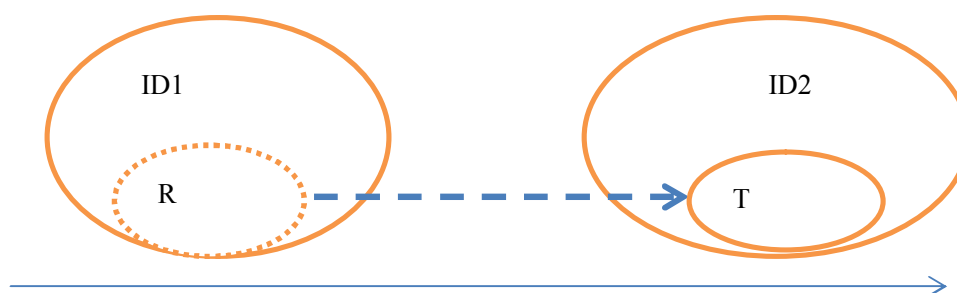


図 17 継起的転換を表す「モ」

図 17 では、例 37) のように、「彼女」の移動は、ID1 (上海) から、ID2 (香港) へと観察される。「彼女」は、特に「上海」や「香港」に属するわけではないことから、前件から後件への事態の発展から、〈意外〉のニュアンスが読み取れないことがわかる。

### 1.3.3 「心的世界」と「現実世界」の対立

他にも、逆接の「モ」は、「心的世界」と「現実世界」の対立が表される。

#### 1.3.3.1 「対比的逆接」

まず、前件 R と後件 T が直接的な相反関係となっている場合、例 38) が挙げられる。



38) 心は厳しい不動の決意にかたまるモ、体はしなやかによく動いている。

(『トラファルガル海戦物語』)

例 38)では、Rは「不動」、Tは「動いている」という肯定・否定の対立をなしている。つまり、RとTが直接対立している。心的世界で考えていることが、現実世界で実現されない。

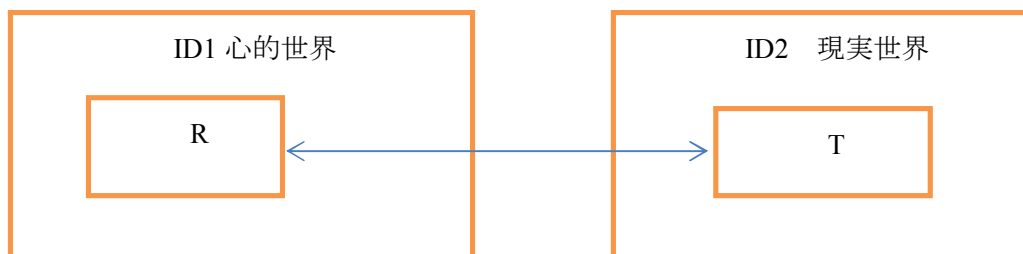


図 18 「心的世界」と「現実世界」の直接的対立

図 18 のように、前件 R は ID1 「心的世界」にあり、後件 T は「現実世界」にある。例 38)の場合では、「心的世界」の「不動」と「現実世界」の「動いている」は直接的な相反関係となっている。したがって、ID1 「心的世界」と ID2 「現実世界」も相反関係となっている。

「心的世界」と「現実世界」の対立は、以下のように、推論的逆接にも見られる。

### 1.3.3.2 推論的逆接

例 39)を見てほしい。例 39)については、図 19 を参照しながら、説明する。

39) 村は上下水道のサービスを停止するなど、かなしいかな非力な抵抗を試みるモ、オウムはその間もやりたい放題。  
(『不肖・宮嶋踊る大取材線』)

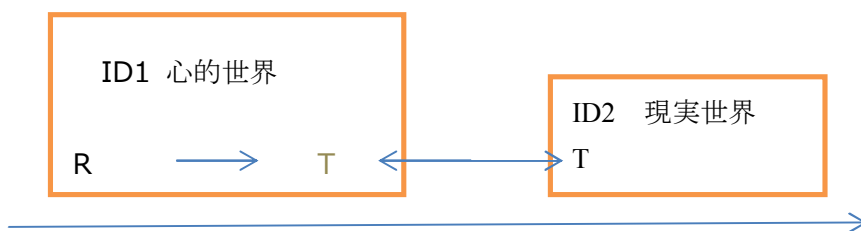


図 19 「心的世界」と「現実世界」の間接的対立

例 39)では、R 「…非力な抵抗」と T 「オウムはその間もやりたい放題」は時間軸において、継起的に発生した出来事である。R における目的は、「非行を止める」ことであるが、実際の結果 T 「オウムは…やりたい放題」が、目的が実現されないことを示している。R と T とは、直接的な相反関係は存在しないが、心的世界のターゲットと現実世界の T が相反関係となっている。したがって、R と T も逆接関係となる。

例 39)のような〈目的の不実現〉や前掲例 2)のような〈予想の不成立〉は、推論的逆接を表している。ここで〈予想の不成立〉を、以下の実例から分析する。

- 40) 八十七年、自信喪失のまま郷里に帰り、『字 aza』で西村むつみ主演映画に決着をつけるモ、精神的にはいっそう落ち込んでいく。(『映画監督になる 15 の方法』)

例 40)の R「主演映画に決着をつける」から、「喜ぶ」などの結果が予想されるが、実際の結果は T「落ち込む」であり、「喜ぶ」と対立している。したがって、R と T は逆接関係となっている。

### 1.3.4 量的表現との共起

以上のほかにも、逆接の「モ」と量的表現と共起する例も見られる。量的表現と共起する「モ」文では、前件の量に応じた後件が示す目的の達成が期待されている。例 41)、42) は図 20 を参照しながら説明する。

- 41) 婦人科三件回った経験あるモ、納得のいく説明得られず。(『現役ナースが明かす更年期のホントの話』)
- 42) 今までに、農協、などなどの指導あるモ、うまくお金にならず。(『Yahoo!ブログ:政治/政界』)

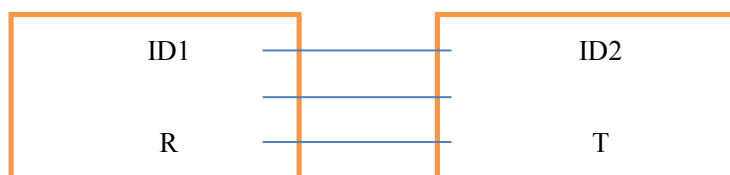


図 20 量的表現と共起する「モ」(逆接の場合)

図 20 のように、例 41)、42)では、「三件回った」、「農協、などなど」は、条件の〈量〉を示している。この〈量〉から、ある事態の〈達成〉が期待されていることがわかる。しかし、実際の結果を表している後件は常に「ず」のような否定文末で事態の未達成を示している。つまりここでは、「(話者) ある量の達成から、結果事態の達成を期待しているが、それが不実現だった」ということになる。これは、逆接の「モ」と量的表現が共起する場合に見られる表出特徴と考えられる。

## 1.4 結語

本節は、係助詞の「モ」と副助詞の「モ」、接続助詞の「モ」を考察し、三者の連続性について分析した。係助詞の「モ」の取り立て機能は、プロトタイプ的な用法であり、取り立てられたものは前景化され、同類の ID は背景化している。〈意外〉や〈極端提示〉の「モ」文では、非同類のメンバーが集合され、それによって同類の ID が拡張される。〈やわらげ〉(〈詠嘆〉、〈周辺の用法〉)の「モ」文では、ID におけるメンバーを取り立てて特別視しても、ID のメンバーであることには変わりはない。〈意外〉は、逆接に派生していったと考えられる。〈取り立て〉の「モ」の拡張用法を、以下の表 2 にまとめる。

表 2 取り立ての「モ」とその拡張用法

| 「モ」の用法 | ID の変化            | 例文                    |
|--------|-------------------|-----------------------|
| 取り立て   | 同類の提示 (ID の変化なし)  | あなたのことモ頼みました。         |
| 極限提示   | 異類が同類 ID に入る      | サルモ木から落ちる。            |
| 意外     | 非同類が同類 ID に入る     | 話すつもりのないことモつい話してしまった。 |
| やわらげ   | 特別視するものも同類 ID に入る | その財布モずいぶん古くなりましたね。    |
| 全面肯定   | 同類の ID が無限に拡張される  | どこの店モいっぱいだ。           |
| 全面否定   | 同類の ID が消失する      | 疑わしいものは何モない。          |

表 2 において、全面否定から全面肯定に向かって、同類の ID が次第に拡張していることが表されている。

また、副助詞の「モ」は、量的表現と共起し、この場合、〈予期超過〉や〈限界到達〉、〈限界状況の明示〉や〈過大評価への控え〉を表す。また、量的表現と共起しない場合もあり、この場合、〈打ち消し〉を表す。〈打ち消し〉を表す場合、「モ」に前接する成分は〈最小限〉を表し、その〈最小限〉が否定されることにより、同類の ID が失われる。副助詞「モ」の拡張用法には、「トイッテモ」などの形式の「テモ」系構文が挙げられる。その関連性については、本章第 3 節で詳述する。

逆接の「モ」文の多様性を、以下の表 3 に示す。

表 3 逆接の「モ」文の多様性

| 逆接の「モ」文の多様性          | R と T の関係                         | 逆接の種類 | 例文                                |
|----------------------|-----------------------------------|-------|-----------------------------------|
| 量的表現による期待への未到達       | R の量が要求する目標<br>T が未達成             | 推論的   | 婦人科三件回った経験あるモ、納得のいく説明得られず。        |
| 「心的世界」と「現実世界」の間接的な対立 | R と T の間接対立/ID1=<br>心的世界、ID2=現実世界 | 推論的   | …かなしいかな非力な抵抗を試みるモ、オウムはその間もやりたい放題。 |
| 「心的世界」と「現実世界」の直接的な対立 | R と T の直接対立/ID1=<br>心的世界、ID2=現実世界 | 対比的   | 心は厳しい不動の決意にかたまるモ、体はしなやかによく動いている。  |
| 継起的逆転                | R と T の ID が対立する                  | 対比的   | 善戦するモ惜敗。                          |
| 継起的転換※1              | 異なる ID の間、主体の物理的移動                | ※1    | 一度は上海に戻るモ、解放後また香港へ脱出した。           |

※1 継起的転換の場合は、逆接ではない

逆接の「モ」文には、次のような特徴が見られる。

R と T が直接対立している場合、前件と後件は逆接関係であるといえる。R と T の対立は肯定・否定の対立、あるいは意味上の対立だと考えられる。「モ」文には、それぞれ異なる ID に属する例が見られる。例えば、「心は厳しい不動の決意にかたまるモ、体はしなやかによく動いている」の場合では、前件の「不動」と後件の「動く」が肯定・否定の対立を成している。また、前件 R と後件 T はそれぞれ心的世界の ID と現実世界の ID に属している。心的世界と現実世界は R と T の対立によって、相反関係を成している。対比的逆接と推論的逆接には共通性があると考えられる。

ほかにも、「心的世界」と「現実世界」には、間接的な対立もある。例えば、「…非力な抵抗を試みるモ、オウムはその間もやりたい放題」では、前件 R 「非力な抵抗」の目的は、「非行をやめさせる」といえるが、実際の結果 T 「オウムはその間もやりたい放題」はその目的と対立している。「心的世界」の〈期待〉(〈目的〉)は、実現しなかった。この他にも、推論的逆接のもう一つとして、常識による推論との背反を示す逆接がある。例えば、「主演映画に決着をつけるモ、精神的にはいっそう落ち込んでいく」では、前件 R 「主演映画に決着をつける」ことから、「喜ぶ」ということが予想されるが、実際の結果 T は「精神的にはいっそう落ち込んでいく」で、「喜ぶ」という結果と対立している。

また、逆接の「モ」文では、後件の結果 T の不変化が多く見られる。例えば、前掲例 34)の「快調な立ち上がり→1 点失う→要所をしっかりと締め追加点を許しません」では、優勢→劣勢→優勢という流れが見られる。つまり、R という対立する ID のメンバーを経由しても、先行する文（「快調な立ち上がり」）と同じ流れになる。また、前掲例 40)「自信喪失→主演映画に決着をつける→精神的にはいっそう落ち込んでいく」では、「低迷→高揚→低迷」という主人公の心境の流れが示されている。さらに、前掲例 37)「香港大学進学→一度上海に戻る→解放後は再度香港に脱出」では、「香港→上海→香港」という主人公の物理的移動が、異なる ID を経由しても、もとの ID に戻る流れが見られる。（「モ」の範囲内はこのような傾向を示している）

逆接の「モ」は、〈結果の不変化〉を示し、文末が「ず」で終わる例も多く見られる。例えば「婦人科三件回った経験あるモ、納得のいく説明得られず」では、R という量的表現が示す事態（「婦人科三件回る」）を経由しても、やはり相応の結果は得られなかった。

以上のように、本節では、係助詞の「モ」の〈同類を示す〉機能から、助数詞の「モ」の〈限界を示す〉機能、逆接の「モ」の〈同じ結果を示す〉機能への拡張が明らかになった。

## 2. 「テモ」系構文の特徴

### 2.1 はじめに

「テモ」文は論理文体系の中で、逆条件を表すものとされている。前節で取り上げた例文「千九百三十九年、上海マリア女学校から香港大学に進学し、一度は上海に戻るモ、解放後は再度香港に脱出、さらに米国に移住している」の「モ」は、同じく逆接を表しているが、「テモ」と置き換えることができない。前件 R と後件 T には、条件付けがないと、「テモ」文が成立しないだろう。また、「彼が行かなくテモ私は行く」のような文では、「私は行く」という結果の不変化が見られるが、「モ」とは代替不可である。本節では、「テモ」文を取り上げ、前件 R と後件 T の関係を考察し、「テモ」固有の意味機能を明らかにする。

### 2.2 「テモ」に関する先行研究の検証

ここではまず、「テモ」の先行研究を検証してみる。

#### 2.2.1 「条件づけ」と「対立」

中里(1996:168)は、「テモ」は「条件付け」と「対立」を表す機能があるとしている。中里は、条件づけの「テモ」は「A という条件から予想される事態 B とは相反する事態が展開する場合」に用いられる、としている。このことを、例 1) を用いて説明する。

1) あの店がおいしくテモ、はやっていない。 (中里 1996:168)

前掲図 19 を見てもわかるように、我々のフレームでは、「おいしいカラはやっている」という因果関係が常に成立する。しかし、現実世界では、T「(あの店が) はやっていない」という結果が成立している。予想のターゲットと現実の T は肯定・否定の相反関係となる。したがって、R と T の間接的に対立し、ID 1 と ID 2 も間接的に対立している。

図 19 では、中里の言う「A という条件」は R と相当する。「事態 B」は ID 1 中のターゲットである。「事態 B と相反する事態」は現実世界の T である。「美味しくテモはやっていない」場合では、R という有利条件が無効化される。したがって、結果の成立は条件にたよらない、ということがわかった。つまりこれは、逆条件が与えられても、後件が成立するということを意味している。実際、「テモ」文では、ID 1 を一概に「心的世界」と定義することは適切とはいえない。「美味しいからはやっている」は、常識による推論であることから、ID 1 は常識による因果関係を示していると理解できる。

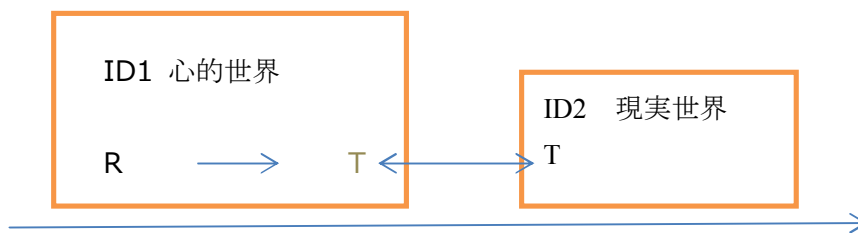


図 19 「心的世界」と「現実世界」の間接的対立 (再掲)

例 1)の「テモ」文では、実際の結果は、常識による推論と背反関係となっている。  
次に、前掲例 1)を「ケド」文に置き換えてしてみる。

1-a) あの店はおいしいケド、はやっていない。 (作例)

「ケド」を使う場合、前後件の関係は、推論的逆接よりも、対比的逆接のみに見られる。「おいしい」は「あの店」に対する「プラス評価」であるのに対し、「はやっていない」は、「あの店」に対する「マイナス評価」である。このように、接続助詞によって規定される従属度は異なっていることがわかる。2)の場合、前件と後件は、話者の伝えようとする情報が等しいのに対し、「テモ」が使われている場合、後件の結果が際立たされていることがわかる。では、前掲のステージモデルを用いて「ケド」と「テモ」について見てみる。

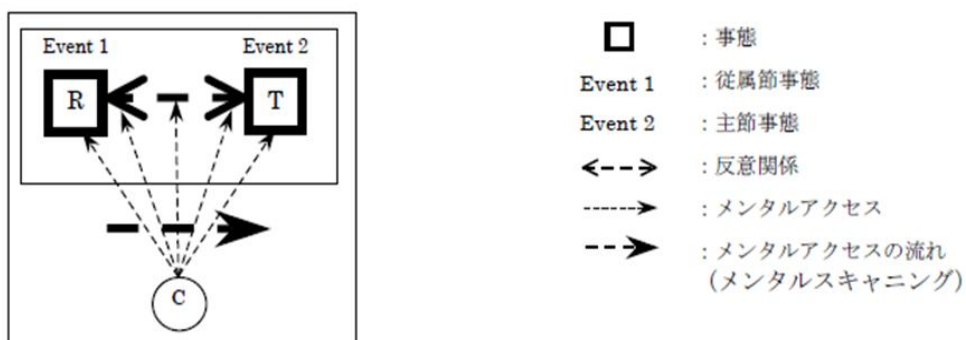


図 3 ステージモデル (再掲)

図 3 のように、「ケド」文では、R と T がシンプルな相反関係に見られる。R「おいしい」の背景に「プラス評価」という ID があるのに対し、T「はやっていない」の背景に「マイナス評価」という ID がある。R と T は ID の対立によって相反関係となっている。例 1)、1-a)の前後件関係から見ると、対比的逆接関係とも理解できるし、推論的逆接関係とも理解できる。したがって、対比的逆接関係と推論的逆接関係とは、明確な境目がなく、連続性があると考えられる。

次に、「テモ」文のステージ・モデルを示す。

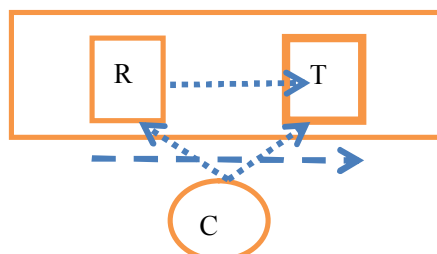


図 21 「テモ」文のステージ・モデル

図 21 の R は「おいしい」という条件である。観察者 C は、R よりも、T「はやっていない」ということを際立たせている。

例 1)のほかに、中里(1996)は、「ケド」との関連で、例 2)を取り上げている。

2)? あの店は美味しく**テモ**、高い。 (中里 1996:168)

例 2)は、「テモ」を使うと、文は不自然に感じられる（「不自然ではない」と捉えるネイティブもいる）が、「ケド」と入れ換えると、自然に感じられる。

2-a) あの店はおいしい**ケド**、高い。 (作例)

例 2-a)では、前件と後件は、推論が見られなく、「おいしい」と「高い」は、対照関係を成している。推論がない前後件関係に、「テモ」を使うと、文が不自然になる。それは、「おいしい」と「ケド」には、条件付けがないからだと考えられる。一方、中里(1996:163)は、同じ文では「テモ」が成り立つのは、後件を言いたいときに、「おいしい」という利点はあるても「高い」という難点があることに変わりはないことを意味する場合であるから、としている。中里(1996:168)は、3)のように、上下文を足し、「テモ」が成立する例を示している。

3) 話者 1: 「料理がおいしい**カラ**、あの店にしよう」

話者 2: 「いや、あの店は美味しく**テモ**高いよ。別の店にしよう。」 (中里 1996:168)

例 3)の「テモ」文が成立する理由として、文には、条件づけ（推論）が含まれている。つまり、「美味しい」場合は自然と「美味しいからあの店に行こう」に導かれる。「テモ」が用いられる場合は、「高いから別の店にしよう」という結論に導かれる。したがって、「美味しい」という有利条件が無効化されたのである。



図 22 「テモ」文に見られる後件志向性

図 22 が示しているように、「美味しい」と「高い」は、それぞれ「あの店に行く」と「あの店に行かない」に条件付けられている。太い矢印は、話の流れを示している。「おいしく**テモ**高い」という文には、「高い」→「別の店にしよう（あの店には行かない）」という志向性が含まれているといえる。

### 2.2.2 「テモ」の論理的分析

丹羽(1998:111)は、逆接をあらわす他の助詞と比べ、「テモ」の最大の特徴は、〈假定条件〉、〈恒常条件〉、〈確定条件〉は、それぞれ文脈によって区別される、と指摘している。

丹羽(1998:111)は、以下のような例を挙げている。

- 6) 彼は雨が降っ**テモ**出かけるだろう。  
 7) 彼は雨が降っ**テモ**出かけるのが常だ。  
 8) 彼は雨が降っ**テモ**出かけた。 (丹羽 1998:111)

例 6)、7)、8)は、それぞれ、〈假定条件〉、〈恒常条件〉、〈確定条件〉を示している。話者の認識では、不利な条件（前件）があっても、後件が成立することは変わらない。

丹羽(1998:111)は、逆接をあらわす多くの助詞は、確定条件のみを表すと述べている。なぜなら、假定条件 P とその帰結 Q とともに話者の考える世界での事柄であるから、確定条件のような話者の考えと現実との間の種々の関係を考慮することがないからである。

例 6)では、「雨なので、出かけるのが不便だ」という常識が想起される。そして、「不便なので出かけない」という推論がある。話者の判断では、「雨が降る」という不利条件があっても、「彼は出かける」という結果は変わらない。以上のように、不利条件の無効化は、逆条件の一つの特徴といえるだろう。

さらに、丹羽(1998:111-112)は、假定条件と確定条件の「**テモ**」を〈同類を表す〉、〈同類かつ逆接を表す〉、〈同類の意味を持たない逆接〉、〈同一世界において意味的に肯定・否定の逆接〉のように、前件と後件の関係を四種類に分けて、例を挙げている。

- 9) 普段別に異常を感じないし、検診の結果を見**テモ**、やはり異常はなかった。  
 10) 彼女のことは、今思い出し**テモ**むねが痛む。  
 11) あいつ、お父さんがスポーツ選手**デモ**、スポーツぜんぜんだめなんだ。  
 12) 日本語はできなく**テモ**、英語はできた。 (丹羽 1998:111)

例 9)は〈同類の提示〉とされている。「普段」は「異常なし」で、「検診の結果を見ても異常はなかった」ことから、結果が変わらないことを表している。「検診」と「普段」は同じ結果に導かれていることから、同類条件であるといえる。これは、「Vテ」＋「モ」の形で、「モ」文の〈同類を示す〉と類似している機能を持っているとも考えられる。

例 10)では、「今思い出しても胸が痛む」という話の裏では、「時間が経つと忘れ、思い出して胸は痛まない」という予想が含意されている。「別れた直後」は、「彼女のことを思い出すと、胸が痛む」という状態が、発話時（今）でも持続している。図 23、24 は、共に同類を提示しているが、図 24 の場合「今は、胸は痛まない」という予想はあるので、この予想と相反する結果が成立している。これは、〈同類かつ逆接〉という関係を示している。例 9)と例 10)のスキーマを以下に図示する。



図 23 同類を表す「**テモ**」





図 24 同類かつ逆接の「テモ」

図 23、24 から、「異常がない」、と「彼女のことを思い出すと胸が痛む」は、常に成立している結果であることがわかる。

例 11)の場合では、前件と後件が同類の意味を持たない逆接とされている。例 12)では、「日本語」と「英語」は「外国語」という同一世界において意味的に肯定・否定の逆接とされている。例 11)では、「父はスポーツ選手だから、息子もスポーツ堪能だろう」という推論が含意されているが、実際は、一人がスポーツ選手で、もう一人は、スポーツ全然だめだ。例 11) は対比的逆接に見られるが、「ガ・ケド」と言い換えると異なりがよりわかりやすくなる。

11-a) お父さんはスポーツ選手だ**ガ**、息子は全然だめだ。

11-b) あいつ、お父さんがスポーツ選手だ**ケド**、スポーツ全然だめなんだ。 (作例)

例 11-a)の「Aは～が、Bは～だ」は、対比的逆接の最も頻繁に見られる形式である。前件と後件は、情報が均等的に読み取れることから、「テモ」文と異なる。

例 11-b)では、「テモ」と「ガ・ケド」共に用いることが可能であるが、「ガ・ケド」は、前件 R の「お父さんがスポーツ選手」が、〈前置き〉にもなる。本研究は、逆接の論理文を中心にし、「前置き」などの使用は考察対象外のものと見なす。

例 11)では、「テモ」を使う場合、上記の図 23、24 と同じように図示できる。

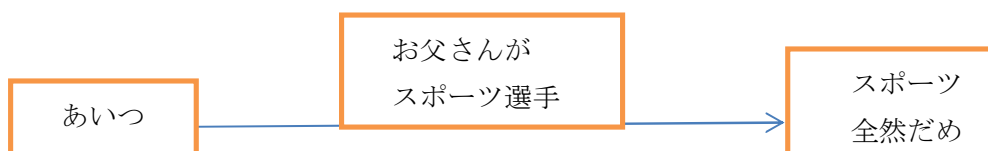


図 25 同類ではない逆接の「テモ」

図 25 から、「あいつ」は、「お父さんがスポーツ選手」という有利条件があっても、「スポーツは全然だめ」という結果に導かれていることがわかる。

例 12)の「日本語はできなく**テモ**、英語はできる」という文は、形式上対比的逆接に見られるが、「ケド」と置き換えたら、その独自の特徴が観察される。

12-a) 日本語はできなかった**ケド**、英語はできた。 (作例)

例 12-a)の場合では、前件と後件の情報が均等的に読み取れるのに対し、例 12)の場合では、「英語はできた」という後件が際立たされる。これを図 26 で示してみる。

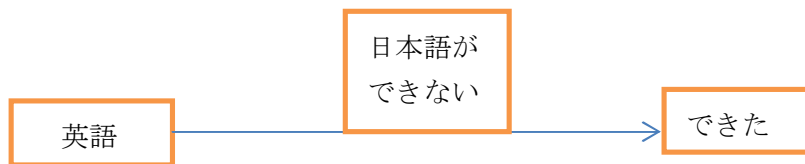


図 26 同一世界における意味的な肯定・否定の逆接

図 26 のように、例 12)は一見対比的逆接に見られるが、実際の際立ては後件にある。つまり、「日本語ができない」という不利な条件があっても、「英語はできる」という結果が成立している。

### 2.2.3 条件の唯一性を否定する「テモ」

前田(2009:187-188)は、「テモ」は、「逆原因」を表す「ノニ」と異なり、「逆条件」を表し、「テモ」が担う条件関係では、「条件の否定」説と「条件の取立て」説があるとしている。ただし、「条件の否定」といっても、それがただの条件文との平行する用法ではないと前田が指摘している。前田は、「条件の否定」に対する反論として、〈反復〉、〈不定語との共起〉、〈順接の意味に近い〉という三種の用法を上げている。また、反復用法をさらに、〈複数句の反復〉、〈同一句の反復〉、〈否定句の反復〉に下位分類している。

13) ご飯を食べテモ酒を飲んでテモ太らない。

14) 食べテモ食べテモ太らない。

15) 食べテモ食べなくテモ太らない。

(前田 2009:188)

例 13)では、「ご飯を食べる」と「酒を飲む」は、〈複数句の反復〉である。「太らない」という結果が話者によって際立たされている。「ご飯を食べる」と「酒を飲む」は、「太る」の有利条件であるが、有利条件の無効化により、結果のが変わらないことが際立たされている。

例 14)における「テモ」の反復用法は、〈同一句の反復〉である。「太る」の有利条件が累加しても、「太る」ことにはならない。つまり、後件結果の変わらないことを表している。

例 15)では、「食べる」と「食べない」という、〈否定句の反復〉が見られる(本研究では、これを肯定・否定の反復という)。順接条件とその否定形式が反復して現れる場合、結果に導かれることは必然的だと考えられる。つまり、条件を経由しても経由しなくても、結果が成立するのは変わらない、ということが示されている。

前田(2009)では、「条件の否定」という説は、誘導推論(「XならばYだ。XでなければYでない」)に由来するものと考えられる。つまり、XはYの充分必要条件であることから、XとYの推論では、唯一性が強調され、条件の否定において提示される条件もまた、唯一でなければならないとしている。「テモ」文の場合、この条件の唯一性が否定されている。

前田(2009:190-195)は「テモ」の典型的な用法を、①「テ」形の並列・取立て、②並列条件、③逆条件、④並列・逆条件の四つに分けている。順接文に用いられる「テモ」文は、同類を示す「テモ」のことを指している。



では、「テモ」の用法と「テモ」が現れる文を、表4を用いてまとめている。

表4 田中(2004)による「テモ」の記述的研究(形式は筆者による)

|             |          |         |           |
|-------------|----------|---------|-----------|
| 仮定逆接条件      | 否定と屈折    | 処置と未完   | トシテモ・ニシテモ |
| 確定逆接条件(既定)  | 例示・投機の否定 | 肯否判断タイプ | トハイッテモ    |
| 恒常逆接条件(無条件) |          |         |           |
| 強調の表現       | 節末慣用     | 並列・累加   | 例示の用法     |
|             | 文末慣用     | 対比の用法   | 反復の用法     |

#### 2.2.4.1 例示の多様性

取り立ての〈例示〉として、田中(2004)は例19)を挙げている。

- 19) ここを押しタラ、スイッチが入ります。ここを押しテモ、スイッチが入ります。  
(田中 2004:191)

例19)のように、「テモ」文の範囲内の「ここを押す」は、「スイッチが入る」ためのもう一つの条件である。前件「ここを押す」がきっかけで、後件が発生する。この文では、条件を変換しても、結果が変わらず成立することを表している。これは、前田(2009)の並列条件と同じ用法と見なせる。〈取り立て〉の例19)のほか、田中(2004:200)は、並列・累加・反復用法の〈例示〉を挙げている。

- 20) 明るいネオンの下にいテモ広い通りの真ん中にいテモ高いビルの間を歩いていテモ、不意と寂しさが顔を出す。  
(田中 2004,199:『北国通信』)
- 21) 右を向いテモ左を見テモ、馬鹿と阿呆のいがみあいだ。  
(田中 2004:200)

例20)では、「明るいネオンの下にいる」と「広い通りの真ん中にいる」と「高いビルの間を歩いている」は、いずれも後件「不意と寂しさが顔を出す」に導かれている。つまり、後件「不意と寂しさが顔を出す」という状態が常に起こっている。おそらく、主人公は、いつも「寂しげな」表情をしているので、どこにいても、何をしていても、そのような表情が自然に出てくるのだろう。例21)では、前件で「左」と「右」という相反関係の反復は、周囲全体を示している。21)からは、周り全体「馬鹿と阿呆のいがみあいだ」という意味が読み取れる。〈取り立て〉、〈反復〉のほか、例23)の「見テモワカルヨウニ」のような慣用的な用法も見られる。

- 23) 円高が進んでいる割には値下がりしないものの多くは、農産物を見テモわかるように、政府が大なり小なり価格形成にかかわっている。  
(田中 2004,202:『朝日新聞』1988.2.10)

例 23)では、「農産物」はただの一例である。実際は「農産物」だけではなくて、「水産物」などの条件を経由しても、「政府が大なり小なり価格形成にかかわっている」という結果に導かれていることがわかる。

#### 2.2.4.2 意志の不実現と打消し

〈処置〉と〈未完〉の例として、例 24)、25)が挙げられる。本研究では、前件・後件には同じ動詞が肯定・否定の形で表れているので、それぞれの形式を「V タクテモ V ヨウガナイ」、「～V テモ～V ナイ」で示す。

24) 用途の面から名前をつけたく**テモ**、名前の付けようがないのである。

25) 裁判は終わっ**テモ**事件はまだ終わっていなかった。 (田中 2004:190)

例 24)のように、前件には、「たい」という、話者の願望が表れ、後件で、前件動詞の意思や願望を否定する結果が見られる。また、「名前を付ける」という述語表現が、前件と後件両方で表れている。例 24)から「～V タクテモ～V ヨウガナイ」という文型が見られる。意志が実現しないことを表す表現は、〈心的世界〉と〈現実世界〉のずれを表している。

例 24)では前後の主語は一致しているが、例 25)では前後の主語は異なっている。「裁判は終わった」が、「事件はまだ終わっていなかった」という文の流れは、対比的逆接に見られるが、ここには、「裁判が終わったら、事件もおしまいになる」という常識による推論が含まれている。対比的逆接の形式といっても、「事件はまだ終わっていない」という結果が際立たされる。前件の有利条件が無効化され、結果が変わらないので、例 24)は逆条件文とも見なすことができるだろう。本研究では、統一のため、〈処置〉と〈未完〉を〈意志の不実現〉と〈打消し〉と言い換える。



図 18 「心的世界」と「現実世界」との直接的対立 (再掲)

#### 2.2.4.3 条件の競合性

田中(2004:187)は、否定と屈折の例として、26)を挙げている。例 26)には、「テモ」と「ナラ」の併用が見られる。

26) ガラガラ空いている映画館や列車の中なら、コートや荷物で座席を占領し**テモ**誰にも迷惑はかからない。 (田中 2004,187:『墮落——あるいは、内なる曠野』)

公衆マナーという常識によって、公衆場所では、「コートや荷物で座席を占領する」ことは、非常識で、他人に迷惑をかける行為に見受けられる。しかし、先行する文には、競合する条件とし

て「ガラガラあいている映画館や列車の中」とあり、「テモ」文の結果は「誰にも迷惑をかけない」という結果を示している。「テモ」文のもともとのスコープは「コートや荷物…」から、文末までであるが、付加条件がある場合、それはただの R と T の構造ではなく、ランドマーク・参照点・トラジェクターの三項目が必要とされる。図 28 を参照しよう。

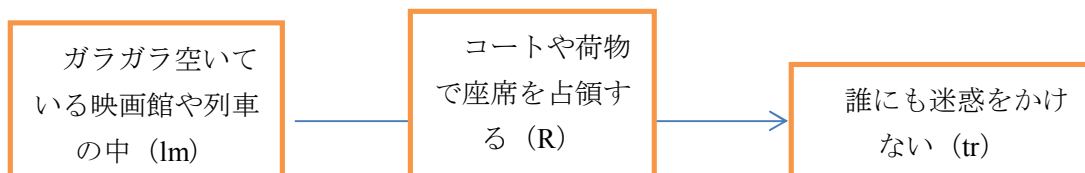


図 28 条件の競合性

つまり、ランドマーク(lm)から、トラジェクター(tr 前掲の結果 T と相当する) へアクセスする場合、R を経過するが、R は逆条件であっても、アクセスの経路を変えることができなかった。常識的推論による因果関係が、競合する条件の作用で、逆条件へと変換される。例 26)は、予想された因果関係の逸脱を示している。

#### 2.2.4.4 関連形式

田中(2004:187)の分類では〈假定逆接条件〉の場合、「テモ」は「トシテモ」、「ニシテモ」になって現れるのに対し、〈確定逆接条件〉の場合、「トイッテモ」になって現れているとする。

田中によれば、〈假定逆接条件〉の場合、「テモ」は「たとえ、仮に、ときに、たまに」などと常に共起し、条件を仮定に成立させ、経験などにもとづき、結果を判定するのが一般的であるとしている。以下は、例を挙げ、本研究の理論モデルが応用できることを証明する。

27) 我々の計画が仮に採用されていたトシテモ、やはりあの国は滅びねばならなかった。

(田中 2004,188:『墮落——あるいは、内なる曠野』)

28) 世の中の変化に対応するニシテモ、教育のあり方全体を見通すのではなく、小手先のつじつま合わせに終わるのでは矛盾は避けられない。

(田中 2004,189:『青春の蹉跎』)

例 27)、28)のように、田中(2004:188)は、「トシテモ」は、引用や伝聞に多く用いられ、前件で仮に資格、立場、基準、範囲を認め、後件で評価などを与えたり、挿入語句が現れる場合も多いとしている。一方で、「ニシテモ」は、人の認識に限定され、前件で場面を例示し、後件で前の趣旨を言い換えたり取消したり、補足説明したりすると述べている。本研究では、以下のように図を用いて以上の例を分析する。

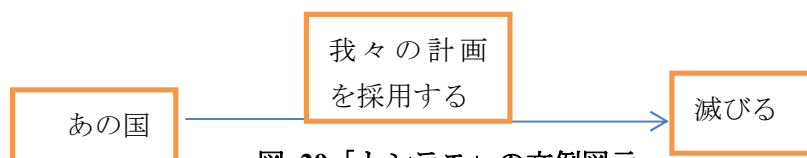


図 29 「トシテモ」の文例図示

図 29 のように、まず、話者の認識では、「あの国が滅びねばならない」となっていて、つまり、

「あの国が減じる」という結果は、「我々の計画を採用する」という条件があっても、事態が発展する方向性が変わらないと話者が判断している。27)は有利条件の無効化と見なされる。

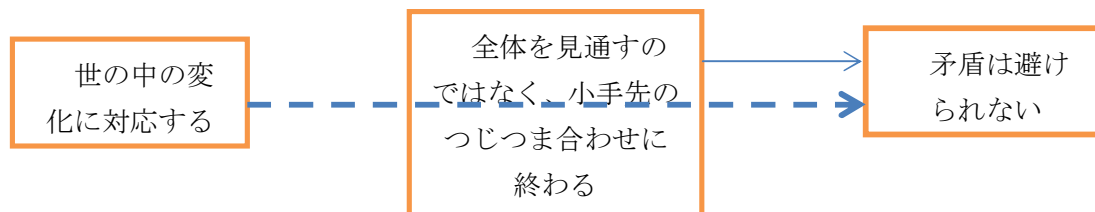


図 30 「ニシテモ」の文例図示

図 30 も、前掲した図 29 と似て、競合する条件が与えられている。話者の考えでは、「世の中の変化に対応する」という条件の下でも、「全体を見通すではなく、小手先のつじつま合わせに終わる」場合には、「矛盾は避けられない」という結果に導かれる、となっている。「ニシテモ」は、恒常性の道理を述べるのに対し、「トシテモ」は、〈反事実仮想〉や〈仮に特殊条件〉を取り立てて、結果の不変性を示す傾向が見られる。また、田中(2004)は〈確定逆接条件〉を表す「トイッテモ」の例を 29)のように挙げている。

- 29) 日本人が金持ちになったトイッテモ、それは土地の問題などがあって、実力以上に表に現れているに過ぎない。  
(田中 2004,192:『朝日新聞』1986.11.28.)

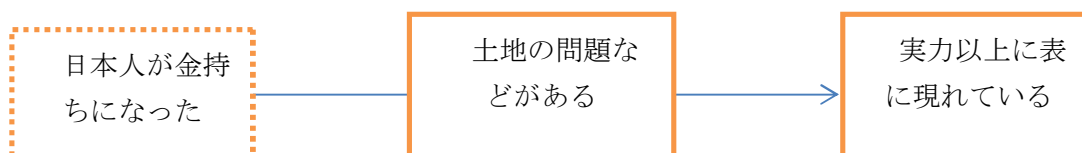


図 31 過大評価への控えとしての「トイッテモ」

田中(2004)は「ト (ハ) イッテモ」は、「トイウ」のあらゆる一般的な評価、認定、引用、伝聞といった意味規定により、逆接の条件を設定するものであるとしている。前件では「トイウ」で導かれる内容から受けるイメージと、現実が相反する状況が後件で述べられる。「トハイッテモ」は一般通念に反する過小評価に類する、一種の留保的な表現である。例 24)を挙げて説明すると、図 31 のように、「日本人が金持ちになった」という概念への理解は、「土地の問題などがある」という理由が追加されたことにより、「実力以上に表に現れているに過ぎない」と修正されている。参照点モデルで示すと、以下の図 32 が得られる。

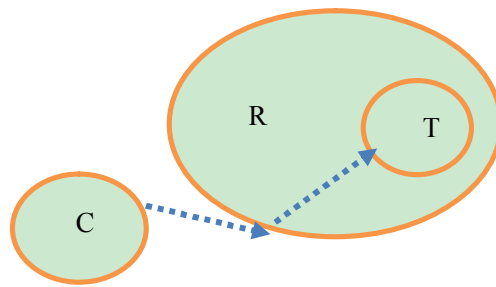


図 32 「ト (ハ) イッテモ」の参照点モデル

図 32 のように、「ト (ハ) イッテモ」の認知的過程は、まず大きい参照点 R まで心的接触して、そしてその中の、より小さい概念の T に到達する。このような使い方も、取立ての「モ」(例)「中世モ鎌倉のごろ (中世とはいっても鎌倉のころ)」と共通している。

#### 2.2.4.5 慣用表現

節末・文末慣用表現では、例 30)、31)が挙げられる。

30) 怪物の動きいかんが選挙結果を左右するトイッテモ過言デハナイ。

31) 間違ッテモヤミ金融に手を出してはならない。 (田中 2004:197)

30)では、「怪物の動きいかんが選挙結果を左右する」という極端的な言い方が取り立てられている。文末慣用表現「トイッテモ過言デハナイ」によって、話者はその極端的な言い方を認可している。このような用法は、「極端条件の認可」と名付けられるだろう。これは、前掲「条件集合の拡張」とも見なされる。31)では、慣用表現「間違ッテモ」もまた、特殊な場面を提示している。特殊な場面でも、結果は成立している。例 31)のような特殊条件を一般化する過程が観察される。これも前掲「条件 ID の拡張」と見なされる。

田中(2004)では、「テモ」の文例が多く取り挙げられ、仔細に分析がされている。複雑な文脈で「テモ」が用いられている場合、〈常識による推論の不適格〉についての説明、慣用表現による〈意志の不実現〉や〈打消し〉、関連形式「トシテモ」の仮定条件の不適格、「ニシテモ」の状況分析姿勢や「トイッテモ」の追加注釈機能などが取り上げられている。関連形式もまた、互換性や連続性が存在しており、これらについては、第3節、4節で取り上げて行う。

#### 2.2.5 接続語句成分「ソレデモ」

ここでは、上記で触れられていない「テモ」の用法について触れ、接辞のついた「テモ」の連続性について検証する。宮地(1983)は接続詞としての「ソレデモ」について、話者の意味づけの評価が読み取れると述べている。以下の例を見てほしい。

32) 外は非常に寒かった。ソレデモかけだしていった。

(宮地 1983)



宮地(1983)は、「それ」は前件の成立を指し、「デモ」は逆接の意味機能を持っている、としている。「外は非常に寒かった」から、常識によって、「外へは出かけない」という結論が得られるが。この結論と反して、実際の結果は「駆け出して行った」。このことから、先行する文で示された〈不利条件〉は、無効化されている。

### 2.3 実例による考察

『中納言』で、「テモ」を文字列として調べてみたところ、192823 件ヒットした。その中で、116118 件の無効例（「シテ最モ」「トテモ」など）を除外とし、残ったものを接続の形により、分別した。結果は以下ようになる。

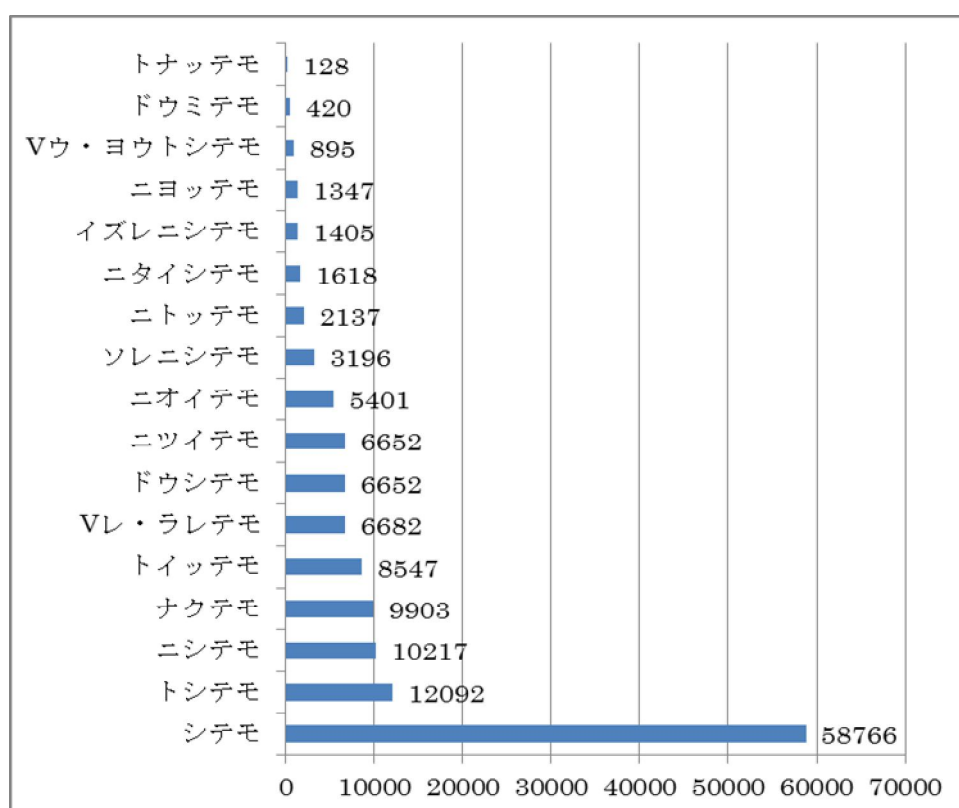


図 33 「テモ」と関連形式の使用調査

※「シテモ」の検索結果には、「ニシテモ」「トシテモ」などといった「…シテモ」が含まれる関連形式の検索結果も含まれている。

図 33 で示されたように、実例を考察した結果をさらに研究対象内のものと研究対象外のものを決めておかないとならない。以下に、研究対象を明記しておく。

まずは「後置詞+モ」の形式である。「ニツイテ+モ」、「ニオイテ+モ」、「ニイタッテ+モ」、「ニタイシテ+モ」、「ニトッテ+モ」、「トナッテ+モ」などの形式があげられる。これらは、「トシテモ」、「ニシテモ」、「トイッテモ」のような複合辞に定着している表現とは異なる。前者は取り立て・並列あるいは並列条件機能だけ果たしているのに対し、後者はさらに、逆接を表される。

本研究は逆接を大きなテーマとしているので、前者は考察対象外のものとする。後者はさらに関連形式と一緒にあげながら、本章の第3、4節で分析する。

また、「ドウミテモ」、「ドウシテモ」のような表現は不定語と共起する慣用表現と見なす。また、「ナクテモ」も慣用表現に用いられやすく、慣用表現として、考察していく。

次に、本節から、「テモ」文の実例分析を、慣用表現、文末モダリティー、指示詞・不定語との共起、文末省略表現の四つに分けて行う。

### 2.3.1 慣用表現

「テモ」は、その長い歴史のなかで、ある固定された語と一緒に組み合わせられて用いられる用法も多く見られる。ここでは、それらを「慣用表現」として、「～ト断言シテモサシツカエナイ」「～トイカエテモイ」「～ニオモエテモカマワナイ」を取りあげる。

33) それは同時に、どのようにして「犯人」が権力とマスコミのタッグマッチのもと、「確定」されていくかの過程でもある、**ト断言シテモサシツカエナイ**のではあるまいか。

(『メディアの現象学』)

34) 企業には、確かにカルチャーがある。それは「企業風土」**トイカエテモイ**。

(『花王強さの秘密』)

35) 最初は突拍子もないアイデア**ニオモエテモカマワナイ**。すばらしいアイデアは、枠にとらわれない自由な発想から生まれてくるものだ。

(『友だちを自殺させないためにきみにできること』)

33)、34)、35)における「慣用表現」は、「～テモイ」と似た言語環境の下で現れている。この「～テモイ」について、田中(2004:193)は、〈許容・許可〉を表していると指摘している。許容表現といっても、「テモ」文のスキーマから脱出する特例ではない。我々の常識では、「断言」はいつでも通用するものではなく、極端行為と見なされることもある。「断言シテモサシツカエナイ」は、前掲「極端条件の認可」と同類である。「トイカエテモイ」、「ニオモエテモカマワナイ」は「条件の変換」を表している。「条件の変換」は「並列条件」と同類である。条件が並列しているので、変換はできる。以上の慣用表現のいずれも、条件 ID の拡張を示している。

以上は文末に見られる固定的な表現形式であったが、従属節との共演句もみられる。

35-a) 似ても焼いても食えない。

35-b) 居ても立ってもいられない。

35-c) 逆立ちしても勝てない。

35-d) 死んでも恨み続ける。

35-e) 話しても話し切れない。

35-f) 泣くに泣けない。??泣いても泣けない。

### 2.3.2 文末モダリティ

「テモ」文には、文末に義務（「ナケレバナラナイ」）、不満評価（「ダケ」「シカナイ」）、否定・マイナス評価などといった文末モダリティがよく現れていることがわかる。実例を考察した結果、文末モダリティの中では、逆条件の「有効条件の無効化」の例が圧倒的に多かった。これは、話者の低い評価も後件によく表れていることを表す。

- 36) 適当な獲物がみつからなかったり、またみつかったテモ成功率が低いので、トラは1週間ほどの絶食に耐えなければならないことがある。アキシスジカの第1胃には、未消化の草がっぱいつまっている。 (『偉大なる密林の王者』)
- 37) 警察に届け出テモそう処理されるだけだった。 (『C.h.e.』)
- 38) 追体験作業などトハイッテミテモ、それが実際には作品を読むことからしかなされえないのは自明である。 (『江戸人の歴史意識』)
- 39) 自分の内面を変えないかぎり、外の世界を変えヨウトシテモ意味のないことです。 (『願う力』で人生は変えられる』)
- 40) いくら取引の安全が大切ダカラトイッテモ、このような場合は本人Aを犠牲にしてまで取引の安全を保護するわけにはいかないのです。 (『契約で失敗しないための知識と Q&A』)

例 36)、37)では、「有効条件の無効化」が明確に示されている。例 38)、39)、40)では、「テモ」が「トハイッテミテモ」、「ヨウトシテモ」、「イクラ～ダカラトイッテモ」として表れている。例 38)は過大評価への控えで、例 39)は〈意志の不実現〉である。例 40)は因果関係の不成立を示している。また、例 39)、例 40)では、条件の競合性が観察される。実例から「テモ」文の文末モダリティを観察すると、低い評価が多く現れることが分かった。「トハイッテミテモ」「イクラ～ダカラトイッテモ」については、第3節で分析する。

### 2.3.3 指示詞・不定語との共起

「テモ」と指示詞・不定語が共起する例も多くあるが、その多くは接続語句として現れている。前掲した先行研究では、接続語句の文例が一つしか挙げられていなかった。以下に、頻繁に用いられている形式を挙げて分析する。指示詞と共起する例として、41)、42)が挙げられる。

- 41) ただソウハイッテモ、世界の諸集団と較べた場合、現代日本人のどちらかというと鼻の低い扁平な顔立ちや、シャベル状切歯を持つやや大きな歯、いわゆる胴長短足傾向の強い体つきなど、弥生時代を契機に日本列島に現れた身体形質は、今もなお我々の体に巣くったままである。 (『日本人の起源』)
- 42) だが“クマ”はμの方をチラリと見ると、再びノッシノッシと歩いて前沢家の背戸にある裏口からどこかに出て行ってしまったので、μは生命拾いをすることができた。ソレニシテモμにとって前沢家の第一夜は、ビックリすることばかりだった。 (『ボケ（痴呆）は予防できる』)

41)、42)では、「ソウ」、「ソレ」は、先行する文を指している。接続語句は先行する文を条件として取立て、その条件からの推論と異なる結果を導いている。例 41)、42)は、実際の結果は先行する条件によって変わりなく成立することを表している。つまり、後件の「ままである」や、「ばかりだった」などは、依然として変わらない結果を表している。指示詞と共起する場合は、逆条件の〈有利条件の無効化〉と同類であるといえるだろう。以下の例 43)~46)は、不定語と共起する文例である。

- 43) これ自体はここで扱うべき問題ではないが、横光論からの照らし返しによっても判断されるべきだろう。イズレニシテモ、「アシルと亀の子」以下の作品の本格的な研究は今後に委ねられているといえよう。(『小林秀雄必携』)
- 44) それから町のイメージのもう一つは、やはり“しょうゆ”ということになるろう。ナントイツテモ“しゅうゆ”といえは野田だし、ブランド名でいえば“キッコーマン”であろう。(『都市民俗学』)
- 45) だが、信介はその瞬間、たとえどんな相手であろうとも一歩も退かずに渡り合ってみたいという、説明のつかない盲目的な衝動につき動かされていた。そのためにドンナ目ニアツテモ、むしろそれが一種の快感として感じられるような、そんな衝動だった。(『青春の門』)
- 46) しかし、それを見る私と画の間に、真向いにいる志賀さんの視線がちらちら動いて、どうにもそれが邪魔で、よく眺められなかった。誰ニシテモ、そういう状況に身をおいた自分を想像してみるがいい。(『物語戦後文学史』)

田中(2004:202)によれば、「テモ」が不定語と共起する場合は〈無条件〉となる。不定語と共起する「テモ」によって、すべての条件が条件 ID に集合されている、と説明ができる。そのため、結果の成立は必然的だと見なされる。例 43)~46)の波線部を見てもわかるように、逆条件の「テモ」文と異なり、〈無条件〉の場合では、後件の成立は恒常性を示している。

#### 2.3.4 文末省略用法

文末に用いられ、言い切らない表現には、例えば「ソナコトイワレテモ…」 「ソナコトイツテモ」などがある。その数は多くはない。

- 47) それを、求めちゃイケナイなんて言われテモ…。(『この愛にできること』)

「テモ」の文末用法が、曖昧表現と言われるのは、上記したように「テモ」には、(「ガ」とくらべて) 後件が変わらないことを際立たせる機能がある。そのため、省略することにより、「曖昧」という表現効果が期待できるのだ。いづらいかもしいないが、「ソナコトイワレテモ」、「私はやはり求めたい」というような、〈不変化〉という後件が読み取れる。

## 2.4 結語

「テモ」構文では、前件で取り上げられた条件は、特殊なものであれ、極端なものであれ、結果には影響が及ばない。条件の ID は、無限に拡張されることができる。また、「テモ」文は、推論的逆接と対比的逆接両方に表せる。対比的逆接の場合でも、背後にある意志判断などの主観性が存在している。

以上の分析を以下の図 5 にまとめる。

表 5 「テモ」文とその特徴

| タイプ   | 前件条件の変化       | 後件結果の特徴             | 例文                      |
|-------|---------------|---------------------|-------------------------|
| 対立    | 条件づけがない       | 前件の不利条件から影響を受けず成立する | 日本語はできなくテモ、英語はできた       |
| 無条件   | 元来の条件づけの否定    | 恒常性を示す              | いくら努力しテモ、成功しないだろう       |
| 逆条件   | 有利条件の無効化      | 前件から影響を受けず成立する      | 美味しくテモ、はやっていない          |
|       | 不利条件の無効化      |                     | 雨が降ってテモ行く               |
|       | 条件の撤去         |                     | 彼が行かなくテモ、私は行く           |
| 並列逆条件 | 条件集合が無限に拡張される | 条件付けがいらなくなる         | 結婚すれば、悔恨あり。結婚しなくテモ、悔恨あり |
| 並列条件  | 同類条件の提示       | 結果の一致               | ここ押しテモ、スイッチが入る          |
| 同類の提示 | 同類の提示         | 結果の不変化              | 検診の結果を見テモやはり異常なし        |

「テモ」の〈同類の提示〉は、表にある再掲の例文を見ると、「検診」の結果は、「普段」と変わらない。つまり、「検診」も「普段」も、同じ「異常なし」という結果に導かれている。同じ結果に導かれる点で、「検診」と「普段」は、同類と見なせる。「テモ」文における「結果」の成立は、条件的ではなく、必然的である。

また、「テモ」の用法には〈並列条件〉もある。〈並列条件〉と〈同類の提示〉の違いは、条件付けにある。つまり、〈並列条件〉の場合、結果の成立は必然的ではなく、条件に依存している。「ここを押しテモ、スイッチが入る」という例からもわかるように、「スイッチが入る」条件は、一つではない。つまり、〈並列条件〉の場合、条件の ID が拡張される。

〈並列条件〉には、順接条件と否定の形式が反復して示される〈並列逆条件〉がある。この用語は、前田(2009) に習っているが、「正反条件」と名付けるのがより妥当だと思われる。〈並列逆条件〉でも、やはり結果は変わらない。例えば、「結婚すれば、悔恨あり。結婚しなくテモ、悔恨あり」。では、結婚の有無に関わらず悔恨があるという結果に導かれることは変わらない。この場合、条件の ID は、前提となる条件まで拡張される。〈並列条件〉の場合、結果の成立は条件に

依存するが、〈並列逆条件〉場合、結果の成立は、非条件的である。また、〈並列条件〉には反復用法がある。

〈逆条件〉は、さらに3種類に分けられる。一つ目は、有利条件の無効化である。例えば、「おいしくテモはやっていない」が典型的な文といえる。「おいしいからはやっている」という常識による推論が見られるが、実際の結果は、「はやっていない」という、「おいしい」という有利条件から影響を受けてない。二つ目は、〈不利条件の無効化〉である。例えば、「雨が降ってテモ行く」では、「雨だったら外へは出かけない」という常識による推論が見られるが、「雨が降ってテモ行く」の場合、「雨」という「出かける」への不利条件は無効化されている。「行く」という話者の意志は、前件で提示された不利条件「雨」に影響されず成立している。三つ目は、〈条件の撤去〉である。前提である条件は、「V ナクテモ」の形で撤去され、結果は変わらず成立する。例えば、「彼が行かなくテモ、私は行く」において、本来の前提となる条件付けは「彼が行くなら、私も行く」であるが、「彼が行く」という条件が撤去されても、「私は行く」が依然として成立している。

「テモ」は、不定語と共起する場合、無条件を表す。不定語によって、前件の条件の ID が無限に拡張される。つまり、結果の成立は恒常的である

以上のように、「テモ」文は〈条件変化の影響を受けない結果〉を示している。後件には、「だろう」のような推量表現も用いられるが、後件の示す結果が変わらない、という話者の確信が読み取れる。

一方、「テモ」文は〈対立〉も表せる。〈対立〉の「テモ」文の前件と後件は、直接的に対立しており、話者は後件を際立たせている。後件 T は、対立している前件 R から影響を受けず成立しており、「テモ」系構文と共通していることがわかる。

### 3. 「テモ」系構文の関連形式(1)

— 「トシテモ」「ニシテモ」「ニシロ」「ニセヨ」を中心に—

#### 3.1 はじめに

「スル」＋「テモ」の形式で現れている「テモ」の関連形式として、「トシテモ」「ニシテモ」、さらに「ニシテモ」の関連形式「ニシロ」・「ニセヨ」、また「ニシテモ」の接続語句「ソレニシテモ」「イズレニシテモ」「ドチラニシテモ」が挙げられる。また、「トシテモ」の関連形式として、「Vウ・ヨウトシテモ」も挙げられる。本節では、「トシテモ」「Vウ・ヨウトシテモ」「ニシテモ」「ソレニシテモ」「イズレニシテモ」「ドチラニシテモ」「ニシロ」「ニセヨ」を関連形式として取り上げて考察する。

#### 3.2 「トシテモ」に関する先行研究の検証

ここでは、第1章第1節で挙げた理論モデルを用いて、先行研究を考察する。

前掲したように、「トシテモ」は、仮定逆接のプロトタイプである。「トシテ」の後件では、前件である種の資格、立場、基準、範囲を仮に認めても、なお現実に残る事態や、主義主張の普遍性が積極的に評価選択される。一方、否定文を承る場合でも、「Pは確かにそうであるがQは」という既成価値、関心に対する反駁、申し立ての気持ちがこめられる(田中2004:188)。

前田(2009:224)によれば、条件接続辞にみられたように、逆接条件の場合も、動詞「する」を用いた複合的な形があり、「テモ」の場合は「トシテモ」になり、「トシテモ」は、ある事柄を仮定的に設定する述語「とする」の逆条件「テモ」が伴う形なので、仮定性が一層強くなる。「トシテモ」は、前節述語は、前節述語がタ形になる場合がほとんどである。

「トシテモ」の用法について、前田(2009)は、反事実的用法、仮説的用法と非仮定的用法の三種類に分けている。本論はこれを受け、主観性の視点から、考察を加える。

##### 3.2.1 反事実的用法

まず、前掲した「テモ」文の条件類型で、「トシテモ」文における条件を分析していく。反事実用法では、既定事態の未発生を仮定する場合と未発生の手態の発生を仮定する場合がある。

- 1) 君が来なかったトシテモ、ぼくは行っただろう。
- 2) 君があの場合にいたトシテモ、同じことをしただろう。(前田2009:225)

例1)は既定事態の未発生を仮定する場合である。例1)では、「君が来た」は「ぼくは行った」とも既定事態である。「君が来た」、「ぼくは行った」。「君が来なかった」と仮定する場合、話者は「ぼくは行っただろう」と推測している。つまり、話者の認識では、「君が来た」でも「来なかった」でも、後件の発生は変わらないことになっている。

例2)は未発生事態の発生を仮定する場合である。例2)では、「君があの場合にいなかった」が既定事態である。また、「君があの場合にいた」と仮定する場合、話者は「同じこと」といい、結果が変わらないことを示している。したがって、「トシテモ」の反事実用法は、有利条件や不利条件を

仮定し、それらの無効であることを示し、結果が変わらないことを示している。例 1)、2)は逆条件の〈反事実仮想〉と見なされる。次の例 3)、4)は既定事態の未発生 of 仮定である。

3) ぼくは、咄嗟に答えるべき言葉が見つからなかった。ぼくは、君と過ごした時間ほど充実した時間を知らなかった。そのために、人生において読むべき何十冊の本を読めなかったトシテモ、悔いはなかった。

4) 君は、ぼくの苛立った沈黙の意味をすぐ理解した。が、君は頑に眼をそらしていった。「いままでの無駄は、無駄でなかったトシテモ、これからの時間はわたしたち…」

(前田 2009,225:『贈る言葉』)

例 3)の後件は話者の心境を示している。話者の考えでは、「君と過ごした時間さえあれば、それは悔いはなかった」である。仮に「人生において読むべき何十冊の本を読むこと」という有意義なことが見逃しても、「悔いのない」という心境は変わらない。不利条件があっても、後件へは影響が及ばない。例 3)は不利条件の無効化が見られる。

例 4) では、後件は未完である。それでも情報伝達へは差し支えない。「今までの無駄」を「無駄でなかった」としても、「これからの時間はわたしたち (はもう無理だ)」と推測される。「テモ」文の省略された部分には「結果が変わらない」という主旨が変わらないことから、例 4)もまた、有利条件があっても、結果は変わらないことを示している。つまり、例 4)から、有利条件の無効化が観察される。続いて、未発生事態の発生 of 仮定の例 5)、6)、7)を見てみる。

5) あの時、ぼくが、どんなに大きな衝撃を受けたが、君には断らない。たとえ、君がもうぼくを愛さないといったトシテモ、あれほどの衝撃は受けなかったと思う。

(前田 2009,225:『贈る言葉』)

6) われわれの計画が仮に採用されていたトシテモ、やはりあの国は滅びねばならなかった。

(田中 2004,188:『墜落—あるいは、内なる曠野』) (再掲)

7) 浮気なら、それが後までしこりになったトシテモ、明子はこの年で一人になる心細さから、信吉を許したに違いない。

(前田 2009,225:『午後の恋人』)

例 5)では、「タトエ」との共起が見られる。未発生 of 事態を仮に発生したとして、後件に話者の認識(「と思う」)が表される。「どんなに大きな衝撃を受けたが、君には断らない」という事態から、仮に極端事態「君がもうぼくを愛さないといった」という事態が発生しても、結果は「あれほどの衝撃は受けなかった」と思われる。この結果は、先行する文に見られる話者の考えとは一致している。したがって、極端事態の発生を仮定しても、今の局面は同じであるという話者の判断が伺える。

例 6)では、有利条件が前件で取り立てられている。有利条件があっても、「あの国は滅びる」局面を挽回することは出来ない、と話者が確信している。それは、「(滅び)ねばならなかった」という表現から確認できる。

例 7)では、話者の発話は今の局面に基づいたものである。明子と信吉は、別れてなく、一緒に



いる。仮に過去「浮気なら、それが後までしこりになった」ことがあっても、今の局面からみればもうすでに解決済みと判断できる。したがって、「信吉を許す」ことはすでに発生したと思われる。結局、明子と信吉は一緒にいる局面は変わらないことである。つまり、異常があっても今の局面へ影響は及ばない、と話者が信じている（「に違いない」）。

以上の実例分析から、反事実用法の「トシテモ」は、図 34 のように示される。

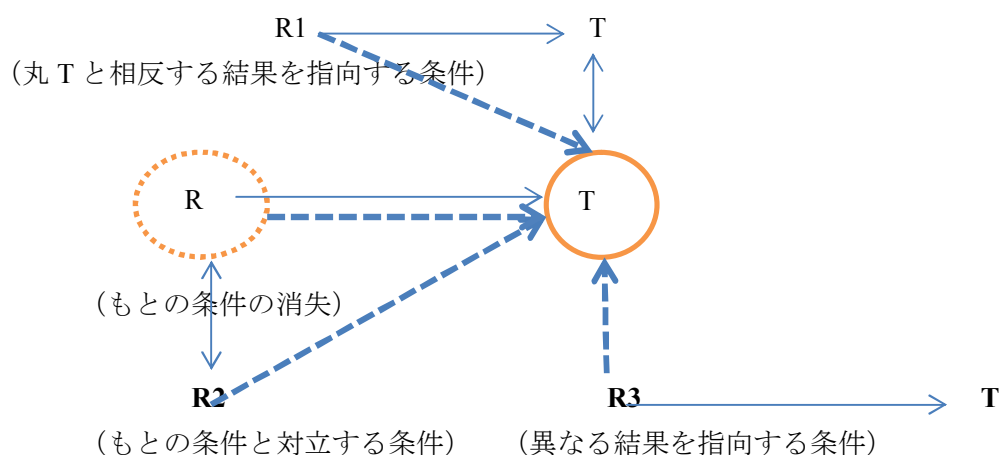


図 34 反事実用法の「トシテモ」

図 34 では、丸の中の T は実際の結果を示している。また、もとの論理では、「 $R \rightarrow T$ 」という推論が前提として成立している。既定事態の未発生を仮定する場合には、R は「もとの条件の消失」、あるいは「もとの条件と対立する条件」の R2 の形で現れる。点線矢印で示したように、もとの条件が消失しても、実際の結果 T に導かれることは変わらない。未発生事態の発生を仮定する場合、R は「もとの条件と対立する条件」R2、「現実結果と相反する結果を指向する条件」R1、「異なる結果を指向する条件」R3 の形で現れる。いずれも、実際の結果 T に導かれている。

### 3.2.2 仮説的用法

仮説的用法として、前田(2009)と『現代日本語文法』を挙げて見てみる。仮説的用法には、「V (ル) トシテモ」も用いられる。しかしながら、「V (タ) トシテモ」のほうが、仮定性が強く、「V (ル) トシテモ」のほうが実現する可能性が大きいというニュアンスの違いがある。(前田 2009:225)『現代日本語文法』(2008:150)によれば、「トシテモ」は動詞・イ形容詞の非過去形・過去形、ナ形容詞の語幹・名詞+「ダ/ダッタ/デアル/デアッタ」に接続する。では、まず「V (タ) トシテモ」の例を見てみよう。「V (タ) トシテモ」の例では、一般事態の仮説と極端事態の仮説が見られる。

- 8) しかしこれ以上孤独になったトシテモ、自分を欺いてむなしく待っているよりはよっぽどま  
しだろう。
- 9) そしてたとえ肉体が回復したトシテモ、ひと度受けた精神の傷痕は、終生、癒されることな  
く残るだらう。(前田 2009,224:『草の花』)

10) 千枝子がいうように、四十過ぎて、若い男に思われて結婚するのだから、失敗したトシテモ、せいぜい、幸せを大事にしたいと、殊勝な気持ちにもなってくる。

(前田 2009,224:『午後の恋人』)

11) 事態はもう一刻も猶予できない。彼らの歯ぐきは腫れ、歯という歯はみなぐらつきそれが抜け落ち、ついには口蓋が痛々しく腫れあがって来る。たとえ奇跡的に食物にありついたトシテモ、もう無理にも嚙下することさえできない。

(前田 2009,224:『どくとるマンボウ航海記』)

例 8)では、「これ以上孤独になる」ということは、一般事態である。話者は、この一般事態の発生を仮定し、後件で「ましだろう」という話者の判定が現れる。つまり、話者は、「自分を欺いてむなしく待っている」ことはよくないと考えている。前件の不利条件と比べてみても、後件事態の「よくない」評価が変わらない。例 9)も、前件に一般事態の仮説が立てられている。

例 9)では、話者は「一度受けた精神の傷痕は、終生癒されることなく残る」という後件事態を示している。たとえ「肉体が回復した」という有利条件があっても、後件の結果が変わらないと話者が推測している。

例 10)では、話者が際立たせる部分は「千枝子が四十過ぎて、若い男に思われて結婚するのだから、幸せを大事にしたい」という「千枝子の心境」である。たとえ「失敗した」、という不利条件があっても、例の心境が変わらないと、話者が示している。

例 11)では、「奇跡的」という極端事態が取り立てられている。今の状態では、「無理にも嚙下すること」が「できない」、ということがわかる。たとえ「奇跡」が発生しても、「無理にも嚙下することさえできない」という結果が変わらない。

例 12)~17)は「V (ル) トシテモ」または「トシテモ」がイ形容詞の非過去形・過去形、ナ形容詞の語幹・名詞+「ダ/ダッタ/デアル/デアッタ」に接続している文例である。

12) 家を買うトシテモ、結婚した後だ。

13) どんなに元気だトシテモ、あまり無理をさせてはいけない。

14) どんなに名医であるトシテモ、この病気は治せない。(『現代日本語文法』2008:150)

例 12)では、前件では話題「家を買う」が提供されている。ここで話題提供の「ナラ」と対照しながら分析してみる。

12-a) 家を買うナラ、結婚した後だ。

(作例)

問題は「家を買う」の実現性である。「トシテモ」の場合、「家を買う」は仮説事態と見なされる。「ナラ」の場合、それはほぼ確定的な事態と見なせる。つまり、12-a)においては、話者の中で行われる順序は「結婚する→家を買う」とされている。これに対して、「トシテモ」の場合は、「家を買う」かどうかはまだ未定である。「買うトシテモ結婚した後だ」から、いまは「それについて考えていない」という、今の状態や心境は変わりがないことが伺える。

例 13)、14)では、不定語との共起が見られる。不定語と共起する場合、後件の成立が無条件となる。つまり「無理をさせてはいけない」、「この病気は治せない」は恒常性や一般性を示している。

例 15)、16)、17)は、それぞれ異なっている例に見られる。

15) 世の中、陰謀まがいの話は締め出しきれぬトシテモ、言論は公明正大がいに決まっている。  
(田中 2004,188:『朝日新聞』1984.5.22)

16) 今度の二年生をうんとしこむトシテモ、だな、己達がよっぽどしっかりしねえと、夏の試合は負けるぞ、え、まけてもいいのか。

17) 「当分、田園調布よ」「どうして…」「いろいろ、しなければならぬことがあるのよ。開店早々だから…それに、こっちのマンションへ泊まるトシテモ、奈緒子さんも一緒だから…」  
(前田 2009,225:『午後の恋人』)

例 15)では、前件で極端事態が仮定されている。そして、極端事態が発生しても、後件の恒常性が変わらない、と話者が認識している（「決まっている」）。

例 16)、17)では、条件の競合性もまた観察される。予想された因果関係は、「ト」、「カラ」などの競合する条件によって、不成立となる。例 16)、17)は前掲した図 31 と類似した図で示すことができる。

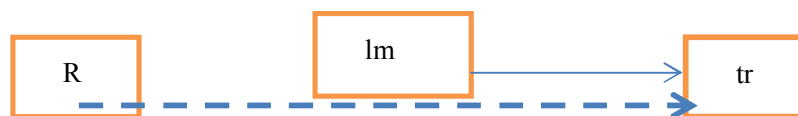


図 35 「逆条件→条件→結果」構造（条件の競合性）

図 35 で示したように、「 $lm \rightarrow tr$ 」は、「条件文」、「理由文」における因果関係を示している。 $lm$  は条件・理由で、 $tr$  は結果である。また、 $R$  は「トシテモ」で提示される前件である。図示したように、 $R$  という逆条件も、「 $lm \rightarrow tr$ 」という結果に導かれる。

例 16)では、「 $lm \rightarrow tr$ 」の条件関係が明示されている。つまり、「己達がよっぽどしっかりしねえと夏の試合は負ける」という〈条件→結果〉が示される。「今度の二年生をうんとしこむ」という有利条件があっても、更なる条件「己達がよっぽどしっかりしねえと」がないと、結果「負けてしまう」が変わらず成立する。例 17)では、後件は省略されている。「奈緒子さんと一緒は都合が悪いの」という文に還元される。前件「こっちのマンションへ泊る」という有利条件があっても、否定の結果が成立する。例 16)、17)から見ると、競合する条件がある場合でも、「トシテモ」は「有利条件の無効化」を示している。

「トシテモ」の仮説的用法を、図 36 にまとめる。 $T(tr)$ は、結果事態を示している。「 $lm \rightarrow tr$ 」は、もとの条件関係（因果関係）である。逆条件の  $R1$  は「結果を変えようとする条件」と「極端条件」に分けられる。極端条件は結果事態と相反する結果に導く傾向を示している。また、前件事態が拡大した。そして、 $R2$  でも、拡大しても同じ結果に導かれることがわかった。また、対比的逆接では、前件  $R3$  は不利条件を示すが、後件は変わらず成立する。無条件  $R4$  の場合では、結果成立は必然的なことと見なせる。条件  $ID$  は  $R4$  の至るところまで拡張される。

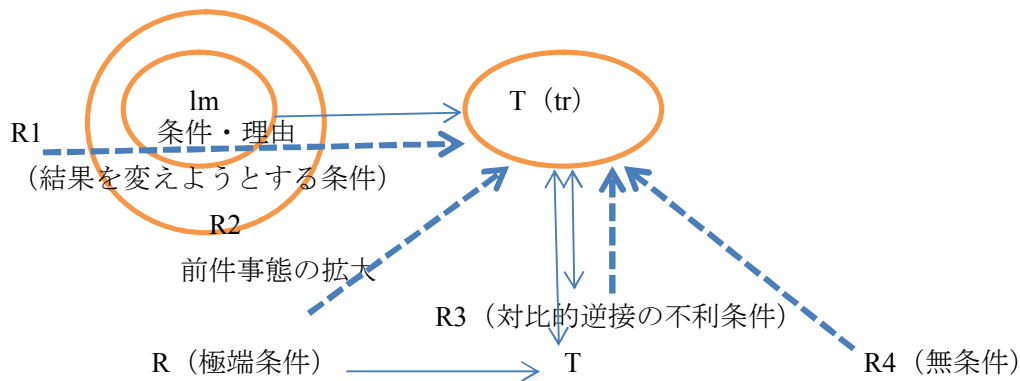


図 36 「トシテモ」の仮説的用法

### 3.2.3 非仮定的用法

次に、非仮定的用法の例を分析する。非仮定的用法の場合、前件・後件とも既定事態となる。前掲したように、田中(2004:188)によれば、「トシテモ」は、引用や伝聞に多く用いられ、前件で仮に資格、立場、基準、範囲を認め、後件で評価などを与え、挿入語句が現れる場合も多いとある。

18) 佐伯家の両親、信吉の姉などとの小さなトラブルはあったトシテモ、とりたてて苦勞というほどのものは知らない中に歳月が過ぎてしまったようである。

(前田 2009,226:『午後の恋人』)

19) ぼくらは、婚約者では、もとよりなかった。が、単なる異性の友達であったわけでもない。リーベという言葉には、旧制高校の古き、よき、甘えた時代が匂って、ぼくたちをぞっとさせた。恋人という言葉を使ったことがあったトシテモ、それは便宜のために過ぎず、ぼくらは、互いにそう呼び合えるほど甘やかな存在ではなかった。

20) ロシアのことを、ソ同盟と呼んで、得々となる奴も珍しくなかった。自分達のことを中国語で呼んで喜ぶ奴がいたトシテモ、何の不思議があるうか。

(前田 2009,226:『贈る言葉』)

例 18)、19)、20)の前件は、引用や伝聞に見られる。

例 18)の「小さなトラブルはあった」は、話者自身の経験ではない。また、「小さなトラブルはあった」ということは真実かどうか話者自身はわからないことも理由として挙げられる。また、後件「とりたてて苦勞というほどのものは知らない中に歳月が過ぎてしまった」ということは話者の見在目からの判断である。つまり、前件の不利条件があっても、後件状態に影響を与えなかったと話者が判断している。

例 19)では、「恋人という言葉を使ったことがあった」は、話者はそれを仮に認めても、「互いにそう呼び合えるほど甘やかな存在」という推論を否定している。話者の考えでは、もともと、「ぼくらは甘やかな存在ではなかった」から、「恋人という言葉を使ったことがあった」という事実があっても、後件の結果が変わらない。

例 20)の前件はある現象を引用している。この現象は「自分達のことを中国語で呼んで喜ぶ奴がいた」である。先行する文に、「得々となる奴も珍しくなかった」という結果が提示されている。そして、前掲の現象があっても、話者の考えでは、「何の不思議があろうか」という先行する文と類似する結果が成立している。

非仮定的用法の「トシテモ」は、前掲図 19 で示される。

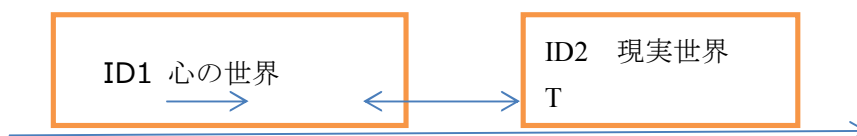


図 19 「心的世界」と「現実世界」との間接的対立（再掲）

図 19 のように、前件で発生した事態から、現実結果と相反するターゲットが推論されるが、現実世界では、結果 T は変わらず成立する。また、反事実的、仮説的と非仮定的の「トシテモ」の用法をまとめて図示すると、図 37 が得られる。

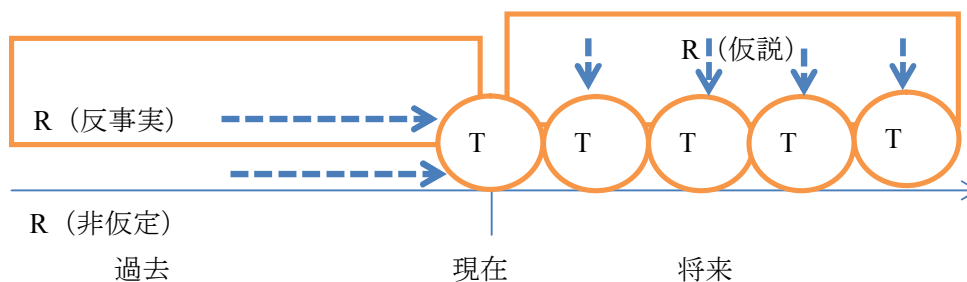


図 37 「トシテモ」のスキーマ

図 37 のように、T という現実結果が現在の時点から成立している。反事実的用法の場合では、話者は条件の R の発生を想定し、最後に今の結果 T に到着するという結論を得ている。仮説的用法では、話者は将来に R という逆条件を取り立てて、メンタル・スペースで走行し、結果 T が変わらないという結論に帰結する。非仮定的用法では、話者は R は T にとって逆条件であることを取り立てて、T 逆条件から影響を受けず成立していることを示している。

### 3.3 「ニシテモ」に関する先行研究の検証

つぎに、「ニシテモ」についての先行研究を取り上げて考察する。田中(2004:189)は、21)のような例を挙げ、「トシテモ」に引用的な機能が優勢であるが、「ニシテモ」にするとすわりが悪いと指摘している。例 21)の「ニシテモ」を「トシテモ」に置き換えれば、文が自然となる。

- 21) \*彼はまだ子供であるニシテモ、許された行為ではない。 (田中 2004:189)  
 21-a) 彼はまだ子供であるトシテモ、許された行為ではない。 (作例)

以下、「ニシテモ」の特徴について分析する。

### 3.3.1 認識の再注釈

田中(2004:189)によれば、「ニシテモ」は人の認識に限定され、前件で場面を例示し、後件で前の趣旨を言い換えたり取消したり、補足説明したりする。「ニシテモ」は前句の趣旨をめぐっての言い換え、取り消し、補足説明などの場合に多く用いられるとしている。

- 22) 相手に戦争を起こそうという気持ちががないニシテモ、偶発的な事故がきっかけで戦争が起こる恐れが絶えずある。(田中 2004,189:『朝日新聞』1985.1.7)
- 23) 彼女は錯覚していた。いや、それはまったく錯覚ではないニシテモ、観念的な理解だった。(田中 2004,189:『墜落—あるいは、内なる曠野』)
- 24) 世の中の変化に対応するニシテモ教育のあり方全体を見通すのではなく、小手先のつじつま合わせに終わるので矛盾は避けられない。(田中 2004,189:『青春の蹉跎』)(再掲)

例 22)では、「戦争する気持ちががない」という認識に関して、話者は「偶発的な事故」をきっかけとして、「戦争が起こる恐れが絶えずある」と指摘している。

例 23)では、「彼女はまったく錯覚ではない」という認識について、「(それ)は観念的な理解だった」と追加注釈している。

また、24)では、「世の中の変化に対応する」という認識について、やり方として「教育のあり方全体を見通すのではなく、小手先のつじつま合わせに終わる」だけでは、「矛盾は避けられない」と指摘している。つまり、「ニシテモ」を用いる場合、話者は「言い切り」表現を避けて、より客観的な叙述で、ほかの可能性などを提示している。

〈認識の再注釈〉を表す「ニシテモ」は、図 38 で示すことができる。

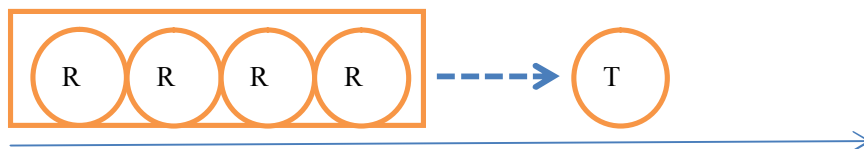


図 38 「ニシテモ」による〈認識の再注釈〉

図 38 で示したように、認識の ID では、R は R のままでいるが、話者は R より T のように思う傾向を示している。これは「ニシテモ」による〈認識の再注釈〉のスキーマと見なせるだろう。「ニシテモ」の場合、後件の判定は、説明・解釈という客観的色合いが強い。

### 3.3.2 後件の例証

田中(2004:189)は、前掲した例を見て、「ニシテモ」は逆接的な意味合いよりも「～する場合もまた常に」という「モ」の取立て機能を持つ後置詞的な用法となっていると述べている。こうした性格から、派生した「～ニシテモ～ニシテモ」という資格の取立てが行われる並列句は、後件に共通する話題、要素を提供するパターンとして用いられる。この場合、「トシテモ」は不自然である、とも付け加えている。つまり、後件論理の成立を例証するために、前件が存在している。「ニシテモ」による後件論理の例証には、反復例証と無条件例証がある。

### 3.3.2.1 反復例証

反復例証の例 25)をみてほしい。

- 25) 藤山愛一郎ニシテモ三木武夫ニシテモ、総裁選挙立候補にあたっては閣僚を辞任して筋を通した。 (田中 2004,189:『朝日新聞』1987.7.29)

例 25)では、話者は、「筋を通す」方式は、「閣僚を辞任する」と考えている。「藤山愛一郎」も「三木武夫」も、後件の例証となれる。このように、「ニシテモ」には、説明の角度、仕方が観察されるので、客観的な捉え方が特徴として見受けられる。反復例証のほか、無条件例証も挙げられる。

### 3.3.2.2 無条件例証

無条件例証の例として、26)が挙げられる。

- 26) 社会のどの部門に進むニシテモ、学位は一種のパスポートとなって、あらゆる人生、の難関をなめらかに通過して行くことができるに違いない。 (田中 2004,189:『青春の蹉跎』)

例 26)の前件には、不定語との共起が観察される。前掲したように、不定語と共起する場合、後件の成立が無条件となる。したがって、後件 T の成立は恒常性を示している。

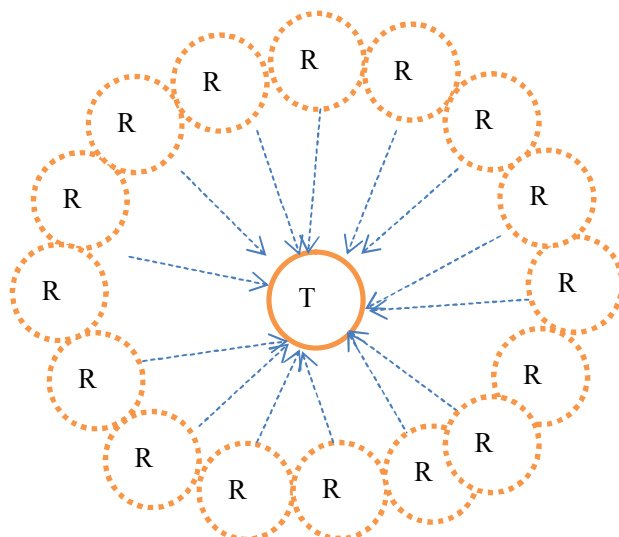


図 39 無条件例証の「ニシテモ」

図 39 で示したように、例) 26)において、R は「あらゆる部門」を示している。前件がどの R であっても、後件 T「学位は一種のパスポートとなって、あらゆる人生の難関をなめらかに通過して行くことができる」が常に成立するを表している。

一方、前掲した反復例証の場合も図 39 を用いて説明できる。取り立てられたもの以外、R はまだいくつか存在している、ということが反復例証によって暗示されている。「ニシテモ」の例証を提示する用法は、取り立ての「モ」と類似している用法と考えられよう。

### 3.3.3 「ニシテモ」の関連形式

また、『現代日本語文法』(2008:150)では、「ニシテモ」「ニシロ」「ニセヨ」は動詞・イ形容詞の非過去形・過去形に接続し、ナ形容詞の語幹と名詞には直接か、「だった/である/であった」を介して接続する。「トシテモ」「ニシテモ」「ニシロ」「ニセヨ」は、「テモ」と同様、逆接の仮説条件、反事実条件を表すとされている。

- 27) 家を買う{ニシテモ/ニシロ/ニセヨ}、まずお金をためてからだ。
- 28) やり方に問題はあった{ニシテモ/ニシロ/ニセヨ}、最後まで調査をやり遂げたことは素晴らしいことだ。
- 29) 無意識{ニシテモ/ニシロ/ニセヨ}、人を傷つけるようなことをしてはいけない。

(『現代日本語文法』2008:150)

例 27)と前掲例 12)の違いは、後件の恒常性である。「家を買う」だけではなく、「車を買う」場合も、「海外旅行に行く」場合も、「まずお金をためてからだ」という論理が常に成立する。前掲の「結婚した後だ」は、話者の考えであり、恒常性が観察されない。

例 28)では、前件に関わらず、後件「最後まで調査をやり遂げたことは素晴らしいことだ」が常に成立している。逆条件にも、後件はその適用性を示している。

例 29)では、「無意識」という極端事態が取り立てられている。前件を見なくても、後件「人を傷つけるようなことをしてはいけない」が常に成立する。極端的な場合でも、後件が通用する。したがって、後件論理が常に成立する場合は、「ニシテモ」、「ニシロ」、「ニセヨ」が互換できる、ということが明らかにされた。

### 3.3.4 「ソレニシテモ」

田中(2004:189)は、「ソレニシテモ」を取り上げ、それはしばしば「ソレにツケテモ」と同様に、接続詞的、文頭句的な機能を持ち、談話の中では前述の主題となる内容全体を指して、差し迫った現実的な問題が提起される、としている。

- 30) ソレニシテモ、日本の GNP が増えるにつれて身代金誘拐事件が増えてきたのはなぜだろうか。  
(田中 2008:189 『朝日新聞』1987.9.16)

例 30)では、「ソレニシテモ」に先行する文は条件の取立て、もしくは一種の話題転換のための慣用句として使われる場合もある。30)の場合、前件が先行する文に現れるが、後件は「日本の GNP が増えるにつれて身代金誘拐事件が増えてきた」という現象である。前件も後件も現実が発生していることでありながら、前後件の理屈を問う姿勢「のはなぜだろうか」が見られる。

「トシテモ」の場合、後件では話者の認識が表出され、前件は特殊条件や無条件、結果を変えられない条件に限定されている。それに対し、「ニシテモ」の場合、前件と後件は現実が発生する可能性が高く、話者はより客観的な視点から問題も説明する姿勢を取っている。「トシテモ」には、反復用法と文頭接続詞用法がない理由は、そもそも「ト」による引用機能が果たしていると判断



できる。以上のように、「トシテモ」文は、前件がいかに変わっても後件が成立することを示しているが、「ニシテモ」文はより客観的で、後件の一般性や恒常性を示していることがわかった。

以下、BCCWJ『中納言』で、実例を挙げながらそれぞれの表現を再検討する。

### 3.4 実例による考察

「トシテモ」、「ニシテモ」をそれぞれ、文字列の形で例文を検索してみた。前掲「トシテモ」12092件、「ニシテモ」10217件ヒットした。その中に、「ことしても」のような無効例を取り除き、それぞれ、以下の図40のような形態が見られる。

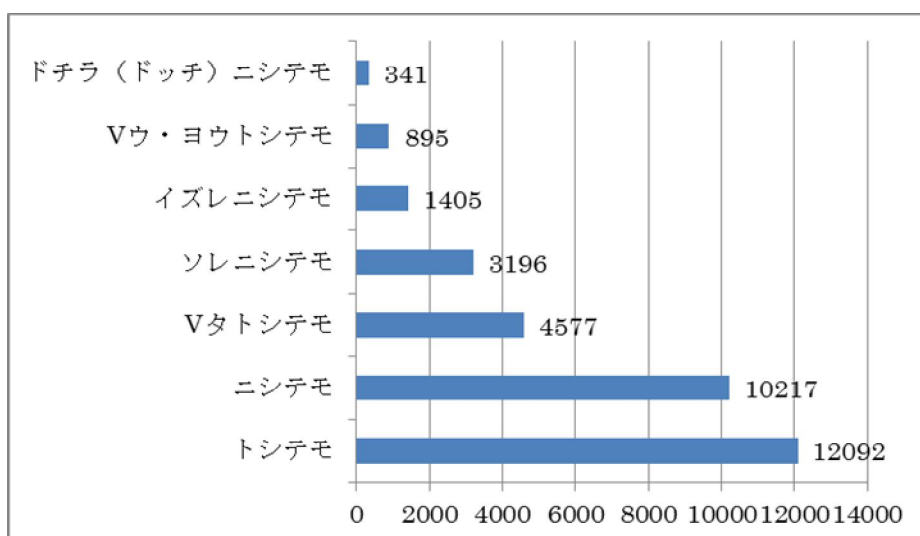


図 40 「トシテモ」「ニシテモ」と関連形式の使用調査

図40で示したように、「トシテモ」は動詞のタ形に接続する例が多く見られるのに対し、「ニシテモ」は「ソレニシテモ」の形が多く見られる。

#### 3.4.1 「トシテモ」の実例による考察

「トシテモ」の文例では、前件を仮定状況として条件を取立て、後件には否定表現や否定評価が来る例が多く見られる。

- 31) 仮によろやく落ち着く場所を得たトシテモ、そこがまたいつ戦場になるかもしれないのだ。  
(『シギラの月』)
- 32) しかし私が何より危険だと思うのは、たとえ理想的な刑事裁判型審判が行われたトシテモ、そこで主として戦うのは付添人と検察官になるということです。  
(『子どもは大人のパートナー』)
- 33) しかし、たとえ誰であれ、このいずれかで毒を入れたトシテモ、そのグラスを確実に笠木に届けることが不可能なのはわかるじやろう。  
(『作者不詳』)

例31)、32)では、ある仮定の条件を取り立てて、話者の認識を表出する過程が読み取れる。「ニ

シテモ」と比較して、「トシテモ」には、前件、後件は相反する関係が見られる。つまり、前件の成立が、後件で否定されている。有利条件があっても、予想の実現が難しく思われ、話者の後件事態に対し、否定や低い評価に多く観察される。例 31)、32)は〈認識の再注釈〉する仮定にもなれるので、「ニシテモ」と置き換えることができる。例 33)の場合、「たとえ誰であれ」という表現は無条件を示している。そして、それでも結果は変わらないと話者が推論している。例 33)では、後件はある道理を説明しているので、「ニシテモ」と置き換えられる。また、後件では、否定表現や否定評価以外、認識モダリティーも現れる。

34) だからもし停電があったトシテモ、すぐにそっちに切り換えられるわけ。

(『ダンス・ダンス・ダンス』)

35) かつては修験と巫女が組んでいた形態の名残かどうか知るよしもないが、修験の影響が女人禁制を強化して女性を排除したトシテモ、その一方では、どこかに古層にかかわる女性原理の混入や祭祀対象を残しているという構図がある。(『女人禁制』)

例 34)の場合、「停電」は現実でもありうることで、仮に「停電」という事態が発生しても、「すぐにそっちに切り替えられるわけ」という対策が提示されている。つまり、停電しても、「大したことではない」「大きな変わりはない」という結果が変わらないことが読み取れる。例 35)では、前件の「排除した」と後件の「残している」が相反する存在となっている。前件・後件とも既定の事態であるが、話者は後件に着目している。つまり、「女性原理などが残っている」ことは事実である。前件で「修験の影響が女性を排除した」という行為があっても、「女性原理の残り」が持続しているということがわかる。前件の不利条件は後件まで影響を与えなかった。さらに、36)のように、「Vルトシテモ」の形も観察されたが、仮定条件となる行為を取り立てるといよりも、前件は条件を提示し、後件で常に成立する事実を示しているといえるだろう。

36) あらゆる条件下の加害男性が参加するシステムでは、個人セッションを行ウトシテモ、その適合性を十分に判断しなければスタッフが危険に晒されかねない。(『生と死の幻想』)

例 36)では、後件の恒常性が強く伺える。したがって、例 39)の「Vウ・ヨウトシテモ」を「ニシテモ」と置き換えることは可能である。

### 3.4.2 「Vウ・ヨウトシテモ」

つぎに、「Vウ・ヨウトシテモ」が用いられている例を検討する。「Vウ・ヨウトシテモ」の用法は、〈意志の不実現〉を表しており、これは「モ」の打消し用法と共通している。多くの文例は「Vウ・ヨウトシテモ」+〈否定表現・否定評価〉という形で現れている。

37) ところが、現実はどうかというのを、この予防的請求を実行しヨウトシテモ、この財務会計上の行為がなされる以前に住民にどれだけの情報が伝わっているとかということになると、今、全然駄目じゃないかというような御批判があるわけですよ。(『国会会議録』)

- 38) 身振り手振り、ハイウェイの路肩に車を止め、泳いで来たんだと言アウトシテモ、その理由を問いただされたら、答えることはできない。(『江戸っ子の身の上』)
- 39) 太ってしまったとき、急激なダイエットや矯正下着でごまかソウトシテモ、それは一時のことです。(『現代思想の遭難者たち』)

例 37)、38)、39)のように、動詞の意志形によって、実行したいことが提示されているが、結果として、実行することができなかつた、もしくは理想の結果に達することができなかつたことが表されている。「Vウ・ヨウトシテモ」の形で、実行したい動作が提示され、その試行の失敗が後件の否定表現・否定評価で表されされていることがわかる。つまり、意志の実行が無効とされている。結果として、何も変わってないことがわかる。

### 3.4.3 「ニシテモ」

「ニシテモ」の文例には、〈認識の再注釈〉、あるいは〈後件の例証〉が挙げられるが、具体的には、以下のような例がある。

- 40) 実は教育について何を論ずるニシテモ、「人を教え導く」というこの世界の根本義の拘束力からどうしてもものがれられないところにあること、これらのことをこそむしろ「教育の荒廃」とよぶべきなのだ。(『学校の現象学のために』)
- 41) たとえ人生のすべてを犠牲ニシテモ—自分の命と引き換えニシテモ—この手だけは絶対に放してはならないのだ、ということを彼は知っていた。(『4人の食卓』)

例 40)は前掲した無条件例証で、例 41)反復例証である。例証の結果は後件にある。例 40)は複雑な文脈に見られるが、「ニシテモ」のスコープでは、例証する部分は明確でわかりやすい(「教育について論ずる場合、〈人を教え導く〉というこの世界の根本義の拘束力からどうしても逃れられない)。例 41)では、前件で極端事態が例示され、後件が適用できることが示されている。反復例証を一つ消せば、「トシテモ」文と言い換えられる。

「ニシテモ」文では、例証は後件で際立たされることから、否定評価や否表現に拘らないということが自明である。

- 42) だが野村は、この指定の時刻の重要性を知っていたのだから、たとえ通告の最初の数行しか出来上がっていないニシテモ、あとは出来次第持ってくるように大使館員にまかせて、正一時に私に会いに来るべきだった」(『渡部昇一の昭和史』)

例 42)では、〈認識の再注釈〉が読み取れる。「最初の数行しか出来上がっていない」という事態への認識は、「あとは出来次第持ってくるように大使館員にまかせて、正一時に私に会いに来る」ことによって修正されている。また、「ニシテモ」を「トシテモ」に置き換えることができ、後件は、前件によって変わることのない一般的な事態と見なされてもいい。

- 43) また結婚したところで、セックスレス・カップルとまでいかないニシテモ、いろいろな問

題は自分の母親に聞くという傾向は、男女とも見られる。(『出る杭になれ!』)

- 44) 『マークスの山』は一段高い達成に、作者を運んだといえる。だがすでに述べたとおり、完成作であるとともに、いや、完成作であるからこそ、絶対的なマイナスとはいえないニシテモ、ある種の不整合は生じていた。(『高村薫の世界』)

例 42)と似て、後件が前件認識の再注釈となる例として、43)、44)が挙げられる。「ニシテモ」文では、前件と後件には、程度の差が存在しているように見受けられる。42)では、「最初の数行しか出来上がっていない」は、完成までかなりの量が残っていることを示しているが、「とは出来次第持ってくるように大使館員にまかせて、正一時に私に会いに来る」ということは、完成を含意している。



図 41 「ニシテモ」文における前後件の程度差( $R < T$ )

例 42)を図 41 で示すと、後件 T は完成を示している。前件 R は「最初の数行しか出来上がっていない」状態である。前掲図 38 と対照しながら見てみると、R は R のままでいるわけではなく、後で T に到達する見込みがある。

例 43)、44)の場合、「セックスレス・カップル」と「絶対的なマイナス」は限界値 R を示している。また、「いろいろな問題は自分の母親に聞くという傾向は、男女とも見られる」と、「ある種の不整合は生じていた」は、実際の到達する程度 T を示している。



図 42 「ニシテモ」文における前後件の程度差( $R > T$ )

- 45) しかし、挙げ足をとるつもりはないニシテモ、「赤」や「青」という色彩が白黒の劇画では表現できないだけでなく、ゲームの画面の CG のオートバイが「花のように」見え、それが「綿毛のように」そして「水しぶきのように」主人公の目にうつるという表現は、小説のような文学表現では可能だが「ように」という比喻そのものを劇画化することはやはり困難だ。(『南回帰船』)

例 45)では、話者は聞き手に「挙げ足をとるつもりはない」とは言っているが、後件で聞き手に低い評価を与えている。あまりにもひどい評価を下ろしたら、聞き手に「挙げ足をとる」印象が付けられる。そうだとすると、後件にはやはり、否定評価が出ている。それほどひどい評価でなくても、低い評価であることは確実だ。したがって、例 45)は例 43)、44)と同じく、図 42 で示すことができる。

- 46) 恐らく中小企業としては、いままでのままの経営ではなかなかやっていけない、しかし新

しい分野に行くニシテモ、この不況の中でどこへ行ったらいいんだろうかというような点が一番悩みの種ではないかというふうに感じておりました、そういう点につきましては、極力情報の提供あるいは具体的な相談、こういうことに力を入れていきたいと考えております。

47) 両立との関係を抜きニシテモ、このことには、ひとことふれておきたいと思えます。

(『国会会議録』)

例 46)では、「新しい分野に行く」場合でも、古い問題が未解決のままである、という流れが読み取れる。新しい分野に行くというゴールは、未達成のこととなる。例 46)は後件が変わらないことを示しているので、「トシテモ」文に言い換えられる。

例 47)は「抜きにする」+「テモ」の形をとっている。したがって、「ニシテモ」で現れても、意味形式はまだ複合辞として定着している「ニシテモ」とは異なっている。もちろん、「トシテモ」と互換は出来ない。

以上の内容から見てみると、「トシテモ」、「ニシテモ」の場合、普通の「テモ」文と異なり、後件に叙述、評価や認識、さらに説明のモダリティーが常に現れている。

#### 3.4.4 接続語句の「ニシテモ」

接続語句である「ニシテモ」文は、「ソレニシテモ」「イズレニシテモ」「ドチラ（ドッチ）ニシテモ」の形で現れる。「ソレニシテモ」を除き、ほかの接続語句は、無条件を提示する機能を持っている。

##### 3.4.4.1 「ソレニシテモ」

「ソレニシテモ」によって提示される前件や先行する文は確定事実が多い。後件では、形容詞による評価、「デハナイカ」「ダロウ」のような確定を求める表現が見られる。また、48)のように、先行する文と対照になっている事実の提示も見られる。

48) これも不思議な縁である。ソレニシテモあれ以来会っていない。(『山内一豊と妻千代』)

49) 政検校はただ坐っているだけだろう。すべてをお苑にまかせていたのか。ソレニシテモ、あれほどの女をもったいない。三十を過ぎても、まだまだ花だった。これからの女だった。

(『奥州の牙』)

50) 藤岡が力説するにもかかわらず、彼女は、聞いているのか、いないのか、あらぬ方向へ視線を投げながら考え込んでいる様子であった。(ソレニシテモ、二百五十万円という金額は高すぎる。わざと高くしやがったんだ！)

(『悪夢』)

51) これは総会で発表された論文であろうか。ソレニシテモ余り注目されなかったのではないか。もっと関心を持たれてもいい。

(『復権への日月』)

52) 「まあな。もっとも、それが人間の弱点ってもんだがよお。ところで、吉崎は逮捕したんだろう?」「はい。昨日、逮捕状を執行しましたわ。ソレニシテモ、吉崎の罪は最も重いんじゃないやありませんか。二つの殺人既遂と、もう一件の殺人未遂を引き起こしたわけですか

ら…」

(『容疑者は赤かぶ検事夫人』)

- 53) そうなのだ。国語の教科書には注として寺の廂にさがる風鐸の写真が載っていたはずだ。  
ソレニシテモ、高校時代、ひとりなるわが身の影をあゆます詩人の心境を真に理解できていたのだろうか。(『家族』)

上記したように、「ソレニシテモ」は、話者が理屈を問う姿勢を取る文で用いられることから、48)~53)では、以下のような操作過程が見られる。例 48)、49)のような後件に単純否定表現と共に起す場合は、論理の反論を示している。例 50)のような、後件に否定的評価が現れる場合は、論理の存在を否定する過程である。例 51)、52)、53)のような、詰問調の表現が現れる場合、それは論理への質疑といえる。

#### 3.4.4.2 不定語を含む接続語句

「イズレニシテモ」、「ドチラ(ドッチ)ニシテモ」の場合、後件には断定表現が多く見られる。以下に例を見てほしい。

##### 3.4.4.2.1 「イズレニシテモ」

「イズレニシテモ」は、ある種の諦念的感情の差し出しにあらわれる(例 54)~58)を参照)。また、例 59)~61)のように、直接結果を提示する表現も見られる。

- 54) あるいはある種の政治的権力行使のように、他者に自分の意思を押しつけることができたときに、自らの優越性を感じる場合もあるだろう。イズレニシテモ、さまざまな場面で、男性たちは、人間関係を、優越・劣等の関係図式のなかでとらえる傾向が強い。  
(『「できない男」から「できる男へ」』)
- 55) イズレニシテモ、容赦のないことよ。(『日本の六大企業集団』)
- 56) その共同体から排除される。それがリストラというかたちであるか、円満な定年退職であるかによって、会社に対する思いも違って来るでしょうが、イズレニシテモ、人は会社という共同体から離れて、個人として生きていくことになります。(『団塊老人』)
- 57) 身分証明書類は完璧なように見えたが、イズレニシテモ、偽物に違いなかった。  
(『鴉よ闇へ翔べ』)
- 58) イズレニシテモ、具体的な行動特性が明文化されていない以上、評価者の判断にまかされていることになります。(『スマート・ガバメント』)
- 59) しかし、イズレニシテモ、十七歳の世界にないものばかりが、そこにはあった。  
(『早春物語』)
- 60) イズレニシテモ、原料は産地の必要量の5分の1しかなかった。(『経済白書』)
- 61) イズレニシテモ、夫が一緒でないと知って、久木はいくらか気持が軽くなった。  
(『失樂園』)

「イズレニシテモ」によって、先行する文から、何があっても後件が成立することが表されて

いる。この点で、無条件提示の「ニシテモ」と一致している。

#### 3.4.4.2.2 「ドチラニシテモ」

「ドチラニシテモ」の場合、後件は、評価や判定になっていることが多い。

- 62) 岩盤といっても、おそらく礫ではなかったか。ドチラニシテモ、この堅い層を突き破るのは容易ではない。 (『孫悟空はどこまで飛んだ?』)
- 63) ドチラニシテモ、こんな低空で敵に発見されたら、いちじるしく不利である。 (『青春の証明』)
- 64) おいしいお茶が飲みたくなったとき、いつもここの「どらやき」が頭に浮かんでくる。いや、この「どらやき」が食べたくなったから、おいしいお茶が飲みたくなるのだろうか? ドチラニシテモ、日本茶との相性が抜群なのです。 (『京都とお菓子』)

ほかにも、後件に、確定を求める表現や、解釈、説明が出る場合もある。

- 65) ドチラニシテモ、死の意味を少しでもよけいに考えている人が傍らにいた状況があればよいのではないのでしょうか。 (『身近な人がガンになったとき何をなすべきか』)
- 66) ドチラニシテモ、殺される前に出した手紙なのである。 (『日美子の歌麿殺人』)
- 67) ドチラニシテモ、私には余り魅力的なテーマではなかった。 (『大リストラ時代を生き抜く』)

「ソレニシテモ」と異なり、「ドチラニシテモ」は、二つか二つ以上の条件を取り立て、そこから後件の評価や、結論に導くのが、「ドチラニシテモ」の特徴である。「ドチラニシテモ」の場合は、逆接よりも、順接に近いと考えられる。

#### 3.4.5 「ニシロ」・「ニセヨ」

次に、「ニセヨ」「ニシロ」の使用実態を考察する。コーパスで調べたところ、「ニセヨ」の場合、形式的には、「イズレニセヨ」「N ニセヨ、～N ニセヨ」「V ニセヨ、～V ニセヨ」「タトエ～ニセヨ」などがあるのに対し、「ニシロ」の形式は少なく、「N1 ニシロ、N2 ニシロ、N3…」のように、名詞に後接し、例示には数の制限がない。

##### 3.4.5.1 「ニシロ」

「ニシロ」には反復用法が多く観察される。

- 68) 93年のシアトルでのAPEC首脳会談ニシロ、その後のジャカルタ会談ニシロ、江沢民に冷淡だった。 (『中南海の「最高機密」』)
- 69) だが、客のほうは、俳味ニシロ、茶味ニシロ、禅味ニシロ、てんで趣味が判らない。 (『大東京三十五区冥都七事件』)

- 70) リースニシロ買取りニシロ、車を維持管理するには手間と費用がかかる。  
 (『アメリカ発ニュービジネス特選 200』)
- 71) あ〜、自分の事って長所ニシロ欠点ニシロ、探すのは難しいわ。(『Yahoo!ブログ』)
- 72) 辞めるニシロ居続けるニシロ、絶対にお得な方法なのである。(『中国』)
- 73) 妻は乳が出るニシロ出ないニシロ、決して授乳してはならない、私はいつもこう心に堅く決めたのです！  
 (『黒船擾乱』)

「ニシテモ」とくらべてみると、「ニシロ」の反復用法は、後件恒常性の例証に拘らないことがわかる。例 68)のような事実を例示する場合、例 69)、例 70)のような語を例示する場合、例 71)、72)、73)のような反復例証など、後件形式が自由に見られる。また、例 71)、72)、73)、反復の「ニシロ」によって取り立てられた事態は肯定・否定の反復、あるいは正反反復となることから、前掲「ニシテモ」の〈無条件〉用法と類似する。〈無条件〉はこの点で、順接関係と類似している。

- 74) 忠邦の直筆ではないニシロ、署名と花押があれば主君からの命令書である。  
 (『挑発する肉体』)
- 75) ところが医療体制、「がんと闘うな」の問題ニシロ、数年前までは学会内の論争ですよ。  
 (『季節の思想人』)

74)、75)を見ると、「ニシロ」の前件と後件は同じ事物についての二つの側面について述べているように見られる。つまり、事物に対する異なる側面の記述は、両立するという表現となる。ただし、前件を譲歩の形で認めて、後件を示す姿勢が見られるから、主観は後件にあることが自明である。例 74)、75 は、逆接関係となる。これらも、〈認識の再注釈〉の一つの形式と考えられる。

### 3.4.5.2 「ニセヨ」

前掲したように、「ニセヨ」には、形式は「ニシロ」より豊富であるが、以下は例示するため、一つずつ取り上げてみる。

- 76) たといその成立の動機に科学の誤られた解釈が混入しているニセヨ、また反抗的な気分が  
 っているニセヨ、その後ろには切迫した人間の意志が働いているのを見逃すことができな  
 かった。  
 (『近代作家入門』)

例 76)は反復用法である。二つの条件を提示し、どちらも、後件を逆転させることができない。前掲した順接関係と類似している例とは異なり、例 68)では、逆条件の並列が見られる。

- 77) いかにそれが筋道の通った明かなものニセヨ、一向記憶となって母の頭に影さえ残してい  
 ない事がしばしばあったのです。(『こころ』)

77)では、「ニセヨ」は不定語と共起している。前件に関わらず、後件が常に発生する。例 77)は、無条件を示している。



78) いでもね、その子にシッスンするのは楽しかったわよ。高性能のスポーツ・カーに乗って高速道路を走っているようなもんでね、ちょっと指を動かすだけでピッピッと素速く反応するのよ。いささか素速すぎるという場合があるニセヨね。そういう子を教えるときのコツはまず賞めすぎないことよね。  
(『ノルウェイの森』)

例 78)は倒置文である。「いささか素速すぎるという場合があるニセヨ、その子にシッスンするのは楽しかったわよ」と還元できるだろう。後件が前件認識の再注釈に見られる。この用法は、前掲「ニシテモ」と類似しているが、「ニシテモ」には、倒置文の例が少ないようである。多くは「ソレニシテモ (ね)」の形で現れる。

79)ときどきひどく淋しい気持ちになることはあるニセヨ、僕はおおむね元気に生きています。  
(『ノルウェイの森』)

例 79)の場合、前件、後件とも現実となっている。前件と後件は相補的な表現(「淋しい」「元氣)や、「ときどき」「おおむね」というような表現との共起で、文の中で比較して、その結果から、前件事態への再認識する過程が見られる。

### 3.5 結語

本節は「トシテモ」「ニシテモ」「ニシロ」「ニセヨ」を分析した。

「トシテモ」と「ニシテモ」は、ほとんどの場合互換可能で、その使い方もほぼ同じであるが、若干の違いが見られる。「トシテモ」は、前件で条件を挙げ、後件が前件から影響を受けず成立することを示している。それに対し、「ニシテモ」は、前件への理解を、後件で再注釈し、後件の内容の恒常性や適用性が示される。また、「トシテモ」は、「ニシテモ」の関連形式である「イズレニシテモ」、「ドチラニシテモ」、「ソレニシテモ」、「ニシテモ」とも違いが見られる。なお、「Vウ・ヨウトシテモ」は、ただの打ち消し用法である。

「トシテモ」の場合、後件の結果は、常に成立している。「トシテモ」の前件には、〈反事実〉、〈仮説〉、〈非仮定〉が表され、後件の結果は、それに関わらず成立している。〈反事実〉では、一般条件、必要条件の撤去、過去状態への変更、極端事態の発生、他の可能性の提供など、条件の変化が仮想されるが、結果はすでに成立している事態 T とは変わらないことを示している。〈仮説〉の場合、前件に、事態の拡大や、限界事態の提示などが現れる。前件条件が変化しても、現状としての結果 T が変わらないことがわかる。前件では目標話題や、極端事態の例え、無条件などが話題として提示され、後件 T が提示されたすべての話題に適用できることを示されている。さらに、「トシテモ」は、「ダカラ」「ト」と併用され、予想された因果関係との逸脱が示されている。恒常性や一般性が T で示される場合、前件 R は常に「Vルトシテモ」の形式(「N・ANダトシテモモ」)で現れる。これもまた、「ニシテモ」と互換できる。〈非仮定〉の場合では、前件はすでに発生している事態であるが、前件から影響を受けず後件が成立している、ということが示されている。

なお、「Vウ・ヨウトシテモ」文では、前件でもまた、〈意志の不実現〉が表されている。意志

が実現されてないことから、結果の不変化が読み取れる。また、〈意志の不実現〉の場合、条件の競合性を示す「タラ」「ト」と併用される場合もある。

「ニシテモ」文には、前件 R という認識への再注釈が後件で示される場合と、後件 T という恒常性の例証が示される場合がある。認識への再注釈は、前件と後件の間に条件付けがなくても成立する。前件 R と後件 T には、程度差が常にあり、R という認識より、T のほうが一般性を示している。「ニシテモ」文には、条件の競合性も見られ、「テハ」などとの併用形式もあり、前件から予想された因果関係の逸脱が示されている。「ニシテモ」文が後件 T の恒常性の例証を示す場合、R は〈一般事態の例示〉、〈極端事態の例示〉、〈反復の一般・極端例示〉、〈無条件例示〉をして、恒常性の T の適用性を示している。

表 6、表 7 で、「トシテモ」「ニシテモ」の用法の比較をまとめた。「トシテモ」文と「ニシテモ」文を比較すると、「トシテモ」文の前件で示される仮定のニュアンスはより強いことがわかる。しかし、「トシテモ」文と「ニシテモ」文の後件が一般性や恒常性を示している場合、互換が可能だと考えられる。また、際立てば常に後件成立にあることから、「テモ」文の基本的な特徴を有していると判断できる。

表 6 「トシテモ」文とその特徴

| タイプ        | 用法                            | 前件条件の変化                | 後件結果の特徴（主観性）               | 例   |
|------------|-------------------------------|------------------------|----------------------------|-----|
| 反事実的<br>用法 | 既定事態の未発生※                     | 一般条件の撤去                | 結果の不変化（推量、心境表明、曖昧用法推量可、予測） | 1)  |
|            |                               | 必要条件の撤去                |                            | 3)  |
|            |                               | 過去（状態）の変化              |                            | 4)  |
|            | 未発生事態の発生※                     | 有利条件の無効化               |                            | 2)  |
|            |                               | 極端事態の仮説                |                            | 5)  |
|            |                               | 不利条件の無効化               |                            | 7)  |
| 仮説的用法      | 仮定事態※                         | 事態の拡大                  | 現状の不変化（評価・推量）              | 8)  |
|            |                               | 極端事態の仮説                |                            | 9)  |
|            | 話題の提供<br>Vルトシテモ、<br>N・ANダトシテモ | 目標話題の提示                | 結果の一般性・恒常性が示される            | 12) |
|            |                               | 極端事態の仮説                |                            | 15) |
|            |                               | 無条件                    |                            | 13) |
|            |                               | 条件の競合性（「ト」「ダカラ」などとの併用） |                            | 16) |
| 非仮定的<br>用法 | 伝聞・引用※                        | 不利条件の無効化               | 前件から影響を受けず後件結果が成立する（判定）    | 18) |
|            |                               | 有利条件の無効化               |                            | 19) |
| Vウ・ヨウトシテモ  | 意志の不実現                        | 条件の競合性（「ト」「タラ」などとの併用）  | 現状の不変化                     | 38) |

※「Vタトシテモ」が用いられる

表 7 「ニシテモ」文と関連形式の特徴

| タイプ        | 用法                 |          | 前件条件の変化     | 後件結果の特徴（主観性）           | 例   |
|------------|--------------------|----------|-------------|------------------------|-----|
| RとTに程度差がある | 前件認識の修正            | R>T      | 仮に前件認識を認める  | 後件で前件より普遍性のある認識を示す     | 22) |
|            |                    | R<T      | 前件事態を仮説する   | 後件で前件事態より達成している段階を示す   | 43) |
|            | 条件の競合性（「デハ」などとの併用） |          | 仮に前件認識を認める  | 「ニシテモ」から予想した因果関係の逸脱を示す | 24) |
| RとTに程度差はない | 後件の恒常性の例証          | 一般例証※1   | 条件付けが必要ではない | 結果の恒常性を示す              | 27) |
|            |                    | 極端条件例証※1 | 極端事態の提示     | 結果の恒常性を示す              | 29) |
|            |                    | 反復例証※1   | 一般例示        | 後件認識の適用性を示す            | 25) |
|            |                    |          | 極端例示        | 後件認識の適用性を示す（義務）        | 41) |
|            |                    | 無条件例証※2  | 無条件例示       | 結果の恒常性を示す              | 40) |
|            |                    | 理屈を問う※3  | 事実の提示       | 先行する文と相応しくない後件事態を示す    | 30) |

※1 「ニシロ」「ニセヨ」も用いられる

※2 「不定語」との共起、「イズレニシテモ」、「ドチラニシテモ」の場合を指す

※3 接続語句の「ソレニシテモ」の場合を指す

#### 4. 「テモ」系構文の関連形式(2)

—「ト (ハ) イッテモ」「カラトイッテ (モ)」「トハイエ (ドモ)」を中心に—

##### 4.1 はじめに

「トイウ」+「テモ」系列は、前件の言い方の妥当性を検証する過程が観察される。「トイッテモ」と関連し、「カラトイッテ (モ)」、「トハイエ」が挙げられる。本節では、これらの関連形式と取り上げ、「テモ」文との連続性を検討する。

##### 4.2 「ト (ハ) イッテモ」と関連形式に関する先行研究の検証

「ト (ハ)」は、「トイウ」のあらわす一般的な評価、認定、引用、伝聞と言った意味規定に基づき、逆接の条件づけをするものである。主文では、「トイウ」で導かれる内容から受けるイメージが、現実と相反する状況が述べられる。(田中 2004:192)

###### 4.2.1 「トイッテモ」文の特徴

田中(2004:192)は、例 1)~6)を挙げて、以下のように「トイッテモ」の多様性を記述している。例 1)は〈現状否定、見かけと事態との不均衡、不整合を表す〉が、例 2)は〈一般通念に反する過小評価に類する、一種の留保的な表現〉である。例 3)、4) は〈言い換えや注釈を必要とする場合〉であり、例 5)、6)は〈現象の多様化を判断留保気味に表す言い方〉とされている。また、例 1)と類似し、例 1-a)では前件情報のうち、「朝食」が反復され、不均衡的な状況の註釈がなされている。

- 1) 日本人が金持ちになったトイッテモ、それは土地の問題などがあって、実力以上に表に表れているに過ぎない。(田中 2004,192:『朝日新聞』1986.11.28) (再掲)  
1-a) 出港二日目、花巻朔太郎は真夜中の零時から朝六時までの哨戒長付の直があげると、一緒に勤務した船務長の五島正義一尉と二人で朝食をとった。朝食トハ云ッテモ、白身魚のフライがメインの重いメニューである。(山崎豊子『約束の海』18)
- 2) 君、今外国旅行トイッテモパスポートさえ持っていれば手続きなんか一度ですむ時代だよ。(田中 2004,192:『青い壺』)
- 3) 「座敷空いているよ」と主人が言う。座敷トイッテモカウンターから見通せる畳敷きの狭い場所である。(田中 2004,192:『夕暮れまで』)
- 4) 昔、トイッテモ十数年前の沖縄の海は淡い緑、淡い虹の珊瑚でまばゆかった。(田中 2004,192:『朝日新聞』1986.12.4)
- 5) ひとくちに弁護士トイッテモ民事事件しかやらない人、刑事事件専門の人など、さまざま仕事も多様だ。(田中 2004,192:『朝日新聞』1985.2.13)
- 6) 同じ報道写真トイッテモ死体の扱いひとつとってもずいぶん違うんじゃないですか。(田中 2004,192:『文芸春秋』1986.11)

以上のように、田中はトハイッテモの用法を仔細に分類している。本研究は、上記の田中の分類を参考にし、認知言語学の観点から、「ト (ハ) イッテモ」のスキーマを以下のように示す。

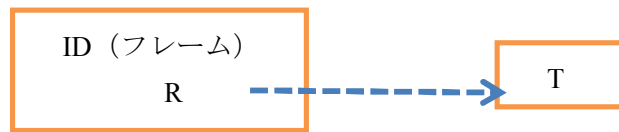


図 43 「ト (ハ) イッテモ」のスキーマ

例 1)～6)で、「トイッテモ」の前件は、それぞれ「金持ち」、「外国旅行」、「座敷」、「昔」、「弁護士」、「同じ」である。また、それぞれに対して、後件の解釈は「実力以上の表現」、「パスポートで手続きが一度ですむ」、「狭い場所」、「民事事件専門、刑事事件専門など」、「違う」である。前件で示された要素は、後件で「注釈」がほどこされている。この「注釈」には、三種類の関係が見られる。以下、この三種類の関係について説明する。

#### 4.2.1.1 過大評価への控え

前掲例 1)～3)は、「トイッテモ」の用法の第一種である「過大評価への控え」に相当する。図 43 を見ながら考察してみよう。T は R の「フレーム」から離れている。R について、「フレーム」に基づく解釈(ID の中) がさまざまある。一方、R について、話者の解釈は T である。

例 1)では、「日本人が金持ちになった」という認識は、「実力以上の表現」によって修正されている。つまり、見た目では、日本人が「金持ちになった」と思われるが、実際はその「見た目」は、「実力」をオーバーしている表現と見なされる。つまり、後件は、「金持ちになった」という変化を否定している。前件でいう変化が、後件によって否定される。前件と比べて、後件は一般性を示している。

例 2)では、「外国旅行」に対し、「手続きが複雑で面倒くさい」というフレーム (イメージ/理解) が「パスポートで手続きが一度ですむ」によって修正されている。

例 3)では、「座敷」と呼ばれるものは、実際の「カウンターから見通せる畳敷きの狭い場所」によって修正されている。

例 1)、2)、3)では、後件の注釈によって、「前件の認識が〈フレーム〉相当の認識ではない」、「前件の言い方は適切ではない」、ということがわかった。

例 1)、2)、3)では、前件と後件の程度差が必要とされる。前掲した程度差を示す図 42 を見てみよう。

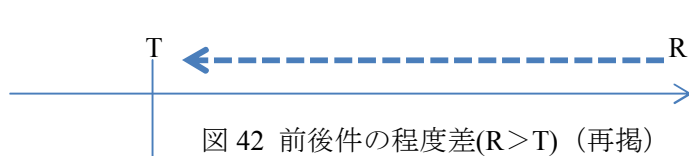


図 42 前後件の程度差(R>T) (再掲)

例 1)、2)、3)には、前件 R という言い方は、右のゴール (縦の線) まで到達しないと、不適格と見なされる。R と言われて、実際は T しか到達していないから、前件の言い方は過大評価と見なされ、後件 T はその控えと考えられる。

#### 4.2.1.2 包含関係の例示

例 4)、5)では、「トイッテモ」の前件と後件には、包含関係が含まれている。「昔」というフレ

ームの中に、「十数年前」が含まれている。「弁護士」というフレームの中に、「民事事件専門の弁護士」、「刑事事件専門の弁護士」などが含まれている。図 44 を見てほしい。

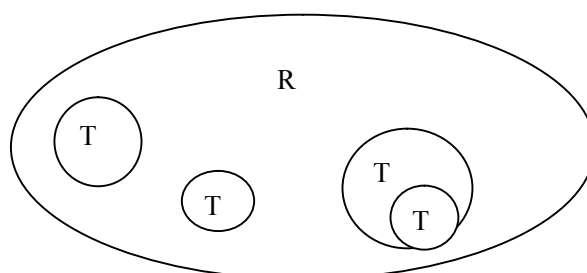


図 44 追加注釈の場合

図 44 で示したように、R のフレームの中に、幾つかの T (フレームによる解釈) が存在している。

例 4) の場合、前件 R 「昔」という言い方は、後件 T 「十年前」によって、指示する範囲が縮小される。例 5) では、前件 R 「弁護士」という言い方は、後件 T1 「民事事件専門の弁護士」、T2 「刑事事件専門の弁護士」によって、その精度が要求されている。これらの包含関係の中では、例 4) は単独例示で、例 5) は複数例示と考えられる。

#### 4.2.1.3 前件言い切り形式の例外

例 6) では、前件 R の「同じ」と T の「違う」の対立によって、前件 R と後件 T が相反関係を成している。前件 R という言い切りの正式から、後件 T はその反面を示している。このような前件 R と後件 T から、言い切りより一般性の結果を求める姿勢が観察される。

「トイッテモ」文では、「ハ」を用いると、前件と後件の相反関係が多く見られる。

- 7) 平等だトハイッテモ、移民の種類によって、職業の別は自然に出来上がっているみたいです。  
(『日本語表現文型』:117)

前件 R の「平等だ」の例外として、後件 T は「差別」を示している。「ハ」には、提題機能がある。「ハ」を用いると、前件が主題として際立たされ、前件 R と後件 T が相反関係となるのも当然なことと見受けられる。

#### 4.2.2 「トハイエ」文の特徴

「ト (ハ) イッテモ」の関連形式として、「トハイエ」が挙げられる。「トハイエ」について、角田(2004:24)は「トハイエ」を用いる場合、その従属節には名詞だけが現れる場合も、形容動詞、形容詞だけが現れる場合もあるとしている。また、名詞句や、述語の終止形を伴う節が現れる場合もあると述べている。

角田(2004:24)によれば、「トハイエ」文では、従属節と主節の接続が表す意味は「従属節の内容を前提としても(話者としては、なおかつ)主節で述べる内容のように考える、あるいは主節で

述べている内容を述べる」という意味関係になっている。

実際、「トハイエ」文には、前件 R の補足説明と、前件 R を理由として不適格であることを示すの 2 種類が挙げられる。例 8)、9)は、T が前件 R を超過していることを示している。

#### 4.2.2.1 前件内容の補足説明

- 8) 予想通りトハイエ、その敗北はあまりにも惨めだった。
- 9) 建設業トハイエ、仕事の内容は一種のトビで、数十メートルもの高さがあるハイウェイに、命綱をつけて防音壁を取りつけるといったようなことをするらしい。 (角田 2004:24)

例 8)、9)では、「予想通り」や、「建設業」という言い方を先に認めるが、後件で、前件のフレームを超過している結果 T を示している。つまり、「あまりにも惨めだった」や、「一種のトビ」であることは、前件 R のフレームを超過している結果である。図 45 を見てほしい。

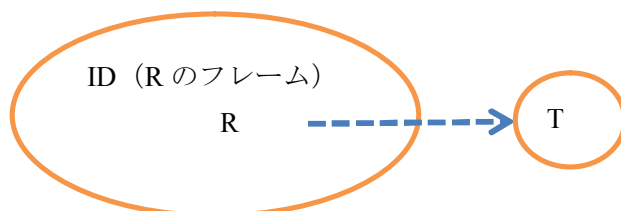


図 45 R のフレーム(ID)を超過する T の「トハイエ」

図 45 を見てもわかるように、例 8)、9)の後件は、メタ言語に対する再注釈に見られる。後件は前件の ID から離れている。例 8)で「予想通り」は、「敗北」だと読み取れるが、話者の判断では、その敗北は、予想を超えて「惨めだった」。例 10)では、「建築業」の考えでは、「一種のトビ」は、「建築業」の基本的定義から離れている。

名詞や名詞節だけではなく、文に接続する「トハイエ」場合もまた、予想した範囲を超過している結果を示す機能を持っている。

- 10) 自衛隊が隊員に教えていることは、現実とあまりにかけ離れている、自衛隊の最高指揮官は内閣総理大臣トハ云エ、その総理以下の政治家も官僚も、事故が起きれば、保身に汲々として、隊員をまるで犯罪人呼ばわりする、… (山崎豊子『約束の海』170)

例 10)では、「内閣総理大臣」という立場からは、後件「事故が起きれば、保身に汲々として」までは連想できず、後件は前件と対立する側面を示している。

以上のように、前件の成立を認めながら、それと想起関係のないもの、あるいはそれと対立する側面を示すのが、「トハイエ」文の特徴といえるだろう。

一方、「トハイエ」文には、前件と後件に、因果関係が想定された場合、前前件が、後件の原因、理由になるには不適格性を示す場合も挙げられる。

#### 4.2.2.2 前件原因・理由の不適合性

- 11) いくらコーヒー好きトハイエ、これだけのコーヒーを一人で 飲みきれものではない。
- 12) 便利トハイエ、駅のとりに住むのも 気が進まない。
- 13) おもしろくないトハイエ、学校へは行かなければならぬ。 (角田 2004:24)

例 11)~13)は、前件が、後件が実現するための理由や根拠とならないことを示している。つまり、Tが因果関係 ID から離れている。さらに、例 11)では、不定語との共起が見られる。この場合では、「トハイエ」文は無条件となる。無条件となる場合、後件の成立が必然的となる。例 11)では「どんなにコーヒーが好きの人でも、飲みきれない」というふうに解釈される。例 12)、13)では、例 10)と同様に前件は、後件を変える十分条件ではないと見なされる。

さらに、動詞文の場合もまた、前件から後件へ導くことが出来ない、ということが表されている。例 14)、15)、16)を見てほしい。

- 14) 「私が認められないトハイエ、お祝いを欠席するとはどういうことなの?」
- 15) 「許しがたいことです。富と権力に目がくらんだトハイエ。」
- 16) たとえ知らなかったトハイエ、会社の持ち物であるマンションを担保に五百万円もの借金をし、それを親類が使っていたとなったら、必ずや責任を取って辞職すると言いつくのは目に見えている。 (角田 2004:24)

例 14)、15)、16)では、「私が認められない」や、「富と権力に目がくらんだ」、「知らなかった」は、「欠席する」、「許す」、「責任を取らない」理由にはならない、という話者の考えが伺える。つまり、前件と後件は、因果関係にならない、ということがわかる。

#### 4.2.2.3 「トハイエ」が接続語として用いられる場合

一方、接続語として、角田(2004:24)では、「トハイエ」に先行する従属節、あるいは文の中では、話者を含む誰かが実際に言ったことを引用するよりも、話者が了解していることが考えたことなどを表す場合が多いとしている。

角田(2004:24)によれば、「トハイエ」に先行する従属節、あるいは文の中では、話者の胸中、判断を表すことがある。そして、「トハイエ」に続く主節、あるいは文との関係で、話者(あるいは登場人物)の心の葛藤を表すのである。こうした話者の心の葛藤を表す用法は、特に、「トハイエ」という形態にも関係があるように思われ、「トハイエ」という表現の中では、「イウ」は未確定の形にすることによって、「トイウ」に先行する部分が客観的な事実というよりも、自らの思い、判断であるということ、あるいは仮にそうだと前提するとしても、なおかつ主節の内容のように考える、あるいはそのことを述べるという意味内容を表しているように思われる。

#### 4.2.3 「カラトイッテ (モ)」文の特徴

「ト (ハ) イッテモ」のもう一つの関連形式として、「カラトイッテモ」が挙げられる。「カラ



トイッテ」は、前件の根拠から考えて普通に下される判断が常に正しいとは言えないことを示す。「ただそれだけの理由で～することはない」「いくらそうであっても～しては困る」の意で、後件には、「とは限らない」「わけではない」など、話者の否定的な判断を加える表現が頻繁に見られる。(森田・松木 1989:116)例 17)、18)、19)を見てほしい。

17) 昔人間がそうであった**カラトイッテ**、現在そうではなければならない根拠は少しもないのである。

18) 暑い**カラトイッテ**、氷など冷たいものをやたらに飲んだり食べたりすることは禁物です。

19) 日本人だ**カラトイッテ**、すべて日本文化について知っているわけではありません。

(『日本語表現文型』:116)

例 17)では、「昔はそうであった」ということは、「現在はそうでなければならない」を意味するわけではない。例 18)では、「暑い」を理由にして、「氷など冷たいものをやたらに飲食する」ことは禁物である。例 19)では、「日本人」だから、「すべての日本文化について知っているわけ」ではない。「カラトイッテ」文では「カラ」により因果関係の ID が設定されている。また、「カラトイッテ」の後件からみると、前置した理由は無効とされていることがわかる。以下に「カラトイッテの参照点モデル」を図示する。

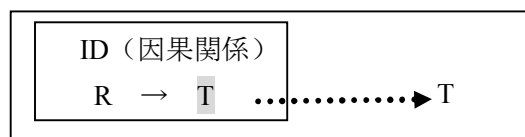


図 46 「カラトイッテ」のスキーマ

「カラトイッテ」の構文的な特徴として、後件の「わけではない」などとの共起性があげられる。この類には「とはいえない」「とはかぎらない」「とはいえない」などがある。前掲内容に対して一部分の同意を示しながらも、全面的には承認できない事情を述べる。次の例では「もちろん」「だが」の接続語句により、判断留保的な心情が述べられている。

20) 「わいせつ」を理由に、芸術活動に警察が介入する出来事が相次いだ。もちろん、芸術作品だ**カラトイッテ**、どんなものでも無制限に公表していいわけではない。だが、作品の意味や、発表の仕方を考慮せず、取り締まるだけの社会は、息苦しい。(『朝日新聞・社説』2014.10.5)

また、「カラトイッテ」は、一般的に「カラトイッテモ」の形式と互換できる。ただし、以下の例では、「カラトイッテ」は用いられるが、「カラトイッテモ」とは互換できない。

21-a) 子供だ**カラトイッテ**、甘やかすのはよくない。

21-b) ?子供だ**カラトイッテモ**、甘やかすのはよくない。

(作例)

「カラトイッテ」の場合、前件と後件との因果関係が否定されるが、「カラトイッテモ」の場合では、後件の成立が恒常性を有している。例 20-a) の場合では、後件が常に成立するわけではないので、「カラトイッテモ」を用いると、文が不自然と見受けられる。

#### 4.2.4 「ト (ハ) イッテモ」「カラトイッテ (モ)」「トハイエ」の連続性

『日本語表現文型』(2008)によれば、「トハイエ・トハイッテモ」は、前件が事実であることを認めた上で、それと相反・矛盾した後件が成立することを示すとある。「～だけれども、しかし」「～は本当だが、実は」の意で、いったん事実として容認したものの、内容を吟味し、改めて問題点を指摘する文の流れもみられる。後件では、前件の内容は一言で言い切れるものではない、というような主観が表れている。

陳(2011:121)は、「トイッテモ」は前件を、事実として認めたところで、それから導いたこと、あるいはそれしか考慮されないことに対する否定的な内容へと結び付ける。それに対し、「カラトイッテ」は、前件を事実として認めたところで、それを根拠に推論を行うことの妥当性を否定する内容へと結び付ける、と述べている。

「ト (ハ) イッテモ」文では、前件で取り立てられたものと対等関係にならない後件を示している。多くの場合、後件は前件理解を修正し、フレームの概念から前件の不適格を示している。また、「トハイエ」文は、前件の成立を認めながら、前件からの想起関係を超過する側面を示している。「カラトイッテ (モ)」文は、前件と後件が因果関係にはならないことを示し、理由・原因として前件の不適格を示している。「トハイッテモ」、「トハイエ」、「カラトイッテ」は、同一のスキーマを有している。そのスキーマを以下に示す。



図 47 「トイッテモ」のスキーマ

※ 「トイッテモ」:ID がフレームとなる/ 「カラトイッテ」:ID が因果関係となる/  
「トハイエ」:ID がフレームか因果関係となる

図 47 で示したように、T は R の ID から離れている。「トイッテモ」の場合、ID が前件 R のフレームとなる。後件 T で実際の状況を示し、R の内容は、実際の状況を示すものとして適切ではないことを説明している。「ハ」を入れて「トハイッテモ」の形となる場合では、提題性が高くなり、前件と後件が相反関係となる場合が多く見られる。「トハイエ」文では、前件も成立しているし、後件も成立している。前件についての理解の補足として、T が存在するか、あるいは、前件から導かれる一般的通念を否定するものとして、T が存在している。「カラトイッテ」の場合では、前件は、後件成立の理由とはならず、「モ」を入れると、後件成立の一般性が強くなる。

#### 4.3 実例による考察

BCCWJ『中納言』で「ト (ハ) イッテモ」を文字列で調べてみた。その結果 9097 件のうち、N トイッテモの形が最も多く観察された。名詞や名詞節以外の接続も見られるが、それは「N ト

「トハイエドモ」と類似して、前件の言い方を過大評価とし、後件でその控えを示している。また、「トハイエドモ」は 550 件あった。「トハイエ」は 5946 件あるが、「トハイエドモ」の形式も 9 件ある。これに対し、「カラトイッテ」は総計 2742 件の中、「カラトイッテモ」の文例は 73 件ある。

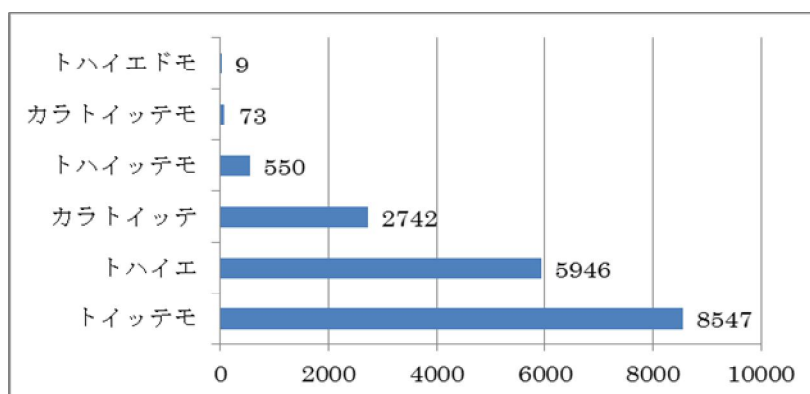


図 48 「トイッテモ」の関連形式の使用調査

#### 4.3.1 「トイッテモ」の文末に見られる留保的表現

- 21) でも、校長に決定権があるトイッテモ、「学習指導要領」に反する決定をすることはできません。 (『国会会議録』)
- 22) たとえ女の寿命がのびたトイッテモ、すべての女の寿命が八十を越すというわけではない。  
私の姉などは六十六歳で死んでいる。 (『新寂庵説法』)
- 23) 1970 年代後半に予想される日本経済の成長率は低いトイッテモ、いぜんとして欧米の 60 年代よりも高いくらいである。 (『20 代で女を磨く本』)
- 24) 誰が教育を減ぼしたか、先ほど申しましたように五十四年に始まったばかりの制度でございまして、試験実施の結果はあるトイッテモ、あくまでも試験でございます。 (『国会会議録』)
- 25) 瀬戸大橋はできたトイッテモ、さすがに陸路を車で行くには遠い距離である。 (『讃岐路殺人事件』)

例 21～24)では、R のフレームと T の程度差が読み取れる。例 21)では、前件で「決定権」を取り上げ、「決定権」のフレームでは、T「〈学習指導要領〉に反する決定をすること」は含まない。後件 T は前件 R でいう「決定権」の権力範囲を付け加えて説明している。

例 22)、23)では、「寿命がのびた」ことに対して、「すべて八十を超すというわけではない」、「成長率が低い」に対して、「欧米の 60 年代よりも高いくらい」のように、「トイッテモ」の後ろに、追加注釈、比較的に程度を提示する表現が見られる。その中で、「わけではない」、「くらい」が関連表現となっている。

また、24)のように、「あくまでも」から、過大評価への控えを示す表現が観察される。

例 21)、22)、23)は、前件の文の理解に対する再注釈と考えられる。24)、25)では、前件からの

推論が含意されている。「試験実施の結果がある」から、「結果により判断することはできる」と予想されるが、実際の結果が T「あくまでも試験でございます」という、留保的な判定となっている。例 25)は、例 24)と類似し、常識による推論過程を用いて説明ができる。「大橋はできた」から、「通行が便利になる」と予想されるが、実際は、「陸路を車で行くには遠い距離である」→「便利になったが遠い」という結果が得られた。

#### 4.3.1.1 「V タイ」 + 「トイッテモ」

「トイッテモ」の文型には、26)、27)のように、前件に「V タイ」という意志提示をして、後件でその不実現を語る表現の文例も見られる。これらも、〈意志の不実現〉の一種と考えられる。

26) いきなり高速を飛ばしたいトイッテモ、エンジンを慣らしてなければ、本当の意味で性能を發揮することはできません。 (『20代で女を磨く本』)

27) 婚姻届けを出した夫婦でしたら、夫が浮気して別れたいトイッテモそんな簡単にはいかな  
いとか、経済的にも妻をある程度守るとか。 (『男が語る一家族・家庭』)

これとは逆に、28)は、前件で「たくない」という意志の否定形式を提示し、後件ではその実現が述べられている。

28) 診たくないトイッテモ、この歯は前館でやってもらったんだぜ、といったんだ。  
(『三毛猫ホームズの四捨五入』)

「V タイ」 + 「トイッテモ」の形では、後件は前件の意志によって変わらないという結果を示している。

さらに、例 29)のように、「トイッテモ」が「イクラ～V タイトイッテモ」の形で現れている。不定語が共起する場合、結果は一般性のあるものなので、意志によって変えられないニュアンスが一層際立たされる。

29) いくらおまえがなりたいトイッテモ、おまえの力が足りなけりゃあ部隊に加えてやるわけにはいかんだ。  
(『天保山夢の川さらえ』)

例 29)のほか、「タイ」を除いて、「イクラ～トイッテモ」の形式も多用されている。

#### 4.3.1.2 「イクラ～トイッテモ」

30) いくら雑誌の連中と一緒にだトイッテモ、あんな恰好は君らしくない。 (『B・D・T』)

31) いくら、世の中の善意を広く、薄くトイッテモ、ある程度大きな寄付や融資を当てにしな  
いかぎり、街頭募金程度では到底追いつかない額である。  
(『誰も知らないイタリアの小さなホスピス』)

また、30)、31)と前掲29)では、「イクラ～ナイ」のように、不定語が共起されている。つまり、前件は、後件の論拠にはならない、という話者が認識している。この点で「カラトイッテ」と類似している。ただし、「カラトイッテ」は唯一の原因の否定であるのに対し、「イクラ～トイッテモ」は無条件である。

例31)はほかの例と異なり、話者は、前件は後件の理由にはならないと判断している。したがって、「トイッテモ」には、さらに「イクラ～トイッテモ」の形で、前件Rは後件Tの原因・理由として不適格であるということが示されている。

#### 4.3.2 「カラトイッテ」文に見られる文末否定

「カラトイッテ」文は、因果関係の否定である。前件Rは、後件Tの原因・理由として不適格だと思われる。したがって、「カラトイッテモ」文では、後件には否定表現が多く表れている。また、顕在化している否定表現のほか、例33)「できるの」のような疑問表現、例32)の「お身体にさわる」ような低い評価なども見られる。

32) それなのに、いくら一万年前の最凶貴族だカラトイッテ、いきなりこんなことができるの？  
(『D-白魔山』)

33) 榭の方におられます。いくら気候がいいカラトイッテ、あんなところに長くおられては、お身体にさわるのですけれど。  
(『乱紅の琵琶』)

例32)では、「一面年前の最凶貴族」という条件は、「いきなりこんなこと」できる充分条件ではないと判断される。ここではさらに、「イクラ」という不定語との共起が見られる。不定語+「カラトイッテ」の例32)から、前件の程度の変化と関わらなく、「いきなりこんなこと」は、前件にとってできないことということがわかる。これはまた、〈無条件〉だと考えられる。

例33)では、「気候がいい」から、「体にいい」という推論が含まれている。しかし、後件では、「あんなところに長くおられては身体にさわる」という結果が示されている。例33)の文脈が複雑に見られるが、予想された因果関係のほかには、競合する条件(「テハ」との共起)も観察される。意味として、後件は「体によくない」ことを表している。したがって、「気候がいい」は「身体にさわる」ことが不成立の理由にはならなかった。

##### 4.3.2.1 「カラトイッテモ」

「カラトイッテ」は「モ」をいれて「カラトイッテモ」の形でも用いられるが、前掲したように、「モ」を入れると、後件成立の一般性が強くなる。「モ」はもともと、取り立てのほか、同類のIDを暗示する機能があるので、「カラトイッテモ」を用いる場合、後件に影響が及ばない原因として、前件は唯一ではないことを示している。

34) 権利義務の関係がないカラトイッテモ、お祖父さんの代までは所謂三代相思の主君だったぢゃないか？我々が今日あるのも皆伯爵家のお蔭だよ。  
(『少年倶楽部の頃』)

例 34)では、「権利義務の関係がない」ということから、「お祖父さんの代までは所謂三代相思の主君だった」という事実を変えることはできない。また、後件事実の成立は、「カラトイッテモ」によって、前件原因だけではなく、他にも言い分があつて後件が成立する確実性がある。

#### 4.3.2.2 「イクラ～カラトイッテモ」

不定語「イクラ」とともに構成される無条件節がある。

35) いくらボーナスが出るカラトイッテモ、そんな高級な店へ友だちもとは言えない。

(『同時代ノンフィクション選集』)

話者によって、「ボーナスが出る」ということは、「そんな高級な店へ友だちも（連れて行く）」という結果を導くことができない。この前件だけではなく、話者の判断では、「そんな高級な店へ友だちも（連れて行く）」ということが無条件で成立することを意味している。

以上の考察から、例 32)から 35)まで、いずれも推論が成り立たないことを述べている。ことがわかった。いずれの例も、前件が後件の判断の理由にならないことや、疑問を呈したりしている。前件 R から設定された元の因果関係は、「とは言えない」「じゃないか」「できるの？」により、否定されている。

#### 4.3.3 「トハイエ」

次に、「トハイエ」について考察する。「トハイエ」文は、前件 R を提示し、後件 T で R のフレームと異なる理解を説明する場合が多い。また、「イカニ」、「イクラ」と共起する場合も見られる。前件資格の不適を後件で補足説明する文が多く観察される。他にも、前件と後件が相反する存在となっている場合もある。

##### 4.3.3.1 対立事態の両立を表す「トハイエ」

「トイッテモ」の文語体、書面体である「トハイエ」をみてみよう。

36) 宣告されたのはこれが最初トハイエ、私はずっと前からこの宣告を予感し、覚悟していた筈である。

37) あんなに唐突に生れた想念であったトハイエ、金閣を焼くという考えは、仕立卸しの洋服か何ぞのように、つくづくぴったりと私の身についた。 (『金閣寺』)

36)、37)では、前件と後件は対立している事態を述べている。つまり、36)では「最初」と「前から予感し、覚悟していた」が、37)では、「唐突に生れた想念」と「つくづくピッタリと私の身についた」が対立している。後件は、対立すると同時に、前件の概念を補足説明している。前件成立を認めながら、同じ話題の対立側面を示している。また、例 36)、37)のような、顕在化されている対立だけではなく、前件 R に含意されている推論と対立している後件を示す「トハイエ」文もある。

- 38) 人は殺したトハイエ、肉は食わなかったのだから、何でもないはずであり、私の一方的な記憶が、妻との生活の間に「挿まる」など、比喩としてまずい比喩であるが、どうもほかに考えようもない。 (『野火』)
- 39) ひとつには、当時は十九世紀の後半に入ったばかりであったばかり、先進国はおおむね産業革命を経過していたトハイエ、技術水準からみれば、熟練と経験の累積にもとづく技術段階から、科学に裏づけられた技術段階へと進みつつある時代であった。 (『激動の百年史』)
- 40) それに不良債権をかかえているトハイエ、日本の大銀行は当時と比べてはるかに大きく、強い力を持っている。まさか恐慌といわれるようなことはおこらないと思う。 (『日本経済の飛躍的な発展』)

例 38)、39)、40)はともに、後件が、前件の文に対する補足的説明になっている。38)はまた、ほかの二つと性質的には違いが見られる。「人は殺した」という前件から、「何でもないはず」という判断はどうしても得られにくいものであるが、話者の中で肝心なのは「肉を食べたか、食べなかったか」であるとしている。39)では、「先進国は概ね産業革命を経過していた」という前件に続き、後件で補足説明が続いている。40)は、「不良債権」に関する理解へ、後件でもう一つの側面で解釈を付け加えている。

#### 4.3.3.2 「イクラ～トハイエ」

不定語と共起する「トハイエ」は、前件の成立している事実を認めて、それが後件の原因・理由としては不適切であることを示している。

- 41) 慈海もそのとき、こんなこときいたのは背のひくい四尺そこそこの慈念が、いくら教練だトハイエ、兵隊の担ぐ鉄砲をもっているなど想像だに出来なかったからにほかならない。 (『雁の寺』)
- 42) いくら草も山蛭も食べていたトハイエ、そういう食物で、私の体がもっていたのは、塩のためであった。
- 43) 私はいかに自分の肉体を養う要請に応ずるトハイエ、すべて有機質から成り立っている食物を食べることを、その有機質の以前の所有者であった生物達に、まず詫びるのである。
- 44) いかに推理によって安全を確信していたトハイエ、私の恐怖にとっては、逃げた男はこの道に比島人のいる可能性だったのである。 (『野火』)

例 41)では、一般的な認識として、「教練を受けたら、兵隊の担ぐ鉄砲を持つことぐらいはできるでしょう」と予想ができるが、慈海のお考えでは、背の低い慈念が鉄砲を担ぐことは想像できないこととわかる。つまり、予想された因果関係が不成立となる場合である。例 42)では、「私の体がもっていた」理由は「塩」だといっているが、前件の「草」や「山蛭」は、後件に導く理由ではない。例 41)では、「自分の肉体を養う要請に応ずる」ことは、「有機質」を食べる理由とはならない。「トイッテモ」、「カラトイッテモ」と異なり、「トハイエ」が不定語と共起する場合、そ

れが無条件と相当する。例 43)では、「安全確信していた」ということから、「私の恐怖」がなくなると言い切ることはできないと話者が伝えている。「安全確信」の程度が高くなっても、恐怖感がまだ存在している。例 44)の場合では、前件と後件に顕在化された対立が見られる。つまり「安全」と「恐怖」が対立している。「トハイエ」文は、前件・後件の両立を認める点では、対立が表されるのも当然に見受けられる。

#### 4.3.3.3 接続語の「トハイエ」

前掲角田(2004:24)で、すでに接続語の「トハイエ」が説明されているが、「トハイエ」が接続語で現れる場合、物語文における登場人物の内心的な葛藤が表出される。以下に、実例を見ながらこのことを検討してみる。

- 45) 言葉は私を、陥っていた無力から弾き出した。俄かに全身に力が溢れた。トハイエ、心の一部は、これから私のやるべきことが徒爾だと執拗に告げてはいたが、私の力は無駄事を怖れなくなった。(『金閣寺』)

例 45)は、前件と後件が相反関係となっている。「無力から弾き出した」、「全身に力が溢れた」と「心の一部は…徒爾だと執拗に告げてはいた」が対立している。前件事態 R と内心の考え T が相反関係となっている。この対立も、後件は前件話題の対立する側面を示し、補足する機能を持っている。

#### 4.3.3.4 対立の「トハイエ」の後件際たて

「トハイエ」の場合、前件と後件は対立する関係でありながらも、前件より後件のように思う傾向が観察される。例 46)、47)、48)を見てみよう。

- 46) 実利的な考えかたばかりがハバをきかす世の中は、いたしかたないトハイエ、何とも淋しい。(『心の危機管理術』)
- 47) いかに日本人が序列偏重だトハイエ、現実には顕在する個人の能力差を無視することはできないし、また、実際に能力の評価ということが行なわれている。
- 48) アメリカ、ソ連、イギリスなどに比して少ないトハイエ、日本でも今日まで特にアジア諸国に対して相当の援助がなされてきており、…。(『タテ社会の人間関係』)

例 46)では、「仕方ない」よりも、「淋しい」が際立たされている。また、例 47)、48)では、「序列偏重」や「少ない」という言い方より、「実際に能力の評価が行われる」、「相当な援助がなされる」という結果が際立たされている。

以上のように、前件の成立を認めながらも、あえて前件と対立している後件のように思う点で、「トハイエ」文は、後件を際立たせる特徴があるといえる。



#### 4.3.3.5 「トハイエドモ」

ほかには、「トハイエ」と関連し、「トハイエドモ」の形式も観察される。

49) チャットは、コミュニティトハイエドモ、いつでも離脱が自由なコミュニティだ。

(『チャット依存症候群』)

50) この間、外気は12・2℃から28・2℃まで変動しているのでさわやかトハイエドモ、肌寒い感覚とちょっと暑いなという感じが入り交じっている日々でもある。

(『本質を暮らす贅沢な家』)

「トハイエドモ」文では、前件・後件とも成立するが、相反関係が明確である。「トハイエ」より、従属節と主節の独立性が高く見られる。

#### 4.4 結語

本節は、「ト (ハ) イッテモ」「トハイエ」「カラトイッテ (モ)」を分析した。

「トイッテモ」文の後件は、前件の内容を再注釈している。前件で取り立てた言い方は過大評価であると話者が認識し、後件で、より一般性のある、適切な考えが提示される。前件に「ハ」が用いられると、前件の提題性が高くなり、前件と後件が意味上の対立関係になるが、際立たされるのは、依然として後件である。「トイッテモ」の関連形式には、「V タイ・タクナイトイッテモ」があるが、これも「トイッテモ」と同じく、現状 T の不変化を表す。

「トハイエ」文では、前件の成立は否定されず、前件・後件が共に成立している。後件は前件の内容の拡充(フレームの超過や対立する側面の提示)、あるいは前件は後件の理由とはならないことが示される。「トハイエドモ」は、「トハイエ」よりも、節間の独立性が高い。「トハイエ」文では、前件の成立を承認した上で、それでも後件のように思う傾向が示されている。

「カラトイッテ」文では、条件づけが否定されている。関連形式の「カラトイッテモ」の形式では、T は恒常性を示している。

「不定語」と共起する場合、「トイッテモ」「トハイエ」「カラトイッテ (モ)」の前件は、いずれも〈無条件〉を示している。「何トイッテモ」では、後件 T の適切性が示される。「イクラ～トイッテモ」文では、言い訳の無効や、極端な R への控え T を提示する。「イクラ～トハイエ」文では、前件の理由 ID が拡張されるが、その理由によらず結果 T が成立していることが表される。「イクラ～カラトイッテ (モ)」では、前件 R で極端的な原因・理由が示され、後件 T で恒常性が示される。

「ト (ハ) イッテモ」「トハイエ」「カラトイッテ (モ)」文では、後件で、前件への適切な注釈、補足、前件との因果関係が成り立たないことが表される。そして、後件では適切性、現実性、恒常性が示される。

以上の分析結果を、以下の表 8 のにまとめる。

表 8 「ト (ハ) イッテモ」文と関連形式の特徴

| タイプ        | 用法        |                            | 前件条件の変化             | 後件結果の特徴                          | 例                 |                   |
|------------|-----------|----------------------------|---------------------|----------------------------------|-------------------|-------------------|
| トイッテモ      | 程度差       | T<R                        | 言い方・考え方の引用          | 過大評価への控え                         | 1)                |                   |
|            | 包含関係      | T<R                        |                     | フレームの例示                          | 4)                |                   |
|            | 相反関係※1    | T⇔R                        |                     | 例外を示す                            | 6)                |                   |
| Vタイトイッテモ   | 意志の不実現※2  |                            | 他人の意志の引用            | 現状の不改变<br>(認識)                   | 26)               |                   |
| イクラ～トイッテモ  | 無条件       | 前件過大評価への控え、<br>或は条件付けの否定※3 | 原因・理由の引用            | 「トイッテモ」から<br>予想された因果関係の<br>逸脱を示す | 30)<br>31)        |                   |
| トハイエ       | フレームの超過   | TがRの<br>拡充                 | Rという言い方・考え<br>方を認める | Rのフレームから<br>超過する部分をT<br>で示す      | 8)<br>9)          |                   |
|            | 相反関係※4    | TがRの<br>補足                 | 前件成立を認める            | Tが同じ話題の前<br>件と対立する側面<br>を示す      | 10)<br>49)<br>53) |                   |
|            | 条件付けの否定   | 因果関係<br>の不成立               | 前件成立を認める            | 他人のRから予想<br>された因果関係の<br>不成立を示す   | 12)<br>13)        |                   |
| イクラ～トハイエ   | 無条件       | 条件付けの否定                    | 理由IDが無限に拡張<br>される   | 理由のいかんによ<br>らずTが成立する             | 11)               |                   |
| カラトイッテ     | 条件付けの否定※5 |                            | 因果関係<br>の不成立        | 理由の取り立て                          | 言い訳の不合理性<br>を示す   | 19)<br>20)<br>35) |
| イクラ～カラトイッテ | 無条件       | 条件づけの否定※6                  | 極端原因・理由の引用          | 言い訳の無効化                          | 33)<br>34)<br>36) |                   |

※1 「トハイッテモ」の形でも用いられる

※2 不定語と共起・条件の競合（「ナケレバ」などとの併用）でも用いられる

※3 条件の競合性も表せる（「カギリ」などとの併用）

※4 接続語・「トハイエドモ」の形でも用いられる。接続語の場合、後件では登場人物の内心的葛藤も表出される。

※5 「カラトイッテモ」の形でも用いられる

※6 「イクラ～カラトイッテモ」の形でも用いられる

## 5. 「テモ」系構文の関連形式(3)

— 「トモ・ドモ」「Vウ・ヨウト(モ)・デアウト」「Vウ・ヨウガ・デアウガ」「デアレ」を中心に—

### 5.1 はじめに

「テモ」の関連形式として、「トモ」がある。まず、先行研究における考えを見てみよう。前田(2009:229)によれば、「テモ」の類義表現として、「トモ」は、「テモ」と似た逆条件用法を持つ接続辞であり、動詞の意志・勧誘形に接続する。また、「トモ」に似た形式として、「ヨウトモ」は、前節の述語には制限があり、動詞の意志・勧誘形「シヨウ」に接続された「シヨウトモ」、打消し形・形容詞の中止形に接続する「ナクトモ」・「クトモ」という形がある、とある。

一方、三尾(1942:280)は、「Vウ・ヨウト(モ)」は、接続詞「ト」が「用言」の推量形に接続した場合である。『日本語表現文型』(1989)は、「ヨウト」と「ヨウガ」を共に取り上げ、形式上は推量の助動詞「ウ」「ヨウ」に接続助詞「ト」または「ガ」のついた形で、活用語の未然形に接続する。用法については、起こりえる場合を前件で仮定した上でその条件に拘束されずに後件が成立することを表し、「たとえ～したとしても」の意であるとしている。また、「ヨウトモ」は「ウ」「ヨウ」に接続助詞「トモ」がついている形とされている。

『現代日本語文法 複文』(2008:153)は、「ヨウト」「ヨウガ」「ヨウトモ」は、従属節の事態が主節の事態に影響を与えない、主節の事態が従属節の事態と関わりなく生起するという意味を表すとしている。また、「ヨウガ」は動詞の否定推量形「マイ」に接続する場合、「マイガ」となる。イ形容詞に接続する場合、「ヨウガ」「ヨウト」「ヨウトモ」は「カロウカ」「カロウト」「カロウトモ」、ナ形容詞語幹・名詞に接続する場合は「デアロウガ」「デアロウトモ」となる。

本節では、「トモ・ドモ」、「ヨウト(モ)」、「ヨウガ」、「デアロウガ」、「デアロウト(モ)」、そして「ヨウトモ」の関連形式「ヨウニモ」、「デアロウガ」、「デアロウト」の関連形式「デアレ」を取り上げて考察してみる。

### 5.2 先行研究の検証

藤田(2008:14)によれば、「ヨウト/ヨウガ」文では、前件として仮定的な事柄を導いて、以下の後件に逆接的に続ける形式となるのが一般的であるが、形式上の基本用法は以下のようにまとめられるとしている。

- i 不定語(誰・何・どう等)を含む節を導いて用いられる。
- ii 対比になる内容を示す節を導いて対比的に用いられる(「ヨウト～マイト」「ヨウガ～ナカロウガ」)。
- iii 排他的に相並ぶ内容を示す節を導いて、列記的に用いられる(「ヨウト～ヨウト」「ヨウガ～ヨウガ」)。
- iv 一つの事柄を取り上げる節を導いて用いられる。(藤田 2008:15)

このことから、前件は、仮定条件を導く形式であるので、基本的には前件では既定事態を表せない。したがって、「トモ」と「テモ」が互換可能かどうかを考察する場合、仮定条件の限定する

ことも念頭に置かなくてはならないだろう。この他にも、「ウ・ヨウ」に対する否定の形である「マイ」もあり、「ヨウガ/ヨウト」は「ヨウトモ」の形もある。ただし、「ヨウトモ」の場合、ii、iiiが不自然になる。

藤田(2008)では、「ヨウト/ヨウガ」は前件に拘束されず後件が成立することを表しているが、その内容は以下のように二つに分けられるとしている。

- a) 仮に前件 A のような事柄があっても、それに拘束されないということを述べる後件 B を導く。
- b) 前件 A に拘束されることなく、後件 B のようなことがあるという関係を述べる、とは指摘している。(藤田 2008:16)

また、前田(2009:230)は、「ヨウト」は「テモ」と同様、後件を引き起こす筈の前件が後件を引き起こさない、という関係を示していると述べている。前件は、未実現の場合もあるので、「ヨウト」も逆条件を表す接続辞の一つであるといえる。「～シヨウト～シヨウト」「～シヨウト～シマイト」といった並列された用法や、前節に不定語を伴った不特定の表現「ドンナニ～シヨウト」などがある点も、「テモ」と共通しているが、「ヨウト」には、非仮定的用法、評価的用法や、後置詞的用法・接続詞的用法はなく、逆条件を表すことに特化した接続辞であるといえる、と指摘している。「ヨウガ」について、前田(2009:230)は、「ヨウガ」は、並列的な条件において使用されるものである。「ヨウガ」は、単独で使われることはほとんどなく、「A ショウガ B ショウガ」という形で、並列的な関係を持つ事柄を並べたり、「A ショウガ A' ショウガ」と、意味上相反する事柄を比べたり、「A ショウガ A シナカロウガ」と打消しと比べたりするなど、二つ以上の事柄を並べて、どちらの場合でも後件が成立しないということを表現し、結局は「何が起こっても・絶対に」といった副詞的な意味合いを持っている、とされている。前田(2009:229)によれば、「ヨウトモ」は逆条件を表す接続辞であり、仮定的用法・非仮定的用法がある。また、「テモ」同様、前節に不定語を含む場合もある。しかし、許可・許容を表す評価的用法や、後置詞的用法も見られない。「テモ」と較べて使用範囲は狭く、用例数も圧倒的に少ないとある。

本研究は、藤田(2008)の分類に基づき、前田(2009)を参照し、「V ウ・ヨウト」「V ウ・ヨウガ」を中心に、先行研究の検証を行う。

### 5.2.1 不定語との共起

ここではまず、不定詞と共起している例を見ていく。

- 1) まわりの人に何と言われ**ヨウガ**、そんなことを気にする必要はない。
- 2) みんなが入る浴場だから、だれか**入ロウト**、相手の邪魔をしに入るわけではなく、まして失礼でもない。
- 3) 彼もまたどんなに馬鹿にされ**ヨウト**、腹を立てるではなく…。(『日本語表現文型』)
- 4) 彼女との間にいかなる関係が**アロウト**、それは山代大五においてはなにもないのと同じことである。(前田 2009,229:『崖』)
- 5) 何事が**アロウトモ**、兄弟わかれわかれになるなど…。

6) それは虹のように、人々がそこに何色の色を見ヨウトモ、本来連続した帯でしかない。

(『日本語表現文型』)

例 1)~6)から、「V ウ・ヨウト/V ウ・ヨウガ/V ウ・ヨウトモ」は従属節の事態が主節の事態に影響を与えないことがわかる。このことについて、『現代日本語文法』(2008)では、「V ウ・ヨウト/V ウ・ヨウガ/V ウ・ヨウトモ」における主節の事態が従属節の事態と関わりなく生起するという意味を表すと、指摘されている。

ここで、「V ウ・ヨウトモ」と「V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウガ」の違いを見てみよう。例 5)、6)では、「兄弟別れ別れになるなど… (よくない)」、「虹のようなものは本来連続した帯でしかない」ということは、前件がなくても成立する事実や道理である。つまり、前件を経由しなくても、後件が成立する。これに対し、例 1)、2)、3)、4)は前件を経由して後件に到達する過程が見られる。つまり、「V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウガ」は、前件の発生を仮定し、後件が変わらないことを示している。「V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウガ」が不定語と共起する場合は、前件 ID の拡張を示している。「V ウ・ヨウトモ」と不定語の共起は、条件付けの無効を表しているのに対し、「V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウガ」と不定語の共起は、条件の無視と見なされる。この点では、「テモ」文と類似している。例 1)~6)を見てもわかるように、後件は、前件を受けても変わらないことを示している。

また、不定語と共起する場合は、「V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウガ」、「V ウ・ヨウトモ」には、互換性が見られる。

7) 誰に頼まれヨウガ・ヨウト・ヨウトモ、お引き受けできません。

8) どんなに忙しカロウト・忙しカロウガ、趣味のゴルフをやめるつもりはない。

9) 私が何をしヨウト・しヨウガ、父は決して叱らなかった。

10) お金さえあれば、誰が反対しヨウト・反対しヨウガ、私は旅出ていただろう。

(『現代日本語文法』2008:153)

11) だれが来ヨウト (ガ)、中に入れるわけにはいかない。

12) 他人が何と言オウガ (ト)、これは紛れもない一つの真実だ。

13) その人は何を言オウトモ選ぶのはあなたです。

14) 私が何と言オウト (ガ)、あの男は耳を貸さないだろう。

(藤田 2008:24)

例 7)~例 14)では、「V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウガ」と「V ウ・ヨウトモ」の互換が頻繁に表れているが、それぞれのスキーマを以下のようにまとめて説明する。

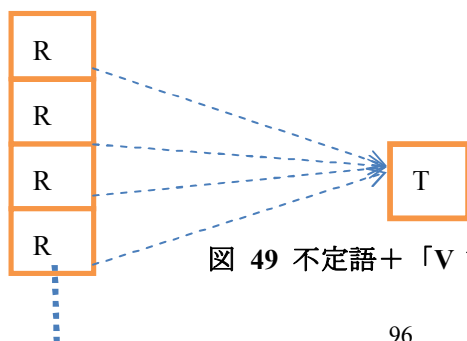


図 49 不定語+「V ウ・ヨウガ」のスキーマ

図 49 は、不定語+「V ウ・ヨウガ」のスキーマを示している。R は T とともに独立性の高い節で、「V ウ・ヨウ」によって提示された前件 R は、仮定事態と見なされる。そして、前件の仮定事態に関わらず、後件 T が成立する。

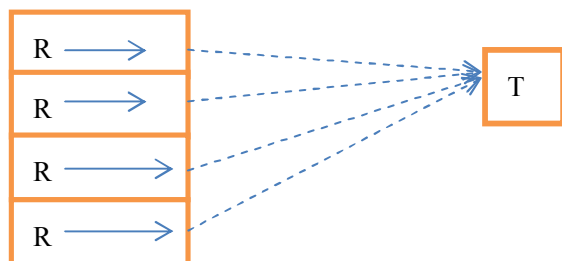


図 50 不定語+「V ウ・ヨウト」のスキーマ

図 50 は不定語+「V ウ・ヨウト」のスキーマである。R から継起的な事態が発生するはずであるが、T は R と関わらず成立する。「V ウ・ヨウガ」が R と T の対立を強調しているのに対し、「V ウ・ヨウト」は、〈実行〉と〈非目的達成〉を示している。また、不定語+「V ウ・ヨウトモ」の場合は、前掲図 39 を用いて説明できる。

図 39 で示したように、不定語+「V ウ・ヨウトモ」文では、「モ」によって、逆条件のメンバーが暗示され、R の ID も無限大に拡張される。したがって、T の成立が無条件となる。

以上のように、不定語+「V ウ・ヨウガ」、「V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウトモ」は後件成立の必然性を示している。基本的に 3 者の用法は同じであり、いずれも「前件でいかなる条件を取り上げようとも、後件で表す話者の考え、現実などは変わらないことを表す」という「テモ」系構文の根底的な特徴を有している。

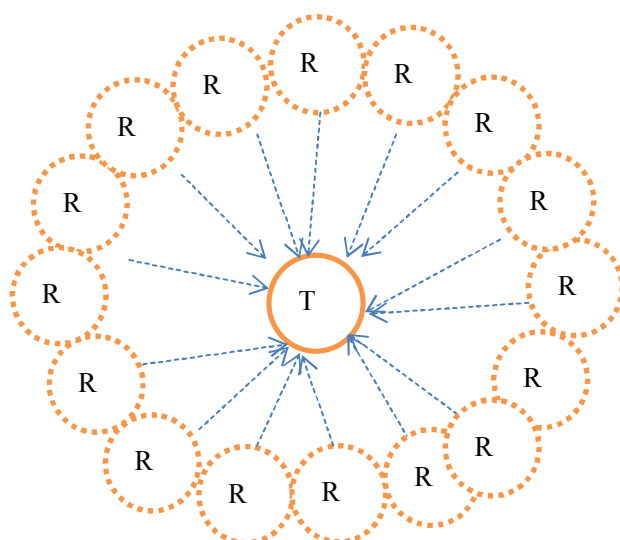


図 39 〈無条件例証〉の「ニシテモ」(再掲)

### 5.2.2 反復用法

『現代日本語文法』(2008)によれば、「V ウ・ヨウト」「V ウ・ヨウガ」は単独で用いられるより、複数の条件を並べる並列用法として用いられ場合が多く、更に疑問語と共起する用法もある

のに対し、「Vウ・ヨウトモ」には並列用法はない、と付け加えている。従属節と主節の主体が同じ場合は、疑問語とも共起しにくいともある。前掲藤田(2008)、前田(2009)でも反復用法が考察されている。以下、例を挙げながら、検証を試みる。

### 5.2.2.1 「Vウ・ヨウガ～Vウ・ヨウガ」と「Vウ・ヨウト～Vウ・ヨウト」

動詞の意向形（意志形）（例「鳴こう」）、形容詞の未来形（例「高かろう」）を組み合わせる形式である。例文を見られたい。

- 15) これが陸上で聞く話しなら、それこそヌエが鳴**コウガ**人喰い土人がタイコを叩**コウガ**、知ったことではないのだが、初航海でいくらかも日が経たないうちに聞くどんな話でも、ずっと微妙に変形し、幼い頃に読んだ冒険小説のかもしれない幻想のように不思議な生々しさをもたってくるものだ。 (前田 2009,232:『どくとくマンボウ航海記』)
- 16) 夜中に、脈が早くなると、町子が起き上がり、冬**デアロウガ**、雨の日**ダロウガ**雨戸を開ける。 (前田 2009,232:『夫婦の情景』)

名詞後接の場合は、16)のように、「～デアロウガ～デアロウガ」のようになる。

- 17) 僕は、学校で何点と**ロウガ**、いつ帰ってこ**ヨウガ**、帰ってからだれとどこで何をし**ヨウガ**、だれも何もかまってくれない生活に慣れ、少しさびしいながらも、その自由さが自分には住み心地が良いのだと思い始めていた。 (前田 2009,232:『贈る言葉』)
- 18) 意志のない人形と言ワレ**ヨウト**、肉欲の虜ト言ワレ**ヨウト**、浩之の求めるままの女でいたいと思う。 (前田 2009,231:『午後の恋人』)

例 15)～17)は「Vウ・ヨウガ」が反復して用いられている例で、例 19)は「Vウ・ヨウト」が反復して用いられている例である。「Vウ・ヨウガ～Vウ・ヨウガ」の反復表現で例示のみが行われる場合、前件と後件は条件付けが観察されなく、ただ同じ結果に導かれる点では一致している。例 18)「Vウ・ヨウト～Vウ・ヨウト」の反復表現では、「前件で列挙された逆条件を無視する」話者の意志が読み取れる。

次に、「デアロウト」と「デアロウガ」の反復用法を取り上げ、「Vウ・ヨウト」と「Vウ・ヨウガ」が互換可能である例を見る。

- 19) ここでは、物理学**デアロウガ**（ト）、植物学**デアロウガ**（ト）、先行の領域は問われない。 (藤田 2008: 24)
- 20) 三味線弾きは義大夫**デアロウト**（ガ）長唄**デアロウト**（ガ）芸人という風に明治時代には思われていたようですが… (『現代日本語文法』2008:153)

先行研究で挙げられた例 19)、20)では、「Vウ・ヨウト」「Vウ・ヨウガ」と「デアロウト」「デアロウガ」は、接続形式が異なるが、機能的としては、共通していることがわかる。

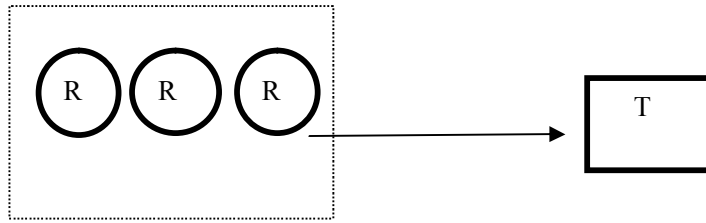


図 51 列挙条件の場合

図 51 で示したように、列挙された R は、いずれも同じ結果 T を指している。ここでは〈逆条件〉の特徴が見られないのも、特徴の一つである。

### 5.2.2.2 「V ウ・ヨウガ～ナカロウガ」「V ウ・ヨウト～マイト」「A カロウト～A カロウト」

21)～25)では、「V ウ・ヨウガ」「V ウ・ヨウト」の〈対比になる内容を示す節を導いて対比的に用いた例が見られる。

- 21) ちょっとこんな事を書くと陸の人々はすぐ船員と女という概念を連想するようなのだが、ここで少しく彼らに代わって弁じておこう。大体がどこにでもスキモノはいるのであって、そういう者は陸にイヨウガ土中にモグロウガ、やはり同じことに違いない。

(前田 2009,231: 『どくとくマンボウ航海記』)

- 22) 苑子は、特に反対した訳でもなかった。先方に合わせて、まずまずの慎ましい結婚式も協力的にやった。社宅住いをするのだから、若夫婦の生活は簡素なものだし、賢次郎は、なんら、物質的な要求をするわけでもなかった。嫁は二十一歳だから、行き届いていヨウガナカロウガ、たかが知れている。

- 23) 「しょうがないって言オウガ、言わナカロウガ、俺のものは俺のものだ。お前が勝手にやったものは返してもらえ！」

(前田 2009,231: 『夫婦の情景』)

- 24) 第一、今の明子について言えば、ロベール・フィリップが来日シヨウトシマイト、自分の生活には、まるで、かかわり合いがないのであるから、知らなくても別段、どうということでもなかった。

(前田 2009,231: 『午後恋人』)

- 25) 「なかなかいい画廊ですよ」「ほう」山代は大きく吐息した。良カロウト悪カロウト、その自分の店であるという画廊にいささかの実感もなかった。

(前田 2009,231: 『崖』)

上記の例にある「V ウ・ヨウト」「V ウ・ヨウガ」の反復用法に接続する成分を見ると、いずれも対比関係になっていることがわかる。対比になる内容を示す節を導いて対比的に用いられる場合には、既に前田(2009)で述べているように「A ショウガ A' ショウガ」と、意味上相反する事柄を比べたり、「A ショウガ A シナカロウガ」と打消しと比べたりするなど、二つ以上の事柄を並べて、どちらの場合でも後件が成立しないということを表現し、結局は「何が起こっても・絶対に」といった副詞的な意味合いを持っている、ということが示されている。この点において、「V ウ・ヨウガ」「V ウ・ヨウト」には、大きな区別はないようである。



26) 私が行コウト行くマイト・行コウガ行くマイガ、君には関係ないだろう。

(『現代日本語文法』2008:153)

27) 時間がアロウト (ガ) ナカロウト (ガ)、問題はない。

(藤田 2008:25)

28) それを「発展的」と名づけヨウガ (ト) 名づけマイガ (ト)、要するに党解体を覚悟していることでもある。

(『現代日本語文法』2008:153)

例 26)~28)のように、「V ウ・ヨウト~マイト」と「V ウ・ヨウガ~マイガ」、「V ウ・ヨウガ~ナカロウガ」とは互換できる。

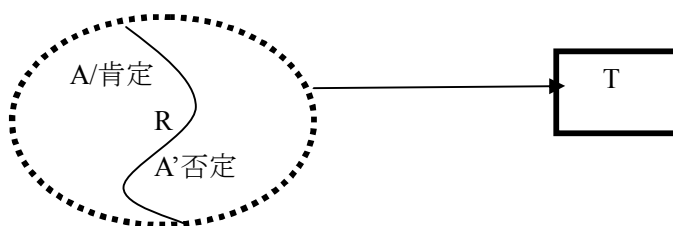


図 52 肯定・否定反復条件の場合

図 52 のように、R の ID は、対比対立した R の列挙で、無限に拡張される。したがって、T の成立が必然的と見なされる。また、〈逆条件〉の意味合いも読み取れない。これも、〈無条件〉と類似している。

### 5.2.3 非不定語・反復用法の場合

以下、不定語と共起する場合と反復以外の使い方を検証する。

#### 5.2.3.1 「V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウガ」、「V ウ・ヨウトモ」の単独使用

まず、反復せず、単独で用いられる「V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウガ」、「V ウ・ヨウトモ」の用法を挙げる。

29) 「大体、あんたは佐伯家の長男じゃないの。あんたがちゃんとお父さんの後を継いで、会社を背負って立っていれば、あたしが離婚シヨウト、誰からもなにも言われなくて済む筈じゃないの。進一郎からだって、馬鹿にされなかったわ！」 (前田 2009,230:『午後の恋人』)

30) 「じゃ、ありがたくもらってくわね。ほんとにありがとう」これが「プラスチックのカット・グラス」デアロウト、姉は同じように喜んで見せるだろう、と春子は考えていた。

(前田 2009,230:『夫婦の情景』)

例 29)では、前件では仮説が見られ、後件「離婚しても誰からも何も言われなくて済む筈」は話者の判断である。また、例 30)の前件は反事実仮想となる。例 29)、30)では、前件の条件を変えても、後件が変わらないという主観が表される点で、単独で用いられる「V ウ・ヨウト」は「テモ」系の典型的な特徴を有しているといえる。

31) 夏海が土下座シヨウガ、許すつもりはなかった。

32) 今回の事件は、金田一さんが捜査シヨウト、謎ときは不可能だね。 (藤田 2008:25)

例 31)、32)では、「土下座」と「許す」、「金田一さんの捜査」と「謎解き」には、因果関係が含まれている。つまり、「(夏海が) 土下座」したら「(夏海は) 許される」、「金田一さんが捜査」したら、「謎解き」が可能という推論が含まれている。しかし、推論と逆関係となる結果が成立すると、話者が表出している。これは、典型的な〈逆条件〉と見なされる。

33) 私が離婚シヨウト・シヨウガ・シヨウトモ、友達はだれも気にしない。

(『現代日本語文法』 2008:153)

例 33)では、「V ウ・ヨウト」「V ウ・ヨウガ」「V ウ・ヨウトモ」が互換可能である。前件は仮説であるが、例 28)とほぼ同じ前件を取っている。「V ウ・ヨウト」「ヨウガ」が用いられると、前件（ここでは「私が離婚すること」を指す）確実に発生することを仮定し、その結果引き起こされること（ここでは「友達は誰も気にしない」）を導く。「V ウ・ヨウトモ」を用いると、前件には〈極端事態〉が挙げられ、前件が実際に発生するかどうかは不問である。極端事態の場合でも、今と大した変りがない、という結果が得られる。

### 5.2.3.2 「タトエ」による一般条件の提題化

さらに、「V ウ・ヨウガ」「V ウ・ヨウト」「V ウ・ヨウトモ」と「タトエ」が共起している例も藤田(2008)で挙げられている。

34) 私は、たとえ時間がカカロウト (ガ)、必ずその絵を手に入れるつもりだ。

35) たとえあなたが遊びに行コウト (ガ)、それを非難する人はおりません。 (藤田 2008:24)

藤田(2008)は、例 34)、35)では、「タトエ」がないと、座りが悪く見られるとしている。藤田(2008)ではすでに指摘されているが、「テモ」と言い換えると、「タトエ」がなくても構わない。「V ウ・ヨウガ」「V ウ・ヨウト」には、一般条件が前件に来ないことがわかる。

36) それからもう一つ、患者はたとえ昏睡状態にアロウトモ、彼に付き添っている家族のものがいれば、その家族のモノが当人に代わって、その欄の空白を埋める筈であった。

(前田 2009,229: 『崖』)

37) たとえ偽物デアロウトモ、君が勧めるなら買っただろう。(前田 2009,229: 『午後の恋人』)

例 36)、37)は「タトエ」を取り除いても文が成立する。したがって、「トモ」と比べて、「V ウ・ヨウガ」「V ウ・ヨウト」は、逆条件や無条件さらに、反復条件のほか、同類条件の提示に用いられる可能性が低いと考えられる。

### 5.2.3.3 「Vナクトモ」「Vズトモ」

上に挙げた他にも「Vナクトモ」、「Vズトモ」の例も以下に挙げる。これらは〈条件の撤去〉と考えられる。

38) 気分的にも、つましく暮らさねばという意識があったし、実際、二、三年、服を新調シナクトモ、取り立てて不自由をしないほど、洋服箆筒の中には、豊かでもあった。

(前田 2009,229: 『午後の恋人』)

39) お料理や裁縫を習うこと自体は、面白クナクトモ、仕方がないかもしれない。でもそれが何故、女子だけなの。

(前田 2009,229: 『贈る言葉』)

40) 山代大五において、失われた三年間の向こうにある時間が、どのぐらいの遠さで思い出されるか、これは高崎ナラズトモ、機会あるごとに探りを入れてみたい問題である。山代大五が失っている三年間の過去というものは、一体どんな形をしているのか。

(前田 2009,229: 『崖』)

41) 「毎日毎日、そのモノばかり見過ぎましたがな」太田ミキに言われると、南美子もなんだかそんな気がした。なんの名所も見ナクトモ、この祝福の微笑をたたえているとしか感じられない、澄んだ陽と風は、どこにいても人間に抱きついて来るのだった。

(前田 2009,229: 『夫婦の情景』)

例 38)~41)では、「Vナクトモ」「Vズトモ」が見られるが、実際は、前件のVが成立しても、成立しなくても、後件が変わらず成立することを表している。「Vナクトモ」「Vズトモ」文では、条件が撤去されても、後件の結果が成立することで、これは、「テモ」文の〈条件の撤去〉と共通している。例 38)~41)は仮定条件で、例 42)は非仮定用法である。

42) 富士が見エナクトモ、湖の風景は十分に美しかった。 (前田 2009,229: 『午後の恋人』)

例 42)では、「山中湖 (ここでの〈湖〉は山中湖のことを指す)」のフレームが含まれている。湖に富士山が映し出され、湖はよりいっそう美しくなる。話者の体験では、富士が見えなかった。それでも湖がきれいだと思っている。したがって、前件では条件の撤去が見られる。それでも後件が成立する。例 41)は、〈逆条件〉の多様性を示している。例 42)では、「ソレデナクテモ」という接続語句は挿入語句の形で表れている。

43) 「どうする、明子さん…」店内に人が少ないのをみて、源太郎が声をひそめた。「信吉君は、ソレデナクトモ、明子さんと復縁したがっているのだろう。もしも、赤ちゃんが他人の子なら、あんた方は別れる必要なかったんだ」 (前田 2009,229: 『午後の恋人』)

例 43)は、意味上は例 37)~40)と類似している。肯定の場合も、否定の場合も、同じ結果に導かれている。さらに、例 44)のように、「少ナクトモ」の形式で、後件の存在を提示する文例がある。

- 44) 長富禄郎は、まじめな、あまり笑わない青年であった。眼鏡をかけて、中肉中背で、清潔な感じでした。少ナクトモ、その当時の真弓は、男の「色香」について評価をそのような基準でしか考えられなかったのである。(前田 2009,229:『夫婦の情景』)

#### 5.2.3.4 「Vウ・ヨウニモ」

「Vウ・ヨウトモ」と関連する形式として、「Vウ・ヨウニモV」も挙げられている。45)のように同一動詞を繰り返すほか、例示 46)、無条件 47)の用法が見られる。

- 45) お金がないので、旅行に行コウニモ行けない・行けなかった。  
 46) 頭が痛くて、家事をシヨウニモ立ってもいられない。  
 47) 何をシヨウニモ忙しすぎてやる時間がない。(『現代日本語文法』2008:153)

『現代日本語文法』(2008)によれば、「Vウ・ヨウニモ」は「たくトモ」「ヨウト思ッテモ」と言い換えられ、従属節の意志的な動きを行う希望や意志があるにも関わらず、それができない、あるいはできなかったということを表すとされている。さらに、「ヨウニモ」は疑問語と共起することはできるが、反復を表す用法は現れにくい、とある。例 45)~47)を見てもわかるように、「ヨウニモ」の場合では、意志形がそのまま意志を表し、後件でその不実現が表されている。一般的に、「Vウ・ヨウニモ~ナイ」という文型で現れる。これらも、〈意志の不実現〉を表している。また、「ヨウニモ」と「ヨウトシテモ」の後件を比べてみると、前者のほうの後件が否定表現に限られているのに対し、後件には、不実現だけ示す表現あれば成立する。

- 48) 太ってしまったとき、急激なダイエットや矯正下着でごまかソウトシテモ、それは一時のことです。(『現代思想の遭難者たち』)(再掲)

例 48) (再掲) のように、後件は否定表現(「ナイ」)が表れてないことから、「Vウ・ヨウニモ」と言い換えると、文が不自然に感じられる。以上の分析から、「Vウ・ヨウト」「Vウ・ヨウガ」と関連形式の前後件関係を図 53 のように示す。

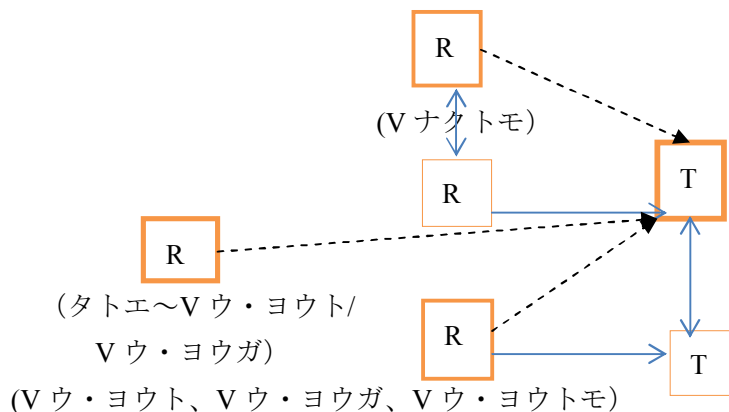


図 53 「ヨウト」「ヨウガ」と関連形式の前後件関係

図 53 で示したように、「V ウ・ヨウガ」「V ウ・ヨウト」と関連形式の使用は〈逆条件〉のほか、普通の条件例示も挙げられる。〈逆条件〉はさらに、対立する結果を指向する条件と V ナクトモのような、順接条件の否定形式に分けられる。一般条件を例示する場合には、「V ウ・ヨウト」「V ウ・ヨウガ」は、「タトエ」と共起しないと不自然に見受けられる。また、不定語と共起する場合と反復用法では、ほぼ無条件と見なされるが、後件の成立が必然的だと考えられる。

### 5.3 実例による考察

BCCWJ『中納言』の中で、「トモ・ドモ」で総計 5097 件の文例が得られた。「ことも」、「それとも」、「二人とも」を除外し、「トモ・ドモ」の主な形式として、「ナクトモ」と「V ウ・ヨウトモ」が多数見られた。また、「V ウ・ヨウト」の使用が多く観察される。それに次いで、「デアレ」、「デアロウガ」、「デアロウト」の文例も数多く見られる。

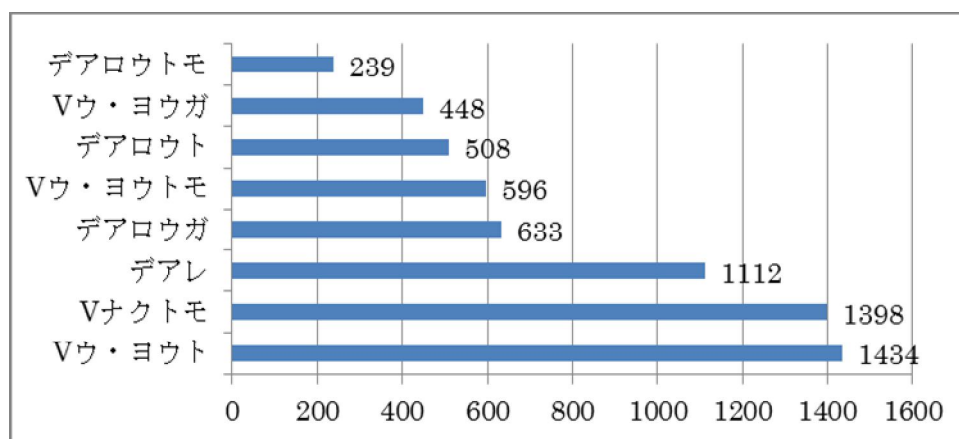


図 54 「トモ」 関連形式の使用調査

#### 5.3.1 反復表現

反復表現として、「V ウ・ヨウト～V ウ・ヨウト」、「V ウ・ヨウガ～V ウ・ヨウガ」、「デアロウト～デアロウト」、「デアロウガ～デアロウガ」、「デアレ～デアレ」が挙げられる。また、肯定・否定の反復として、「V ウ・ヨウト～マイト」、「V ウ・ヨウガ～マイガ」、「V ウ・ヨウガ～V ナカロウガ」などの形式が挙げられる。以下、前者を並列反復と言い、後者を肯定・否定反復と言う。

並列反復の場合では、「V ウ・ヨウト～V ウ・ヨウト（デアロウト～デアロウト）」、「V ウ・ヨウガ～V ウ・ヨウガ（デアロウガ～デアロウガ）」、「デアレ～デアレ」は、同じく、逆条件の並列も表されるし、ただの同類（同じ結果を導く）の並列も表される。

##### 5.3.1.1 逆条件の並列

逆条件並列の場合では、後件では、話者の意志性が強く窺われる。

49) 実家の奴等に笑ワレヨウト、彼女に内兜を見透サレヨウト、出かけて行って平詫りに詫ま  
って、姉や兄貴にも口添えを頼んで、「後生一生のお願いだから帰っておくれ」と、百万遍  
も繰り返す。 (『痴人の愛』)

「笑われる」も「見透される」も、話者の「お詫び」行為にとって不利条件と見なされるが、それがあっても話者は絶対「お詫び」を実行する、という話者の決意が観察される。

- 50) 「砂おとし? ああ、いいでしょう……」男は気がなさそうに、いまさら、そんなことが、おれになんの関係があるというのだ……梁が腐ロウト、棟が折レヨウト、こちらになんの関係もありはしない。 (『砂の女』)

「梁が腐る」も「棟が折れる」も、話題「家屋の補修」にとって極端的な事態だと考えられる。話者は極端事態を挙げて、後件の心境「こちらと関係ない」を際立たせている。

- 51) 信仰を禁ジラレヨウガ、潰サレヨウガ、本当の宗教ならば、必ずそれを機に、却って盛んになりませんか。 (『神の微笑』)

「信仰を禁じられる」も「潰される」も、「もうそれでおしまいだ」という予想(常識による推論)されるが、それと反して、話者は「却って盛んになりませんか」と認識している。逆条件の並列に、「タトエ」や不定語と共に起る例も多くある。

- 52) 朝飯の後、丑松は机に向って進退伺を書いた。その時一生の戒を思出した。あの父の言葉を思出した。「たとえいかなる目を見ヨウト、いかなる人に邂逅オウト、決してそれと自白けるな、一旦の憤怒悲哀にこの戒を忘れたら、その時こそ社会から捨てられたものと思え」こう父は教えたのであった。 (『破戒』)

例 52)では、「目を見る」と「人と邂逅する」は「いかなる」によって極端化された。また、極端条件が「タトエ」と「Vウ・ヨウト～Vウ・ヨウト」によって例示され、後件「決してそれと自白けるな」という強い主張が際立たされる。後件結果の成立は、無条件と見なされる。

先行研究ですでに指摘されているように、「Vウ・ヨウトモ」は反復用法に用いられにくいとされているが、以下のような実例も見られる。

- 53) 流れの両側の土手が雪に覆ワレテイヨウトモ、冬の枯れ草のままにナッテイヨウトモ、ここだけは春になったことがだれにも認められる。 (『定年後・八ヶ岳いなか暮らし』)
- 54) 彼等のために開放すべき座敷は開放するように、区別してあるから、隠れん坊をシヨウトモ、鬼ごっこをシヨウトモ、「ここはどこの細道じゃ」をシヨウトモ、あてがわれた座敷以外にハミ出さないことには、あえて干渉を加えないことになっているから心配はない。 (『大菩薩峠』)

例 53)、54)では、前件では逆条件の並列が見られるが、それにもかかわらず後件が成立している。逆条件の並列を表す「Vウ・ヨウト」「Vウ・ヨウガ」文には、後件に話者の意志が強く表されていることが特徴だと考えられる。

### 5.3.1.2 同類条件の並列

実例を見ると、逆条件は少数を占めていることがわかるが、多くの例において、前件は同じ結果を導く同類が示されている。

- 55) さわの小唄の会が三越劇場で行ナワレヨウト、大舞台の演舞場で行ナワレヨウガ、井熊はただの一度も顔を見せようとしな。 (『たそがれ迷子』)

例 55)では、「V ウ・ヨウト～V ウ・ヨウガ」の形式が見られる。前件条件はどのように変換しても、後件結果が変わらない。つまり、「さわの小唄の会」はどこで行われても、「井熊は一度も顔見せようとしな」という結果が変わらないことを表している。

さらに「V ウ・ヨウガ～V ウ・ヨウガ」の形式には、「V ウ・ヨウガ何シヨウガ」のような形も観察される。

- 56) 弱肉強食の世界だからこそ、侵略シヨウガ何シヨウガ「勝てば官軍」なのである。 (『逆説の日本史』)

例 56)では、「侵略する」は、後件を実現するための手段の一つだと考えられる。また、「何シヨウガ」により、いわば「勝つための手段」がまだまだあるということが暗示されている。要するに、後件「勝てば官軍」という結果は、前件で表す勝つための手段に関わらず常に成立している。

### 5.3.1.3 同類の並列

同類の並列を示す反復文では、後件は話者自身の考えではなく、常に成立する事実を示しているのが特徴だと考えられる。「V ウ・ヨウト」「V ウ・ヨウガ」と同じ働きを示す形として、「デアロウト」「デアロウガ」の反復表現が挙げられる。

- 57) 名目は勾引デアロウト任意出頭デアロウト、事実上彼は逮捕されていた。逮捕とは何か。  
それを彼は身にしみて味わっていた。もはやここから勝手に出ることもできないし、学校へ行くこともできない。 (『青春の蹉跎』)
- 58) 男女問題は、知能指数が一〇〇デアロウガ二〇〇デアロウガ、それとは関係なく起きることなのです。 (『幸福の法』)

例 57)、58)では、波線の部分は結果を示している。「デアロウト」「デアロウガ」は「A も B も～」に言い換えることができることから、「並列」の機能を持っていることがわかる。例 57)では、「名目はとにかく、事実上かれは逮捕されていた」という結果に導かれる。例 58)では、「男女問題は知能指数と関係ない」という結果が導かれる。「デアロウト」「デアロウガ」に似た形式として、「ダロウト～ダロウト」「ダロウト何ダロウト」「ダロウガ～ダロウガ」「ダロウガ何ダロウガ」が挙げられる。形式の違い以外で、伝達機能は「デアロウト」「デアロウガ」と同じである。

59) 読経し、説教をしてそこに存在していれば、それは信明ダロウト静信ダロウト、他の誰ダロウト構わなかったのだ。(『屍鬼』)

60) 最近はほとんどの人が携帯電話をもっているので、たとえ夜中ダロウガ朝ダロウガ外出中ダロウガ、連絡をとろうと思えばいつでもとれる。

(『社会人なんだからこれだけは知らねば!』)

例 59)では、「ダロウトダロウト何ダロウト」の反復が現れている。「AもBも誰も」みんなにとって、「読経し説教をしてそこに存在する」という後件の適格性がある。つまり、結果成立は、無条件となる。例 60)では、「ダロウガ」が三回も反復して現れている。反復用法について、「ダロウガ」「ダロウト」よりも多くみられる。列挙された事態「夜中」「朝」「外出中」のほか、取り上げられる条件がまだあると予測され、話者の考えは、「連絡を取ろうと思えばいつでもとれる」である。「いつでもとれる」ならば、列挙された時間帯全てに適用できる。「ヨウト」「ヨウガ」にも、三回反復している実例があるが、例 60)と構造は同じであるので、例は省略する。「Vウ・ヨウトモ」には、反復させ、同類条件を示す文例が見られなかった。そのため、「Vウ・ヨウトモ」は、逆条件や無条件以外は表せないと考えられる。

つぎに、「デアレ」の反復用法の例を見てほしい。

61) 大言壮語とは違い、黒人の自画自賛は、自分の評価を高める目的でなされる真剣な活動である。したがって、それが自分の能力に関するものデアレ、所有している物や社会的地位に関するものデアレ、自画自賛は実証される必要がある。(『即興の文化』)

61)では、前件には二つの事態が挙げられているが、それに止まらなく、要するに「自画自賛は実証される必要がある」という結果が導かれる。「デアレ～デアレ」文は、「AもBも～」という形式と最も類似している文型と考えられる。ただし、「AもBも～」はただ同類のIDを示しているのに対し、「デアレ～デアレ」は、無条件を表すところに違いがみられる。この点で、前掲した反復表現も類似している。並列反復の場合で、〈逆条件〉が並列すると、話者は「その逆条件を無視し、結果成立を主張する」傾向を示している。〈同類条件〉が並列すると、話者は「前件とはかかわりなく、結果が成立する」ということを示している。ただの「同類」を示す「デアレ～デアレ」文では、前件が後件成立を例示する機能を持っている。

#### 5.3.1.4 肯定・否定反復および対比反復

「ヨウト」「ヨウガ」には、「ヨウト～マイト」「ヨウトナカロウト」「ヨウガマイガ」「ヨウガナカロウガ」といった形式がある。「デアロウト」「デアロウガ」には、「デアロウト～デナカロウト」「デアロウガ～デナカロウガ」の形式も見られる。「デアレ」には、肯定・否定の反復例は見られなかった。

62) しかし、流通範囲が限ラレテイヨウトイマイト、やはり新しく発行される貨幣には信用がなければならない。(『ニッポンの創業者』)



63) 鈴木総理が出ヨウガ出マイガ、それは関係ないことですね。そんなことで解決するような問題じゃないです。  
(『国会議事録』)

例 62)、63)では、「流通範囲が限られる」「鈴木総理が出る」という前件は、後件成立と関係ないことだと判断されている。つまり、「新しく発行される貨幣には信用がなければならない」と「解決できない問題」は、前件と関係なく成立する。

64) ですから、海外に進出シヨウトナカロウト、遅かれ早かれ、人気は落ちていくのは理の当然です。  
(『Yahoo! 知恵袋』)

65) とにかく刈谷に知ラレヨウガ知ラレナカロウガ、事実はれっきとしてあるのです。  
(『この悲しみの世に』)

例 64)、65)では、「海外進出」「刈谷に知られる」ことは、後件成立へ影響が及ばないと話者が判断している。例 62)~65)では、元来、前件は問題解決の有利条件と見なされるが、話者の判断により、有利条件が無効とされ、前件から後件への影響も否定されている。逆条件の並列には、逆条件を無視する、あるいは前件不問・例示の形で後件が成立するが、「Vウ・ヨウト」「Vウ・ヨウガ」の肯定・否定並列の場合では、前件と後件の関係さえも否定される。

66) こじつけデアロウトナカロウト、わたしはそう信じた。  
(『わたし革命』)

67) 手荷物の中はX線検査ですので金属製品デアロウガナカロウガ形として見られますので不審な形と思われたら調べられるケースもあります。  
(『Yahoo! 知恵袋』)

例 66)、67)の前件では、判定形式(「デアレ」)が見られる。「こじつけ」や「金属製品」のいかんによらず、後件が成立している。前掲した例と類似し、前件で取り上げている事物は、後件成立へは影響が及ばない、ということが示されている。肯定・否定の反復以外にも、語義上対立している語が、前件と後件に用いられている実例もある。

68) 一方、正デアロウト負デアロウト、強い生理的喚起が生じると、人の注意の範囲が狭められ、広告などの情報が排除されてしまい、広告認知が抑制されると考えられる。  
(『新広告心理』)

69) 女デアロウガ、男デアロウガ、門番として職務訊問をするのは当然なことだ。  
(『武田信玄』)

上掲の例では、「正⇔負」、「男⇔女」のように、語義上対立する語が、前件と後件に用いられているが、それに関わらず後件が成立している、という主観が読み取れる。対比の反復は、同類条件反復の「デアロウト」「デアロウガ」の用法と一致している。また、「デアレ」の対比反復も、「デアレ」の同類反復の用法の一種に見られる。

70) 加害者**デアレ**、被害者**デアレ**、「子どもを守りたかった」その母親たちの自責の日々を思うと、外に向かつて発言できる言葉など私には、思いつくことすらままならない。

(『働く女は敵ばかり』)

71) こんなとき、成文法**デアレ**不文律**デアレ**、あらゆる場合に適用できる全般的な、議論の余地のない法律がなければ、両者のあいだに何とも始末に悪い激烈な紛争が起こる。

(『集英社ギャラリー「世界の文学」』)

対比反復用法では、「デアレ」の場合は、同類の並列と類似している。つまり、肯定・否定の反復のように、前件と後件の関係を否定するのではなく、相反関係となっている前件は共に同じ結果を導くことを示している。

以上の分析から、本節のすべての反復表現では、並列されるものが同じ結果を導いていることがわかる。条件が変換しても結果が変わらない、という特徴が明らかになったといえるだろう。

### 5.3.2 不定語との共起

前掲した関連形式は、いずれも不定語と共起する用法がある。共起する不定語も様々で以下に、一つの表現ごとに一例を示す。

72) いくら喧嘩を**ショウト**、周りのおとなさえ公平に扱ってやるようにすれば、外に出ればかばいあい、どちらかがいないときには淋しがる、お互いに必要な存在として育っていくはずです。それがきょうだいがいるということの意味でもあります。

(『ひとりっ子の上手な育て方』)

73) 形式をいかに糊塗**ショウガ**、天皇が大元帥を否定することになるろう。(『聖断』)

74) 結婚というのは、二人の性的結合の形式だ。それだけの事なら、相手が誰**デアロウト**、大した違いはない。しかし人間の場合にはそれから後に、何十年と続く二人の生活がある。それが問題だ。そしてその生活を支えて行く原動力となるものが、二つある。

(『青春の蹉跎』)

75) たとえそこで目的とされているものがどんなにすばらしい善**デアロウガ**、その善という目的、理想のための手段として人間をみているからだ。(『人生の意味と価値』)

76) 父と母とが何を苦しみ、何を悩**ン**デ**イ**ヨ**ウト**モ、その胎児は存分に母体から養分を奪い取って、あくまでも自分勝手に育ってゆく。(『青春の蹉跎』)

77) なにごと**デアレ**、継続してやることは、ひとつの才能であり、大きく伸びていくために絶対に欠かせない要素です。(『ひとりっ子の上手な育て方』)

以上の例文から、不定語と共起する場合、後件の成立が無条件となっていることがわかる。前件は何であっても、いかなる程度となっても、後件が変わらず成立するのが特徴である。「喧嘩する」「形式を糊塗する」「相手」「悩む」「やることの内容」は、後件成立の決め手でもないし、後件成立を左右する要素でもない。

### 5.3.3 「タトエ」との共起

「ヨウト」が用いられる文例では、「タトエ」と共起する件数が多くある。また、「タトエ」と反復表現の共起も見られる。

- 78) たとえその企業が戦前から存在シヨウト、一切が壊滅したに等しい戦争直後は、ある王朝の末期の混乱と無政府的状态に等しくなっている。 (『帝王学』)
- 79) 自分が必要とされてるということであれば、たとえ雑用の類いデアロウト、かけつけて来てくれると思うよ。 (『毎日が日曜日』)
- 80) たとえあなたが反対シヨウトモ、もっと赤裸々な自分のところを見つめてみないことには、何も得られないような気がするの... (『ユカのこころの旅』)

例 78)~80)では、逆条件が前件で取り挙げられている。「企業が戦前から存在しても、戦争直後は無政府状態に等しくなっている」、「雑用の類いでも駆けつけて来てくれる」「あなたが反対しても自分の心を見つめてみる」というように、「モ」に言い換えることができる。例 78)、79)では、「タトエ」を取り除いたら、文の座りが悪くなるが、例 80)の場合は「タトエ」をつけても付けなくても文として自然である。すでに前掲で述べたように、一般条件の場合では、「Vウ・ヨウト」「Vウ・ヨウガ」の単独使用は不自然に見受けられるが、「Vウ・ヨウトモ」は「モ」の同類提示機能により、単独でも用いられる。

- 81) 成果やアイデアを人にとられたくない、盗まれたくないという意識が働く。たとえ上司デアレ、はっきりした結果が出るまで隠していたくなる。 (『部長の難問課長の苦問』)

例 81)では、「上司」は特殊条件あり、ここでは特殊条件の場合でも通用しない、という結論が読み取れる。「デアレ」には、不定語、「タトエ」との共起と反復用法以外、単独で使用する文例が見られなかった。

- 82) 野生の植物の種子は、たとえ水がコヨウガ温度がコヨウガすぐには発芽しない。 (『DNA 考古学』)
- 83) ここは名にし負う遊女の里、たとえ和殿が盗賊デアロウガ落人デアロウガ、妾にはなんのかかわりもないこと。 (『源九郎義経』)

既に例証したように、「ヨウガ」「デアロウガ」の反復表現は、同類条件を提示しているが、「タトエ」と共起する場合、一般条件は特殊化され、前件は後件の逆条件と見なされる。

## 5.4 結語

本節では、「トモ」とその関連形式「Vウ・ヨウト (モ)・デアロウト」「Vウ・ヨウガ・デアロウガ」「デアレ」を考察した。

「Vウ・ヨウト」と「Vウ・ヨウガ」は、単独で用いられる場合、前件が極端条件でないと文の座りが悪くなる。そのため、「タトエ」と共起し、前件条件を特殊化させる必要がある。なお、

「Vウ・ヨウトモ」文では、前件は一般条件であっても文は成り立つ。「ヨウトモ」には、「モ」の同類提示の機能があるからであろう。

「Vウ・ヨウト」と「Vウ・ヨウガ」には、反復して用いられる例が多く見られた。条件を並列し、後件結果の不変化を表す。「Vウ・ヨウト」と「Vウ・ヨウガ」文には、〈逆条件の並列〉、〈一般条件の並列〉、〈対立関係〉が特徴として見られる。ただし、肯定・否定関係の場合は、無条件に近い。

「Vウ・ヨウト」で条件を提示する場合、文全体は、逆接よりも順接に近づく。特に、「デアレ～デアレ」という形式は、意味上「AモBモ～」と似ている。

本節で分析した逆接機能辞とその関連形式は、全て不定語と共起できる。〈指示〉を表す不定語と共起する場合は、無条件であり、〈程度〉を表す不定語と共起する場合は、条件のIDは拡張し、無条件に近くなる。

単独で用いられる特殊な例に、「ヨウニモ」がある。「ヨウニモ」文において、前件には話者の意志が、後件にはその結果が現れ、「ヨウニモ」文には、「～ヨウニモ～ナイ」という慣用的な使われ方をする。そして、「ヨウニモ」の後ろには否定表現しか来れないが、「ヨウトシテモ」はこの限りではない。この点で、「ヨウトシテモ」文とは異なる。

以上のように、「トモ・ドモ」と、その関連形式「Vウ・ヨウト(モ)・デアロウト」「Vウ・ヨウガ・デアロウガ」「ヨウニモ」「デアレ」は、前件で示される条件が変わっても、後件結果が変わらず成立する点で、「テモ」系接続機能辞の典型的な特徴を有している、ということがわかった。

以上の分析を、以下の表9にまとめる。

表 9 「トモ・ドモ」文と関連形式の特徴

| タイプ  |           | 用法           |          | 前件条件の変化       | 後件結果の特徴(主観性)               | 例   |
|------|-----------|--------------|----------|---------------|----------------------------|-----|
| 反復   | 並列反復      | 逆条件並列※1      |          | 無条件と類似        | 結果は前件から影響を受けず成立する(決心、態度明示) | 49) |
|      |           | 同類条件並列※2     |          | 同類条件を示す       | 同じ結果に導かれる                  | 54) |
|      |           | 同類の並列※3      |          | 同類を示す         |                            | 57) |
|      | 肯定・否定反復   | 肯定・否定の対立反復※4 |          | 条件づけが否定される    | 結果成立の必然性を示す                | 62) |
|      |           | 語義の対比反復※5    |          | 同類、または同類条件の並列 |                            | 63) |
| 共起   | 不定語と※6    | 無条件          | 指定関連の不定語 | 条件IDの無限拡張     | 結果の成立が無条件的                 | 76) |
|      |           |              | 程度関連の不定語 |               |                            | 72) |
|      | 「タトエ」と※7  | 単独用法と        |          | 一般条件の特殊化(逆条件) | 結果は前件から影響を受けず成立する          | 78) |
|      |           | 反復用法と        |          | 無条件と類似        | 結果成立が必然的                   | 80) |
| 単独使用 | 肯定        | Vヨウトモ        | 逆条件の提示※8 | 有利条件の無効化      | 結果は前件から影響を受けず成立する          | 28) |
|      |           | Vヨウニモ        | 意志の不実現   | 意志そのままの体現     | 現状の不変化                     | 30) |
|      | 否定(Vナクトモ) | 逆条件の提示       |          | 条件の撤去         | 結果の不変化                     | 44) |
|      |           |              |          |               |                            | 37) |

※1 「Vウ・ヨウト～Vウ・ヨウト」「Vウ・ヨウガ～Vウ・ヨウガ」「Vウ・ヨウトモ～Vウ・ヨウトモ」が用いられる。非逆条件の場合では、「Vウ・ヨウトモ」が用いられない。

※2 「Vウ・ヨウト～Vウ・ヨウト」「Vウ・ヨウガ～Vウ・ヨウガ」が用いられる。

※3 「デアロウト～Vウ・デアロウト」「デアロウガ～デアロウガ」「デアレ～デアレ」が用いられる。

※4 「Vウ・ヨウト(ガ)マイト(ガ)」「Vウ・ヨウガ(ト)ナカロウガ(ト)」が用いられる。

※5 「デアロウト～デアロウト」「デアロウガ～デアロウガ」「デアレ～デアレ」が用いられる。

※6 単独、反復用法共に用いられる

※7 単独用法との共起には、「ヨウガ」「ヨウト」「デアレ」が用いられる。反復用法との共起には、本節の関連形式いずれも用いられる。

※8 「Vウ・ヨウガ/ト」「デアレ」の単独用法には、極端事態でないと、用いることが出来ない。

## 第3章

### 事実系逆接構文成立の諸相 —「ノニ」系構文の特徴をめぐって—

### 第3章 事実系逆接構文成立の諸相

#### —「ノニ」系構文の特徴—

#### 1. 〈反期待〉を表す逆接構文

##### —「ノニ」文の成立—

##### 1.1 はじめに

前田(2009:210)によれば、「ノニ」が表す基本的な意味は、「話者が食い違いを認識している」ということである。その「食い違い」には、「前件と後件は、通常ならば結びつくことはできないと予測あるいは期待していること」、「そうした予想にもかかわらず前件と後件が両者とも成立していることを確認していること」、「その結果それに対して違和感や驚き・意外感などを感じていること」が挙げられる、とある。本研究は、前田の説に基づきながら分析する。

まず、「ノニ」の条件づけについて、従来の研究では、「ノニ」は主に〈逆原因〉を表すとされてきた。「A するのに B」は「A すれば B しない」という一般的に理解される因果関係への判断が、実際には、前件が満たされたにもかかわらず、後件は起こらなかった。そのような状況を描写すると考えることができる。実際、前田(2009:202)によれば、逆接の原因・理由づけとは見られない「ノニ」文も存在している、とある。

渡部(2001:36)は、「ノニ」は〈推論的逆接〉を表し、推論的逆接では、話者が前提としている事態（つまり、前件から推論されうると話者が信じている事態）が接続に関しているとしている。丹羽(1998:754)は、「ノニ」を〈反推量希求型〉としている。つまり、「P が成立し、P から推論を経て R を話者が推量・希求する状況において、又は、P を話者が推量・希求する状況において、それに反して、Q(=～R)が成立する」というような場合には、「ノニ」が使用できる。

渡部(2001)、丹羽(1998)の〈事実による推論〉説のほか、前田(2009:203)によれば、「ノニ」文には、前件が希望や予測・予想あるいは意図そのものを表している場合もある。

「ノニ」文の前件・後件の事実性という点において、「ノニ」系文と「テモ」系文は異なっている。「テモ」系文では、前件が如何なる場合でも後件は成立するという点を強調しているが、「ノニ」系構文では、前件と後件は必ず成立することを強調している。また、前件は話者の期待そのままの反映としても、成立するものだと見なされる。ただ、前件の成立と後件の成立が矛盾すると見受けられる。

「ノニ」の表出機能について、西原(1985:34)は、〈意外性〉+〈遺憾〉+〈不満〉、或いは〈不本意〉を表すとし、田野村(1989:164)は、「ノニ」は話者の予想または期待に反し、期待が実現しなかったことを表すとしている。今尾は、「ノニ」が期待に反する事柄に対する話者の気持ち（意外感、遺憾など）を表すものとし、衣畑(2001:19)によって、「ノニ」文は、話者個人の経験的側面からの含意と矛盾している違和感、意外感、不満などを表す文とされている。本節では、主観性の視点から、「ノニ」文を取り上げて考察してみる。

##### 1.2 先行研究の検証

前田(2009:205)は、「ノニ」文を〈逆原因・理由文〉、〈非並列・対照〉、〈予想外〉、〈不本意な事

態を生み出した状況)の四種類に分けている。本研究の分類に従い、「ノニ」文を主観性の視点から分析を試みる。

### 1.2.1 逆原因・理由文

逆原因・理由文は、さらに2種類に分けられる。一つは、継起的に発生する事態 R と T のつながりであり、もう一つは既定事態 T への反論 R を付ける場合である。

#### 1.2.1.1 継起的事態 R と T の逆原因・理由文

主に逆原因を表す「ノニ」文は、原因・理由文、条件文と深いつながりがあることが考えられる。小泉(1987)は、「ノニ」文は〈事實的譲歩文〉と定義している。小泉は〈条件文〉を「前件と後件の因果関係を予測したもの」として、この予測の実現性に関して〈譲歩文〉と〈理由文〉を定めた。その結果、〈譲歩文〉は「結果的條件文が成立しないことを推意している文」すなわち「条件文の結果的否定」とされ、〈理由文〉は「結果的に條件文が成立することを推意している文」、すなわち「条件文の結果的肯定」と考えている。また、「ノニ」文は事実文にしか用いられない点から、「デモ」と「ノニ」の違いを見ている。

- 1) 努力すれば、成功する。
- 2) 努力しデモ、成功しないだろう。
- 3) 努力したノデ、成功した。
- 4) 努力したノニ、成功しなかった。

(小泉 1987:5)

後件が事実となっているかどうかによって、例 1)、2)は例 3)、4)と異なっている。3)、4)の前件・後件とも既定事実となっているが、例 1)、2)の後件は事実となっていない。また、例 1)、2)、3)、4)いずれにも、「努力する」→「成功する」の推論関係が含まれている。この推論は、常識に基づく判断ともいえるし、個人的な期待ともいえるだろう。

例 2)では、話者は「成功しない」という結果を推測している。例 4)から、「努力したノニ、成功しなかった」から、話者は「成功すること」を期待していることが読み取れる。話者の期待通りの結果が実現しなかったので、話者の不本意、不満が読み取れる。例 4)の「デモ」を「ノニ」に置き換えてみると、4-a)が得られる。

4-a) \*努力したノニ、成功しないだろう。(作例)

すでに論述したように、常識的推論は「努力する」→「成功する」である。前件で「ノニ」を用いると、話者の期待は「成功する」ことにある。後件では、話者は「成功しない」ということを推測している。なので、前件と後件における話者の捉え方は矛盾しているといえる(つまり、「成功する」ことを期待する→「成功しない」ことを推測しているという矛盾である)。また、「ノニ」文の後件は、事実でなければならないので、4-a)は非文と見なされる。

例 4)のように、前件 R と後件 T は継起的に発生している事態だと見なされる。しかも、R、T



とも既定事態である。推論は含意されているが、前件・後件には現れなかった。推論の結果と反して、実際の結果 T が存在している、とは言える。継起的事態の逆原因・理由文は、図 55 のように示すことができる。

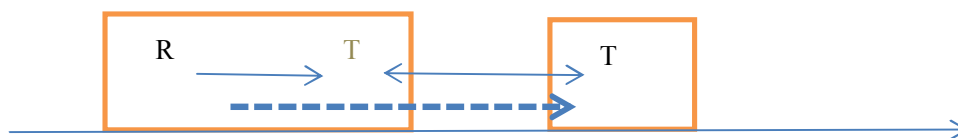


図 55 継起的事態の逆原因・理由文

図 55 にある下の横軸は時間軸である。R と同じ枠のなかに存在している T は、推論の結果である。それと反して、右の枠内の結果 T が成立している。継起的事態の逆原因・理由文は、〈出来事〉⇒〈出来事〉の形式にまとめられる。

### 1.2.2.2 非継起的事態の R と T の逆原因・理由文

継起的事態のほか、既定事態に対し、その不合理性を述べる逆原因・理由文もある。話者はまず、T という既定事態を認識する。そして、R という事態を使用し、T の不合理性を述べる。一般的は、〈状況〉→〈出来事〉の形式となり、その状態の下では、事態の発生は不合理性を示す。

- 5) 明日試験があるノニ、だれも勉強していません。 (前田 2009:200)  
 6) この寒いノニ、水泳なんかするな。 (丹羽 1994:104)

例 5)では、話者の主観性は次のように理解できる。まず、「だれも勉強していません」という情景が話者の眼に入り、話者は、この情景は不合理だと思っている。その不合理の理由は「明日試験があるから」である。話者は、叙述のため、前件にその理由をおいてから、後件事態を述べている。R から判断すれば、T の発生は不合理だと考えられる。

例 6)の「ノニ」文は、禁止表現「な」が後件に現れている。この場合、話者はおそらく、第三者が装備して出かけようとする姿を見て、「水泳に行くの？」と判断してから、発話をしている。話者は、「寒い」という理由を言い、後件「水泳に行く」の不合理性を述べている。この点について、丹羽(1994:104)は、後件が成立しそうな状況にあってその後件を阻止するとき「ノニ」が用いられると述べている。同じ現象に関して、前田(2009:215)は、スコープの原理の述べ、禁止「な」の対象は、後件だけではなく、文全体になっていると指摘している。

- 7) [まだ病気が治ってないノニ、無理をする] な。 (前田 2009:215)

前田(2009:215)によれば、禁止のスコープは[まだ病気が治ってないノニ、無理をする]という、「ノニ」で結び付けられるべき論理的な関係になっているので、例 7)のような文は可能になる。また、後件の「無理をするな」は、働きかけ表現ではありながら、後件はすでに、確定した事態になっていることも重要である、とされている。

「ノニ」文の後件には、命令表現は現れないが、禁止という否定命令であれば可能と、前田(2009:215)が付け加えている。禁止表現には、未実現の事態を禁止する〈未然防止〉に加えて、既実現している事態を禁止する「続行阻止」の二つあるが、「ノニ」文に現れるのは〈続行阻止〉の禁止文である。ほかには、「ノニ」文には統語的制約があると前田(2009:211)が指摘している。「ノニ」文には、後件モダリティとして、〈命令・依頼などの働きかけ〉、〈意志・希望などの表出〉、〈「ダロウ」「ウ・ヨウ」による推量〉、〈疑問文〉が用いることができないとされている。ただし、前掲したスコープの論理に従い、「ノニ」文の後件に、「ノダ」による疑問文を用いることができると考えられる。

8) [雨が降っているノニ、出発する] のですか。 (前田 2009:212)

例 8)のように、後件の疑問文の対象「出発すること」は、疑問文のスコープではあるが、事実かどうか未確定の事柄ではなく、既に成立していることであると考えられる。(cf.前田 2009:212)

前田(2009:213)によれば、例 8)のほか、形式的には疑問文であっても、意味・機能的には疑問文でない場合、「ノニ」を用いることができる。一般的に、話者の断定的な主張、あるいは疑問文によって自分の疑念を表明している場合と考えられる。

前掲した例 5)は現在の状態に対する不満であるが、例 6)、7)、8)は、成立しそうな事態に対する議論である。また、例 9)のような、既に発生した(過去)事態の不合理性を述べる形式もある。

9) 「今帰ったよ、どうもひどい埃でね」  
「風もないノニ…」 (今尾 1994a:94)

例 9)は「どうもひどい埃で、風もないノニ、(話題の人)が今帰ったの？」に還元される。すでに発生している事態へ、不理解などを表す場合、「ノニ」が用いられる。話者は、「今帰った」という事態に対し、その不合理性を述べている。つまり、「どうもひどい埃で、風もない」ことから、「帰る」のは大変なことと考えている。それにもかかわらず、「第三者が帰った」ことに対し、話者は理解できないと考えている。

また、例 9)のような用法について、前田(2009:208)は、後件が先行文脈に言語化されて出現している、と述べている。例 9)と類似し、後件倒置の用法について、前田(2009:208)は例 10)、11)を挙げている。

10) 「今、出て行った奴、見たかい。昔の恋人が忘れられずに、会いに行ったんだ。何一つ見通さないノニ。」

11) 「馬鹿ねえ、何の見通しもないノニ。馬鹿ねえ、本当に馬鹿ねえー」  
(前田 2009,208:『贈る言葉』)

例 10)、11)を還元すると、「何の一つ見通さないノニ、会いに行ったんだ」「何の見通しもないノニ、馬鹿ねえ」というようになるだろう。例 10)は例 9)と同じく、既に発生した事態の不合理

性を問っているのに対し、例 11)は後件が省略されて別の文へ短絡的に結び付けられてしまう場合である。(前田 2009:208)

短絡的結びつき用法には、後件に話者の感情・評価が現れるが、これは、口語的な使い方、後件は原則上「ノニ」文の後件ではなく、付け加えられたものだと考えられる。本研究はプロトタイプ的な R と T の参照点モデルを研究するため、短絡的結びつきは考察対象外のものとする。

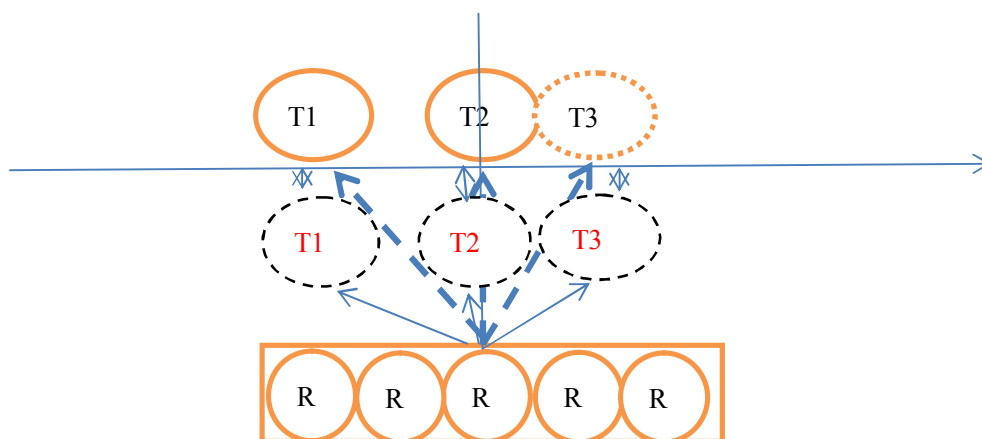


図 56 非継起的事態の逆原因・理由文

非継起的事態 R と T の逆原因・理由文のスキーマは、図 56 のように示すことができる。横軸は時間軸であり、中心線は現在の時点である。R は時間軸において持続しているものとして把握される状況である。R による因果関係の推論結果として、時間軸の下に T1、T2、T3 がある。実際の結果として、時間軸の上に推論の結果と逆となっている T1、T2、T3 がある。T1 は既に発生した事態（過去の出来事）として捉えられている。話者の考えでは、R という状況により、T1 の成立は不合理だと判断される。T2 は現在の状態である。T2 という状態の不合理性は、R によって説明されている。T3 は発生しそうな事態である。R という状況から判断すれば、T3 の発生は不合理だと見なされる。話者の発話は R から T への順で述べている。しかし、実際の認知する過程は、先に T を接触し、T の発生は観察者（話者）のフレーム（常識による推論）と衝突する。そして、話者は R という理由を言い、T の発生が不合理だと述べている。

逆原因・理由文としての「ノニ」文は、原因・理由文に還元することは可能であるが、他の三つの状況（〈不本意な事態が生み出される状況〉、〈予想外〉、〈非並列・対照〉）は不可能となる。

### 1.2.2 不本意な事態が生み出される状況

前田(2009:204)は、この場合は、「ノニ」文で与えられる状況下において、その状況から生じる話者の期待を裏切るような不本意な事態が後件で述べられる、としている。

ここで、田野村忠温(1989)の例を見てほしい。

12) スキーに来たノニ雪がない。

13) 荷物がたくさんあったノニ雨まで降り出した。

14) 静かな音楽を聴いていたノニ、近所で工事が始まった。

(田野村忠温 1989:174)

例 12)、13)、14)では、前件と後件が時間軸において前後に発生する事態と考えられる。

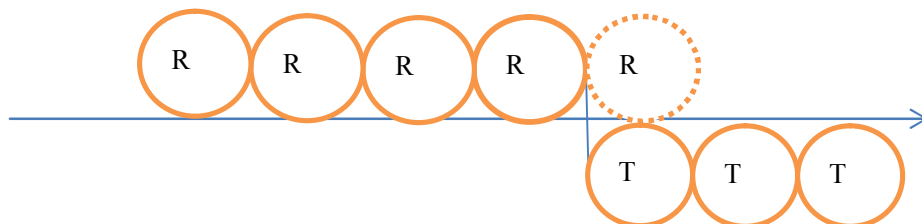


図 57 不本意な事態が生み出される状況

図 57 のように、T が不本意な事態であり、R は前掲〈与えられる状況〉である。T の発生により、R ができなくなる、もしくは R にとっては不利条件と見なされる。上記の例を見てみると、例 12)では、「雪がない」から、「スキー」はできなくなる。例 13)では、「雨が降り出した」から、「荷物」が大変な状況に遭う。例 14)では、「近所で工事が始まった」から、「静かな音楽を聴く」ことが邪魔される。例 12)、13)、14)はまた、倒置文に言い換えられる。

12-a) 雪がない。スキーに来たノニ。

13-a) 雨まで降り出した。荷物がたくさんあったノニ。

14-a) 近所で工事が始まった。静かな音楽を聴いていたノニ。 (作例)

例 12)、13)、14)では、時間軸における事態発生連続感が読み取れるが (図 57 を参照)、例 12-a)、13-a)、14-a)では、先行する文の画面感が強く現れ、後件は「主人公」の心理的描写と類似している。このような倒置のレトリックは、前者は会話文に多用されるのに対し、後者は物語文や小説に多く用いられると考えられる。

### 1.2.3 予想外をあらわす場合

予想外の場合では、〈期待〉が前件に現れている。逆原因・理由文において、不本意な事態が起こる場合も、期待や、予想が含意されている。「ノニ」文には、期待や予想が顕在化されている場合もある。例 15)、16)を見てみよう。

15) いつもなら簡単に勝てるはずなノニ、今日は大苦戦をした。

16) 予め言っておいてくれたらよかったノニ、どうして言ってくれなかったの？

(丹羽 1998:754)

例 15)は「はず」で判断を表しているのに対し、16)は反事実仮想となる。前者は推論が前件で顕在化されているのに対し、後者は期待が前件で現れている。

また、例 15)、16)は、前掲の例と異なり、前件は事実ではなく、判断や反事実となっている。例 15)では、「簡単に勝てる」と「大苦戦」は相反関係となっていて、予想と現実が対立している。例 16)では、「言っておく」という反事実仮想があるが、実際は「言ってくれなかった」という事態になっている。前件と後件は、肯定・否定の対となっている。さらに、後件では、「どうして…

の?」のような、相手に対する疑問が見られる。話者は、反事実の前件を取り立て、後件で予想の不発生に対して疑問を呈しているといえるだろう。

前田(2009:204)によれば、15)のように、前件が希望や予測・予想あるいは意図そのものを表している場合、前件に「～たい」「思っていた」「信じていた」「つもりだった」などのような表現が見られるまた、16)のような、前件が条件文になっている場合、この条件文そのものが裏にある条件的判断に当たり、それが外れた結果が後件に現れる、とある。



図 58 顕在化された期待

図 58 で示したように、予想の ID にある R と現実の ID の T が正反対の関係となっている。このように、顕在化された期待の場合、予想と現実が対立しているので、前件と後件は対比的逆接にもなる。

#### 1.2.4 非並列・対照

前田(2009:205)は、非並列・対照の場合を、二つの事態の肯否の食い違いと解釈している。対比的逆接を表す「ノニ」文には、予想外のような同時的に推論的逆接にもなれる状況と、〈非並列・対照〉のような、単なる対比的逆接関係となる場合がある。前田(2009:202)は、非並列・対照において、対照される要素を〈ガ格名詞句の対照〉、〈ヲ格名詞句の対照〉、〈ニ格名詞句の対照〉、〈時間の対照〉、〈空間の対照〉、〈状況の対照〉、〈見かけと現実の対照〉の七種類を挙げている。本研究では〈継起的対照〉と〈非継起的対照〉に分けて考察する。

##### 1.2.4.1 継起的事態の対照

以下の例 17)は〈継起的事態対照〉である。

17) きれいに咲いたノニすぐしぼんでしまった。 (田野村 1989:164)

例 17)には前件「きれいに咲いている」と後件「萎んでしまう」は相反関係となっている。R と T が直接相反関係となる場合、話者は前件の状態でいたい、と考えられる。例 17)をみると、話者の「ずっときれいに咲いていたらいい」、という主観的表出が読み取れる。また、前件と後件が継的に発生した事態であるので、対立した事態の継的つながりから、話者の違和感が読み取れる。つまり、「きれいに咲いた」ことから、「すぐ萎んでしまう」ことは予想できなく、不本意なこととも考えられる。

##### 1.2.4.2 非継起的事態の対照 (状況の対照)

例 18)は〈非継起的事態の対照 (状況の対照)〉である。

18) お金があるノニ、時間はない。

(前田 2009:200)

例 18)では、対比的逆接となっているが、前件「お金がある」が際立たされている。つまり、「お金がある時間もあれば最高だ」、という話者のもともとの期待が読み取れる。しかし、実際は「時間はない」。主観は前件にあるから、「時間はないから、お金もないならいい」というような推論を導くことは難しい。したがって、「事態 T も事態 R と統一すればいいな」、「事態 T と事態 R が統一できなくて困るな」というような話者の考えが読み取れるであろう。

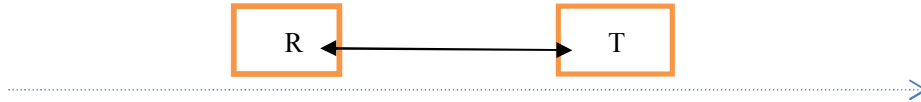


図 59 非並列・対照

図 59 のように、非並列・対照の場合、R と T が直接相反関係となっているが、継起的対照となる場合、時間軸の存在が必要となり、非継起的な場合では、時間軸は必要ではない。R と T では、R が際立たされる。

### 1.3 実例による考察

『中納言』で、「ノニ」を調べてみた結果、65424 件ヒットした。この中から、27478 件の無効例（「ものになる」「～のに対して」など）を除外し、残ったものを接続の形により、分別して分析を加えた。検索の範囲は、前後文 30 文字ずつにし、文法・文型中心の研究なので、語彙形態レベルの検索設定はオフにした。

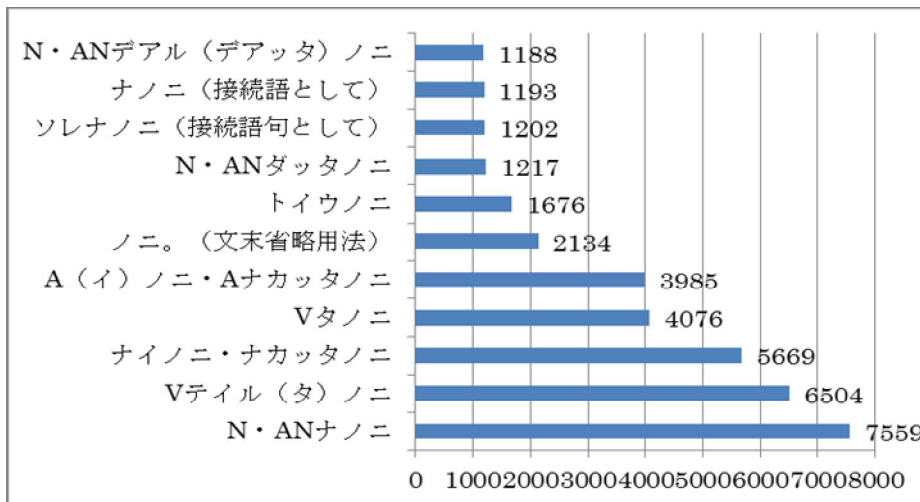


図 60 「ノニ」の使用調査

図 60 で示したように、「ノニ」は、名詞・形容動詞に接続する文例が最も多かった。また、動詞のテイル形（テイタも含め）や、否定表現「ナイ」、動詞のタ形に接続する文例も多かった。その次に、形容詞あるいは形容詞のタ形に接続する文例も多く観察される。他には、文末省略や、接続語句としての用法もあるが、その数は比較的少なかった。

### 1.3.1 話者の捉え方への再考察

ここでは、具体的な文例から、「ノニ」文における話者の捉え方を再考察する。

#### 1.3.1.1 逆原因・理由文

- 19) エラスムスは、ルター思想が自分の思想から生まれたものであることは認めますが、「私が産んだのは牝鶏の卵だったノニ、ルターはその卵を軍鶏に孵した」といって、思想は同根だが、内実はぜんぜんちがうということを強調します。 (『脳を鍛える』)

例 19)では、「ノニ」は「名詞ダッタ」の形式に接続されている。この「名詞」は、「牝鶏の卵」というものである。話者からみると、「牝鶏の卵だったから牝鶏に孵すはず」であるが、実際の結果は「ルターはその卵を軍鶏に孵した」ということである。継起的事態ではないが、後件事態の不合理性は、前件事態によって説明されている。

前件と後件には条件付けが含まれていて、「牝鶏の卵だったから牝鶏に孵すはず」という推論が含まれている。しかし、結果は、である。18)における結果は条件付けの論理と反している。したがって、既に発生した事態の不合理性を問う場合には、名詞ダッタの形で、そのフレームによる推論も働いている。

- 20) 江戸日本橋を出て、まだ最初の宿の品川にさえ着かないノニ、もう解放感。旅の楽しさのひとつに、この解放感がある。 (『モンダイは君のその喋り方と態度だ!』)

例 20)では、「ノニ」は「V ナイ」の形式に接続している。「解放感」は話者の発話する時点で感じられた気分である。この状態の出現に対して、「まだ早い」という話者の認識が読み取れる。話者の考えでは、「品川さえ着かない」状況の下では、「旅の楽しさとしての解放感」をすでに感じているのが不思議なことと思われる。例えば、主人公(話者)は、東京に住み、東京で働いている。品川を出ない限り、「東京を出る」とは言えない。まだ「東京」を出てないうちに、「解放感」が感じられるのは、さすが早いことだと話者が認識している。話者の考えでは、前件はまだ十分条件となっていないのに、後件が既に発生していることは、不思議である。したがって、既に定着している状態ではなく、ある状態が出現し始め、その出現の不思議さを表現するために、「ノニ」文が用いられる。

#### 1.3.1.2 不本意な事態が生み出した状況

- 21) やっところまできたノニ、あと三センチの距離が進めない。 (『Yahoo!知恵袋』)

例 21)では、「ノニ」は「V タ」形に接続している。今までの成就を状況として取り上げ、そこから話者の不本意な事態「後三センチの距離は進めない」を述べている。前件「やっところまできた」から、期待している結果に届かなく、話者の悔しい気持ちが読み取れる。

### 1.3.1.3 予想外

22) 自分は生きたくもないノニ生まされてきちゃったと。 (『遊びと精神医学』)

例 22)の前件には、話者の期待、つまり「自分は生きたくもない」がそのまま現れている。「ノニ」「V タクモナイ」に接続している。前掲したように、「～モナイ」の場合に、「～」には最低の限度が来る。「生きる」のに必要最低基準「自分が生きたい」ことが否定され、「生きる」ことさえも難しいと考えている。実際の結果はそれと反して、話者は「生まれてきちゃった」からわかるように、生まれてきた。このことは、話者の期待としている。そのため、例 22)は、「現実期待と反している」と解釈すれば十分だと考えられる。

23) 平等な社会に私たちでしていきたい。男・女差別はだめだとわかっているノニ「男のくせに」という見方をしている自分にショックだった。 (『生活主体を育む』)

例 23)では、前件では「ノニ」は「わかっている」という表現に接続している。予想と現実の食い違いは、「わかっている」道理と実際の「見方」の衝突である。話者の考えでは、道理がわかっていたら、行動も道理に従うはずだと判断しているが、実際の結果として、自分は道理に反した行動をとって、「ショックだった」のである。

### 1.3.1.4 非並列・対照

非並列・対照の例として、24)をみてみよう。

24) 年月が経ち、自分も年をとり、親も八十あるいはそれ以上になっているノニ、頭の中にあるのはいつまでも若い親である。 (『健康法あれこれ』)

例 24)では、前件と後件は現実「年をとった」と頭の中「若い親」の対照である。つまり、それぞれの ID は現実世界と心的世界となる。現実世界の実実は、「親も八十あるいはそれ以上になっている」ことで、話者自分はそれを甘えてまだ事実を認識していない。前掲したように、非並列・対照の場合では、前件における現実世界の実実を認めなければならないということを示す傾向が観察される。

25) 旧居の近くの商店街は八時ともなると大ていの店の戸が閉められてしまって閑散としていたノニ、ここでは八百やや本やでさえ十一時まで開けている。 (『夏目家の糠みそ』)

例 25)は、対比的逆接となっていて、期待や条件付けが含まれていない。前掲の対比的逆接には、前件・後件とも過去のことである場合と、前件・後件とも現在の状態である場合がある。しかし、例 25)では、前件は過去の事態で、後件は今の事態である。しかも、前件・後件は異なる主語が現れている。つまり、「A はこうだが、B はそうだ。」と類似する。



### 1.3.2 言いさしの「ノニ」

実例考察の結果、文末省略の「ノニ」文では、期待がそのまま表れている場合が多くあることがわかった。

- 26) 「エミール！」果林はエミールの首に抱きすがった。エミールはこたえなかった。いつもは全身で反応するノニ …。  
(『館山寺心中殺人事件』)
- 27) ぶつかるような感触が感じられなかった。さっきまで、あんなに感じていたはずなノニ。  
(『ひそやかな消滅』)
- 28) ああ、それでも、夢ならばいいノニ。こんなことが現実だなんて、やだ！  
(『新月闇の結晶』)
- 29) もう少しでスッキリ乾くと思っていたノニ。なんだか雲行きが怪しくなっていてわか雨が降り出して大慌て！！  
(『Yahoo!ブログ』)
- 30) もうかれこれ三十年近くも「ガイコツ」をひきずって生きてきたというノニ。  
(『過激にして愛嬌あり』)

例 26)では、前件には「いつもは」、一般的な状況を提示する語がきている。例 27)は判断、例 28)、29)では、「ならばいいノニ」という反事実仮想を提示する表現がみられる。例 29)のように、「思っていた」という、期待そのものが前件に現れている例も多く見られた。30)では、「～という」が前件に現れている。例 30)の省略した部分を還元すると、前件から予測される行動の不一致が読み取れるだろう。以上のほか、倒置文の形で、理由を言う形もある。

- 31) あれが流れると音を消すようにしてます。いい曲なノニ。
- 32) 最近昼と夜が逆転してしまって眠れません。もうすぐ学校が始まってしまうノニ。  
(『Yahoo!知恵袋』)

例 31)では、話者の先行する文における発生しそうな行為へ、自分の不満や文句を理由が現れている。つまり、「いい曲だから…しないでください」という表出が読み取れる。例 32)では、今の状況は「夜眠れません」ということである。この現状に対し、話者は、「もうすぐ学校が始まってしまう」という理由を示して、今のままではいけない、という主張が読み取れる。これは、前掲した「明日試験があるノニ、誰も勉強していません」の用法と一致している。

### 1.3.3 接続語句「ナノニ」、「ソレナノニ」

接続助詞の「ノニ」のほか、接続語句の「ナノニ」「ソレナノニ」なども 1000 例ほどヒットした。以下、これらの意味機能について考察する。

#### 1.3.3.1 「ナノニ」

まず、文頭に現れる現代語の口語的用法である「ナノニ」の文例を見てみたい。「ナノニ」に先行する文では、「はず」「わけ」「じゃないか」など、ことの予想や判断、期待をそのまま述べる助

動詞が用いられた文が多く見られる。順接の「ナノデ」と対立した用法である。

- 33) 美空ひばりのような、骨肉のドラマがあったわけでもない。ナノニなぜ、人々は彼女にこれほどまでに関心を寄せ、慕い続けるのだろうか？ (『女性セブン』)
- 34) ゆうべあなたにわたしの考えを言ったはずよ。ナノニ、なにも聞いていなかったのね。 (『愛をつないで』)
- 35) 一緒に世界中を旅行して回ったりもしたんだ。素晴らしい人生じゃないですか。ナノニ今になって、何もかも私のために生きてきただの、私に抑圧されただのと言われたって。 (『結婚の新しいかたち』)
- 36) してみれば、本名で呼ばれなければおかしい。ナノニアナウンスは、明確に「倉阪鬼一郎さん」と告げていた。 (『オバケヤシキ』)

例 33)~36)では、先行する文では、話者の判断や確認などがそのまま現れている。33)では、「骨肉のドラマがあった」なら、「彼女に関心を寄せ、慕い続ける」のは予想されるが、実際は「骨肉のドラマ」はない。この場合、後件の発生は、話者にとって、理解できないことである。34)では、「考えを言ったはず」ということから、後件「何も聞いてなかった」という結果には、話者の不満が見られる。話者は、「はず」によって自分の論拠を示し、後件結果の不合理性を述べている。35)では、「素晴らしい人生じゃないですか」という確認を求める疑問を呈してから、「何もかも私のために生きてきただの、私に抑圧されただの」というのが理由はないと表出している。また、36)では、「本名で呼ばれなければおかしい」という前提を言い、後件でアナウンスは「倉阪鬼一郎さん」という、本名ではないものと呼んでいるのが、「おかしい」と読み取れる。

- 37) このバルコニーは家の中で唯一の、私だけの心休まる場所だ。ナノニ今、そこをコナーに侵入させてしまった。 (『プレイボーイの優雅な生活』)
- 38) 自分にはまったく非がない。ナノニ受け入れられないことがあるなんて。 (『気象予報士になりたい!』)
- 39) 自分は女だと偽った。ナノニ彰の股間からは、ドクドクと赤い血液が流れる。男性器を切断した傷が癒えないのだ。 (『背徳のマリア』)
- 40) 最初のうちは、楽しいんだ。ナノニ、お母さんがトイレから戻るのが遅いってだけで、お父さんは、いらいらしはじめる。 (『永遠の仔』)

例 37)、38)では、話者は後件の発生に不満がある。例 37)では、「うちの中で唯一の、私だけの心休まる場所」が「侵入されてしまった」から、話者の不満な気持が読み取れる。例 38)では、「自分にはまったく非がない」から、「受け入れられないことがあるなんて」は、話者にとって納得できないことである。つまり、前件は、後件の出来事に不満がある理由が表されている。例 39)、40)では、先行する文と後件は、相反関係となっている。例 39)では、「女だと偽った」と「男性器を切断した傷が癒えないのだ」が相反関係となっている。例 40)では、「最初」と「その後」が相反関係となっている。

以上のように、接続語句「ナノニ」には、先行する文を論拠として、後件の不合理性を問う場合と、先行する文で理由を言い、後件結果に不満を言う場合がある。さらに、先行する文と後件が相反関係となっている場合、それが「物語文」における前後事態の対照と見なされ、話者の主観性があまり見られない。接続助詞の「ノニ」と比べて、接続語句の「ナノニ」には、先行する文の叙述性が強く読み取れる。また、「ナノニ」文には、先行する文から後件を判断する、という特徴も見られる。

### 1.3.3.2 「ソレナノニ」

次に、「ソレナノニ」の文例を取り上げて検討してみる。「ソレナノニ」文にも、先行する文に「はず」という話者の判断を表す表現が観察される。

- 41) 虹ならば、空の上方にかかるはずである。ソレナノニ、みなは自分の足もとに眼をやっていた。 (『魅惑の車窓地を這う旅へ』)
- 42) 私たちは、家庭医が処方した風邪薬でさえその副作用を恐れて、なるべく短期間飲み、風邪がなおりかけたら服用をやめるなどの自衛手段をとっているはずだ。ソレナノニ、「男がいやがる」「性感が損なわれる(男性側の)」ぐらいの理由で、副作用のあるピルを避妊の手段に選ぶのはどんなものでしょうか。 (『ひらかれた性教育』)
- 43) 修太郎は多分、気が向いた時に何の前触れもなく戻るのだ。ソレナノニ、修太郎はその度にまるで、一寸半刻銭湯にでも行って来たかのように振る舞う。 (『塗仏の宴』)
- 44) リオンは目がさめているかぎり、一時間おきに腹ぺこの発作が起きるのだ。ソレナノニ、どんなに食べても太らない。 (『ぼくたちの宝島』)
- 45) 私はいまの地位を得るために必死で働いてきたのです。ソレナノニ、なぜ他人を助けなければならぬのでしょうか。 (『みんなに好かれる人避けられる人』)

41)では、前件「虹ならば、空の上方にかかるはずである」と判断しているが、それに反して、「みなは自分の足元に眼をやっていた」。42)では、「私たちは風邪薬であえ副作用を恐れて、なるべく短期間飲み、風邪治りかけたら服用をやめるなど自衛手段をとっている」と判断しているが、それに反して(ある人は)副作用のあるピルを避妊の手段に選ぶとすることに、不理解を示している。例43)では、前件には「たぶん~のだ」という、話者の判断が現れている。判断した内容とことなり、「修太郎は一寸半刻にでも行って来たかのように振る舞う」。例44)では、先行する文に「のだ」による説明が現れている。「一時間置きに腹ぺこの発作が起きる」ことから、後件の結果「どんなに食べても太らない」ということは不合理だと見なされる。例45)も例44)と類似し「のだ」が先行する文に現れている。先行する文で事実を取り上げ、それを判断する根拠として、後件既定事態への批判や詰問が現れている。また、後件は、前掲したように、疑問文は「ノダ」文によるものと判断できる。

- 46) 「親父」の周囲には誰もいなかった。ソレナノニ、彼は刺された。 (『カーニバル三輪の層』)

- 47) 二人は、仕事の責任をそれぞれのやり方できちんと果たしていた。ソレナノニ、イタリア人のほうだけ、怠けているように見られてかわいそうでしたよ。 (『Nakata mode』)

例 46)、47)では、先行する文も後件も過去の事態である。先行する文の状況において、後件の発生は不合理だと見なされる。例 46)の場合では、「かわいそう」という話者の評価が文末に現れているが、実際「ノニ」のスコープは、「怠けているように見られて」までと思われる。

- 48) 経済が伸びているために発生した赤字である。ソレナノニ、経済拡大をつづけながらどうやって赤字をなくすことができるのか。 (『日本は悪くない』)

例 48)では、先行する文において、赤字の成立について話者が説明している。また、例 48)も前掲例 45)と類似し、疑問文は「ノダ」によるものとなる。

以上の考察から、「ナノニ」、「ソレナノニ」が用いられる場合、その多くは、先行する文で論理を取り上げ、そこから出発し、その判断と異なる事態や、その判断から対立する論理への指摘や、詰問を表すのが一般的であることがわかった。「ナノニ」には、相手に論拠を示して、説得する姿勢に見られるが、「ソレナノニ」には、自己主張に集中しているような特徴がある。

### 1.3.3.3 「トイウノニ」

「ナノニ」、「ソレナノニ」のほか、接続語句「トイウノニ」の文例も見られる。前件で、ある名目を述べ、後件でその名目と一致しない結果を示すのが「トイウノニ」文の特徴である。「トイウノニ」には、文頭接続語的な用法は見られなく、主に接続助詞として用いられる。

- 49) ところが、やっと心ゆくまで練習ができるようになったトイウノニ、かんじんのピアノへの情熱はしだいに冷めていってしまったのです。 (『シンガー・ソングライターイルカ』)
- 50) いまも、おとうさんとマキが、すでに起きているトイウノニ、おにいちゃんはまだ、じぶんのへやで、グーグーねむっている。夜はおとうさんがいないのをいいことに、夜中の一時二時ごろまで、テレビを見たり、レコードをきいているから、朝はぜったいいいほど、起きられないのだ。 (『おにいちゃんのヒミツは一日 300 えん』)
- 51) 河岸だトイウノニ、いつごろ掘り下げたのであろうか、貯酒タンクが林立する地下蔵があった。 (『ワインづくりの思想』)
- 52) そろそろお産が近いトイウノニ、いまさら大きなお腹を、椎名に見せたくはない。(『化粧』)

例 49)では、「やっと心ゆくまで練習ができるようになった」ことから、「ピアノもだんだん好きになるだろう」と予想されるが、結果は「情熱はしだいに冷めていってしまった」である。例 50)では、前件と後件は相反関係となっている。「おとうさんとマキが、すでに起きている」状況の下、「おにいちゃんはまだグーグーねむっている」のように、「起きている」「寝ている」が対照関係になっている。前件・後件は相反関係でありながらも、前件は後件叙述の状況を与えていると考えられる。例 51)では、前件は「名詞ダ」の形式に接続している。「河岸」という名目と一致

しない後件で、「貯酒タンクが林立する地下蔵があった」という発見があった。例 52)では、短絡的結びつきが後件に来ている。「椎名」は、主人公が「お産が近い」のに、毎日自分のことばかり集中していることに不満があった。また、主人公の気持ちとして、「いまさら大きなお腹を、椎名に見せたくはない」という後件が表されている。

「トイウノニ」文は、前件の成立がもっとものこととして、後件と前件は譲歩的構造となる。また、「ノニ」と類似し、文末省略や短絡的結びつきなどの用法も多く観察される。

#### 1.4 結語

本節では、「ノニ」文に見られる主観性について分析した。「ノニ」文のプロトタイプは、〈逆原因〉である。〈逆原因〉文では、前件から因果関係に沿って推論された結果と相反した結果が成立している。また、実際の結果の不合理性を問う場合もある。結果 T は、現状である場合、既成事実である場合、発生しそうな場合があり、原因が後づけとされる。これらは、条件付けのある「ノニ」文と特徴を同じくする。

〈逆原因〉のほかにも、〈反期待〉も表せる。〈反期待〉は、期待そのものが前件に現れる場合と、期待が含意される場合がある。期待そのものが前件に現れる場合、前件と後件が対比的逆接関係となる。期待が含意される場合、〈予想できない結果〉が表せる。

〈逆原因〉と〈反期待〉は、条件付けのある「ノニ」文であるが、この他にも、条件付けのない「ノニ」文がある。条件づけのない「ノニ」文は、前件と後件は対比的逆接関係を成している。また、条件付けのない〈対比的逆接〉は、前後件は継起的と非継的に分けられる。いずれも、話者の主観性は前件にある。

以上の考察結果を、以下の表 10 にまとめる。

表 10 「ノニ」文とその特徴

| 用法     |                 | 例     | R と T の関係             | 事実性                      | 文の機能 (主観性)         |                    |
|--------|-----------------|-------|-----------------------|--------------------------|--------------------|--------------------|
| 従属的用法  | 逆原因・理由          | 4)    | 継起的事態 R と T           | R、T とも事実                 | 予想された因果関係の不実現 (失望) |                    |
|        |                 | 9)    | 非継起的事態 R と T          | T が発生した                  | T の不合理性を問う (不満・阻止) |                    |
|        |                 | 5)    |                       | T が現状                    |                    |                    |
|        |                 | 6)    |                       | T が発生しそう                 |                    |                    |
|        | 不本意な事態が生み出される状況 |       | 12)                   | R の進行は T の出現によって中止・邪魔される | T が一種の発見           | T の出現に違和感を示す       |
|        | 予想外 (期待の顕在化)    | 反期待   | 15)                   | 予想 R と現実結果 T が相反関係となる    | T が事実              | 期待に反する事実への不満       |
|        |                 | 反事実仮想 | 16)                   | 予想 R と現実結果 T が相反関係となる    |                    | T の逆を期待する          |
|        | 非並列・対照          |       | 17)                   | 継起的対照 R と T              | R、T が継起的に発生する      | 前件 R のままでもいい       |
|        |                 |       | 18)                   | 非継起的対照 R と T             | R、T とも持続相で現れる      | 後件 T の状態も R と統一したい |
|        | 否定的累加           |       | 略                     | 継起的 R と T                | R、T が継起的に発生する      | 礼儀用法               |
| 非従属的用法 | 意外感の表出          |       | 略                     | R と T が短絡的結びつきとなる        | R が事実である           | T は、話者の評価そのもの      |
|        | 終助詞的用法          |       | 31)                   | R と T が倒置される             | 先行文が事実である          | 先行文発生 of 不合理性を問う   |
|        | 接続語句            | ナノニ   | 32)                   | 先行する文が発話の論拠となる           | 先行文は事実か判断となる       | 後件の不合理性を問う※1       |
|        |                 | ソレナノニ | 43)                   | 先行する文からの分析が後件となる         |                    | 後件の不合理性の評価         |
| トイウノニ  |                 | 略     | 名目と一致しない結果 (短絡的結びつき可) | 先行文は名目、T が事実             | 前後不一致を示す           |                    |

※1 物語文では、前後件はただの対照関係を示す。

## 2. 〈不一致〉に対する非難を表す逆接構文

### —「クセニ」文の成立—

#### 2.1 はじめに

「クセニ」は、「ノニ」と類似していて、前件、後件とも事実であり、文の中から話者の主観性が読み取れる。また、「ノニ」と同じく、前件を支え、後件に反対する傾向が観察される。「ノニ」文には、後件は一般的には、事実でないとならないが、短絡的結びつきや、「ノダ」による禁止表現、疑問文、および形式的疑問文（話者の観点が明確である）がとられる。したがって「ノニ」文には、話者観点の表出が明確に読み取れる。「クセニ」はさらに一歩進んで、主観性が「ノニ」よりも強く伺える。本節では、「クセニ」の主観性について分析する。

#### 2.2 先行研究の検証

今尾(1994:94)は、「クセニ」は逆接確定条件を表すとしている。また、今尾(1994:94)は、従属節の焦点化について、「一般に、重要な情報は文末に置かれやすい。この文末重点の原理に従い、複文における焦点も主節に置かれることが多い。しかし、話者が文末重点の原理に逆らい、あえて従属節に重点を置く場合には、「ノニ・クセニ」が選択されやすい。というのも、これらを用いた複文では、主節の省略による従属節の焦点化が可能なためである。」と述べている。主節が表す旧情報を「ダ」で代用省略することによっても従属節の焦点化が可能である。「ノニ・クセニ」は逆条件を中心的用法とする形式で、条件節を焦点化する談話機能を持つ。

##### 2.2.1 「クセニ」の間主観性

他の接続機能辞と異なり、「クセニ」文には、相手に対する働きかけがある。

###### 2.2.1.1 命令・禁止との共起

西原(1985:33)は、「ガ・ケレドモ」「ニモカカワラズ」「モノノ」「ノニ」「クセニ」の順で、話者のムードを「ガ・ケレドモ」は、事実の客観的な描写に近く、モダリティーとして「意外性」だけを表す。「ニモカカワラズ」は書き言葉で、改まった表現である。「意外性」に加えて、〈遺憾〉、〈好感〉両面のムードが表現可能である。(例1)、2)を参照)「モノノ」は〈意外性〉のほか、〈遺憾〉だけを示すといえる。(例3)を参照)「ノニ」は、〈意外性〉、〈遺憾〉のほか、〈不満〉〈不本意〉の感情を聞き手に対して訴える〈アピール〉の要素も含まれている。また、「クセニ」は、「ノニ」の〈不満〉、〈不本意〉がさらに強く、〈非難〉を表面に出している点で特異である。口語的な表現である点は「ノニ」と同様である」のように分析している。

- 1) 朝早くから並んだニモカカワラズ、傍聴券のもらえない人も多かった。
- 2) 御遠方ニモカカワラズ、多数ご参列くださいませして…
- 3) 公明党は修正部分に賛成したモノノ、原案には反対だった。
- 4) 人が使っているノニ、黙って持っていくなんて…
- 5) 見ていなかったクセニ、余計な口出しをするな。

(西原 1985:33)

例 5)を、「ノニ」に置き換えられると、5-a)、5-b)、5-c)が得られる。

5-a) 見ていなかったノニ、余計な口出しをするな。

5-b) 見ていなかったノニ、余計な口出しをする。

5-c) 余計な口出しをするな! 見ていなかったノニ… (作例)

前節で分析したように、例 5-a)では、「な」という禁止命令のスコープは、「ノニ」文の全文であれば用いられるが、単なる後件の文末禁止表現と見る場合、「ノニ」を用いると不自然に感じられる。一方で、「クセニ」には、このような制限はない。また、5-a)を倒置文 5-c)にすれば、文として座りがよくなる。「ノニ」には、理由を提示する機能があるが、一般的には、後件は事実に限定されている。つまり、「ノニ」が用いられると、話者の不満や非好感を伝え、相手に言外の意、つまり「～ないでほしい」を伝えるのである。これに対して、「クセニ」には、間主観性の機能を持っていて、聞き手に直接命令・禁止など具体的な働きかけの機能がある。例 5)では、R「見ていなかった」は、話者の判断する根拠となる。話者の論理では、「見ていなかったから、余計な口出し」と因果関係が成立している。後件事実からわかるように、聞き手は余計な口出しをすでにしている、あるいはしようとしている。話者は、理由を取り立てて、聞き手の行為を直接阻止している。

#### 2.2.1.2 からかい・揶揄の働きかけ

今尾(1994:94)によれば、「クセニ」は、一般的に、第二者、第三者に対する表現主体の非難、なじりの気持ちを表し、主体の行動や状況を前節にもち出して、当然と期待されるどころと反対の行動や状態をその同じ人物が示すというので、不満や非難の心持を含むとしている。「クセニ」文は期待に反する行為及びその行為者に対する話者の攻撃的評価(非難・難詰・軽蔑・揶揄など)を表し、この評価には攻撃性が伴い、非難・難詰・軽蔑など程度がはなはだしいものから〈揶揄・からかい〉といった軽いものまで含まれる、とある。

6) -海外旅行に行くんだって?

-ああ、行くよ。

-金もないクセニ。

(今尾 1994a:94)

例 6)は倒置文であるが、後件は先行する文として現れている。つまり、「海外旅行に行く」行為は、妥当ではないと話者が考えている。「お金がない」から、「海外旅行に行く」ことは道理に合わない。話者の考えでは、「お金がある」ということは、「海外旅行に行く」ための必要条件とされている。「お金がないクセニ、海外旅行に行く」からは、話者の〈揶揄〉、〈からかい〉といった働きかけが読み取れる。例 6)の「クセニ」を「ノニ」に置き換えると、ニュアンスが微妙に異なる。

6-a) お金もないノニ、海外旅行に行こうとしている。

(作例)



例 6-a)のように、「ノニ」文に言い換えると、倒置文ではなく、「R→T」の順序で組み立てたほうが自然だと思われる。前件と後件が不合理性につながっている場合、「ノニ」「クセニ」両方とも用いられるが、「ノニ」には、「クセニ」のような〈からかい・揶揄〉といった働きかけはないので、例 6)をそのまま「ノニ」に置き換えると、前件と後件が不合理に結ばれているだけであり、「クセニ」のような強い主観性は見られない。

また、「クセニ」と「ノニ」の前件「お金もない」は、その主観性の度合いが異なっている。「クセニ」を用いると、「お金がない」ということは、話者の個人的な判断である。話者は、話題の人は「お金がない」と思っている。「ノニ」を用いると、「お金がない」ということは、他人から見ても同じ判断の結果が出ると予想できる。

### 2.2.2 前件と後件の主語の一致

今尾(1994a)は、「クセニ」は、他者に対する非難だけでなく、話者自身に対する批判にも使用できることを指摘している(例 7を参照)。また、従属節の主語と主節の主語は同一動作主でなければならないということも述べている。(例 8を参照)

- 7) こうなることは判っていたような気もする。わかっているクセニ時分どきに出かけたのは、自分に対する言い訳なのか…。
- 8) \*伯父は大金を持っているクセニ太郎は金を借りない。(今尾 1994a:96)

例 7)は特別な例である。一般的に、「クセニ」文は、第三者への、批判や不満などの働きかけとなるが、例 8)の主語は話者自身である。ここでは、話者が、自分のことを、舞台上に置いて、オフ・ステージの視点から、自分のことを攻めている。つまり、自分を第三者化して、観察するのが例 7)の特徴である。例 7)も、前件の論理と不一致な行動が起こる場合であるが、「クセニ」を使うと、自分を貶す、揶揄するニュアンスも読み取れる。

例 8)のように、前後主語は不一致であれば、「ノニ」が使えるが、「クセニ」は使えない。

さらに、今尾(1994a)は、動作主の行為が自分自身の意思決定によるものではない場合、話者は動作主に行為の責を負わせて非難することができないことから、「クセニ」が使えないも指摘した。

- 9) 深田:いいセクレタリーがもらえるかどうかで、その人の社内地位が決まる。  
?ハンソン:いいセクレタリーがいたクセニ、それが違う人のところへ行く。これは張り出しに落とされたな、ということになる。(今尾 1994a:96)

筆者の考えでは、例 9)には「クセニ」が使えない理由は、おそらく、前件・後件主語の不一致によるものと思われる。

今尾(1994a)は、「クセニ」文では、前件と後件は、主語は一致しなければならないと述べているのに対し、渡部(2001:36)は、前件が自然現象や客観的な状況で、後件がそれに関する人間といった場合にもクセニの接続が可能だとしている。

10) 雨がたくさん降るクセニ、水不足が続く。 (今尾 1994a:102)

例 10)は、「ノニ」と置き換えると、文としての座りが更によくなると考えられるが、「クセニ」を使うと、主観性があまりにも強すぎて、水不足が続くのを非難する、文句を言うニュアンスが読み取れる。しかし、「水不足」は自然現象とイッテモ、人間とかかわりの深いものである。人間は水が必要なので、人が多くなると、水が不足となる。したがって、人口数がそのまま増えてしまうと、水不足も続く。例 10)の非難の対象を人間と理解すると、通じるようになる。前件が自然現象である場合、「クセニ」文は常に、「自然が十分条件を提供している」のに、人間のせいでは予想結果が不実現となっているという主観的表出が読み取れる。

11) あんなに待ち望んだ雪がやっと降ったクセニ、妻はちっとも嬉しそうじゃなかった。

12) 事業部には秘書なんかいないクセニ、部長は見栄えを張ってウソを言っている。

(渡部 2001:41)

例 11)、12)では、話者は前件で自然条件を提供し、後件の人間の反応を見て非難している。したがって、推論的逆接のカテゴリーにおいて、「クセニ」は、前件、後件の叙述が唯一の対象に関するものだけではなく、その対象は人間であり、つまり具体的にはその非難を受け止める対象が必要だと考えられる。

### 2.2.3 対比的逆接を表す「クセニ」

13) この料理はまずいノニ・クセニ見た目はきれいだ。

14) ? 太郎は人柄がいいノニ・クセニ体が弱い。 (原田 1998:75,78)

対比を表す場合、前件と後件の主語が一致しているかどうか注目しなければならない。例 10)の場合、「クセニ」を使うと、「ノニ」より、話者の不満が強く読み取れる。「ノニ」を用いると、単なる違和感が読み取れるのに対して、「クセニ」の場合では、「だまされたような気分」まで至っていることが分かる。つまり、「ノニ」はTの不合理性を述べるのにとどまっているが、「クセニ」の場合は、さらに後件成立の不合理性を強く非難している。

例 13)では、人柄がよければ仕事が早いという推論の帰結は不自然かつ不明瞭であることから、ノニ・クセニの使用が問題になる、と原田(1998:78)は述べている。実際、「人柄がいい」と「体が弱い」には、後件は前件からの想起関係の領域以外にあることが考えられる。そのため、「人柄がいい」と「体が弱い」を関連付けることが難しい。それは、「クセニ」、「ノニ」だけの問題ではないと考えられる。

14-a) 兄が太っているノニ・クセニ弟が痩せているのはどうしてか。 (原田 1998:79)

例 14)は、同じ文において、クセニ・ノニ両方用いられるが、「クセニ」の方は口語的で、主観

性が強く見られる。「兄」と「弟」は親族関係なので、関連付けができる。また、「太っている」と「痩せている」という対立がある。したがって、前件と後件は、対比的逆接を成しているといえるだろう。「ノニ」を使うと、話者は、「太っている」に着目している。「兄が太っているから、弟も太っているはずだ」と、話者が判断している。「クセニ」を使う場合、話者は「弟」の「痩せ」のほうに着目している。つまり、どうして「弟」が「兄と違って、痩せている」のを問いているのである。「クセニ」には、後件を非難する働きかけが「ノニ」より強く伺える。しかし、14-a)の「どうしてか」をとり、文体を変えると、「クセニ」とは互換不可能になる。以下のように、〈言動不一致〉の場合にも、〈対比的逆接〉となる。

15) 彼に会うクセニ、合わないと言い張る。 (前田 2009:233)

例 15)のように、前件は事実であるが、後件は事実と反する弁解である。これを〈言動不一致〉と呼ぶことにする。〈言動不一致〉は、「クセニ」文の一つの構文的特徴となっている。

### 2.3 実例による考察

『中納言』で、「クセニ」を文字列として調べてみた結果、1322 件あった。接続の形により、「クセニ」を以下のように分けた。前後文 30 文字ずつ設定し、検索をした。文法・文型中心の研究であるから、語彙形態レベルの検索設定はオフにして、意味分析をした。「クセニ」は、文中接続複合辞としても、文末いいさし表現としても使われている。また、文末の場合、動詞に接続することが最も多く観察された。文中接続助詞として使われる場合、「名詞＋ノ」以外に、「名詞・形容動詞＋ダッタ」に接続する場合もあり、形容詞、「形容動詞＋ナ」の場合や、助動詞「そうな」に接続することも観察された。さらに、二重接続助詞用法も見られる。ただし、「癖になる」は考察対象外とする。

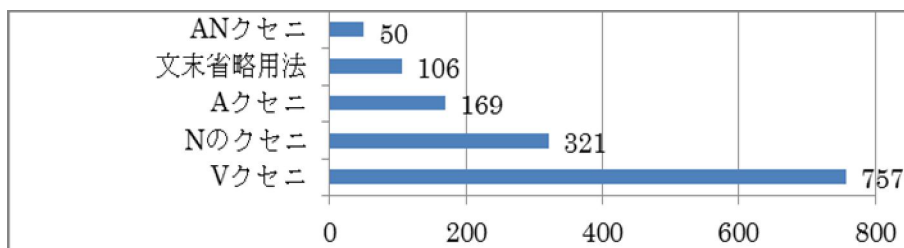


図 61 「クセニ」の使用調査

「クセニ」文には、前件に接続する成分により異なっている傾向が観察される。実例考察の結果、「クセニ」文の前件と後件には、〈不一致〉がもっとも最も特徴的だと考えられる。以下のような不一致の場合には、「クセニ」文が用いられる。以下に、その多様性を見てみる。

#### 2.3.1 〈不一致〉の多様性

〈不一致〉にもいろいろな場合がある。本研究は、〈資格・定義と展開の不一致〉、〈内と外の不一致〉、〈時間軸における前後不一致〉の 3 種類に分けて考察する。

### 2.3.1.1 資格・定義と展開の不一致

「クセニ」文には、前件で資格や、定義を述べ、後件でその資格や定義を超過するふるまいや表現などを取り上げて、資格と名詞に接続する場合、「その身分とふさわしくない振る舞い」という、話題人物の特徴が読み取れる。その例を以下に見てみよう。

- 16) 僕が一人でやきもきしてるんですが、アルさんも克平も登山家のクセニ、のんきです。  
（『あした来る人』）
- 17) 男のクセニ女のようなキメこまかいねっとりした肌をしているのも、どことなく好色な感じがして、昔とかわりはない。  
（『越前竹人形』）
- 18) まだ十九歳のクセニ、知り合ったばかりの異国人に売春婦を世話しようとしたマウロも変わった男だが、他の二人の同室者はずっと変り者だった。  
（『ヒゲのオタマジャクシ世界を泳ぐ』）
- 19) 学生のクセニ女優のまねをして、長く伸ばした髪をわざと結ばずに、両方の肩にばさりと垂らして、母はこの娘から、何かしら一種の不道德さ、身持ちの悪さ、娼婦性のようなものを、ぴんと感じたのだった。  
（『青春の蹉跎』）

16)では、「登山家」という概念から、手早くて登山の仕事やるのは得意だと想像されるが、「登山家」の身分である「アルさん」と「克平」は、のんきにしていた。なので、「僕」は不満の気持ちがあることが読み取れる。17)では、「男」として、「女のようなきめ細かいねっとりした肌をしている」ことは、「男」の身分と相応しくない。そのことに、話者が不満を抱いているとかんがえられる。また、18)では、「十九歳」で「知り合ったばかりの異国人に売春婦を世話しようとした」行動は、あまりにも大人すぎて、十九歳という身分と相応しくないことが読み取れる。19)では、「学生」は「女優のまねをして」、「娼婦性のようなもの」他人に印象付けるのが、「学生」として失格だと思われる。

以上の例文の特徴を以下にまとめる。図 62 のように、R は名詞であり、身分を提示するが、その身分と相応し、フレームという ID が存在している。しかし、この身分の所持者は ID と相応しくないふるまい T をして、他人に違和感を与えている。T は R が示す身分から見て、あるまじきことである。

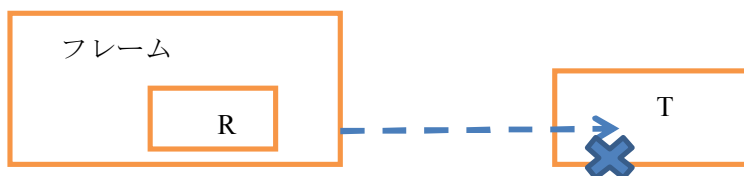


図 62 身分と相応しくない振る舞い

前件で提示された身分と相応しくないふるまいとする場合、「クセニ」が用いられる。ほかには、形容詞で定義された場合、この形容詞定義と相応しない表現が来ると、それも、一種の不適合だと思われる。以下に形容詞の例を挙げる。

- 20) 手紙の封をひらく。登美子の顔が眼にうかぶ。若いクセニ、天性の媚態をもった女だ。  
 (『青春の蹉跌』)
- 21) 通常は常在菌が住み着いていれば増殖できないような弱い菌ですが、抗生物質によって常  
 り、弱いクセニ抗生物質には耐性を持つものが増殖してしまい、その菌が病気をもたらす  
 ことがあります。(『葉で死なない細菌』とどう戦えばよいか)
- 22) 千葉京子の色白で小柄な体軀と、童顔で可憐なクセニ、どこやら大人びてみえる表情を私  
 は思い出した。(『演歌の虫』)

例 20)、21)は、前件は形容詞であり、後件はそれとふさわしくない表現である。例) 20 の「若い」、例 21)の「弱い」のフレームから判断すると、「媚態を持つ」や「構成物質には耐性を持つ」は結びつかない。さらに、例 22)のように、「童顔で可憐」は「大人びて見える」と結びつかない、そしてそのつながりは不適切だと話者が考えている。

前件は一語文でなくても、後件行動には前件が不適格と表出する「クセニ」文が存在している。つまり、後件の展開に対し、前件には、それと相当な資格がないので、一語文でなくても、資格と展開の不一致が読み取れる。

- 23) それをそばで耳にしていた私は、もちろん文字などもわからないクセニ音で覚え、上の句  
 を言うと下の句を、一言も違わずに九十何枚まで言えたいのです。  
 (『川の流れるように』)
- 24) 「へん、お前さんが人並みの働らきもないクセニ、何を言つてんのよ。」(『徳田秋聲全集』)
- 25) 自分はもう読んでるクセニ、海外旅行に行くときでも鞆に詰めるんです。(『野性時代』)
- 26) ほら、安田が呼んでる。俺がいなくちゃ、どうにもならねえクセニ、いつまでも威張って  
 やがるんだ——おーい。(『野火』)
- 27) だからね、うちのお父さんなんか自分じゃ殆んどお酒飲まないクセニうちの中もうお酒だ  
 だけよ。(『ノルウェイの森』)

例 23)~27)は、前件にて資格を提示し、後件でその資格に相応しくない実際の結果を述べている。これは、前掲図 62 の名詞接続と同じスキーマで説明ができる。例 23)では、「文字などもわからない」から、「九十何枚まで言えた」とは結びつかない。例 24)では、「お前が人並みの働らきもない」から、「言う権利がない」。例 25)では、「もう読んでいる」から、また「かばんに詰まる」必要はない。例 26)では、「俺がいなくちゃだめ」だから、「威張ること」というとは起こりえない。「お父さんは自分じゃほとんどお酒飲まない」から、「うちにはお酒だらけ」という風景は起こりえないだろうと話者が考えている。つまり、話者的な論理では、前件を見れば、どうしても後件が発生するのが不合理だと、「クセニ」がこのような話者の主観性を表している。

資格と展開の不一致は推論的逆接となるが、以下の不一致は対比的逆接を成している。

### 2.3.1.2 内と外の不一致

内と外の不一致は、前掲した「モ」の説でも説明した(p.34)ように、ID がそれぞれ心的世界と

現実世界となる場合と対応する。まず、例 28)、29)、30)のように、形容動詞一語に接続する場合がある。

- 28) しかも、その灯の海は、一切の音響というものが死滅して、華やかなクセニ、ひどくひそやかな感じのものだった。 (『あした来る人』)
- 29) 不安なクセニいちおう、強がりをしてきたが… (『化粧』)
- 30) 息子のたまさかの優しさに心は感謝で一杯なクセニ、そういう場面になると素直によろこぶことができない。 (『生きるヒント』)

「華やか」⇔「ひそやか」、「不安」⇔「強がり」が相反関係になっているのは明白で、それぞれ対立した語が前件、後件に現れている。例 28)では、「華やか」は現実世界の ID にあり、「ひそやか」は心的世界の ID に存在している。現実世界と心的世界は、「華やか」⇔「ひそやか」によって、対立している。この対立を、内と外の不一致と呼ぶことにする。例 29)では、「不安」と「強がり」が対立している。「不安」は話者の心的世界の活動であるが、「強がりをする」は話者の現実世界での行動である。心的世界と現実世界の対立は、やはり内と外の不一致を示している。例 30)では、「感謝でいっぱい」は話者の心的世界の活動で、現実世界では、「素直に喜ぶことができない」という内と外の不一致が体现されている。



図 63 内と外の不一致

図 63 のように、ID1 と ID2 はそれぞれ、「心的世界」と「外の世界」に相当する。R と T は対になっているが、それぞれ異なる ID に属している。文の焦点は、前件にあり、話者は後件が前件と一致しない、という考えを示し、更に非難している。

一語の形容詞、形容動詞だけではなく、動詞接続にも、内と外の不一致が見られる。

- 31) 「あたしのこと疑ってたクセニ、随分、面倒なことしたもんね」 (『夢見る乙女じゃいられない』)
- 32) 「ダメだな、わらわは。傲慢に振る舞うクセニ、それなのに本当は、おまえに嫌われるのが何より怖い臆病者なのじゃ」 イプネフェルは猿を抱きしめていた腕を解くと、すっと離れた。 (『オーパーツ・ラブ』)

例 31)では、「疑ってた」は聞き手の心的世界の活動であるが、現実世界では、聞き手は「随分面倒なことした」となっている。したがって、内と外は不一致となっている。例 32)では、「傲慢に振る舞う」は聞き手の現実世界の行動であるが、心的世界は「何より臆病者」である。

以上の例 28)、29)、32)には前件と後件には、R と T が直接的な相反関係となっているが、例

30)、31)では、内心の考えを外見に出さない、あるいは出せないで、内と外の不一致が読み取れる。

### 2.3.1.3 時間軸における前後不一致

内と外、という共時的な出来事の不一致のほか、時間軸における通時的な出来事の不一致を表す文例もある。まず、時間軸において主題の人物の前後行為の不一致が見られる。

- 33) 「さっきまで弱気だったクセニ、ロイディ、ずいぶん自信家になったね」  
「これは自信ではない。客観的な傾向を評価している」 (『迷宮百年の睡魔』)
- 34) この前はあんなにあきれていたクセニ。こんなにあつけないと、調子が狂うな。  
(『この宇宙に地球と似た星はあるのだろうか』)
- 35) いろんなことに担ぎ出し、さんざん協力を頼んできたクセニ、いざとなったら全て引き上げようとする。 (『銀行狐』)

例 33)では、「さっきまで弱気だった」と「ずいぶん自信家になった」は時間的に前後して発生する事態で、「弱気」と「自信家」が対立している。例 34)では、「飽きれていた」と「あつけない」が対立している。例 35)では、「さんざん協力を頼んできた」と「全て引き上げようとする」は否定的継起関係となっている。例 33)、34)、35)とも、「さっきまで」、「この前」、「いざとなったら」のような時間を表す語彙マーカーと共起する例が見られる。



図 64 時間軸における前後不一致

図 64 のように、時間軸においては、主題の人物（あるいは聞き手）は、前件と異なる、あるいは対立する行動をとっている。「クセニ」文では焦点は前件にあるので、前件から後件への変化に対して、話者は違和感を感じている。

前後する時間における行動の不一致のほか、取り立てられた時の行動と普段の行動の不一致も見られる。

- 36) 普段、自転車なんてほとんど乗らないクセニ、選挙の時ばかり襷を付けてママチャリだ。  
(『大人の自転車ライフ』)
- 37) 子供たちは、毎日のように遠慮なく騒いだクセニ、今日はみんな申し合せたように無口だった。  
(『あした来る人』)

例 36)、37)のように、「普段」、「平日」のことを前件で取り上げ、後件の非常性を述べる文例も見られる。36)、37)を「ノニ」と言い換えると、「前件をそのまま発生してほしい」という気持ちになるが、「クセニ」の場合は、主題の人物はいつもの通りではなく、変わっている行動をしている

ることに対し、違和感を述べている。

以上ののように、資格と展開の不一致と、内と外の不一致の時間軸における前後の不一致を見た。この他にも、「クセニ」文では、異なる ID における主題の人物の異なる態度も表されるが、例だけ示すこととする。

38) 変なところに神経質なクセニ、こういうことになると大胆なんだもん。

(『愛さずにはいられない』)

例 38)のように、「変なところ」と「こういうこと」は異なる ID となるが、話題人物は「神経質」と「大胆」という、相反する態度でとらえている。これは、異なる ID における話題人物の態度、と見なされる。

以上は、コーパスから前後の不一致が最も多く観察された文例である。また、ほかの接続機能辞と異なり、「クセニ」には、否定的累加関係も現れる。

### 2.3.2 否定的累加関係

以上の不一致だけでなく、内心の考えが表出できなく、内心と行動が一致しない、意志の不実現を表す「クセニ」も見られた。

39) うちの責任じゃないんですよ。あいつは欲張りのクセニ不用心でね。 (『血族』)

40) 愚かなクセニ虚栄心の強い動物となってしまったと彼は主張するからである。

(『人獣戯画の美術史』)

41) 無器用なクセニ気無精だから、イデオロギーのある作品は書こうにも書けるはずがなかった。

(『酒のかたみに』)

42) 悪戯なクセニ、大飯食いばかり揃っていて——ははははは、まあ君だからこんなことまでも御話するんだが、まさか親の身として、そんなに食うな、三杯位にして節えて置け、なんて過多吝嗇したことも言えないじゃないか。

(『金閣寺』)

例 39)では、「欲張り」も「不用心」もマイナス評価なため、否定が累加しているといえるだろう。否定的累加関係として、例 40)、41)、42)も挙げられる。「愚か」、「不器用」、「悪戯」、三者ともマイナス評価で、「虚栄心が強い」、「気無精」、「大食い」を加え、さらに、叙述の主語への話者の気持ちが強く読み取れる。

否定的累加関係を表す「クセニ」は、図 65 のように示される。R と T は同じ ID (例えば、マイナス評価) に属しているが、R と T が累加的関係となることから、認識過程は R+T の効果となっている。したがって、累加的効果の ID がプロフィールされている。



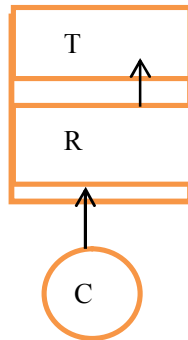


図 65 否定的累加関係を表す「クセニ」

### 2.3.3 倒置・省略用法

「ノニ」文と類似し、「クセニ」にも倒置・省略用法がある。前掲した資格と展開の不一致の類似している用法として、「クセニ」の倒置用法は、〈資格の喪失〉を表していると考えられる。以下にその実例を見てみよう。

#### 2.3.3.1 資格の喪失

- 43) 知らん顔どころか中国・韓国の尻馬に乗って日本政府を非難した—自分たちの誤報が原因だったクセニ。 (『紳士と淑女』)
- 44) 何よ。へんな真似をして。吃りのクセニ。
- 45) 見ろ。たった三枚だ。君のとこの和尚の渋いことはどうだ。学生同士の貸し借りで、利子などということは認めないというんだ。自分はさんざん儲けてやがるクセニ。
- 46) 何だ。ちっとも出て来ないクセニ。 (『破戒』)
- 47) どうしてそんなことを思ったんだ。近ごろ会ったことも無いクセニ… (『青春の蹉跎』)

例 43)~47)は、「クセニ」が文末に用いられており、倒置文となっている。例文の前半には、「クセニ」の後件に相当する内容が表れている。以上の例を還元すると、それぞれ「自分たちの誤報が原因だったクセニ、日本政府を非難した」、「吃りのクセニ、変な真似をする」、「自分はさんざん設けてやがるクセニ、貸してくれたお金はたった三枚でした」、「ちっとも出てこないクセニ何だ」、「近頃あったこともないクセニどうしてそんなことを思ったんだ」となるだろう。これらの文では、資格と展開の不一致が観察される。このことから、倒置文では、前件にその不一致な展開を述べ、あるいはその展開について非難して、後件でその展開には、資格がないことを示す。このような文を、「資格の喪失」と呼ぶこととする。

#### 2.3.3.2 短絡的な結びつき

省略表現の一つ特徴的な場合には、短絡的な結びつきがある。

- 48) 見た目は、生クリームとかフルーツがゴテゴテしたようなパフェが似合いそうなクセニ、

詐欺だろう？」 …俺は、その『生クリームとかフルーツがゴテゴテしたようなパフェ』  
が大好きだ。 (『半熟たまごのレジスタンス』)

例 48)では、「見た目は…パフェが似合いそう」が「クセニ」の前に表れているが、「クセニ」の後に、「詐欺だろう」という、話者の評価や判断や詰問が現れる。後件は短絡的結びとなるが、実際「クセニ」文の省略された元来の後件は「実は…/実際は…」という「見た目」との不一致を表す文となることが予想できる。

#### 2.3.4 「クセシテ」に関する考察

「クセニ」とほぼ同じ表現として、「クセシテ」もあるが、先行研究には、「クセシテ」に関する記述がほとんどみられなかった。本研究の調査でも、17件しかヒットしなかった。そのほとんどは会話文に用いられ、「Nのクセシテ」が主な形式となる。資格と展開の不一致、あるいは資格の喪失、さらに、異なるIDにおける話者行為の不一致も表せる。「くせしてからに」の「からに」は関西方言である。

49) 「何よ。男のクセシテだらしないわね。」 (『ロシアンルーレットの女』)

50) 「お竹はん、若いクセシテからに、なにを辛気臭いことをいうてはりますねん。」  
(『見えない橋』)

51) 「あいつ、このところ毎晩くるわ。あの背の低い男—ぜんぜんリズムに乗らないクセシテ—」  
(『過ぎて行く歌』)

52) 自分なんて、パチンコでいっぱいするクセシテ、クレジットカード1枚作れないもんな。  
小心者で。 (『Yahoo!知恵袋』)

例 49)、50)は資格と展開の不一致であり、例 51)は資格の喪失を表している。例 52)は異なるIDにおける話者行為の不一致である。機能的には「クセニ」と類似していることから、「クセシテ」の部分は例のみを示す。

#### 2.4 結語

本節では、「クセニ」文を分析した。「クセニ」文では、前件・後件とも事実であり、この点で、前掲した接続機能辞とは異なり、さらに、「クセニ」文には、非難という間主観性が常にある。したがって、物語文以外の場合には、非難を受け止める対象が常に存在している。先行研究では、「主語の一致が要求される」、「自然現象が前件に現れない」と主張されているが、本研究では、非難する対象がある場合、「クセニ」を用いることができる、という結論に達した。「クセニ」文に頻繁に見られる傾向として、後件は、前件のフレームから逸脱しており、話者に違和感を与えている。この違和感は、いわゆる「不一致」によるもので、例えば主題の人物の振る舞いにおける不一致、前後件における態度差、普段と不一致、いずれも話者の非難する態度が見られる。

最後に倒置、省略表現は、短絡的結びつきで話者の評価が後件に来る場合と、倒置文で話題人物にはその振る舞いに相応する権利・資格がないという非難の主観性も見られる。

表 11 「クセニ」文とその特徴

| 用法        |              | 例                           | R と T の関係                         | 事実性          | 文の機能（主観性）           |
|-----------|--------------|-----------------------------|-----------------------------------|--------------|---------------------|
| 不一致       | 資格・定義と展開の不一致 | 17)                         | 身分 R とそれと相応しくない振る舞い T             | R、T 共に<br>事実 | フレームからの逸脱を示す        |
|           |              | 21)                         | 定義 R とそれと相応しくない表現                 |              | 対立する性質の共存を表す        |
|           |              | 24)                         | 資格 R とそれと相応しくない現実結果 T             |              | 後件結果の不適格を示す         |
|           | 内と外の不一致      | 28)                         | R と T が分別して心的世界と現実世界にある           |              | 前件 R と一致する T を求めている |
|           | 時間軸における前後不一致 | 33)                         | 話題人物の過去の振る舞い R と現在の振る舞い T が相反している |              | 前後振る舞い不一致の非難        |
|           |              | 36)                         | 現状 T と普段の表現 R の不一致                |              | 普段と異なる現状の違和感        |
| 話題人物の差別態度 | 38)          | 異なる ID における話題人物の態度 R、T の不一致 | 差別態度の非難                           |              |                     |
| 否定的累加関係   | マイナス表現の累加    | 39)                         | R、T 共にマイナス評価                      | R、T 共に<br>評価 | 非難プラス非難             |
| 倒置・省略用法   | 資格の喪失        | 43)                         | R、T の位置の倒置                        | R、T 共に<br>事実 | 非難                  |
|           | 短絡的結びつき      | 48)                         | 元来の後件 T が省略され、話者の評価 T が短絡的結びつきとなる | R が事実        | 評価が T となる           |

### 3. <共存的逆接>を表す逆接構文

#### —「ナガラ (モ)」「ツツ (モ)」文の成立—

#### 3.1 はじめに

事実系逆接構文には、「ナガラ」「ツツ」があり、これらは、〈付帯状況〉、〈同時並行〉だけでなく、逆接も表すことができる。「ナガラ」「ツツ」は、他の接続助詞と互換可能である場合で不可能である場合がある。

- 1) 日本は今、世界で最も発展している国の一つであり**ナガラ**、伝統文化が依然として失われていないことに、私が驚いています。 (『広報なごや』第3版 1998年2号)
- 1-a)\* 日本は今、世界で最も発展している国の一つ**デアッテモ**、伝統文化が依然として失われていないことに、私は驚いています。 (陳 1999:163)

例1)は生の言語資料の内容であるのに対し、例1-a)は、陳の作例である。陳(1999:163)は例1-a)を適格文としている。しかし、例1)の「ナガラ」を「テモ」とは互換できないことが考えられる。すでに「テモ」系の章節で説明したように、「テモ」文の特徴として、前件の条件が変わっても、後件結果が変わらないということにある。1-a)では、条件の変化が見られないので、「テモ」を用いることができないと考えられる。

本節では、「ナガラ、ナガラモ、ツツ、ツツモ」を対象に、今までの先行研究を踏まえながら、「主観性」の視点から分析を展開したい。以下、「ナガラ」文の先行研究を参照し、逆接の「ナガラ」の特徴を見出す。

#### 3.2 先行研究の検証

南(1974:128)では、前件の独立度については、逆接の「ナガラ」はやや陳述的、つまり文としての独立度のやや高いB類となることが指摘された。また、森田(1980:357)では、「ナガラ」には、同一主体の動作の同時進行の使い方のほかに、動詞、動詞+「テイル」の連用形、形容詞の連体形、形容動詞や副詞の語幹、体言、「～ナイ」などについて、その状態や状況にふさわしくない事態や事柄が同時に存することを示す逆接の「ナガラ」が存在していると述べられている。

牧野・筒井(1995:202)では、逆接の「ナガラ」は、「現実(現在または過去)に二つの相反することがらが併存する状態を観察し描写する言い方なので、主語は第三者である場合が多い」とされている。佐藤(1997:64)では、付帯状況及び逆接を表す「ナガラ」節を取り上げ、両方の共通する点を二つにまとめた。一つ目は、ナガラ節の主語は必ず主節の主語と一致していなければならない。二つ目は、主節とナガラ節の事態は同一の時間間隔を指示していなければならない。また、非難・詰問の文脈では「ナガラモ」は不適切であると指摘され、その点で「ツツ、ツツモ」も同様、否定的な文脈では「ツツ」の方が自然であり、「クセニ」と互換可能とされている。

「ツツ」、「ツツモ」に関する先行研究は少ない。まず、辞書の記述で「ツツ」と「ナガラ」の区別を見てみる。『新明解国語辞典』では、逆接の「ナガラ」は、「前件と後件とが相容れない関係にあることを表す」とされている。また、「ナガラ」は、「造語」として、「一般に両立すること

が不可能と思われるものが、その場面では事実として実現していることを表す」と「満足は出来ないものの、容認することを表す」の二つの機能を持っている。これに対し、逆接の「ツツ」は、多くは「モ」を伴って、「両立しにくい前件と後件とがともに成立することを表す」とされている。

### 3.2.1 「ナガラ」の共存性

堀川(1994:36)は、同時動作と逆接の意味のナガラ節の双方に共通する基盤は、「共存性」であるとし、二義のいずれを選択するかは、時間的共存性の有無が決定しているとしている。つまり、時間的共存性の場合、〈同時性〉を表すのに対し、非時間的共存性の場合、〈逆接性〉を表すとしている。共存性がどのような側面において保持されるのかが、ナガラ節の表す意味を決定するということになる。

2) チョコレートを食ベナガラ、痩せたいとこぼす。 (堀川 1994:36)

例2)において、「チョコレートを食べる」と「痩せたいとこぼす」は、同時に発生している。しかも、「チョコレートを食べる」と「痩せたい」は意味上矛盾(〈言動の不一致〉)となっている。つまり、同時進行の場合にも、相反する意味を持つ表現が来る可能性があると判断できる。

次に、前掲の1)をもう一度検討してみよう。例1)では、「日本は今、世界で最も発展している国の一つである」→「伝統文化が依然として失われていない」という内容であった。

「最も発展している国」と「伝統文化が失われる」とは、必然的な因果関係が見られない。おそらく、「発展している」は「現代」的な要素で、それが「伝統」とある意味で対照しているので、対比的逆接関係を成しているだろう。「ナガラ」文には、「共存」を表す機能があるので、そのまま「テモ」と置き換えると、文が不自然に読み取れる。例1)では、日本において、「現代」的な要素と「伝統」的な要素が共存している、ということが読み取れる。

一つの事物には、対立する性質が共存していることが多々ある。「ナガラ」文で表す逆接は、このような機能が果たしている。

### 3.2.2 「ナガラ」文に含意される予想

睦(2001:85)は、ナガラ節を「共起的なもの」と「継起的なもの」とに分類している。睦(2001:85)は、3)を挙げ、それは同時進行として解釈できず、常に逆接の意味になると説明している。

3) 太郎は電話ボックスまで歩きナガラ、そのまま帰ってきた。 (睦 2001:86)

例3)では、前件Rと後件Tが継起的であり、共に〈太郎が完成した動作〉と理解できる。前件Rと後件Tが〈太郎が完成した動作〉ということから、RとTが共存していることがわかる。「同時性」を持たなくても、RはTと共存していることが読み取れる。

次に、例3)の「ナガラ」を「モノノ」、「ノニ」、「ニモカカワラズ」が互換できるかどうかという角度から、「ナガラ」の表出機能を検討してみる。「電話ボックスまで歩く」ということから、「誰かに電話するでしょう」と予想されたが、結果は何もせずに「そのまま帰ってきた」という

ことである。例3)の「ノニ」は、「モノノ」と「ノニ」と共に互換可能であろう。

例3)の前件と後件はともにすでに発生している事態である。「ノニ」と置き換えると、前件の努力と相応しくない後件が発生したという意味が読み取れる。そして、「ノニ」を用いると、前件から「期待」が強く読み取れるが、「モノノ」の場合はこの「期待」は読み取れない。「モノノ」で置き換えると、ただの継起的出来事を述べているより客観的に見られる。図66のように、「ナガラ」を用いる場合、前件と後件は相反的な関係となっているが、「電話ボックスまで歩く」「帰る」という前件、後件の内容共に「太郎」は達成している。しかし、クエスチョンマークで示された予想「誰かに電話するでしょう」は実現しなかった。したがって、事態の両立だけではなく、逆接の「ナガラ」文には、予想も含意されている、といえるだろう。

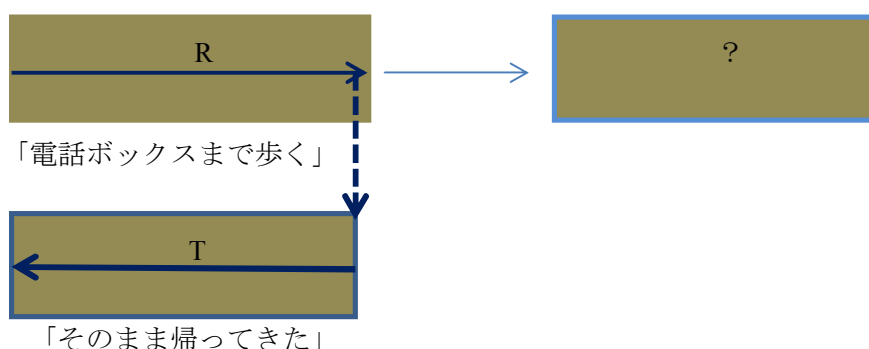


図 66 「ナガラ」文の継起的前件と後件

### 3.2.3 同時性と不相応性

陳(1999)は、「ながら」の使用を〈同時性だけ〉、〈同時性と不相応性の両方を表す〉、〈不相応性だけ〉の三つに分類した。〈同時性と不相応性の両方を表す(同時進行の逆接)〉例として、例4)、5)、6)、7)を挙げている。

- 4) 海外で活躍できる「人材」が必要と言いつつながら、そうした人材が自然に育つのを待つのでは、とてもではないが間に合わない。(陳 1999,163:『世界が見える日本が見える』)
- 5) 彼の車は小さいながら乗り心地は快適だ。
- 6) あのレストランは低額ながら美味しい料理が揃っている。
- 7) 彼女は小学生ながら、大人顔負けの演技をする。(陳 1999:163)

例4)には、「人材が必要と言いつつながら、人材が自然に育つのを待つ」という〈言動の不一致〉が観察される。言っていることと実際やっていることは相反関係となっている。〈言動の不一致〉が表せる「クセニ」文に、例5)は言い換えられるが、「ナガラ」が着目している点は前後の矛盾している事態の両立であり、「クセニ」の表出機能は前件との不一致への非難と見なされる。例4)の前件と後件は対等的な相反関係で、前件と後件は対等的な相反関係で両立している。そして、例5)、6)、7)では、際立ての部分は、後件のほうにある。

池上(1997:22)によれば、「ナガラ」文には、前件・後件はそれぞれ〈プラス評価〉、〈マイナス評価〉の形で現れ、前件を認めながら、後件で消極的な容認を示す、とある。上に挙げた例から、

「小さい→快適だ」。「低額→美味しい料理に乏しいことはない」。「小学生→演技は大人に負けない」は、池上(1997:22)の観点が証明されている。例 6)、7)は、〈消極的な容認〉よりも、R の資格判断から予想できない展開 T が示されていると考えられる。この点で「クセニ」と類似しているが、「クセニ」の前件の際立て対し、例 6)、7)のような「ナガラ」文では、後件が際立たされる。つまり、資格超過の展開に否認するか承認するかの点で、「クセニ」と「ナガラ」は異なっている。陳(1999:167)は、〈不相応性だけを表す〉例として、8)、9)を挙げている。

- 8) とみは、友子が異常な事故に遭いナガラ、比較的落ち着いていることに疑いを抱いていなかった。(陳 1999,167:『ガラスの階段』)
- 9) 2 発目のストロボを浴びた時、自分も視力を失いナガラ反射的に少尉に飛びついたクヴィヨン曹長が彼の身体を押し倒していなければ、パジュリ少尉は確実に失明していただろう。(陳 1999,167:『遠い海から来た COO』)

例 8)と 9)では、後件が成立するために、前件が不相応であるが、両者が共存していることが見られる。前件が提示されている状況の下、それと相反して後件の行動を際立たせる機能を持っている。例 8)では、「異常な事故に遭った」ことから、「比較的落ち着いている」はずはないが、それにも関わらず、前件と後件がともに成立する。前件 R から推論が働くが、推論の結果と相反し実際の結果 T が存在し、R と T が共に両立している。「疑いを抱いている」のスコープは、「ナガラ」文の文全体だと考えられる。例 9)では、「自分の視力を失って」いながら、「少尉の身体を押し倒している」ことは通常、不可能だと予想されるが、それにもかかわらず、前件の状況の下、後件が成立している。例 8)、9)のような「ナガラ」文は「ノニ」文と言い換えられる。「ノニ」を用いる場合、後件の不合理性が述べられる傾向にあるといえる。

さらに、「ナガラ」は主節と従属節の事柄の不相応性を表す働きがあるが、「ナガラ」は「同時性だけ」と「同時性と不相応性の両方」を表すので、「モ」をつける事によって(「ナガラモ」)不相応性が強められる、と陳(1999:167)が指摘している。

江田(1985:153)では、「ナガラモ」も取り上げられて、前件と後件はこれかあれかでなく、これでもあるが同時にあれでもあるという関係なので、重なる部分が大きい例では「モ」を取ると同時進行とも読めるとされている。

筆者の考えでは、「モ」は同類提示の機能があることから、「モ」によって取り立てられた前件以外、同じ結果を導くことができる同類が存在していることが提示されている。両立だけに着目する「ナガラ」文(前掲例 4)を参照)では、前件、もしくは後件に焦点があてられるということは存在せず、「ナガラモ」と言い換えることは難しいが、前件より後件を際立たせる「ナガラ」文では、「ナガラ」と「ナガラモ」は互換できる。

### 3.2.4 「ナガラ A」と「ナガラ B」

池上(1997:18)では、「ナガラ」は、「ノニ、モノノ、ケレドモ」とともに、すべて既定の事柄を述べている前件(従属節)と、それとは内容的対立する事柄を述べてる後件(主節)を結びつける、いわゆる逆接確定条件を表す接続助詞とされている。また、「ナガラ」は大きく、二つの用法

があるとしている。一つ（ナガラ A）は、主体 P が X という動作をしている、または X という状態にあるとき、普通なら P は Y をする、または Y になる筈なのに、そうっていないことを示し、そのことに対して意外、非難、不満、遺憾、不本意、称赞といった感情を表明する場合である。もう一つ（ナガラ B）は話者が前件の状態 X をマイナス（またはプラス）の評価を表すものとして捉えつつ、しかし同時に一方で、X に関連したことがら、（または X 自身には）、Y というプラス（またはマイナス）の面もあることを示す使い方である。前者は常に「ノニ」と置き換えられるが、後件は常に「モノノ」と言い換えられる。

池上が言う「ナガラ A」は、常識による推論的逆接であるが、「ナガラ B」は、フレーム概念を超過する展開の逆接と見なすことができる。「ナガラ A」の例として、10)が挙げられる。

10) 彼は、立派な大学を出てい**ナガラ**、まだに就職できない。 (池上 1997:22)

「立派な大学を出る」ことから、「いい就職ができる」と予想される。だが実際は、「彼」は、「いまだに就職できない」状態にある。「立派な大学の出身」で、「まだ就職できない」ことが、予想されない事態と、現実が共存している。「立派な大学の出身」という身分でありながら、「就職できない」という結果となることは、「ナガラ」によって、共存性が示される。

例 10)は「ノニ」文や「クセニ」文と言い換えられる。ただし、「ノニ」、「クセニ」は反期待という強い主観性が現れているのに対し、「ナガラ」文の場合では、共存性を示す客観的な叙述が読み取れる。

「ナガラ B」の例として、池上(1997:22)は例 11)~15)を挙げている。

- 11) いけないと思**ナガラ**モ、つつい甘いものを食べてしまう。
- 12) よくわからない**ナガラ**モとにかく書いておいた。
- 13) 貧しい**ナガラ**モ幸せな生活を送った。
- 14) わずか**ナガラ**モ毎年給料が上がる。
- 15) 新人**ナガラ**モなかなかの活躍だ。 (池上 1997:24)

例 11)から、例 15)まで、〈不適格と思ながらも容認する〉という話者の捉え方が観察される。例えば、11)では「行けない」から、「食べないのをやめたほうがいい」と相反し、「つつい甘いものを食べてしまう」という結果となっている。12)では「よくわからない」状況の下では、「書かないほうがいいかもしれない」。それに相反し、「とにかく書いておいた」。「貧しい」、「わずか」、「新人」とは、満足できない条件であるが、後件の展開には、話者は容認する姿勢を示している。

「ナガラ」は、順接、逆接両方で用いられる。また、「ナガラ B」は「ナガラモ」の形を取ることが多い。「ナガラ B」が消極的容認という意味を担っているので、「ノニ」とは置き換えられない。(池上 1997:22)

筆者の考えでは「ノニ」文は、後件に不満をこぼすタイプであるので、満足出来ない点は前件に現れない。それに対し、「ナガラ B」文は、前件からある欠点を認めた上、消極的な容認を後件で表すから、この点では「ノニ」と異なっている。



この点では、「ナガラ」は「ノニ」ほど話者の主観性を表せず、適当な語句で補わなければ同時進行や「モノノ」と相当の「ナガラ」に解釈されてしまうことが多いとも指摘されている。例 16) を参照しよう。

16) \*勉強しナガラ、全然上手にならない。

16-a) 勉強しているノニ、全然上手にならない。

(池上 1997:24)

16)のナガラが不適當の理由は、主観性だけではなく、前に接続する動詞の継続性である。前件の「勉強する」は継続動詞であるから、「ナガラ」が用いられると同時進行と思われがちである。しかし、後件は同時進行の条件を満たされないので、非文である。

先行研究を概観すると、逆接の「ナガラ、ナガラモ」は同時に存在する相応しくないことを示したり、十分に話者の主観性を表せないことが指摘されてきた。本節では、「主観性」の視点で「ナガラ、ナガラモ、ツツ、ツツモ」の四つを考察する。

### 3.3 実例による考察

「ナガラ (モ)」「ツツ (モ)」の実例調査した結果、「ナガラ」は 32013 件ヒットした。そのうち同時進行の件数を取り除き、関連形式も取り上げて見ると、図 67、68 のように統計結果が得られた。

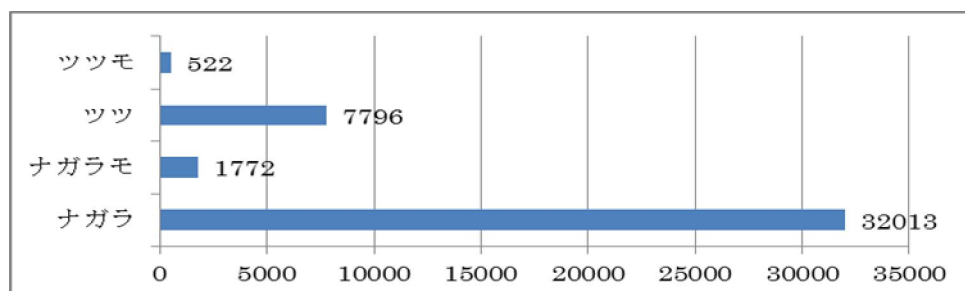


図 67 「ナガラ (モ)」「ツツ (モ)」の使用調査

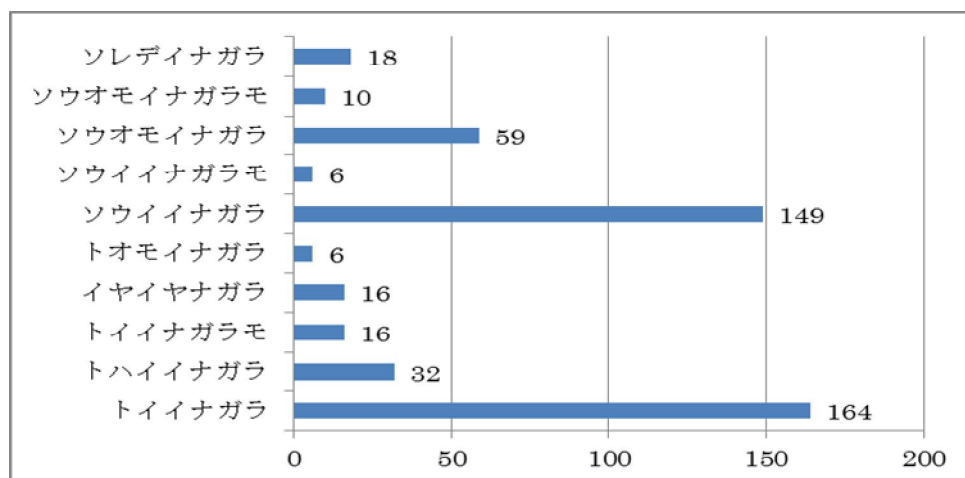


図 68 「ナガラ (モ)」「ツツ (モ)」の関連形式の使用調査

### 3.3.1 対比的逆接に多用される「ナガラ」

「ナガラ」文を実例考察した結果、「ナガラ」は、対比的逆接に多用される傾向が見られた。まず、前掲した対比的逆接論理文に多く現れている形式は、「ナガラ」文の文例にも見られる。例17)、18)、19)を参照されたい。

#### 3.3.1.1 内と外の対立から読み取れる登場人物の矛盾

- 17) 妻はもうだいぶ前から自分の浮気に感づいて**テイナガラ**、わざと見てみぬふりをしているのではないかと、ぼんやり想像していたのである。 (『アンナ・カレニーナ』)
- 18) 文句を思い出そうと苦しみ**ナガラ**、ばかげた唄をうたいだすのだった。 (『罪と罰』)
- 19) これではとても出て行くわけにはいかないことを十分承知し**テイナガラ**、それでもなお、彼女は自分の気持を偽って、荷物の整理をし、家を出て行くふりをしていたのである。 (『アンナ・カレニーナ』)

17)、18)、19)の前件と後件には、内と外の対立が見られる。



図 69 内と外の対立 (一例)

図69で示したように、例17)では、「浮気に感づいている」と「見て見ぬふりをしている」という「妻」の内心と外見の対立が見られる。前件と後件は矛盾しているが、共存している。例18)、19)も例17)と類似する。18)では、内心では「文句を思い出そうと苦しむ」が、外見は「ばかげた唄をうたいだす」ことである。19)では、内心では「十分承知している」が、外見では「家を出たふりをしている」。内と外の対立の共存は、小説などの登場人物の矛盾した言行が描かれている。「クセニ」文にも、内と外の対立が挙げられるが、「ナガラ」は共存に着目しているのに対し、「クセニ」は不一致を際立てている。

#### 3.3.1.2 事柄の矛盾する両面を示す「ナガラ」

例20)、21)では、RとTが直接相反関係を成している。

20)ゲームの渦中にあり**ナガラ**、ゲームとは別の存在に見えた。

21)地図の使い方は、非常に簡単であり**ナガラ**非常にむずかしいものなんだ。 (『孤高の人』)

例20)には、話者が置かれている立場「ゲームの中にいる」と、話者の感覚「見える」の不一致が観察されるこれは、前掲17)、18)、19)と異なり、登場人物の意志による〈言動不一致〉とは異なるといえるだろう。また、例21)にも矛盾感が見られる。「簡単」と「難しい」は相反関係となっており、「地図の使い方」は、「簡単」と「難しい」両方に捉えられる。実際、21)の意味は、

「使い手」によって簡単になったり難しくなったりはするが、地図はこのようなもので、使い手次第なものだと示している。

### 3.3.2 後件を際立たせる「ナガラモ」

前掲した「モ」節ですでに説明したように、「モ」は、前件で明示化されている内容以外にも、同じ後件結果に導かれる要素がある、ということが暗示されている。「ナガラ」は共存に着目しているが、「ナガラモ」の場合には、主観的表出は後件にあると考えられる。

まず、対比的逆接と見なされる「ナガラモ」文を分析する。

#### 3.3.2.1 対比的逆接に見られる「ナガラモ」

例22)~27)では、RとTは直接的な対照関係を成している。

22) 彼等は外山教官の思いやりのある処置に対して喜び**ナガラモ**反射的に影村を代表とする一部教官の冷酷な面を思い出したのである。

23) とお万阿は、うれしい**ナガラモ**庄九郎が気の毒になってしまった。 (『国盗り物語』)

24) オブロンスキーは彼のそうした点を笑い**ナガラモ**、それを愛していた。  
(『アンナ・カレニーナ』)

25) だが、疑い**ナガラモ**、心の底では女を信じていた。 (『四人狂時代』)

26) ふたりは互いに理屈では相手の仕事を認め**ナガラモ**、心の中ではそれを軽蔑しているのだった。  
(『アンナ・カレニーナ』)

27) フェランテは視線に気づき**ナガラモ**、あえて無視し、あごをもちあげ口もとをひきしめた。  
(『スピリット・リング』)

28) いい加減な出たらめをしゃべり**ナガラモ**、北村は眼を周囲に配ることは忘れなかった。  
(『孤高の人』)

例22)では、「冷酷」が引き起こす情緒（恐怖など）と「喜ぶ」は、それぞれの背景となるIDが相反関係となっている。このように、「外山教官」と「一部の教官」の態度が対立しているが、対立している面から想起関係が引き起こされ、「モ」により後件が際たてられている。

例23)、24)は一人が持っている矛盾した感情を表している。「うれしい」と「気の毒になる」、「(人)を笑う」と「(人)を愛する」は、矛盾した感情に見受けられる。また、「モ」によって、取り立てられる部分は後件のほうにあることから、「気の毒になる」と「(人)を愛する」は際立たされている。

例25)も例23)、24)と類似している。ただ、矛盾の表し方は、直接的な相反関係となっている。つまり、「疑う」と「信じる」が語義的に対立している表現である。主人公の矛盾している感情が表されているが、「モ」によって後件の「信じる」が話者の考えを示している。

例26)、27)、28)では、前件と後件の内容は、相反関係となっている。また、前件、後件の背景には、内・外のID間の対立が観察される。

例26)では、外における表現は「認める」が、心の中は「軽蔑している」。例27)では、実際は

「視線に気付いた」が、外見は「無視する」ように見られる。

例28)では、外見は「でたらめをしゃべっているが」、内実は「眼を周囲に気配ている」。このように、内と外における対立に共存が見られるが、「モ」によって、前掲した例と同じく、文の焦点は後件の方にある。

### 3.3.2.2 非対比的逆接に見られる「ナガラモ」

29) 「神人」の株をもらっている身で、富商**ナガラモ**、山崎の神人どもには頭があがらなかった。  
(『赤と黒』)

例 29)では、「ナガラモ」は、名詞に接続している。「神人」の株をもらっている身で、富商である、という身分から、「山崎の神人どもに頭が上がらなかった」という結果は予想さにくいだが、後件は依然として成り立っている。前件の身分と相応しくない事態が発生し、前件資格の不適合が観察される。例 33)は「ナガラ」に言い換えられる。

29-a) 「神人」の株をもらっている身で、富商**デアリナガラ**、山崎の神人どもには頭があがらなかった。  
(作例)

例 29-a)と例 29)を比較してみると、「ナガラモ」文は後件成立の必然性を際立たせるのに対し、「ナガラ」は、前件と相応しくない事態の説明となっている。名詞だけではなく、前件に状況を提示し、それと相応しくない事態の発生を述べる「ナガラモ」文が挙げられる。

30) 彼は自分の非行をあばかれ**ナガラモ**、そうした新しい事態にふさわしい顔つきを妻にすることができなかったのである。  
(『アンナ・カレニーナ』)

例 30)では、前件に「彼は自分の非行を暴かれる」という状況を提示している。また、後件では、それと「相応しい顔つきを妻にすることはできなかった」ということがわかった。前件の状況下と相応しくない事態の発生が、「ナガラモ」によって述べられている。また、「ナガラモ」を用いる場合、「彼」は常に「新しい事態にふさわしい顔つきを妻にすることができない」という習慣がある、と理解できる。例 30)の「ナガラモ」を「ナガラ」に置き換えてみる。

30-a) 彼は自分の非行をあばかれ**ナガラ**、そうした新しい事態にふさわしい顔つきを妻にすることができなかったのである。  
(作例)

例 30-a)は共存する逆接関係「彼は自分の非行をあばれる」と「新しい事態にふさわしい顔つきを妻にすることができなかった」の事態を示す文となっているが、「ナガラモ」のような、常に後件を導く特徴はない。「ナガラモ」には、さらに感情を表す成分に接続する場合は挙げられる。

31) Kは嫉妬から発した批判の声を悲しみ**ナガラモ**、「蔵を建てると隣の腹が立つという譬えもある。気にしないことだ」と上司から励まされ、がんばっている。

(『日本地図に賭けた人生』)

例31)では、「悲しみ」を表しているが、この感覚の下で、後件事態が発生している。つまり、Kは「悲しみ」をかかえながら、「頑張っている」ている。「ナガラモ」を用いると、Kさんは常に仕事に頑張っている姿が読み取れる。身分や事態の状況提示、および感情を表す成分の状況提示のほか、社会環境における状況提示の例もある。

32) しかし戦時中に大躍進したわが国の産業界は、戦後の景気の反動を警戒し**ナガラモ**、いぜん好況を続け、なかでも三品市場（綿花・綿糸・綿布の市場）では大量の「先物取引」が行われていた。

(『トヨタ成長のカギ』)

「景気の反動を警戒する」状況の下、大量の「先物取引が行われていた」という成果が収められた。不利な状況にもかかわらず事態の発展が進んでいる、という前後件関係が読み取れる。

以上のように、「ナガラモ」文では、後件成立の必然性が「モ」によって際立たされていることがわかる。

### 3.3.3 「ナガラ」のほかの関連形式

「ナガラ」、「ナガラモ」だけではなく、ナガラの関連形式として、「イヤイヤナガラ」のような慣用表現、「トイウ・トオモウ+ナガラ（モ）」「トオモイナガラ（モ）」の形式、さらに「ソウイイ・オモイナガラモ」「ソレデイナガラ」のような「指示詞+ナガラ」の形式が挙げられる。

#### 3.3.3.1 慣用表現

33) **イヤイヤナガラ**やっていると、そういうことになるのだ。

34) それに、遅かれ早かれ、なんら喜びを感じなくても、あるいは**渋々ナガラデモ**、虚栄心から、このお手本に従わざるをえなかったであろう。

(『孤高の人』)

「イヤイヤナガラ」は、事態進行の状況を提示しているが、「いやでやりたくない」気持ちで「やっている」ことがわかった。状況提示だけの機能を持っている。また、後件は常に導かれる結果ではないことから、この場合、「ナガラ」は、「ナガラモ」と互換不可能であると思われる。

「渋々ナガラ」でも「このお手本に従う」、慣れてないにもかかわらずそのようにする、「渋々」は、不利な状況として取り立てられている。「若輩ながら」「遺憾ながら」「僭越ながら」などもこれらの定型句的部類に含まれる。

#### 3.3.3.2 「トイウ・トオモウ+ナガラ（モ）」

「ナガラ」の関連形式として、「トイウ+ナガラ（モ）」の形式が挙げられる。

- 35) これからは見も知らぬ男が、役目トハイイナガラ、たえず自分と子供たちのあいだにはいることになると思うと、気が気でなかった。
- 36) きみたちとかきさまたちトカイイナガラ、その対象は加藤ひとりであった。(『孤高の人』)
- 37) だが、「きみの身体をみたい」というと、「困ったな」トイイナガラモ、「いいわ」という澄んだ声がした。(『渦の真空』)

例 35)、36)、37)に見られるように、「トイウ」によって提示される前件は、引用する内容である。つまり、ある言い方を取り上げ、後件でその言い方の不適格を示すのが「トイウ+ナガラ(モ)」文の特徴である。「ナガラモ」の場合では、前件と後件の矛盾が強く読み取れる。

一方、「トオモウ+ナガラ(モ)」の場合では、「思う」は実質的な意味を保ったままであるといえるだろう。

- 38) 書きたいトオモイナガラなかなか書けません。(『「知」のコレクターたち』)
- 39) 彼は煌々と灯りのともる新聞社の玄関前に、全裸のまま、なんの遮蔽物もなく放り出された。少し前、社会部にかかってきた怪電話に、いたずらトハオモイナガラモ玄関に出て来たカメラマンは、好個の被写体に向かってフラッシュを浴びせた。(『ガラスの恋人』)

例 38)では、「V タイ～V レ・ラレナイ」という文型が観察される。前件は状況提示の形で話者の希望を述べているが、後件でその希望の不実現が示されている。

例 39)では、「思う」の内容としての前件は後件の事実によって修正されている。「ナガラモ」は、逆条件と類似する前後件関係を示している。

### 3.3.3.3 「ソウイイ・オモイナガラモ」「ソレデイナガラ」

「ソウイイ・オモイナガラモ」の例では、〈言行不一致〉が表現されている。

- 40) 口ではソウイイナガラモ、そこを去らずに、執念ぶかく加藤のうしろ姿を見守っているのである。(『孤高の人』)
- 41) でも、ソウオモイナガラモ、「どれどれ」って感じで、つつい買っちゃうんですよ。(『書くマーケティング』)
- 42) ヤンキースの四番を任されるまでに成長した松井選手には、もはや風格さえ感じられる。ソレデイナガラ、インタビューに応じて毎日きちんと答える姿には、新人選手のような謙虚さもある。(『なぜ人は話をちゃんと聞かないのか』)

例40)、41)のように、「言う」、「思う」内容にもかかわらず、話者はそれと一致しない行動をしている。また、「指示詞+ナガラ」のもう一つの形式として、「ソレデイナガラ」が挙げられる。「ソレデイナガラ」は、接続語句として用いられている。また、「ナガラ」は「ナガラモ」と言い換えられない。「ソレデイナガラ」は、先行する文と後件の両立に着目している。

### 3.3.5 「ツツ」と「ツツモ」

実例を考察した結果、「ツツ」の逆接用法には、「言う」、「思う」、「知る」＋「ツツ」の用法が主であることがわかった。これらは、言っていることと思っていることの不一致、または、思っていることと現実行動の不一致を表している。

- 43) 私も知り合いには彼氏欲しい-なんて言いツツ、告白されても付き合いたいとは思いません。 (『Yahoo!知恵袋』)
- 44) 孤高であることはよいとしても、「孤高と言いツツ、実は、みずからの心の狭さを誇っている部分があるのではないか」ということです。 (『心の力が未来を変える』)
- 45) 23日はハリーポッターで忙しいけど、そこしか無いとか思いツツ、やっぱり避けたいで、21日は海の日で、海の日恒例のプールでしょうね。 (『Yahoo!ブログ』)
- 46) 飲めば窮るということは知りツツ、どうしても持った病には勝てないらしい。 (『破戒』)
- 47) 筆無精の私は、返事を書こうと思いつつ、ついつい返事が遅れた。 (『サラダ記念日』)
- 48) 父親は関係を信じツツモその事実となるのを恐れるらしい。 (『布団』)

例 43)、44)は共に、これらは、言っていることと思っていることとの不一致、または、思っていることと現実行動の不一致を表している。例 45)、46)は道理を認めて譲歩して、自分の意見を述べて居る。例 47)では、「Vウ・ヨウトオモウ」が前件に来ている。そして、やはり思うことと行動が一致していない。例 48)では、「ツツモ」の形式が見られる。「モ」を付け加えると、後件の成立が際立たされるので、「その事実となるのを恐れる」ことは、「関係を信じる」という前件のほか、後件に導く可能性が高い事態が存在していることを示している。「ツツ」は両立する事実を示すことができる点で、「ナガラ」と類似しているが、「ツツモ」と「ナガラモ」も後件成立を際立たせる機能を持っていることがわかる。しかし、「ツツ」には、接続上の制限もあり、また、文体上の制限によって多用されてないことで、「ナガラ」と異なっている。

### 3.4 結語

本節では、「ナガラ (モ)」、「ツツ (モ)」と関連形式を分析した。「ナガラ」文は、「同時進行」のスキーマにより、逆接を表す場合にも〈時間的共存〉から〈非時間的共存〉への拡張が見られる。実際は、〈時間的共存〉にも、逆接を表す場合がある。例えば「チョコレートを食べながら、痩せたいとこぼす」における二つの動作「食べる」と「こぼす」は、同時進行することは可能である。ただし、「チョコレートを食べると、痩せない」という常識による推論が含意されていることから、前件・後件は逆接関係となる。非時間的共存の「ナガラ」文は、主に逆接関係となっている前件・後件は共に成立している。「ナガラ」文では、前件・後件が対等な場合と、そうではない場合がある。前件・後件が対等な場合、「ナガラ」文は言行不一致や矛盾を表すが、前件・後件のどちらにも主観上の偏りはない。前件・後件が対等でない場合、主観性は後件にあり、消極的な容認や与えられた状況下の事態逆転などが表せる。「ナガラモ」文では、「ナガラ」文と同じように前件と後件が共に成立するだけでなく、後件成立の必然性が見られる。また、「ナガラ」の関連形式として、「イヤイヤナガラ」といった慣用表現、「トイウ・トオモウ＋ナガラ (モ)」「ソウ

「ナガラ」の形で前件の言い方、考え方による言行不一致や両立などが表される。「ツツ（モ）」は、前件と後件が両立していることを表せる点で「ナガラ」と類似しているが、文体上や接続上の制限で、「ナガラモ」ほど多くは用いられない。以上の分析結果を、以下の表 12 にまとめる。

表 12 「ナガラ（モ）」「ツツ（モ）」文とその特徴

| 用法                    | R と T の関係            | 事実性               | 文の機能（主観性）             | 例                 |            |
|-----------------------|----------------------|-------------------|-----------------------|-------------------|------------|
| 時間的共存                 | 逆接関係の R と T が同時進行中※1 | R、T とも事実          | 言動不一致を示す              | 2)                |            |
| 非時間的共存                | R と T が対等する事態※1      | R、T とも事実          | 内と外の不一致を示す※2          | 17)<br>18)        |            |
|                       |                      | R、T とも状態          | 事物の矛盾する両面を示す          | 21)               |            |
|                       |                      | 「ナガラモ」R、T とも事実である | 前件と矛盾して共存する後件の際立て     | 22)               |            |
|                       | R と T が対等しない事態       | R、T とも状態となる       |                       | 消極的容認             | 13)        |
|                       |                      | R が状況、T が事態       | 前件状況と相応しくない行動を示す※3    |                   | 8)         |
|                       |                      |                   | 前件状況 R と相応しくない事態の提示※4 |                   | 32)        |
|                       |                      |                   | 後件事態進行中の状態提示※5        |                   | 33)<br>34) |
|                       |                      | T が事実             | R が引用                 | 名目と実際の不一致を示す※6    | 35)<br>37) |
|                       |                      |                   | R が意志                 | 意志の不実現※7          | 38)<br>39) |
|                       | 先行文が事実               |                   | 前後不一致を示す※8            | 40)<br>41)<br>42) |            |
| R からの推論と反して T が成立する※1 | R、T とも事実             | 矛盾を示す             | 10)                   |                   |            |

※1 「ツツ」も用いられる。

※2 登場人物の心理と行動の矛盾を示す

※3 「ナガラ」の場合を指す。

※4 「ナガラモ」の場合を指す。

※5 慣用表現「イヤイヤナガラ」「渋々ナガラ」の場合を指す。

※6 「トイイナガラ（モ）」の場合。言動不一致も表せる。

※7 「トオモイナガラ（モ）」の場合。予想外も表せる。

※8 接続語句「ソウイイナガラモ」「ソウオモイナガラモ」「ソレダイナガラ」の場合を指す。



#### 4. 〈反期待・再吟味・場面の切り替え・事態の変化〉を表す逆接構文

##### —「モノノ」「モノヲ」「ノガ」「ノヲ」の成立—

#### 4.1 はじめに

「ナガラ」と類似し、「モノノ」がある。「モノノ」の前件・後件共に事実を表す。また、前件・後件とも成立し、逆接関係を成しているのが特徴である。この「モノノ」と関連し、「トイウモノノ」がある。また、「モノノ」と「モノヲ」をある程度類似する表現として取り上げられている。さらに、「ノニ」の展開として「ノヲ」、「ノガ」が挙げられるが、本節では、この一連の表現を考察してみる。

#### 4.2 先行研究の検証

以下、「モノノ」「モノヲ」「ノヲ」「ノガ」の順に、先行研究の検証を試みる。

##### 4.2.1 「モノノ」の意味機能

佐竹(1984:163)は、「モノノ」を形式名詞「モノ」に格助詞「ノ」が接続してできた接続助詞であるとし、その重点は後件にあり、留保・限定を付加的に提示するとしている。また、「ガ・ケレドモ」との対照を考慮し、「モノノ」は相反関係を述べる場合や前置きの場合には用いられると不自然になることも指摘した。伊丹(1999)は、「モノノ」は挿入句の性質があり、省略可能であることを明らかにした。

森田・松木(1989:122)では、「モノノ」は前件の内容を一応認めた上で、それとは対応しない、相反・矛盾した後件が次に展開することを示すとされている。「モノノ」は、確定を表し、前件の内容を認めながら、改めて吟味すれば問題があることを示すというのが特徴で、消極的な表現を受けることが多いとも述べている。

- 1) 一応約束したモノノ、やっぱり行けなかった。
- 2) 来ると言ってはいたモノノ、案の定来なかった。 (池上 1997:25)

池上(1997:25)によれば、例1)、2)のように、「やっぱり」「案の定」という再確認の意味の副詞と共起する点で、意外性が低い、という。

疑問文について、今尾(1994a)は「モノノ」文は話者の判断があった上で、相手に確認する文脈があれば発話可能と述べている。また、中里(1996)は、「モノノ」の文法的制約にも触れて説明をした。一方、池上(1997)は、「モノノ」は前・後件の内容をプラス+マイナス（またはその反対）の評価で捉えることを提出し、プラス+プラス、マイナス+マイナスの関係になるのは不自然であるとしている。この点で、「モノノ」は「ナガラ」と類似しているが、前件と後件が併存していないような場合、あるいは後件に意志・推量などが来ている場合、「モノノ」と「ナガラ」は置き換えられない。

- 3) 勧められて食べたモノノ、後で吐いてしまった。

4) 嫌がっていたモノノ、たぶんやるだろう。 (池上 1997:26)

また、池上(1997:26)は、「モノノ」は独立性が相対的に高いと指摘している。

5) 彼は毎日店を手伝いましたモノノ、頭の中では他のことを考えていたようです。

6) もうとしだからゆっくりではあるモノノ、大分上手になってきた。 (池上 1997:26)

丹羽(1998:27)は、「モノノ」を、自由対立型で、程度量型を表しているとしている。また、「P・Q 全体の中で、xの部分ではpであるのに対し、yの部分では~pである」と指摘した。

7) 京都南インター付近で二キロほど渋滞が見られるモノノ、その他はスムーズに流れています。

8) 八回まで無安打無四死球に抑えたモノノ、九回に速打を浴びた。 (丹羽 1998:28)

P・Q と合わせて「名神高速道路」全体の状況を表す中で、X「京都南インター付近」・Y「その他」が、全体の一部分と他の部分として捉えられるという点で、量的な対立を表している。(cf. 丹羽 1998:28)

9) ごく一部にトラブルがあったモノノ、全体としては滞りなく進んだ。 (丹羽 1998:28)

例9)では、前件と後件は例外と全体という関係を成している、と丹羽が指摘している。

また、「モノノ」のもう一つの用法は、XとYに程度差がある場合である。「ある程度・段階Xまでにおいては、Pであるのに対して、それより高い程度・段階Yにおいては、~Pである。(またはPとQが逆。)」(cf.丹羽 1998:28)

10) K点は越えたモノノ、あまり伸びなかった。

11) 骨に異常はないモノノ、捻挫がひどかった。

12) 調べてみたモノノ、わからなかった。

13) 大学は出たモノノ、就職がない。

14) 口には出さなかったモノノ、つらかった。

15) 学生だから大目に見てもらえるモノノ、社会人なら許されない。

16) 向こうで気が付いてくれたからよかったようなモノノ、とんでもないことになるころだった。 (丹羽 1998:29)

丹羽(1998:29)によれば、例10)~16)には、前件と後件には段階の差が見られる。

『大辞林』によれば、「モノノ」は接続助詞として、ある事柄や状態の存在または成立を一応認めながらも、それに対立する、またはそれにそぐわない事柄や状態が成立するというとき、前後の文を続けるのに用いる、とある。また、『新明解国語辞典』では、「モノノ」は事柄が全面的に容認されるわけではなく、一部にとどまること、または、それから先に事態が進展しないことを

表す、とされている。「モノノ」文では、前件と後件には包含関係、あるいは程度差が観察される。また、前件・後件とも事実となっている。捉え方の再吟味する過程が示されている。

#### 4.2.2 「モノヲ」

「モノノ」以外、「モノヲ」は「モノノ」の関連表現として取り上げる研究もあるが、「モノヲ」を単独で取り上げる研究は少ないようである。日本語記述文法研究会(2008)では、「モノノ」は従属節に述べられた事実から期待される事態が起こらない、あるいは起こらなかったということを主節で述べるのに対し、「モノヲ」は、従属節に反事実条件文、あるいはそれに類するものが来て、従属節の事態が成立してればよかったのにそうでないということを表すとされている。

『日本語表現文型』(1989)は、「モノヲ」は、前件の事実とは相容れない内容の後件が成立することを示し、不満、うらみ、非難、あるいは残念な気持ちといった話者の主観を強くこめた表現であるとしている。

17) そのまま黙っていればいいモノヲ、結局正直に白状してしまった。 (『日本語表現文型』)

『大辞林』によれば、「モノヲ」は接続助詞として、不満やうらみなどの気持ちを込めて、逆接的に下に続ける。または、終助詞として、不満・不平や悔恨などの気持ちを込めて詠嘆の意を表す、とされている。『新明解国語辞典』では、「モノヲ」は、事態を好ましい方向に進展させることができなかったことを、不満・悔恨などの気持ちをこめて表す、とされている。

18) 早くすればいいモノヲ、何をぐずぐずしているのだろう。

19) あの時もっと注意しておけばよかったモノヲ。 (『大辞林』)

20) 謝ればいいモノヲ、意地を張っている。

21) あんなにいやがるモノヲ、無理にさせるのではなかった。 (『新明解国語辞典』)

「モノヲ」文では前件か後件で話者の観点が直接現れている。反事実仮想の場合では、話者の観点そのものが前件となるが、前件が事実である場合、後件は話者の主観性的表出と考えられる。

#### 4.2.3 「ノヲ」

「ノヲ」「ノガ」は、埋め込み文で、取り上げられるだけでなく、「ノニ」の対照として取り上げる研究もある。田中(2004:581)によれば、「ノヲ」について、「ヲ」格表示の内、発見を表す「ノヲ」は出現の頻度が比較的に高いもので、ある事態、状況の偶発的な発生が指示される。「ノ」が実質的な行為を状況として指示し、同時にそれが結果残存の事象であることを明示する場合がある。また、「ノヲ」のなかには、転化を表すものがある。

22) あの時、話してくれたらよかったノヲ どうして黙っていたんですか。

23) 私が病院へ行きなさいと言っているノヲ、あなたはそのままにしているから、大変なことになるのですよ。 (田中 2004:583)

また、田中(2004)は、例 23)、24)を挙げ、「ノヲ」と「モノヲ」は同類だとしている。

24) 一言謝れば済む**モノヲ**、いつまでも意地は張っている。

25) 真面目に働けばよい**モノヲ**、転職ばかりしている。(田中 2004:583)

先行研究からみると、逆接を表す「ノヲ」は、〈画面の転換〉という機能を持っている。つまり、「ノヲ」を用いると、前件の進行が後件に切り替わる。また、話者の主観性が「モノヲ」と類似し、強く読み取れる。

#### 4.2.4 「ノガ」

田中(2004:589)によれば、「ノガ」は、しばしば逆接を表す場合があり、この「ノガ」は対比的、推移的状況を明示するのに用いられることが多いとしている。

26) はじめは毎日水を換えていた**ノガ**、このごろは忘れて、水換えを怠っていることは勲は愧じた。

27) ほかの変電所へ行ったときは、学生証を見せろ、とかうるさいことを言って追い払われた**ノガ**、この菜っ葉服の男は案外親切で、二階へ行けと教えてくれました。

28) 二百万におよぶ失業者の村は、それまで出稼ぎをして仕送りをしていた**ノガ**、今度は帰村して農村の窮乏をいやましにすることになりました。

29) あとから考えると、その留守にわれわれが仕事をしているところにいろんな人が見学に来ていると思った**ノガ**、実は調べに来ておったわけです。(田中 2004:589)

先行研究から見ると、「ノガ」文では、前件・後件は対比関係となっている。以下、実例を取り上げながら、「モノノ」「モノヲ」「トイウモノノ」「ノヲ」「ノガ」の主観性を分析する。

#### 4.3 実例による考察

実例考察の結果、「ノガ」「モノノ」「ノヲ」は多くヒットしたが、「ノガ」「ノヲ」には、接続助詞的用法はあまり見られなかった。

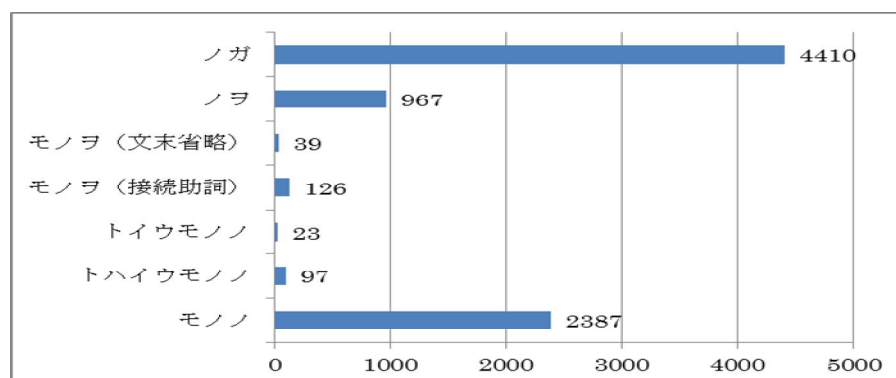


図 70 「モノノ」「モノヲ」「ノヲ」「ノガ」と関連形式の使用調査

#### 4.3.1 「モノノ」

「モノノ」の使用には前件が話者の期待そのものとなる場合と、前件・後件とも事実となる場合がある。前件・後件とも事実となる場合は、さらに程度差関係、包含関係の二つに分けられる。

##### 4.3.1.1 前件が期待そのものとなる「モノノ」

「モノノ」文では前件そのものが話者の期待となる文例がある。現代日本語では〈反事実仮想〉となるが、後文に「やはり」といった容認の感慨が述べられることが多い。また、「～カライイヨウナモノノ」の形式で現れる文例もある。

30) ヘンリーの運転する車で帰れたから、まだよかった**モノノ**、「お気をつけて」というヘンリーの挨拶さえ掻き消すほどの雨音だった。 (『転』)

31) たわけめ、見かけたのが銀次郎であった**カライイヨウナモノノ**、万一ほかの者であったらどうする。 (『雪の駕籠』)

例 31)では、仮説と反する結果が後件で示され、さらに「どうする」という疑問詞が観察される。例 30)の後件は事実であり、例 31)の前件・後件とも仮説と見なせる。

##### 4.3.1.2 再吟味の「モノノ」

再吟味の「モノノ」の用法として、〈程度の説明〉、〈進度の説明〉、〈前後事態の対立・比較〉、〈部分から全体へ〉の捉え方が挙げられる。

###### 4.3.1.2.1 程度の説明

「モノノ」文では、前件で取り上げた事態の程度について、後件でその程度を明らかに解説する形式が多く観察される。

32) 私が知っている浅草はこの辺りからであり、人出は多い**モノノ**、〈モダニズム〉とも〈流行〉とも程遠かった。 (『私説東京繁昌記』)

33) すなわち、法(条例等)に根拠をもたない直接行動もまた許容される**モノノ**、その範囲は、現状に比べて格段に狭められることが期待されるのである。 (『政策法務入門』)

例 32)では、前件で「人出は多い」という事実があるが、後件でその「多い」の程度について、「〈モダニズム〉とも〈流行〉ともほど遠かった」という予想された程度には達成しなかったという結果が見られる。例 33)では、「根拠を持たない直接行動が許容される」という「許容」について、「その範囲は現状に比べて狭められる」と追加注釈している。例 32)、33)は静的に事態を捉えているが、他には、動的に事態の発展状況を確認する形式も多くある。

34) しかし、奇跡的に回復した**モノノ**、左目がほとんど見えなくなってしまった。 (『共済で日本を変える男 EXA 社長・中川博迪の挑戦』)

- 35) とりあえず身柄は解放してもらったモノノ、あいかわらず目をつけられておるのは間違いない。  
(『竜神温泉殺人事件』)

例 34)、35)では、「奇跡的に回復した」と「身柄は解放してもらった」という事態に関して、後件「左眼がほとんど見えなくなってしまった」、「相変わらず目を付けられておる」という、追加事項が述べられている。つまり、「回復した」「解放してもらった」という完全な状態を指すわけではなく、ある程度の制限、つまり予想された程度の未達成がみられる。例 32)、33)、34)、35)では、〈予想程度の未到達〉を示している。この点で、「モノノ」と「トイッテモ」は互換できる。例 33)、34)では、事態はとどまり気味に見られる。

#### 4.3.1.2.2 進捗の説明

動的に事態を捉える場合、事柄の進展を示す例文も見られた。

- 36) 朝の食事をとり、出発したモノノ、あいにくの雨である。  
(『江戸の遊歩術』)  
37) これは、心情的な好悪をあれこれ一応論理の筋道にのせて進めてきたモノノ、あげくの果てに論理を放棄した生の感情語である。  
(『人物日本の女性史』)

ここでは、事柄が順調に進んでいくという予想が後件で打ち消されている。例 36)では、「出発したのに、雨に遭い」、例 37)では、「筋道にのせて進めてきたが、あげくの果てに論理を放棄してしまった」。これらは共に前件では事態の進展の階段を示し、後件では、それと相応しくない出来事、あるいは結果を示している。また、前件事態に止まらず、後件で前件の進捗具合を表す例も挙げられる。

- 38) 戦闘は彼の予測通りになったモノノ、このときの浅井側の猛攻ぶりはすさまじく、十三段のうち十一段が潰滅し、敵は信長の本陣に迫りそうになった。  
39) 驚いた信長は急速に退却して何とか敗滅をまぬかれたモノノ、これを機会に畿内の反信長勢力は一斉に蜂起した。  
(『「孫子」の読み方』)

例 38)、39)では、事態は前件に止まらず、後件でさらに進展していることがわかる。これは、予想外だと見なされる。上記の例を見てみると、「戦闘は予測通り」であるが、「敵は信長の本陣に迫りそうになった」態勢は予想されなかった。「敗滅をまぬかれた」が、「畿内の反信長勢力は一斉に蜂起した」という態勢は予想できなかった。

- 40) ためらったモノノ、あえて口に出した。  
(『天使の梯子』)  
41) 手術後、しばらくは思いどおりのかたちになってくれているモノノ、時間とともにもとどおりになっていくのだ。  
(『ドクター・ショッピング』)

例 40)、41)では、「ためらった」と「思い通りの形になってくれる」は期待する事態であるが、

それに止まらず、「あえて口に出した」「時間とともに元通りになる」ことが反期待となっている。

- 42) あの晩、俊介は迷子になり、一人べそをかいた。すぐにどこかの大人が気づき案内所で無事に保護され、父が迎えに来てくれたモノノ、あの時の父を待つ間の不安を思い出したのだ。 (『解夏』)

例 42)では、結局「父が迎えてくれた」が、その後また、「父を待つ間の不安を思い出したのだ」という、一段落する結果から出た新しい事態と見なされる。

#### 4.3.1.2.3 前後事態の対立

「モノノ」文では、前件事態と相反する事態を示す後件も観察される。前件事態の成立を認め、後件で対立する側面を示している。この使い方は「トハイエ」と類似している。

- 43) 延文元年（一三五六）に再建されたもので、屋根は新しく葺いてあるモノノ、いかにも天台宗の仏教道場らしい面影を残している。 (『死ぬまでにいちどは行きたい六十六カ所』)
- 44) 武田の滅亡後、独立した真田昌幸が、長男の源三郎信幸、次男の源二郎信繁（幸村）らと協力して真田の武勇を天下にしめし、後にはそれぞれの信念に従って東西に別れたモノノ、お互いに理解し合い、いずれもみごとな生き方を示す。 (『歴史・時代小説の作家たち』)

例 43)では、「再建して、屋根も新しく葺いてある」が、「仏教道場らしい面影を残している」という「新しい屋根」と「面影」は、いわば「新」と「旧」の対立といえるだろう。例 44)では、「東西に分かれた」と「お互いに理解し合い」は一見矛盾しているが、前件を絶対的に理解するのではなく、その反面も存在している、という内容が示されている。

#### 4.3.1.2.4 前後事態の比較

ある事態を全体的に把握する場合、部分の比較や部分と全体の関係も「モノノ」文で表せる。

- 45) 水準としては鉱工業生産指数の方は①期の最低水準を若干上回るところでとどまったモノノ、稼働率指数の方は①期にほとんど並ぶ低水準となっている。失業率は著しく上昇して景気の谷時点では四・六%、失業者数は三二〇万人近辺と、二年弱の間に九〇万人近くの増加をみた。 (『論争日本の経済危機』)
- 46) 声もよく通るモノノ、ふだんの会話には少々耳ざわりだ。 (『雪の駕籠』)

例 45)では、鉱工業において、「生産指数は①期の最低水準を若干上回る」のに対し、「稼働率指数の方は①期にほとんど並ぶ低水準となっている」。例 46)では、話題人物は、「演劇」には、声がよく通るが、「ふだんの会話」には少々耳ざわりだという、対比関係が現れている。さらに、例 47)のような一部と全体の捉え方が観察される。

#### 4.3.1.2.5 部分から全体へ

47) 偽刻説も一部にあるモノノ、貴重な石碑である。 (『山形県の文化財』)

この石碑について、偽刻説も一部あるが、全体的から見ると、それは貴重な石碑と見なされる。例 47)は、「ナガラ」と言い換えられない。「ナガラ」文は、「～でもあり、～でもある」のような両立が表せるのに対し、「モノノ」の場合、前件・後件の独立度が高く観察され、「前件は前件であり、後件は後件である」というような構文の特徴がある。

#### 4.4.1.3 「ト (ハ) イウモノノ」

「ト (ハ) イウモノノ」は事物の一面を認め、それと対立するもう一面を示す特徴がある。

48) 医学界に多大な貢献をしたトイウモノノ、そのストレスの大きさが、結局は彼の生命を短くしてしまったと考えられます。 (『がんはやっばりストレスが原因だった』)

49) こんな話を聞くと、現在は物が豊富で便利になったために、家庭の間で一体となるような経験が急に乏しくなっていることに気づく。便利な生活をしているトハイウモノノ、家族の一人ひとりが忙しく、あわただしく、一緒になって一つのことをするどころか、皆が集まって食事を共にすることもない。 (『「出会い」の不思議』)

例 48)では、この「医学界に多大な貢献」という一面は、彼にストレスを与え、彼の生命を短くする一面にもなっていることがわかる。例 49)では、現在の生活が便利になっている一面があるが、それに対し家族メンバーのコミュニケーションが少なくなっている一面もあることを示している。「ト (ハ) イウモノノ」はある捉え方を先に承認し、後件でその反面を示す機能を持っている。また、「トハイウモノノ」には、ポイントを提示する機能もある。

50) 尋ね人専門の調査事務所トハイウモノノ、“初恋のひと、探します”のキャッチフレーズは、香代の本音でもあった。 (『謀殺列島赤の殺人事件』)

「尋ね人専門の調査事務所」では、尋ね人がいれば依頼はできるが、香代の本音は、「初恋の人を探す」のに集中している。「トハイウモノノ」は、前件概念の中で、明確にポイントを示すことができる。さらに、「トハイウモノノ」は〈消極的な容認〉も表せる。

51) 三月も末の二十七日、曙の空はおぼろに霞み、月は有明月で、光はもう薄れているトハイウモノノ、富士の嶺がかすかに見えて、上野谷中の花の梢は、また何時逢い見ることかと心細い。 (『奥の細道を読む』)

「光はもう薄れている」という事態を先に認めるが、また、その事態について、「富士の嶺がかすかに見えて、上野谷中の花の梢は、また何時逢い見ることかと心細い」という後件での〈消極的容認〉が読み取れる。



#### 4.4.2 「バ」と共起しやすい「モノヲ」

実例調査の結果、逆接に用いられる「モノヲ」文は、形式上は、「～バ～モノヲ」の形で、接続助詞として用いられるか、文末省略の形となっている。

##### 4.4.2.1 接続助詞の「モノヲ」

- 52) お風呂にでも入って食事がすんで、ほっとしたところで切り出せばいいモノヲ、相手が疲れていようとどうしようとおかまいなしでは困る。(『女が30代にやっておきたいこと』)
- 53) また、「不言」なら不言のままじっとしていればいいモノヲ、結果が出てから「有言」に変身する“お調子者”もいる。(『仕事ができる人できない人』)
- 54) もっと噛んで含めるように話してやればいいモノヲ、イエスはあまりに短兵急に結論を言い過ぎた。(『ルカによる福音書』)

例 52)、53)、54)では、前件は話者の期待そのものとなっていて、後件は事実である。後件の事実によって、前件の話者の期待が打ち消されている。これは「モノヲ」文の特徴といえるだろう。例 52)、53)、54)では、話者の期待はそれぞれ「ほっとしたところで切り出す」、「不言なら不言のままである」、「もっと噛んで含めるように話してやる」となるが、実際の結果は、「相手が疲れていようとどうしようも構わない状態で」「結果が出てから有言に変身する」「短兵急に結論を言いすぎた」である。この後件の結果から、前件の期待が打ち消されていることがわかる。

##### 4.4.2.2 文末省略表現の「モノヲ」

実例を見ても、文末省略表現の「モノヲ」にも、前件に「バ」という条件仮定を接続助詞が現れていることがわかる。この場合、「モノヲ」の前件は、反事実仮想となる。

- 55) 予がもう少し若ければ、造作なく勝っていたモノヲ。この愚劣な結果が天の命なら、天なぞ要らぬ。(『大公望』)
- 56) あんな事件が起きなければ、何一つ不自由のない生活を送りながら、一軍の将となるべく勉学に励んでいるであろうモノヲ。ましてやこんな饅頭を口にするなどたわいもないことであつたらうが...。(『青狼記』)

例 55)、56)を見てもわかるように、文末省略表現の「モノヲ」の後には、前文の表す事態は、後文でそのまま進んでいる。話者は、先行する文で提示されている既定の事態に対し、反事実仮想を文末省略の形式で述べている。文末省略表現としての「モノヲ」と接続助詞としての「モノヲ」を比べてみると、前者は独り言や自問自答に用いられるのに対し、後者には、聞き手が常に要求されている。聞き手へは、話者の不満などの気持ちが伝達されている。

#### 4.4.3 場面の切り替えが表せる「ノヲ」

逆接を表す「ノヲ」の文例は、あまり多く見られなかった。「モノヲ」と比べて、「ノヲ」文の前件と後件は、独立度がさらに強く伺える。前件も後件も、既に単文の形式となっている。そし

て、前件と後件は、独立度が高いので、対比関係となっているのが一般的である。

- 57) つまりこの山は戦前、日本人が事務を取り、満人や朝鮮人が坑夫となって採鉱していたノヲ、いまはその上下を逆さにしたかたちで経営が再開されたそうであった。(『朱夏』)

例 57)のように、「戦前」と「今」は対照関係を成している。「戦前」は「日本人が事務を執り、満人や朝鮮人が坑夫となって採鉱していた」のに対し、「今」は「その上下逆さにした形で経営再開されている」。「戦前」と「今」の他にも、「上下逆さ」という相反関係が見られる。前件と後件には、場面の切り替えが観察される。例 58)では、前件と後件は対立しているが、前件は後件の情景提示にもなれる。

- 58) この男は、元来函館の商人の子で、子どもの時から本が非常に好きで、しじゅう本ばかり読んでいたので、親がひどくこれを嫌って、書見をいっさい禁じたノヲ、なお隠れ隠れに読んでいたところが、ある時親から見つけられて、むごい目に叱られた上、懲らしめのために両手を縛って二階へ押し込められ、一日中飯も食わないでおらせられた。(『勝海舟』)

「親がひどくこれを嫌って、書見をいっさい禁じた」に対し、主人公は「なお隠れ隠れに読んでいた」という描写は、前件は表の場面であるが、後件は「隠れ」の場面である。例 58)にも、例 57)と同様、場面の切り替えが観察される。また、会話文には、「ノヲ」の表出機能が強く表現されている。

- 59) 我らがこのように苦しんでいるノヲ、どうしてお救い下さないんだ。(『シギラの月』)

例 59)では、「ノヲ」の後件に、「どうして～」という疑問文が現れている。前件は、後件の発話の論拠を示している。また、この論拠は、常識による推論ではなく、話者の個人的な論理に従っている。つまり、話者の判断により、前件が後件の論拠となる。「どうしてお救い下さないんだ」はまた、普通の疑問文ではなく、「詰問」の形になっている。事実としては、聞き手は助けてくれなかった、ということがわかる。例 59)の場合、さらに、我々の場面と聞き手の場面の切り替えが読み取れる。

#### 4.4.4 場面の対比、転換を表す「ノガ」

「ノガ」文では、前件・後件が単純対照となる場合が多く観察される。その多くが、「異なる時間帯における対照」という特徴を有している。

- 60) 八〇年代には「日本男性から韓国女性へ」だったノガ、二〇〇〇年以降は、「日本女性から韓国男性へ」となっただけのことなのだ。(『サンドクラフト入門』)
- 61) 五年以上生存している数が昭和三十九年は三人だったノガ、昭和五十四年には三百七人になっているらしい。(『死を見つめたわが子麻意の三年』)

- 62) タンカーも大型化し、戦前は平均一万総トン（一万五〇〇〇重量トン）が普通だったノガ、最近では二五万重量トンが標準サイズになった。（『海からの世界史』）
- 63) 少し前までは静かな住宅街だったノガ、最近では夜になるとめっきり人通りが増え、遅くまでにぎわいを見せている。（『博多学』）
- 64) たとえば、いまから一五年前には、ビールの容器はビンと缶を合わせて八種類だったノガ、現在では一六〇種類のデザインが生み出されている。（『より身近になった医療レーザー永久脱毛最新 Q&A』）

また、この発展形として「ツモリガ」、「ハズガ」もみられる。65)は「つもりだったのが」の、66)は「はずであったのが」の省略形と見なされる。いずれも「ノガ」の変形である。

- 65) 腰痛が我慢できなくなり、カバーさえない粗末なベッドの上に腰を曲げて横たわり、ちょっと休憩のツモリガ、不覚にも、ものの五分もしないうちに鼾をかくほど深く寝入ってしまった。（山崎豊子『約束の海』202）
- 66) 世界銀行からの外資導入は電源開発にとどまらなかった。中部地方を流れる木曾川から水を引いて、水不足の知多半島に流す「愛知用水」もその一つで、はじめは水道用水のハズガ、名古屋重化学工業地帯の発展に伴って工業用水に活用されるようになった。（『日本経済の飛躍的發展』）

例 60)～65)の波線部を見てもわかるように、前件と後件は時間上の対照関係となっている。例 60)は、ファンとアイドルの関係についての話である。80年代は、「日本男性から韓国女性へ」の傾向を示しているが、2000年以降では、「日本女性から韓国男性へ」の傾向が見られる。例 61)は、「五年以上生存している数」に関する対照である。昭和39年と昭和54年の数が3人から370人に変化している。例 62)は「タンカーの大型化」に関する内容である。戦前は平均1万500重量トンが普通であるが、最近では25万重量トンが標準サイズとなる。例 64)はビールの容器と缶の種類についてである。今から一五年前は8種類であったのに対し、現在は160種類のデザインがある。65)は「不覚にも」という油断を表している。66)は当初の予定の変換である。以上のように、「ノガ」文では、場面の対照が観察されるが、さらに、話題内容の変化も読み取れる。「ノガ」の場合は、相反する内容へ切り替えられるが、「ノガ」は切り替えではなくて、連続性が前後場面に存在している。

#### 4.4 結語

本節は、「モノノ」「モノヲ」「トハイウモノノ」「ノヲ」「ノガ」を分析した。

「モノノ」文は、〈期待〉そのものが前件に現れる場合と、前件・後件ともに事実である場合がある。前件・後件ともに事実である場合、前件 R を再吟味するために、R と T には程度差、或いは包含関係が見られる。程度差は、〈程度の提示〉、〈進度の提示〉、〈予想事態の超過〉にわかれる。包含関係は、対立する事態の比較、対照、部分と全体などがある。また、「モノノ」文の焦点は、常に後件にある。「トハイウモノノ」文における R と T は、常に「包含関係」である。「モノノ」

と比べ、「モノヲ」文の前件は、常に「バ」と共起している。また、「モノヲ」文は、反事実仮想も表せる。「ノヲ」、「ノガ」文における前件・後件は、対照関係であるが、「ノヲ」が場面の切り替えを表すの対し、「ノガ」は事態の変化を表す。さらに、「ノヲ」は、会話文で頻繁に用いられる傾向があり、前件事実を取り上げ、聞き手に詰問などをする場合にも用いられる。

本節の分析結果を、以下の表 13 にまとめる。

表 13 「モノノ」「モノヲ」「ノヲ」「ノガ」文と関連形式の特徴

| タイプ | 用法    |         | R と T の関係                 | 事実性                   | 文の機能（主観性）        | 例                 |     |
|-----|-------|---------|---------------------------|-----------------------|------------------|-------------------|-----|
| モノノ | 仮想    | 反事実仮想   | R の予想が T によって否定される        | R が予想、<br>T が事実       | 話者の期待そのものが前件に現れる | 30)               |     |
|     |       | 仮説      |                           | R、T とも<br>仮説          |                  | 31)               |     |
|     | 再吟味   | 程度差関係   | T は R の程度を示す              | R、T とも<br>状態          | 予想ほどの程度ではないことを示す | 33)               |     |
|     |       |         | T は R の進捗を示す（邪魔される、停滞、超過） | R、T とも<br>事実となる       | 予想ほどの進捗ではないことを示す | 36)<br>37)<br>38) |     |
|     |       | 対等関係    | 相反関係                      |                       | 前件事実と対立する側面を示す   | 43)               |     |
|     |       |         | 対照関係                      |                       | 前件事実と対照となる事態を示す  | 45)               |     |
|     |       | 包含関係    | R が部分で、T が全体的な捉え方となる      | 部分より全体的な捉え方を取る        | 47)              |                   |     |
|     |       | トハイウモノノ | 対等関係                      | R という言い方より T という事実を示す | R は言い方、T は事実     | 前件言い方より後件事実のように思う | 48) |
|     |       |         | 包含関係                      | T は R のキーポイントを示す      | R、T とも<br>事実     | 前件のフレームの中、ポイントを示す | 50) |
|     |       |         | 程度差関係                     | T は R の消極的な容認を示す      |                  | 消極的容認を示す          | 51) |
| モノヲ | 反事実仮想 | 文中      | R の予想が T によって否定される        | R が予想、<br>T が事実       | 話者の期待そのものが前件となる  | 52)               |     |
|     |       | 文末省略用法  | T がない                     | R が予想                 | 55)              |                   |     |
| ノヲ  | 対比的逆接 |         | R が T に切り替わる              | R、T とも<br>事実          | 場面の切り替え          | 57)               |     |
|     | 反期待   |         | R が T の発話論拠               |                       | 詰問が後件に来る         | 59)               |     |
| ノガ  | 対比的逆接 |         | 対照関係                      |                       | 事態の変化を示す         | 60)               |     |

## 5. 〈既定価値を崩す〉逆接構文

### —「トコロデ」「トコロガ」「トコロヲ」の成立—

#### 5.1 はじめに

形式名詞「トコロ」を用いて、補文節や副詞節をなしている「トコロ節」は複文研究で多く取り上げられている。形態から意味・機能まで、さまざまな個別的な例まで取り上げられ、細かい分析がなされているが、より体系化した、構文の視点からの分析はかならずしも十分とはいえない。そこで、本研究は、逆接構文の成立から出発し、「トコロ節」における逆接構文がなぜ逆接を表すのかについて、その本質をあきらかにする。

「トコロデ」には、接続詞としても接続助詞としても用いられる。『大辞林』によれば、接続詞の「トコロデ」は、話題を変えて話を始める時に用いられるとされている。また、接続助詞の「トコロデ」は、逆接条件を表す。前の事柄が無益なものに、また、好ましくない状態になりそうだというもとので、後に結びつけるとされている。『新明解国語辞典』によれば、接続詞の「トコロデ」は、それまでの話をいったんのうち切って、話題が転じることを表す。接続助詞の「トコロデ」は、前件に対して後件が、それが実現したとしても望ましい結果にはいたらないことが予測されるという関係にあることを表すとある。

「トコロガ」もまた、接続詞としても、接続助詞としても用いられる。『大辞林』では、接続詞の「トコロガ」は、予想や期待に反したことを述べ始めようとするときに用いる語である。それに対し、接続助詞の「トコロガ」は順接条件と逆接条件両方表せる。順接条件では、前の事柄が起こった後、引き続き後の事柄が起こることを表す。逆接条件では、前の事柄を予想していたのに、予想に反して好ましくない結果となることを表す、とある。

『新明解国語辞典』によれば、接続詞の「トコロガ」は、前件に対して後件が、予想・期待されるのとは反する結果になるという関係にあることを表す。これに対し、接続助詞の「トコロガ」は、時間的・空間的な広がりの中でほかから切り離してとらえた、特定の場面（状況）を示すか、前件に対して後件が、予想したことに反する事態が展開するという関係にあることを表す、とある。接続詞の「トコロデ」は話題転換を表すので、本研究の対象外とする。また、接続助詞の「トコロガ」には、順接用法もあるので、それも除いて考察する。

#### 5.2 「トコロ節」に関する先行研究の検証

靱山(1989:43)は文末の助動詞としての「トコロダ」について、発話時点も考慮しなければならないという理由で、「Vルトコロ」「Vテイルトコロ」「Vタトコロ」のみが示しているのは、「トコロ」に先行する事態全体の〈開始段階〉、〈進行段階〉、〈終了段階〉であるとしている。

##### 5.2.1 「トコロデ」文の特徴

加藤(2003:165)は、接続助詞化した「トコロデ」の意味を「〈トコロ〉に先行する事態が〈タトコロ〉が表すような最終段階にまで発展しても必ずしも話者が因果関係と比較し、予想された関係になる理由ではないことを表す」としている。

加藤(2003:163)に基づき「トコロデ」の構文的特徴を整理すると、主節に否定の表現が来やすい

こと、複数句を表わせないこと、従属節に不定語が現れやすいこと、文末に意志の表現が来にくいことが挙げられる。本節はまずこの論を受け、先行研究の検証を行う。

### 5.2.1.1 条件づけの否定

前田(1994:109)は、「トコロデ」文では、主節が否定文でなければ用いられにくいと指摘している。また、前田(1994:109)は「否定文」の言い方に「反語的疑問文や程度が少ない場合、あるいは〈どうしようもない、無駄だ〉など、否定的（あるいは非肯定的）な意味を持つ場合であればよい」と付け加えている。

- 1) しかしそれをしゃべってみたトコロデ、彼何の役にたとうか、また、何を理解できようか。  
(前田 1994:109)

この例 1) に対し、加藤(2003:163)は例 2)、3)、4) を挙げ、「トコロデ」の後件は、否定表現や非肯定的な表現が用いられないが、確実に文が成立する、としている。宮崎(1984)は、「トコロデ」を「前件の意図が実らない」とし、その後件の結果は、必ずしもマイナス・不毛な内容とは限らないとしている。(例 5) を参照)

- 2) たとえ先生がうちのを使えと言ったトコロデ、子供はよそのをいくらでも買える。  
(開高健『パニック・裸の王様』)
- 3) 私がどんな風に考えたトコロデ、世界はその原則に従って拡大していくのだ。  
(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)
- 4) たとえ謀反が起こったトコロデ、あの者がうまくやるだろう。(司馬遼太郎『国盗り物語』)
- 5) 失敗したトコロデ、振りだしにもどるだけさ。  
(宮崎 1984:39)

加藤(2003:164)は、「トコロデ」文の主節に否定的な要素が来なければならないということについて、「否定的表現が主文に現れる傾向が強いが、必ずしも常に否定的表現が現れなければならないわけではない」と指摘している。「トコロデ」文には、「因果関係」が含意され、「トコロデ」文は常にその「因果関係」が成立しないことを述べている。(例 6) を参照)

- 6) 油を使わなければ、低カロリーであるとは言い切れない。油を少量にして照り焼きにしたトコロデ、カロリーは高い。  
(加藤 2003:170)

例 6) では、「油を使わなければ、低カロリーになる」は「トコロデ」文に含意される因果関係である。「油を少量にして照り焼きにした」という前提から、「カロリーは高い」という結論が得られ、因果関係が否定されている。前掲した例 3)、4) を見てもわかるように、「トコロデ」の場合、前件が無条件になる場合と、仮説となる場合がある。また、上掲の例 1)~5) は全て、前件条件が変わっても後件が変わらないという特徴が見られる。この点で、「トコロデ」は、「テモ」系の接続助詞と類似している。

### 5.2.1.2 「トコロデ」の前件に見られる制約

前田(1994)は、「トコロデ」は複数句は表せないが、不定語を含む節でも用いることができると指摘している(例 7)、8)、9)を参照)。「トコロデ」文には、前件に「複数句」や、形容詞、否定文などが用いられないとされている。(加藤 2003:163)。例 10)の前件には、「否定」文が現れているが 10)は非文である。

- 7) \*食べたトコロデ食べなかったトコロデ太らない。
- 8) \*食べたトコロデ食べたトコロデ太らない。
- 9) 今となつてはどんなに釈明をしたトコロデ、あのランチに加わってイタという事実は拭いきれないだろう。
- 10) \*そんなに一生懸命勉強しなかったトコロデ合格できますよ。(前田 1994:108)

「トコロデ」が複数句を表せない理由について、加藤(2003)は、「一つの事態内の同じ段階を繰り返し述べる必要がないから」と述べている。また、「トコロデ」の従属節中に不定語が現れる理由は、事態が進んでいくと程度が増すことにあると、付け加えられている。さらに、加藤(2003)は、「トコロデ」の従属節内には出来事の開始や終了の段階の考えにくい否定や形容詞が現れにくいので、「トコロデ」の表す従属節には、段階の考えやすい出来事が表されると述べている。

### 5.2.1.3 「トコロデ」の後件に見られる制約

宮崎(1984:40)によれば、トコロデの主文には、叙述・希望・意志を表す表現が現れにくく、文末が話者の希望、意志、命令を表す時、「トコロデ」は不自然になるとしている。

- 11) ?両親が反対したトコロデ私は大学に進学したい。
- 12) ?彼が反対したトコロデ私は実行しよう。
- 13) ?彼が反対したトコロデ実行しなさい。(宮崎 1984:40)

加藤(2003:165)は、「トコロデ」は内在する因果関係通りに事態が進まないことを表すので、その関係を実現しようとする希望や意志を表す表現とは矛盾する、と指摘している。

### 5.2.2 「トコロ」の認知言語学的アプローチ

楠本(2000:78)は、「トコロ」を多義的表現として捉えている。トコロは基本義として「場所」があり、時空的・抽象的範囲を表す意味となり、さらに複文における接続助詞的機能を表す意味へと拡大しているとある。

接続助詞として、以下の例が挙げられている。

- 14) 断られると思ったトコロガ、彼女は快く引き受けてくれた。
- 15) 幾ら言ったトコロデ、彼は聞く耳を持たない。(楠本 2000:78)



上掲の例のような接続助詞だけでなく、接続詞としても使われるとされている。

トコロの機能は「状況性を喚起することで、話者の心理的投影が具現化される」とされてる。つまり、トコロは事態をあたかも発話している時点や場所で再生されるかのように状況を現場的に捉える働きをしている。つまり、「トコロ」節によって、発話の時点が現場的に捉えられているといえるだろう。

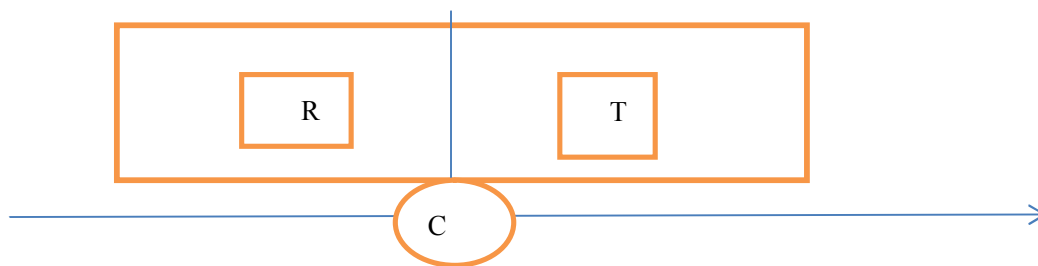


図 71 逆接の「トコロ」文のステージ・モデル

図 71 のように、観察者は、時間軸に立ち、ステージにおける状況を観察している。また、ステージは全体的に前景化され、聞き手（あるいは読み手）の共感を求めている。

#### 5.2.2.1 「トコロデ」

「トコロ」は「デ」が伴われ、事態が起こった時点を表す。この「トコロデ」は「～時」と同じ意味を持っているが、「～時」よりも話者の「状況観察の視点がより明示され、事態進展のある段階を転機的の局面として焦点化しようとする表現意図が内在している」。(cf.田中 2004:444)。

さらに、状況性を喚起する動機づけについて、楠本(2000:82)は、「事態をあるがままの客観的事実と捉えない、つまり事態の成立の既定的価値を認めない」とことと捉えて、「トコロデ」を「時空イメージに伴う主観の介入により、事態の既定価値が崩れる」という動機づけを付け加えている。逆接の「トコロデ」は、「テモ」で表されるような逆接表現に使われるとされている。

16) いくら頑張ったトコロデ、出来ないものはできない。

17) 心配したトコロデ、どうかなるわけではない。

18) 少しぐらい太ったトコロデ、大丈夫だ。

(楠本 2000:85)

例 16)、17)、18)のように、既定価値はそれぞれ、「頑張ったら出来る」、「心配する価値がある」、「太ったら大変」となる。しかし、16)、17)、18)の後件で表される内容は、「出来ないものはできない」、「どうかなるわけではない」、「大丈夫だ」という結果である。この既定価値は、加藤(2003:165)の言う因果関係に相当する。「トコロデ」文では、この因果関係は、常に否定されている。また、例 16)、17)、18)は「テモ」文と置き換えられる。ただし、例 18)の場合では、「テモ」を用いると、仮定条件となるが、「トコロデ」を用いる場合、前件の「少しぐらい太った」は、現実の事態として捉えられる。

逆接の「トコロデ」は、予想や期待通りにはならない、またはそのような結果は得られない状況が表され、このような状況であることを引き立てる形で事態が述べられている(cf.楠本 2000:85)。

これにより、聞き手の関心を引く場を供しているとされている。これに対し、「テモ」文は逆接の経過が、聞き手を意識しない話者の一方的な情感でもって述べられているとある。

- 19) うちの夫は出世したトコロデ課長どまりだろう。
  - 20) どんなに遅れたトコロデ、せいぜい5,6分だと思えます。
  - 21) 泥棒に入られたトコロデ、価値のある本ぐらいしかない。
- (楠本 2000:85)

「出世」、「遅れる」、「泥棒に入られる」という前件について、後件は追加注釈ということで、既定価値を崩して、説明を加えた。例 19)、20)、21)では、〈既定価値〉は、予想された因果関係ではなく、前件そのものである。後件は、前件そのものの〈既定価値〉を再注釈、再認識していることを表している。これについて、楠本(2000:85)は、「事態の進展に置いて当然こうなるだろう」というような既定性が確立されず、偶発的、非他動的結果が導かれることが認められる。話者は既定された客観的事実として提示したくないという意識が働いているので、〈トコロ〉において聞き手との共有意識を求める場ができる」と指摘している。

以上のように、前件 R の既定価値を崩す過程は、以下のように示される。図 72 は既定価値が因果関係となる場合であり、その因果関係が否定される。図 73 は既定価値の変化である。つまり、R そのものが既定価値であり、その理解 T は最初の領域範囲と比べて大きくなったり小さくなったりする。

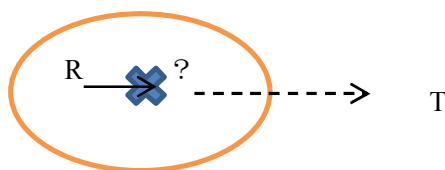


図 72 既定価値（因果関係）の否定

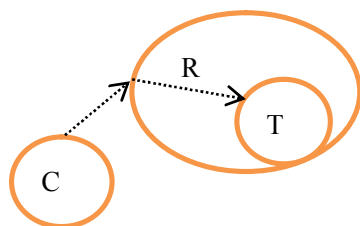


図 73 既定価値の変化

### 5.2.2.2 「トコロヲ」

寺村(1978)によれば、「トコロヲ」は、事態の「自然な進展」が何らかにより「遮られる」場合に用いられるとしている。

- 22) こっそり出ようとしたトコロヲ、彼女に呼び止められた。
  - 23) 財布を落として困っていたトコロヲ、親切な人に助けられた。
- (寺村 1978:213)

例 22)、23)のように、述語には「捕捉」や「拘束」を意味する動詞（例:見る、見つける、発見する、写真を撮る、捕まる、襲う、救う、起こすなど）が来て、また、被害や情意を表す受動態も来やすい（田中 1996:21）。このような用法はトコロを補文標識「ノ」に置き換えられても表す内容が変わらない、と楠本が指摘している。

24) 彼女が公園でデートしているトコロヲ見た。

24-a) 彼女が公園でデートしているノヲ見た。

(楠本 2000:82)

楠本は、「ノ」は前節する句の動作や状態を完結的に捉える機能を持つため、例 24-a)ではデートを一部終始見ていたと解釈できる。「トコロ」は、デートしている事態を遮る形で見ると、デートの一部を垣間見たことと解釈できる、と述べている。

以上見てきた例から、「トコロヲ」文は事態が何らかの干渉を受け、既定的結果の成立を阻害していることがわかった。導かれる結果には時として過失や被害意識、時には反対に恩恵意識が含まれることがあるのが特徴的である、と楠本が指摘している。逆接の「トコロヲ」文は、事態が本来または当然かくあるべきものより逸脱する結果となるような用法もある、と楠本が付け加えている。

25) 何日もかかるトコロヲ、一日で仕上げってしまった。

26) 1時間ぐらいでできるトコロヲ、何時間もかかってしまった。

27) 歩いて20分ぐらいしかかからないトコロヲ、タクシーで行った。

28) 田中さんに言うべきトコロヲ、吉田さんに言ってしまった。

(楠本 2000:83)

25)~27)の前件では、「トコロヲ」と量的表現が共起している。また、25)、26)の場合は、後件でさらに量的表現が見られる。前件で量的表現と共起する「トコロヲ」文は、常に後件で別のことに言い換えられる。

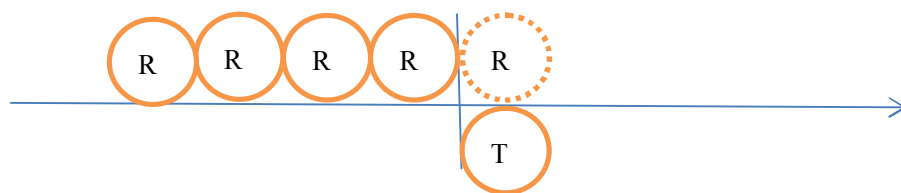


図 74 事態の自然な進展が遮られる「トコロヲ」

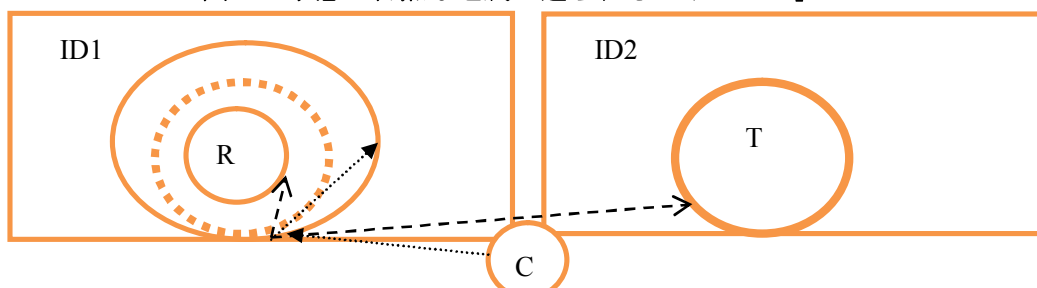


図 75 本来の様子から逸脱する結果を表す「トコロヲ」

図 74 は事態の自然な進展が遮られる「トコロヲ」のスキーマである。横軸は時間であり、縦の線は「トコロヲ」という場面の発生する時点である。つまり、T の発生時点である。もともと、R という事態が持続しているが、T の発生により遮断されている。

図 75 は事態が本来または当然かくあるべきものより逸脱する結果を表す「トコロヲ」のスキーマを示している。量的表現と共起する場合、R の領域が大きくなったり小さくなったりして結果となる。また、前掲した例 28) のように、R の ID 間の移動も観察される。ID1 は「田中さんに言うもの」で、ID2 は「吉田さんに言うべきものである」。田中さんに言うべきものが、吉田さんに言ってしまい、R は ID1 から ID2 へ移動する。

### 5.2.2.3 「トコロガ」

後件が期待に反する内容の時、「トコロ」の後に「ガ」がつき逆接的用法となる。(楠本 2000: 84)

29) 親切に手伝って上げたトコロガ、かえって迷惑がられた。

30) 迷惑になるのではないかと心配したトコロガ、かえって喜ばれた。

31) いつもなら間に合うトコロガ、渋滞で遅れてしまった。(楠本 2000: 84)

例 29)~31) のように、「トコロガ」の後は前件から予想・期待とされることを裏切る結果が導かれる。つまり、事態の展開が既定的でないことが認められるであろうと、楠本が付け加えている。「トコロガ」と「ノニ」は類似しているが、「ノニ」文は反予想性・反期待性が話者の一方的な情感として強く表されるのに対し、トコロガ文は状況を提示することで相手の注意を引くような形で事態の反予想性・反期待性を表している。(楠本 2000:84)

筆者の考えでは、「トコロガ」「ノニ」は共に話者が予想した事態が実現しないことを表すが、「ノニ」の場合、話者の不満という主観が読み取れるのに対し、「トコロガ」は、話者の不満はなく、陳述的である。つまり、「ノニ」の主観性が強く伺える。「トコロガ」文では、常に期待などが前件に含まれているのではなく、前件の表現によって決められるのか一般的である。

例 29) では、自分が「親切」なことをしたが、かえって迷惑をかけた。例 30) では、自分は「迷惑」だと思っていたが、かえって喜ばれた。つまり、前件の価値は前件の表現によって判定されるのである。

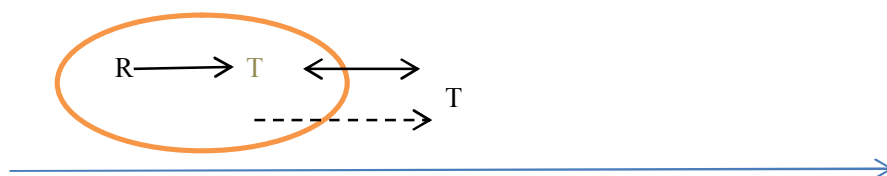


図 76 継起的事態 R と T の逆接を表す「トコロガ」

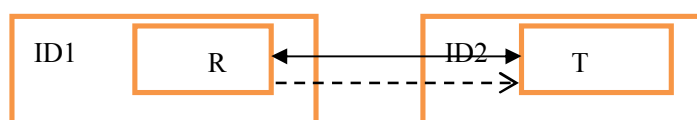


図 77 予想と現実の異なりを表す「トコロガ」

図 76 は継起的事態 R と T の逆接を表す「トコロガ」文のスキーマである。例 29)、30)の R と T は継起的事態であり、R から予想された結果と逆さとなり、実際の結果 T が成立する。図 77 は予想と現実の異なりを表す「トコロガ」文のスキーマを示している。R と T が対立しているが、R は予想の ID1 にあり、T は現実の ID2 に含まれている。

### 5.2.3 田中(1996,2004)による「トコロ節」の連続性について

トコロは形式名詞の中でも、とりわけ多義的な用法を持っている。副詞節として、「トコロ(ガ)」、「トコロデ」、「トコロニ」、「トコロヲ」があるのに対し、文末表現として「トコロダ」、「トコロトスル」、「トコロトナル」等が挙げられる。また、連体修飾成分として、「トコロノ(N)」もある(田中 1996: 34,2004:230)。田中(1996: 34)によれば、「トコロ」節の選択に当たっては、前件と後件との意味的な整合性に基づきながら、現象的な意味関係から抽象的な意味関係のものまで、複雑な様相を呈することからなる。また、副詞節の「トコロデ」、「トコロニ」、「トコロカラ」、「トコロマデ」を除く「トコロ」節には、文末に現れる動作、状態の局面が接続成分にもあらわれているという点で、アスペクト形式をおおむね維持していることも理解された、とある。

田中(1996: 34)の分析に基づく、「トコロ」は新事態発見を表し、結果を導くもので、事態前の想定事態と比較するには不備な状況には「ガ」が要らない。「トコロガ」の「ガ」は、本来の格助詞機能が薄れてしまったもので、意外性を際立たせる機能を果たしており、一般的には後件に述べた事実が前件の結果として、想定事態と発見事態との対比、相反関係を表し、ニュアンス的には「裏目に出て」「意に反して」などが読み取れる。「トコロデ」は逆条件を表し、一般的には試行の反復、努力的な行為遂行を示し、さらに「イクラ」「タトエ」などと呼応し無条件や、例示を表す機能があるとされている。「トコロヲ」は現場状況の再現として、寺村(1979)の説を使用すると、それはいわばある点がある軌道を外れ、別の方向へ行くとされている。概念的には妥当な点が多いが、個別的な検証がさらに求められる。また、「トコロ節」の連鎖性、概念の重なりについて、田中(1996:45)は以下の図示により、意味の分化を試みている。

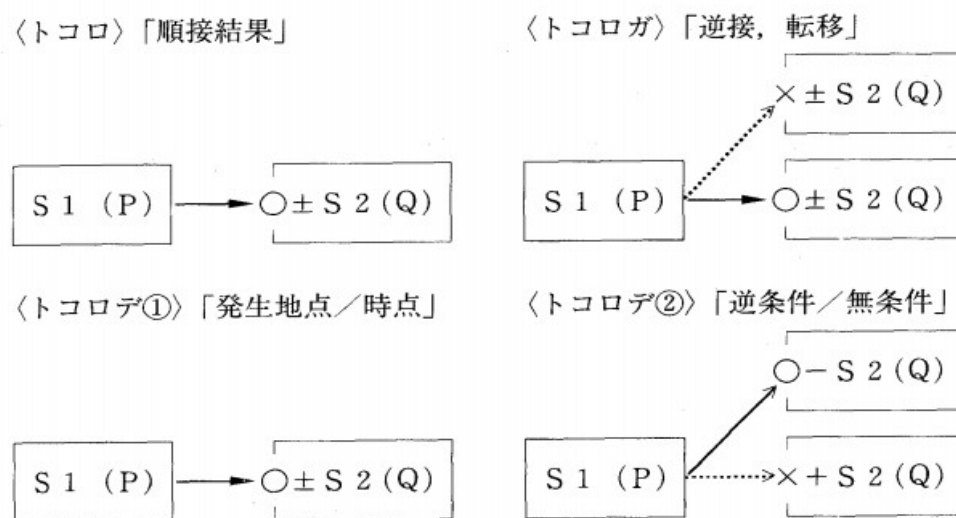


図 78 田中(2004)「トコロ」「トコロガ」「トコロデ」

※「」はそれぞれの意味概念を指している。+は好ましい結果、-は好ましくない結果をあらわす。→は動作の実現する方向性を表す。…」は動作の実現想定の方角性を表す。○は実態の実現態、×は実態の非実現態を表す。

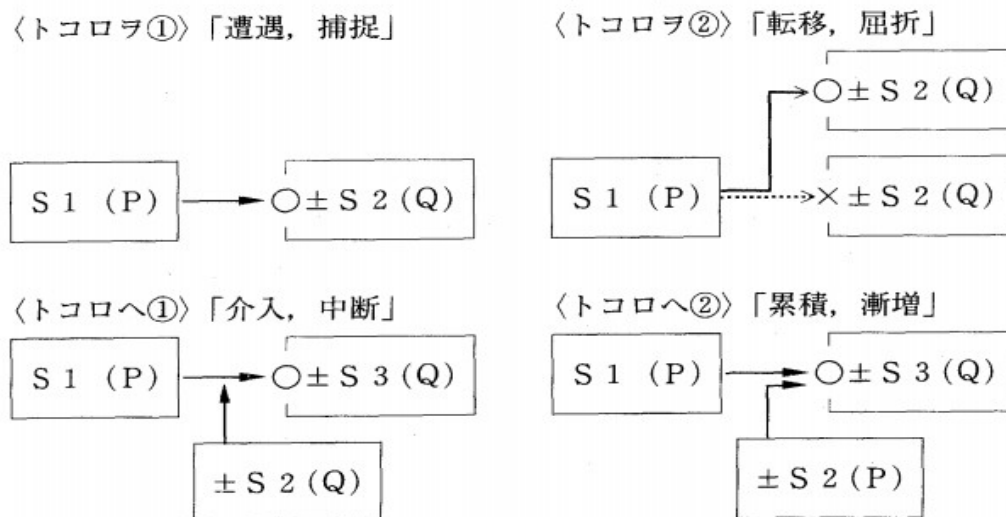


図 79 田中(2004)「トコロ」

本研究では、「主観性」の理論モデルで、以上の連続性分析する。

### 5.3 実例による分析

「トコロ節」は、「時間」や「場所」を指示する機能があることが、多くの研究で指摘されている。逆接を表す「トコロ節」では、「トコロ」をはじめ、「トコロデ」「トコロガ」「トコロヲ」が挙げられる。「トコロ節」は副詞節、また補文節とされる。そのため、「逆接」を表すトコロ節は、かなりの頻度で用いられる。文頭に現れる接続詞的な使用は本研究の考察対象外とし、「トコロ」を用いた形式を以下に分類して提示する。国研『日本語書き言葉均衡コーパス』から、文例を抽出して考察を行った。「トコロガ」の文中や文頭に現る件数 3951 の内、文中接続としての用法が少なく、多くは国会会議録や古い言い方の文例(732 件)であった。

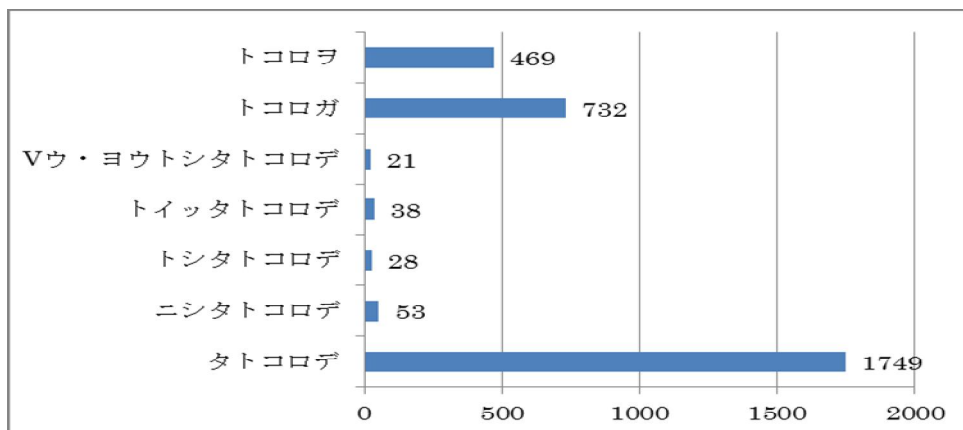


図 80 「トコロデ」「トコロガ」「トコロヲ」と関連形式の使用調査

### 5.3.1 「トコロデ」

「トコロデ」は、田中(2004)にならい、「タトコロデ」の形で検索をしてみた。その結果、「イクラ…トコロデ」のような無条件を表すものや「タトエ…トコロデ」で、例示を表すものが多く観察された。「トコロデ」文における逆接では、条件づけが常に存在している。前件では条件を取立て、後件では実際は実現できなかったという結果を提示する。無条件や例示の場合では、「トコロデ」は「テモ」と置き換えても文の意味に大きな変化は見られないしかし、例 33)、34)の「トコロデ」を「テモ」と置き換えると、際たての部分が前件から後件に移る。

32) たとえ戦後になって天皇にそれまでの「借り」を返した**トコロデ**、それで免罪されてしま  
うわけではない。 (『「きけわだつみのこえ」の戦後史』)

33) いくら念入りにみた**トコロデ**、それではどうていこの実感はつかみだせないのである。  
(『今西錦司全集』)

34) また、戦略に基づき、さまざまな施策を講じた**トコロデ**、それが組織風土に調和していな  
い場合には、思ったように社員は動かず、施策実行のための投資対効果が表れにくい“非効  
率な”組織になる。 (『明日のリスクは見えていますか』)

35) 一時の名声を得るために、「クマのため」にシバグリを植えた**トコロデ**、そんな林は持続す  
ることはできない。 (『熊と向き合う』)

34-a) さまざまな施策を講じ**テモ**、それが組織風土に調和していない。

35-a) 「クマのため」にシバグリを植え**テモ**、そんな林は持続することは出来ない。 (作例)

例 34-a)、35-a)で示したように、「テモ」と置き換えると、前件が仮定条件となる。後件はその仮定条件が発生しても変わらないということを表している。同じ文を「タトシテモ」と置き換えても、「テモ」と置き換える場合と同様である。したがって、「トコロデ」を用いる場合、前件実現の確実性が高く見られる。次に、「トコロデ」の後件を観察してみよう。以下は、「トコロデ」の後件に「ドウシヨウモナイ」のような慣用表現が現れる。

36) わかった**トコロデ**、どうしようもない。 (『クレオパトラの葬送』)

37) でも、あなたにいった**トコロデ**、どうしようもないでしょう。 (『愛のごとく』)

例 37)の前件は仮説である。例 36)も 37)も、前件は、後件の問題解決には有益ではないと、話者が示している。また、「デキナイ」という否定表現が後件に見られる場合もある。

38) 1チャンネルから29チャンネルまでの番組を真似してみた**トコロデ**、それほど多くの視  
聴者を獲得することはできない。 (『ビル・ゲイツ未来を語る』)

39) たとえ規制をした**トコロデ**、有害な化学物質の排出をゼロにすることは決してできない。  
(『41歳寿命説』)

例 39)の前件は仮説である。例 38)、例 39)の前件は共に、後件で示される問題の解決とはならないことを示している。また、例 40)、41)には、「ナル+否定」の例が見られる。

- 40) 正式な抗議をしたトコロデ、無為無策を露呈する結果にしかなるまい。  
 (『暴走するプライバシー』)
- 41) 年をとってから、えらくなったトコロデ、なんにもなりません。(『ジャータカ物語』)

例 40)、41)の後件は、共に前件で提示されている意義を否定している。また、「トコロデ」文の後件には、推量表現「ダロウ」「デショウ」や判断の「ハズ」などが常に現れている。(例 42)、43)、44)、45)を参照)

- 42) あの中華料理店の主人も、従業員がひとり消えたトコロデ、けっして警察に駆けこんだりはしていないだろう。(『新宿のありふれた夜』)
- 43) 「ありのままのあなたを愛しているのよ」と、親が急に子どもに言ったトコロデ、子どもは面食らうか、親を無視するか、傷つくかのどれかだろう。(『子どもの薬物依存と家族』)
- 44) 今度の最後の戦闘にしたトコロデ、日本の沈むべき軍艦はやはり沈んでしまったでしょう?  
 (『連合艦隊ついに勝つ』)
- 45) 名教君子のくりだす是非善悪の倫理観を超えたトコロデ、「自然」のなかで主体性を回復する道は、容易ではなかったはずだ。(『人間三国志』)

例 42)、43)、44)は、前件の状況の下で、判断を下している。「トコロデ」文では、前件の場面に視点を置き、前件から判断する姿勢が読み取れる。つまり、前件や前件からの予想が成立しないと読み取れる。さらに、例 46)、47)のように、前件・後件とも事実となる場合がある。

- 46) ようやく体が動き始めたトコロデ、外野手への転向を命じられる。  
 (『僕達も胴上げに参加していいんですか?』)
- 47) 現代の医学によってでき得るかぎりの延命策が図られたトコロデ、四肢が動かなくなり、衰弱してやがて死ぬ。  
 (『オバケヤシキ』)

例 46)、47)では、前件事態で示される有用性が後件事態によって否定されている。

### 5.3.1.1 「トシタトコロデ」「Vウ・ヨウトシタトコロデ」

「トコロデ」の関連形式として、「トシタトコロデ」「ニシタトコロデ」「トイッタトコロデ」が挙げられる。「トシタトコロデ」の場合、多くは「Vウ・ヨウトシタトコロデ」の形で現れているが、そのほか、検索にヒットした逆接の用例は、48)のように、「仮に…トシタトコロデ」しか見られなかった。

- 48) 仮にマニュアルがあったトシタトコロデ、それはたとえば恋愛小説なら恋愛小説を書くためには、というような限定されたものになると思います。(『文章王』)



例 48)では、前件も後件も仮説である。「トシテモ」とくらべてみると、後件成立は必然的ではなく、ただ、前件の仮説によって導かれる結果と見なされる。「V ウ・ヨウトシタトコロデ」の文例から見ると、順接も逆接も表せることがわかる。逆接を表す文例には、前件では不定語との共起が見られる。

- 49) 気候風土が異なる以上、いくら「イギリス式」を实践シヨウトシタトコロデ、できることとできないことがある。 (『これでもイギリスが好きですか?』)

例 49)のように、前件では「いくら」との共起が見られる。「いくら+トコロデ」は、無条件を表す、ということが既に証明されているので、ここでは例だけ示すこととする。

### 5.3.1.2 「ニシタトコロデ」

「ニシタトコロデ」の場合は、順接も逆接も表せるが、逆接と判断される理由は、ほとんど後件の否定表現や前件「例え」、「仮に」のような仮説表現にある。まず、一語に接続する「ニシタトコロデ」をみてみよう。

- 50) それに、彼自身ニシタトコロデ、決してバード・レイノルズのような面相ではない。 (『ハワード・ザ・ダック』)
- 51) 私ニシタトコロデ、ペーパー・クリップのちらばりかたをいちいち記憶しているわけでもないのだ。 (『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- 52) 久美子ニシタトコロデ、おろおろ泣きだすに違いない。 (『北都物語』)

例 50)、51)、51)は、後件には否定表現が来ないと、逆接のニュアンスも読み取れないと考えられる。実際、これらの文の意味は、特別な例を挙げて、それも同じ結果になると示しているだけで、他の前件にしても、後件が変わらないという意味を表していることから、前件と後件が逆接関係を成している。また、例 50)~52)と類似し、名詞成分のフレーズに接続する例も観察される。(例 54)を参照)

- 53) アメリカの戦争能力ニシタトコロデ、ほとんど変化もないはずなのよ。 (『連合艦隊ついに勝つ』)

ほかには、前件に「逆に」、「稀に」、「仮に」、「例えば」などの表現が現れ、後件で結果が変わらないことを示している場合、前件・後件は逆接関係となる(例 54)~57)を参照)。また、58)のように接続語としても用いられる。

- 54) 逆に、名前をシステムティックニシタトコロデ、検索のスピードが上がるわけではない。 (『「超」整理法』)

- 55) 稀におこなわれる結婚ニシタトコロデ、長く続くものは本当に数少ない。  
(『ジュリーのこんなパリ知ってますか。』)
- 56) 仮に数値ニシタトコロデ、気象庁の降水確率と一緒にね、だからどうするという判断は結局、他人に任せることになる。  
(『スリー・アゲーツ』)
- 57) たとえば、ドーセット州のポートランド半島とイギリス本土をむすぶチェジル堤防ニシタトコロデ、たんに砂利を積んだものに過ぎない。  
(『水源の秘密』)
- 58) ソレニシタトコロデ、道楽で覚えた剣術にかなわぬというのは、あまりにも不甲斐なかった。  
(『ふりむけば闇』)

前掲した例と類似し、後件には否定表現や低い評価が現れる場合、「トコロデ」の前件と後件は、逆接関係となる。

### 5.3.1.3 「トイッタトコロデ」

「トイッタトコロデ」が用いられる場合、前件 R の定義について、修正注釈が行われていて、前件と後件が逆接構文を成しているといえる。したがって、前件がメダ言語の形で現れる場合、逆接となる可能性が高く観察される（例 59）を参照）。また、「不定語＋否定表現」のような構造が現れる場合、前件・後件が逆接関係を成している（例 60）を参照）。

- 59) 遊ぶトイッタトコロデ、なにをしたらいいのか見当もつかない。  
(『水底の棺』)
- 60) 男がいくら平気だだトイッタトコロデ、女が臆病では、さらに愛を高めていくのは難しい。  
(『失樂園』)

例 60)では、「遊ぶ」の定義に関して、後件では修正注釈が行われている。例 61)では、「イクラ～難しい」というような構造が読み取れる。ここでは、前件が後件を変えることができない、という流れが読み取れる。

### 5.3.2 「トコロガ」

「トコロガ」文では、前件と後件は、〈対比〉、〈直接結果に導き、提示するもの〉、〈期待・要求・予想が含まれるもの〉という関係となっている場合がある。〈対比〉を表す「トコロガ」は、「ガ」と互換ができ、この「トコロガ」はやや書面語的な趣がある。

- 61) 東京なら「フン、作り話だろ」で終わるトコロガ、中国の奥地だと「きっとあるよねこういうことって」と、リアリティバリバリ。  
(『超フェラーリ主義』)

例 61)では、前件と後件には推論が介されていない。したがって、楠本(2000)で述べていたように、「トコロガ」文は、必ずしも、予想・期待とされることを裏切る結果が導かれるわけではない。また、〈直接結果に導き、提示する〉場合、田中(2004)の通り、前件から不備な後件が来るとき、「ガ」を取り除いても構わない。例 62)、63)は、逆接関係ではない。

- 62) 文学とか哲学とかが話題になって、漱石の話が出た**トコロガ**、ひとりの級友が、「こんど岩波から全集本が出るが、おやじがあれを買うというので、あれで漱石を読みたいと思うんだ」と言っていました。 (『中野重治は語る』)
- 63) 東京都の港区、ここでひとり暮らしの老人約二千名を対象に調査した**トコロガ**、何と木造賃貸の約二七%に当たる人が立ち退きを迫られている。 (『国会会議録』)

そして、期待・要求・予想が含まれる場合、前件は結果事実により修正、打消され、「トコロガ」文は逆接を成す。

- 64) くらくらしで独りでは歩きにくいから、一緒に連れて行つて下さいと頼んだ**トコロガ**、その下士官は一寸私の脈を見て、それから階段の下までは私を支へるやうにして降りてくれたけれど、校庭に出ると、私をはふつておいて、本部の方に走つて行つた。 (『芥川竜之介雑記帖』)
- 65) それで、抜いたのは一体どういうことなのだというので市民団体に追及いたしました**トコロガ**、まだそのデータというものが出てきてないのだということで言いわけされておりましたけれども、その当時既に業界に対しましては「資料」という、こういうものが流されておったわけです。
- 66) 補助造林から融資造林に切りかえれば一遍に五十ヘクタール、百ヘクタールできると、やろうと思いましたが**トコロガ**、植林の人夫がおりません。 (『国会会議録』)

「頼んだ」、「追及しました」、「と思いましたが」というような表現から、前件からの予想や期待が現れていることがわかる。例 65)、66)、67)はそれぞれ、期待とズレ、要求が満たされていない、思い通りに実行することが出来ないという内容を表している。

以上の例から見ると、対比、事柄そのまま引き受けることではなく、〈意外〉が読み取れる場合や、前件の期待・要求・予想が後件で修正、打ち消されたりするのが「トコロガ」が担う逆接の特徴といえるだろう。したがって、逆接の「トコロガ」文においては、逆接の意味は前件・後件の対立によってなされているのである。具体的には、R と T の直接的な対立、R と T の所属する ID の対立、ID が心的世界と現実世界と対応し、R と T が対立する場合が見られる。

### 5.3.3 「トコロヲ」

「トコロヲ」は構文上、「トコロガ」「トコロデ」と同じく、逆接を表すことがある。

- 67) たとえば「1 + 1 は 3 である」と主張する人がいた場合、「いやそれはちがう 2 である」とストレートに反論すればいい**トコロヲ**、「ひょっとしたら 3 かもしれませんが、計算をしてみるとどうやら 2 になるようなのですが、いかがでしょう」とやるのが日本式の討論である。 (『学び心』)

68) 「本来なら艦長がお参りに三疊すべきトコロ、まだ各所からの取り調べが残って居り、遅くなりましたが、『くにしお』を代表して、まずは船務長の私と船務士がお線香を上げさせて戴くように、司令部から申しつかって参りました」 (山崎豊子『約束の海』189)

例 67)の「トコロヲ」は「ノニ」や「モノノ」と置き換えられる。場面的な捉え方から見れば、「トコロヲ」を使う場合、前件を一挙に、後件で取り消される視点が見られる。68)のように「トコロ」だけでもこうした意味があらわされる。「本来なら」「べき」といった当然あるべき事態とは異なる事態をやむなく差し出している。「トコロ」の心情的な特徴があらわれている。この場合「ノニ」を用いると、話者の不満が読み取れるが、「トコロヲ」を用いると、より客観的に場面とらえている。また、「モノノ」を使うと、前件と後件はただの相反関係となり、「トコロヲ」のような前件を一挙に取るような場面感が読み取れないのである。

#### 5.4 結語

本節では、「トコロデ」、「トコロガ」、「トコロヲ」とこれらの関連形式を分析した。「トコロ」節は、客観的に場面を切り取って示す機能がある。「逆接」として用いられる「トコロデ」文には、〈既定価値を崩す〉を特徴が見られる。この〈既定価値〉は、前件から予測される因果関係、あるいは前件 R のフレームである。「トコロデ」の関連形式として、「トシタトコロデ」、「Vウ・ヨウトシタトコロデ」、「(ソレ)ニシタトコロデ」、「トイッタトコロデ」がある。「トシタトコロデ」文の前件は、逆条件を表し、主に「仮に」などと共起する。「Vウ・ヨウトシタトコロデ」文では、意志の不実現が表されるが、「Vウ・ヨウトシテモ」ほど、後件（意志したことが実現しない）への主観性は強くない。「ニシタトコロデ」文の前件には、一般例示や極端例示が表される。また、「ニシタトコロデ」文は、「ニシテモ」ほど後件成立の必然性が強くない。また、「トイッタトコロデ」文は「トコロデ」文と類似し、〈既定価値を崩す〉特徴が見られるが、「トイッタトコロデ」文は、前件 R は、引用か名詞である。「トコロガ」文は、対照や反期待が表せるが、反期待では、前件 R から予想される結果と相反した結果 T が成立する。「トコロヲ」では、事態の自然な進展が遮られる場合、本来の様子から逸脱する場合がある。「トコロヲ」は、事態進行の軌道の切り替えと事態の切り替えが表される。

以上の分析を、以下の表 14 にまとめる。

表 14 「トコロデ」文と関連形式の特徴

| タイプ          | 用法             |         | R と T の関係            | 事実性               | 文の機能              | 例                |
|--------------|----------------|---------|----------------------|-------------------|-------------------|------------------|
| トコロデ         | 既定価値を崩す※1      | 因果関係の否定 | 逆条件関係（無条件を含む）※2      | R が仮説か現実、T が話者の判定 | 前件事態から予想した因果関係の否定 | 1)<br>48)<br>61) |
|              |                | フレームの修正 | 程度差関係                | R が仮説、T が話者の判定    | 前件事態の予想価値の控え      | 19)              |
| (ソレ)ニシタトコロデ  | 一般例示や極端例示      |         | R は T の除外対象ではない      | R が例示、T が事実       | 前件が特例ではないことを示す    | 50)              |
| Vウ・ヨウトシタトコロデ | 意志通り実現しない結果を示す |         | T が R の期待通りには行かない    | R が意志、T が分析       | 意志通り実現しない客観を示す    | 49)              |
| トコロガ         | 対比             |         | R、T が対照関係            | R、T とも事実          | 対比を示す             | 62)              |
|              | 前件から期待される価値の崩し |         | R から予想された結果と T が相反する |                   | 反期待の事実を示す         | 29)              |
| トコロヲ         | 事態の自然進展が遮られる   |         | R の進行が T の発生によって遮られる |                   | 進行軌道の切り替え         | 24)              |
|              | 本来の様子から逸脱する    |         | R が T となる            |                   | 事態の切り替え           | 25)              |

※1 「トイッタトコロデ」も用いられる。

※2 「トシタトコロデ」も用いられる。

## 6. 〈常識による推論〉との背反関係

### ―「ニモカカワラズ」文の成立―

#### 6.1 はじめに

事実系のもう一つの逆接機能辞として、「ニモカカワラズ」がある。「ニモカカワラズ」の前件、後件共に事実である。また、前件と後件は、常識による推論によって関連付けされる。前件から、常識による推論が含意されるが、それと相反して、実際の結果 T が成立している。常識による推論の不適格性が、「ニモカカワラズ」文によって述べられている。

- 1) 営業担当者は、ものすごく苦勞した**ニモカカワラズ**、あえなく減俸処分となった。

(『女人禁制』)

例 1)では、前件 R「ものすごく苦勞した」から、常識による推論では、「いい結果」が期待されるが、実際の結果は「減俸処分」である。つまり、「ものすごく苦勞した」ということから、「いい結果になるでしょう」という推論が、「減俸処分」という事実によって否定されたのである。「ものすごく苦勞した」という有利条件が、無効とされている。

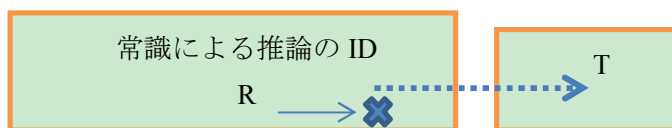


図 81 「ニモカカワラズ」文のスキーマ

図 81 のように、「ニモカカワラズ」文によって、R からの常識による推論が現実の事態 T によって、修正、否定されている。T という事態は、常識による推論の結果からずれていることがわかる。「ニモカカワラズ」文では、前件・後件とも事実であり、しかも継起的に発生しているのが一般的である。前件と後件の関連づけは、常識による推論と相反する点にある。次に、例 1)をテモ文に置き換えて見る。

1-a) 苦勞し**テモ**、減俸処分の結果は変わらない。

1-b) いくら苦勞し**テモ**、あえなく減俸処分を受けるだろう。

1-c) ものすごく苦勞した。苦勞し**テモ**、あえなく減俸処分となった。 (作例)

「ニモカカワラズ」を「テモ」文に言い換える場合、事実系の構文が条件系になる。例 1-c)のように、先行する文で、その事態の発生を既定すれば、確定条件となるが、そうでないと、「テモ」と置き換えると、仮定条件文になる。「ニモカカワラズ」文は、前件・後件が常識による推論に沿わないことを示しているのに対し、「テモ」文は後件の成立が際立っている。

次に、例 1)を「ノニ」文に言い換えてみる。

1-d) 営業担当者は、ものすごく苦勞したノニ、あえなく減俸処分となった。 (作例)

「ニモカカワラズ」文と比べてみると、「ノニ」文には、「今」、「ここ」、「私」のような主観的な視点からの期待が観察される。つまり、話者は、営業担当者と共感し、「ものすごく苦勞した」という点から、いい結果を期待しているが、実際の結果「減俸処分」にあたっては、不満が読み取れる。「ニモカカワラズ」の場合、話者は、第三者の視座を取り、事態の流れ「ものすごく苦勞した」→「あいなく減俸処分となった」を観察している。その観察の結果、常識による推論と反していると判定している。したがって、「ノニ」文は、期待された結果が実現されないことに主観が現れているのに対し、「ニモカカワラズ」文は、前件と後件は、常識による推論によって結び付けられている。

## 6.2 「ニモカカワラズ」に関する先行研究の検証

市川(1978)は、前件と後件の論理的結合関係を、〈順接型〉と〈逆接型〉に分けて「ニモカカワラズ」を背反・食い違いを表すと述べている。松木(1989:120)は、「ニモカカワラズ」を接続助詞として働き、逆接条件の確定を示す複合辞としている。〈逆接条件の確定を示す〉ということから、「ニモカカワラズ」の前件と後件は、事実に限られるということが見て取れる。したがって、前掲のいわゆる〈背反・食い違い〉は、常識による推論との「背反・食い違い」といえるだろう。

### 6.2.1 〈常識による推論〉に基づいた背反関係

「ニモカカワラズ」の前後件とも、事実として現れる点から、「ニモカカワラズ」文の前件では、一般的事実が表れ、前件事実と後件事実は、常識による推論に基づいた背反関係となっている。前田(2009:23)では、「ニモカカワラズ」は逆原因を表すとされている。前田は、リアリティーの側面から論理文を考察し、「ニモカカワラズ」文の後件に既定性があることから、「ノニ」と類似し、逆原因関係を成していると考えている。

2) だが、最後のひとは...? 等々力警部の必死の搜索ニモカカワラズ、それはどうしても発見されなかった。 (『Yahoo!ブログ』)

例 2)では、「ニモカカワラズ」は名詞成分に接続しているが、前件はすでに発生した事態として捉えられている。また、常識による推論によれば、「警部の必死の搜索した」→「何かしら発見はあるだろう」があるが、実際の結果は推論と相反し、「どうしても発見されなかった」。例 3)を「テモ」文に言い換えてみる。

2-a) 必死に搜索しテモ、それは発見されなかった。 (作例)

例 2-a)の「テモ」文と「ニモカカワラズ」文と比べてくると、2)の前件は事実として示しているのに対し、「テモ」文の場合は、前件を極端条件として示している。「テモ」文の場合、「それは発見されなかった」という結果は、前件がいかに変化しても、変わらないことだとみなされる。

例 2)の「ニモカカワラズ」をそのまま「テモ」で置き換えると、自然に見受けられる。

2-b) だが、最後のひとつは...? 等々力警部が必死に搜索しテモ、それはどうしても発見されなかった。(作例)

例 2-b)の前件は、3-a)より、条件の指定性が強く読み取れ、「テモ」文のような前件で条件の変化を示すような文には適性が低く見られる。また、「搜索しテモ」と「どうしても」が相次ぎ同じ文に取り立てられると、矛盾が見られる。前者は特殊条件となるが、後者は無条件と見なされる。「テモ」文の場合では、特殊条件と無条件は前後して現れるのは滅多にない。

「テモ」文に対し、「ニモカカワラズ」文は、後件の事実によって常識による適格性を示していることから、「テモ」文より主観が現れにくく、より客観性を重視する性格が見られる。

### 6.2.2 複雑文脈における「ニモカカワラズ」

田中(2004:273)は、「ニモカカワラズ」は強調した言い方で、書面語であるとしている。前件・後件とも事実叙述である場合、主観性の強い話し言葉には適用性が低くなり、書面語として用いられる性格が強く伺える。

3) 手術中に適切なモニター管理がなされていたニモカカワラズ、モニターを監視していた者がその情報を正確に解釈できなかったために患者が死亡したという報告は少なくありません。(『知らないと危ない麻酔の話』)

「手術中に適切なモニター管理がなされていた」と、「患者が死亡した」という前後件は両方とも事実を表しているが、「モニター管理…」という語句が挿入されていることにより、文脈が複雑になっている。つまり、常識による推論「手術中に適切なモニター管理…」→「患者の死亡人数の減少」のほかに、因果関係「モニターを監視していた者がその情報を正確に解釈できなかった」→「患者が死亡した」も含まれている。したがって、条件の競合性が観察される。

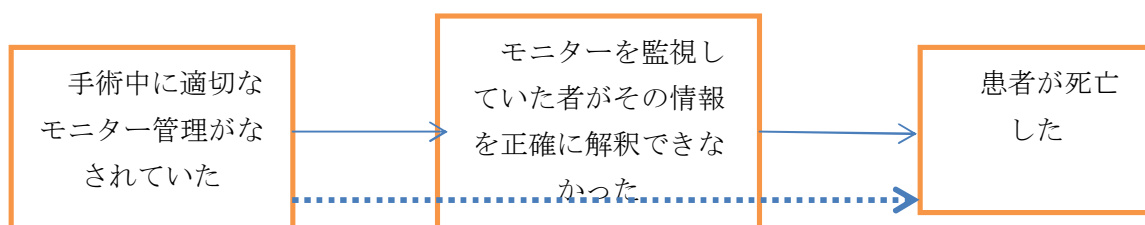


図 82 複雑な文脈における「ニモカカワラズ」

図 82 のように、「手術中に適切なモニター管理がなされていた」ということは、「患者が死亡する」可能性が低くなる条件と見なされるが、「モニターを監視していた者がその情報を正確に解釈できなかった」場合、「患者が死亡した報告は少なくありません」という結果が示されている。例 2)は、常識による推論（「手術中に適切なモニター管理…」→「患者の死亡人数の減少」）の不適



格性を示しているといえるだろう。これはまた、常識による推論から逸脱していることを示している。

### 6.2.3 慣用表現への拡張

西原(1985:34)により、「ニモカカワラズ」は書き言葉として、〈意外性〉＋〈遺憾〉或いは〈好感〉を表すとされている。〈意外性〉は確かに、〈常識による推論〉とのずれから理解できるが、〈遺憾〉や〈好感〉など、話者の気持ちは、表出されず、文の裏に含意されると思われる。

以下の例は、〈好感〉を表す「ニモカカワラズ」である。

4) ご遠方ニモカカワラズ、ご参列くださいませ… (西原 1985:34)

例4)のように、「ご遠方ニモカカワラズ」は、慣用表現で、正式な場面で頻繁に用いられる。「ご参列くださいませ」ということから、すでに、客がそろっていることがわかる。常識により、「遠くに住んでいる」→「来られない・来るのが難しい」という推論が成立するが、それと相反し、客が「参列した」。なので、この事実結果により、常識による推論が成立しないことが示されている。常識では、「遠い」は「来る(参列する)」の不利条件だとみなされるが、客はその不利条件を乗り越えて会場に来ている。この行為に対し、後の省略された部分には「どうもありがとうございます」など、話者の好感を示す表現が来ると予想される。例4)は慣用的な挨拶であるが、使い方としては、「ニモカカワラズ」のプロトタイプ〈常識による推論〉に基づいた背反関係から拡張された例と判断できる。

### 6.2.4 第三者の期待そのものが前件として現れる場合

丹羽(1998:107)は、「ニモカカワラズ」は〈反推量希求型〉文としている。例5)、6)を見てみよう。

5) 雨ニモカカワラズ、人通りが多い。

6) メダルが期待されていたニモカカワラズ、入賞もなかった。 (丹羽 1997:107)

例5)、6)の前件も後件も事実である。例5)の前件と後件には、常識による推論が含意されているが、例6)の場合では、〈期待〉そのものが前件に現れている。この〈期待〉は〈みんなの期待〉と理解できる。認知言語学では、「常識」というものは、人間の認識の「土台」に例えられている。この〈常識〉は、「フレーム」とも言われ、ある事態「R」を認識し、自然に想起される内容を指している。つまり「雨が降る」→「出かけない」のような想起関係である。例6)の〈みんなの期待〉は、容易に理解できるだろう。つまり、五輪大会に参加したら、メダルは自然に期待される。常識による推論という点から、例5)、6)は類似しているといえるだろう。

例5)のように、「雨」の場合、常識から判断すると、「人通りが少ない」となるが、結果は人通りが多かった。前件と後件のつながりは、「雨が降る」→「人通りが少ない」という〈常識による推論〉に基づく背反関係となっている。例5)を「テモ」文に言い換えてみる。

5-a) 雨が降っ**テモ**、人通りが多い。 (作例)

例 5-a) の場合、「人通りが多い」ことは、常に成立している。この点で例 5)と異なっている。例 5)は〈常識による推論〉に基づく背反関係であるが、例 5-a)は、後件の成立は恒常性を有している。

例 6)では、「ニモカカワラズ」は、「ノニ」と置き換えることもできるが、主観性が変わる。

6-a) メダルが期待されていた**ノニ**、入賞もしなかった。 (作例)

「ノニ」を用いる場合、話者は「みんな」と同じ視点から事態を観察している。したがって、「入賞もしなかったこと」には、話者は個人的な不満を表している。また、例 6)を「**テモ**」と置き換えると、「入賞もしなかった」ということは意外であることから、「**テモ**」を用いると、その確実性が高くなってしまい、前後件関係も矛盾してまう。

「ニモカカワラズ」文の前件そのものが期待となる場合、さらに〈第三者の期待〉が現れる。

7) しかし、二、三歩行ったところで立ち止まり、チーナの懇願**ニモカカワラズ**、それ以上動こうとしなかった。 (『インテンシティ』)

例 7)の場合、「チーナの懇願」というものはみんなの期待ではないが、第三者の期待であることから、「**ノニ**」文と置き換えると、また話者とチーナの共感が観察される。

また、後件はただの一時的な出来ことで、確実性とは関連がないことから、「**テモ**」と直接互換できない。

7-a) チーナが懇願し**テモ**、それ以上動こうとしなかったでしょう。 (作例)

例 7-a) のように、文末に「でしょう」をつけると、〈恒常性〉との関連づけができ、文として成立することが考えられる。また、「**テモ**」を使う場合、「チーナの懇願」は、特殊条件、あるいは極端条件として見なされているが、「ニモカカワラズ」の場合では、それは一時的な出来事として捉えられている。

丹羽(1997:107)によれば、「ようだ」「らしい」によって、確定していないにせよ現実がそうであると示されれば、「ニモカカワラズ」が用いられる。例 8)を参照しよう。

8) みんな反対している**ニモカカワラズ**、彼は行くらしい・行く**ようだ**。 (丹羽 1997:107)

現実には、前件も、後件も話者の視角から、既定事態として捉えられるからだ。また、「みんな反対している」ことから、「やめる」ことが望まされるが、実際、彼は行くとしている。みんなの期待と相反する事態が成立している。時間軸においては、事態発生の前後順序が見られる。例 8)の内容を「**テモ**」文に言い換えてみよう。

8-a) みんなに反対されテモ、彼は行くだろう。

(作例)

例8)の「らしい・ようだ」は、話者の観察した事実として捉えられるので、それを推測の「だろう」に置き換えないと、「テモ」文の座りが悪くなると考えられる。以上のように、「ニモカカワラズ」文では、話者は自分の主観を表せなく、ただ常識による推論に基づく背反関係となっている事態Aと事態Bを捉えている。その前件・後件の関係は、以下のように示される。

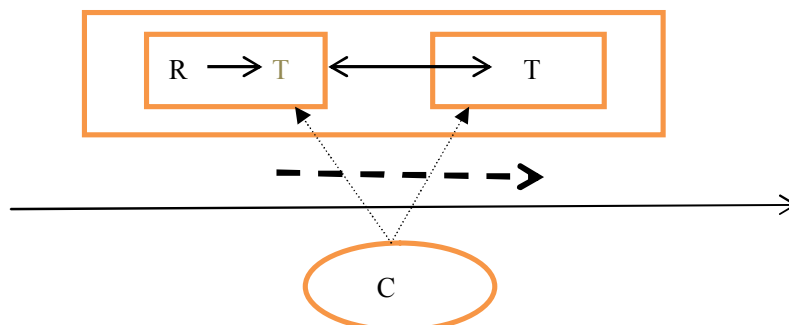


図 83 「ニモカカワラズ」のスキーマ

次に、実例考察を行いながら、「ニモカカワラズ」文を再検討していく。

### 6.3 実例による考察

実例調査した結果、「ニモカカワラズ」は、4919件ヒットし、その形はいくつかにわかる。「ニモカカワラズ」は、接続助詞用法と、接続語句用法共にある。また、接続助詞用法の中、名詞に接続する例が多く観察される。さらに、二重接続詞用法なども現れているが、それを構文モデルで分析する。次から、名詞に接続する「ニモカカワラズ」文を分析する。

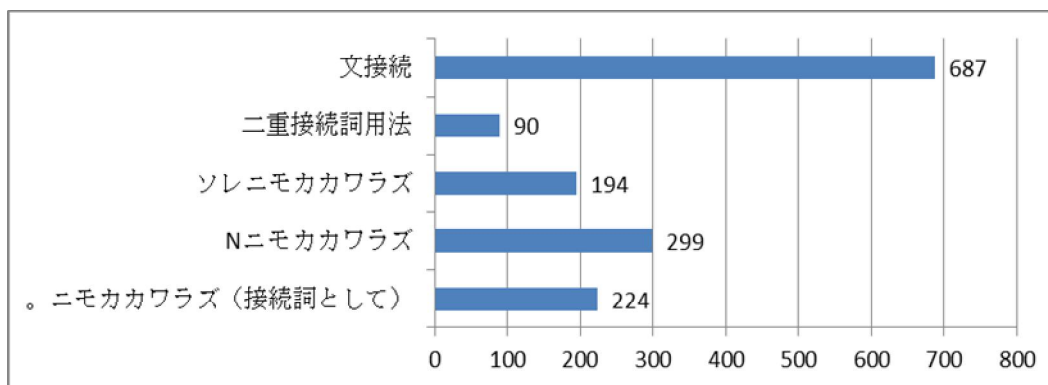


図 84 「ニモカカワラズ」の使用調査

#### 6.3.1 不利条件の無効

実例では、名詞に接続する「ニモカカワラズ」と文接続の「ニモカカワラズ」には、若干の違いが見られる。前者は、後者より文法化が進んでいるように見られる。

『大辞林』(第三版)によれば、「ニモカカワラズ」は連語で、助詞「に」「も」に動詞「かかわ

る」の未然形「かかわら」と助動詞「ず」がついたものと記述されている。また、「ニモカカワラズ」は体現または用言の連体形について、その事柄に反する結果になることを表すとされている。

一方、動詞「かかわる」の意味について、『大辞林』は「関係を持つ」、「こだわる」と記述している。『新明解国語辞典』では、「かかわる」は、(決定的な) 関係を持つ(望ましくない事柄に関係する意にも、しばしば用いられる) とされている。

9) 荒天ニモカカワラズ、山に登ろうとする。 (『大辞林』)

9-a) 荒天デモ山に登ろうとする。

9-b) 荒天なノニ、山に登ろうとする。 (作例)

「荒天」は「山に登る」不利条件であるが、例 9)のように、「荒天」という名詞に接続する場合、前件と後件の逆接のニュアンスが動詞文に接続する場合ほど強くないと思われる。後件事態は、「不利条件」から影響を受けていない。その点で、「テモ」との言い換えも考えられる。9-a)と 9)では、根本的な違いは後件事態にある。例 9)の場合は、その時限定の事態であるが、「テモ」文で望まれる一般化的な後件や、確実性に関する後件ではないから、そのまま「テモ」文と置き換えることが難しく思われる。「ノニ」文に置き換えると、話者の主観性が現れ、後件の発生は望ましくないと話者が考えていることが読み取れる。この点で、「テモ」文とは正反対の関係となっている。次に、文接続の「ニモカカワラズ」の文例を見てみよう。

10) かなりの反対があったニモカカワラズ、票決をしてしまった。 (『大辞林』)

例 9)とは異なり、例 10)の前件から、常識による推論にもとづき、後件は比較的容易に導き出せる。つまり、「かなりの反対があった」から、通常考えでは、「諦める」と予想されるが、結果は「票決をしてしまった」である。では、例 10)を名詞接続文に言い換えてみると、例 10-a)が得られる。

10-a) かなりの反対ニモカカワラズ、票決をしてしまった。 (作例)

動詞文と比べると、名詞フレーズ接続の場合では、前件の独立度が弱く、ただの不利条件として取り上げ、事態の発展はその不利条件によって変わることはない、というような一貫性が読み取れる。前掲例 7)のように、名詞に接続する場合、「不利条件」以外、第三者の意思が実現されないことなども表される。要するに、名詞に接続する場合、主人公は「不利条件」や第三者の意思を無視し、事態はそのまま進んでいるように見られる。

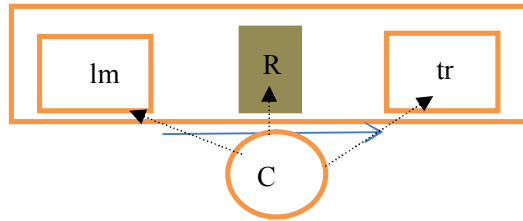


図 85 不利条件の無効を示す「ニモカワラズ」のステージモデル

図 85 のように、lm は事態発生の起点で、tr は実態の結果と見なされる。R という不利条件や第三者の願念が無視され、事態の発生はそのまま進んでいる。また、観察者は舞台の下から、lm から tr に行く事態を観察していることから、「ノニ」とは相対的に、「ニモカワラズ」文は客観的な視座を取っていることがわかった。

以下、更に例を挙げて、名詞文に接続する「ニモカワラズ」の不利条件を検討してみる。

- 11) インフレ対策の結果高失業率が定着して経済の矛盾が深化し、また集権化政策の政治的基盤の不安定ニモカワラズ反集権化勢力の不統一が続く状況の下で、地方財政自治再生の道は未だけわしい。(『地方財政の国際比較』)
- 12) 試験科目がラテン語やギリシャ語などの古典学中心におこなわれれば、これらの教育に馴染んだ支配集団の子弟が有利になり、試験というメリトクラティックな選抜のたてまえニモカワラズ実は家柄や社会的地位にもとづく属性主義的選抜が作動していることになるからだ。(『社会科学の方法』)

例 11)、12)は名詞フレーズに接続しているが、実際その不利条件は長く読み取れる。例 11)では、「インフレ対策の結果高失業率が定着して経済の矛盾が深化し、また集権化政策の政治的基盤の不安定」は「反集権化勢力の不統一が続く状況」の不利条件となる。また、例 12)では、「試験というメリトクラティックな選抜のたてまえ」は、lm「試験科目がラテン語やギリシャ語などの古典学中心におこなわれれば、これらの教育に馴染んだ支配集団の子弟が有利になり」→tr「実は家柄や社会的地位にもとづく属性主義的選抜が作動していることになる」への導出には影響が及ばなかったことがわかる。

### 6.3.2 常識の顕在化標識

前掲で行った分析のように、「ニモカワラズ」文は〈常識による推論の不適合〉を示している。多くの前件には「はずだった」、「常識で判断してもともと…」など、〈常識による推論〉、あるいは先行する文に現れている。『大辞林』によれば、「はず」は「これからの事柄についてその予定を表す」、あるいは「不審な物事や納得のいかない事柄を何等かの事情を根拠にして納得する意を表す」、または「たはずだ」の形で、「事柄についての確信・確認の意を表す。その確信していた事柄と事実とが違っていることを不信に思う気持ちを込めて言う」とある。したがって、「はず」は常識による推論を示すことができるといえるだろう。

- 13) 市の担当者が、事故後、六百万円を支払うはずだったニモカカワラズ、二百五十万円から交渉して小刻みにセリ上げたことにたいする彼の怒りだった。 (『この国の奥深く』)
- 14) 常識で判断してもともと死体でもなければ、多くの可能性をもつケースであるニモカカワラズ、経過は笹川氏による殺人事件へといっきょにつき進んだ。 (『メディアの現象学』)
- 15) 奇妙なことに、ホイジンガは、スポーツと戦争との親近関係を認識していたニモカカワラズ、戦争同様のスポーツの領域にも作用している非文明化の過程に、十分に気づいてはいなかった。 (『「非人間化」の時代』)

例 13)、14)と異なり、例 15)では、「ホイジンガは…認識していた」という表現が表れている。これは、第三者の認識であり、「スポーツと戦争との親近関係」は、一種の常識だといえるだろう。「ホイジンガ」が認識しているのは、その常識である。また、後件では、「非文明化の過程に、十分に気づいてはいなかった」ということから、「ホイジンガ」の常識への認識は、まだ十分とは言えない。したがって、スポーツと戦争との親近関係による推論は、後件事態によって不適格とされている。この他にも、接続詞「ニモカカワラズ」の先行する文にも、常識が示されていることがある。

- 16) ゴルフは作家にとっての好素材のはずです。ニモカカワラズ、ゴルフを嗜みながらゴルフ小説を1編も書かない文学者が多い。 (『痛快！ゴルフ学』)
- 17) どう考えても、ありうることではない。ニモカカワラズ、一これはなんなんだ一おぼろな実感だけがジワリとのぼって来たのである。 (『風の組曲』)
- 18) もしもいまの不況がこのまま長くつづけば、その存続さえ危ぶまれるし、私が定年でなく再びオイルボールの浮かぶカーグ島に行くことなど、とてもできないと思う。ニモカカワラズ、私の心の中は長期間過ごした極東汽船から離れることに深い不安があった。 (『定年最後の航海』)

例 16)で、先行する文は、話者によって、ある通念的な理解が取り上げられている。そして、この通念の理解は、後件によって否定されている。例 17)、18)では、「どう考えても、ありうることではない」、「…など、とてもできないと思う」。いずれも常識による推論を示している。例 18)のように、常識から、話者は「それはとてもできない」ことと判断しているが、実際、話者の心の中は、「長期間過ごした極東汽船から離れることに深い不安であった」という状態にある。つまり、先行する文の「と思う」は、他人の考え（第三者の認識）を示している。また、その認識は、常識から得られた結論と見なされる。ほかには、接続助詞の「ニモカカワラズ」を後件の文頭に現れる例も観察されたが、構文上は、前掲した接続詞的用法と同じく、常識による推論の不適格性を示している。

- 19) 逮捕以前なのだから警視庁記者クラブの発表があるわけではない、ニモカカワラズ “公式発表” がたれ流されたとわたしは判断する。 (『メディアの現象学』)
- 20) 拘置状態では、議員としての責務を果たせないのは自明の理だ。ソレニモカカワラズ他の議員と同額の二千万円近い歳費を手にするのは疑問だ。 (『新潟日報』2003.7.1.)

- 21) ここで詳細に事実関係について触れる余裕はないが、おそらく新しい首がなければ喪が明けられなかったという積極的な「規則」は過去においても存在しなかったと断言してよいと思う。シカシ、ソレニモカカワラズ、首狩りが死と喪明けにきわめて重要な象徴的意味を付与していることは確かである。 (『死の人類学』)

例 19)のように、「あるわけではない」という常識が前件に現れている。さらに、「ソレニモカカワラズ」と二重接続詞で用いられる場合の文例(例 20)、21))を見ると、前件で常識などを取り立てる場合では、それと接続助詞的用法がほぼ同じである。

### 6.3.3 事態と事態のつながり

顕在化された常識や、道理のほか、前件がただの事態として捉えられる文例が最も多かった。

- 22) ただ、初歩の入門書として高く評価されているニモカカワラズ、日本であまり使われないのは諸般の事情があるにせよ残念なことです。 (『ショパンが弾けた! ?』)
- 23) 彼女が孤独な辛い環境に育ったニモカカワラズ、素直なういういしさがあるのも、そのためかもしれない。 (『時の扉』)

例 22)、23)のように、前件事態から、常識による推論が容易に読み取れる。例 22)では、「初歩の入門書として高く評価されている」ことから、「かなり愛用されるでしょう」、「多用されているでしょう」と予想されるが、結果は「日本であまり使われない」である。結果によって、前件からの推論が否定されている。23)では、「彼女が孤独な辛い環境に育った」から、「卑怯な性格をしているでしょう」と予想されるが、結果は「素直なういういしさがある」である。例 23)も例 22)と同じく、後件の事実により、前件からの常識による推論が否定されている。

- 24) さて、「物書きとかそういうの」としては本書の中にこのビヴァリ・ヒルズの御婦人の話を入れることが相応しいかどうか自信はない。ニモカカワラズ、僕はどうしてもこれを外すことができないのである。 (『偉大なるデスリフ』)
- 25) おまけに、部屋の内装はわずかにモルディングが走るくらいで、しごくあっさり、といおうか、貧弱に隣接するあっさりである。ニモカカワラズ、彼は、この部屋に通された時「ベリ・グド」と言ったそうだ。 (『建築探偵の冒険』)

例 24)、25)は、例 22)、23)と異なり、先行する文は、後件の事態発生にとって不利条件と見なされる。先行する文から、例 22)、23)のように常識による推論は得難いことがわかるだろう。

### 6.3.4 接続語句としての用法

前掲した例からも見られるように、「ニモカカワラズ」は、接続詞としても用いられる。また、実例考察の結果、二重接続詞の使用「シカシ、ニモカカワラズ」や、「ソレニモカカワラズ」の例が多く見られる。

#### 6.3.4.1 「ニモカカワラズ」

次に、単独で用いられる接続語句「ニモカカワラズ」の文例を見てみよう。

- 26) いわば本番の稽古は終了している。ニモカカワラズスタジオ内の緊張感に役者さんたちの並々ならぬ真剣さがうかがえる。  
(『Digital Camera Magazine』)

例 26)では、先行する文に、「本番の稽古は終了している」ということが提示されている。「ニモカカワラズ」の後続文に、「スタジオ内の緊張感に役者さんたちの並々ならぬ真剣さがうかがえる」という事態が述べられている。前件、後件とも実際に発生している事態である。「本番の稽古は終了している」ことから、「リラックスしてもいい」と予想されるが、結果は「スタジオ内の緊張感に役者たちの並々ならぬ真剣さがうかがえる」という、「本番の稽古の雰囲気」がまだ持続していることがわかる。先行する文の「終了」と、後件で暗示されている「持続」は、対立している。関係で、「終了」への「フレーム」的な理解が、後件の事態で修正されている。

#### 6.3.4.2 接続詞の二重使用の「シカシ、ニモカカワラズ」

- 27) わたしは絶対にそんなことができなかつただろうと、断言してもいい。シカシ、ニモカカワラズ勝つためになすべきことがまったくそのとおりに起きてしまったのである。  
(『Down the fairway』)

「ニモカカワラズ」によって、前件と後件の背反関係が示されているが、「シカシ」を入れると、その背反関係、〈食い違い〉のニュアンスが一層強く読み取れる。「わたし」は常識的に思えば、そんなこと絶対できないだろうと予想しているが、実際の結果は、「勝つためになすべきことがまったくそのとおりに起きてしまった」ということがわかった。

#### 6.3.4.3 「ソレニモカカワラズ」

次に、「ソレニモカカワラズ」が用いられた例も見てほしい。

- 28) 彼は先天的に手と足が極端に短い人だ。ソレニモカカワラズ、彼は小学校のとき泳げるようになり、飛び込み台から飛び込めるようになった。  
(『路地裏の「名老」学』)

例 28)では、「ソレニモカカワラズ」が用いられている。「彼」は「手と足が極端に短い人」ということは、後件事態発生の「不利条件」である。そして、「不利条件」から影響を受けず、後件事態が発生していることがわかる。接続詞「ニモカカワラズ」と接続語句「ソレニモカカワラズ」の実例を考察した結果、「ニモカカワラズ」文が、〈常識による推論の不適合〉を唱えているのに対し、「ソレニモカカワラズ」文が〈不利条件の無効化〉を説明していることがわかった。「不利条件の無効化」の場合では、話題となる人物が必要となる。そして話題となる人物がその不利条件を気にせず、後件を達成しているのである。



### 6.3.5 関連表現「トイウノニモカカワラズ」と「ニモカカワラズ」

「トイウノニモカカワラズ」は、「トイウ」+「ニモカカワラズ」と同一の表現だと考えられる。コーパスには1例しかなかった。例29)のように、「という」は、通念や日常的に言われていることを取り立てて、常識や道理をいい、後件で事実を挙げ、その通念や常識の不適合を述べる姿勢が見られる。なお、「ニカカワラズ」は「行く行かないニカカワラズ」「行く行かないをトワズ」のような「関係なく」の意味で、「ニモカカワラズ」からは逸脱することに注意したい。

- 29) ところが、実際には審査してみないと事実上そういうふうになるのかならないのかもわからないトイウノニモカカワラズ、ここで協定にはこういう小区域を設定したという意味は、事実上これらの出願者に引き続いて鉱業権を与えるということの内容を前提としておるというふうに考えられるんじゃないですか。 (『国会会議録』)

以上、「ニモカカワラズ」の文例を考察したが、前件で肯定・否定などのような対立構造やいくつかの状況を取り上げ、それを条件と見なされなく、後件の成立を示している。

## 6.4 結語

本節では、「ニモカカワラズ」文を分析した。「ニモカカワラズ」文の前件・後件は、ともに事実であることが特徴であり、事実系構文であるといえる。前件・後件は、〈常識による推論〉によって結びつけられた相反関係が見られる。また、前件には、みな期待や第三者の期待が表されえる場合、常識による推論が、「はずだ」「わけはない」などと共起して現れる場合がある。話者がより客観的立場をとる場合、「ニモカカワラズ」が用いられ、〈常識による推論〉の不適合性が表される。「シカシ、ニモカカワラズ」は、接続語句として用いられ、逆接のニュアンスがより際立てられるが、「ソレニモカカワラズ」や、「シカシ、ニモカカワラズ」が名詞句に接続する場合、先行する文や前件は不利条件であり、後件で不利条件が無効化される。この点において、「テモ」文と連続性があるといえる。

以上の分析を、以下の表15にまとめる。

表 15 「ニモカカワラズ」文とその特徴

| タイプ                   | 用法                      | R と T の関係      | 事実性                  | 文の機能                        | 例   |
|-----------------------|-------------------------|----------------|----------------------|-----------------------------|-----|
| 名詞接続                  | 不利条件の<br>無効             | R は T の不利条件    | R、T とも事実             | 用法と一<br>致                   | 9)  |
|                       |                         | R は第三者の期待      | R が期待、T が<br>事実      |                             | 7)  |
| ソレニモカ<br>カワラズ         |                         | R は T の不利条件    | R、T とも事実             | ※話者の<br>捉え方は<br>相対的に<br>客観的 | 29) |
| 動詞文接続                 | 常識による<br>推論の不適<br>格性を示す | R と T は背反関係となる |                      |                             |     |
|                       |                         | R は推論そのものとなる   | R は常識による<br>推論、T は事実 | 14)                         |     |
|                       |                         | R はみんなの期待である   |                      | 10)                         |     |
| (シカシ、)<br>ニモカカワ<br>ラズ |                         | R と T は背反関係となる | R、T とも事実             |                             |     |
|                       |                         | R は推論そのものとなる   | R は常識による<br>推論、T は事実 | 28)                         |     |

## 第4章

# 条件系逆接構文と事実系逆接構文の用法 と拡張

## 第4章 条件系逆接構文と事実系逆接構文の用法と拡張

本章では、条件系逆接構文と事実系逆接構文の用法と拡張について述べる。第2章と第3章は、逆接機能辞を「テモ」系、「ノニ」系に分けて考察を行った。「テモ」系構文は逆接条件が特徴であるのに対し、「ノニ」系構文は事実的逆接が特徴である。「テモ」系構文では、前件の条件がいかに変化しても、後件の結果が変わらず成立しているという話者の判断が視えるのに対し、「ノニ」系構文では、前件と後件は、期待や、常識による推論とずれていることから、背反関係となっている。「テモ」系構文では、条件の唯一性が否定されている。つまり、取り立てられた条件のほか、同じ結果に導かれる条件が幾つか存在していることが暗示されている。これは、同類を示す「モ」の拡張用法考えられる。同類を示す「モ」の拡張用法を以下の図86に示す。

### 1. 条件系逆接構文の用法と拡張

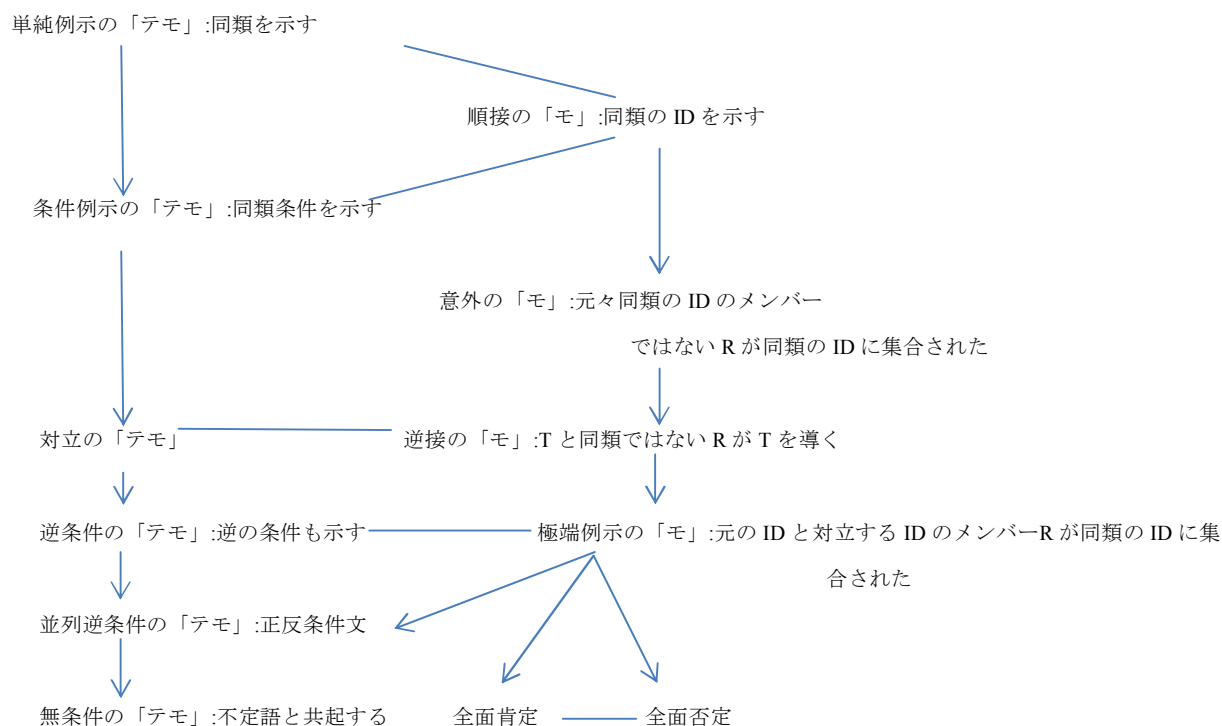


図 86 同類を示す基本用法の「モ」と拡張用法

#### 1.1 同類を示す「モ」から周辺の用法の「モ」への拡張

「モ」の基本用法は同類の提示であるが、他にも〈意外〉、〈極端例示〉、〈詠嘆〉、〈やわらげ〉、〈全面肯定・全面否定〉といった拡張用法もある。また、現代日本語には、古典文法の名残として、逆接を示す「モ」もある。同類を示す「モ」は、例えば、「王さんモ中国人です」といったものである。「王さん」のほかにも、「中国人」がいることは「モ」によって暗示されている。参照点モデルで示すと、「中国人」という ID の中に、R（「王さん」）のほかにも、「孫さん」、「李さん」なども存在していることが「モ」によって暗示されている。ただし、「ジョンソンさんも中国人で

す」という文では、もともと「中国人」ではないはずの「ジョンソンさん」が中国人の ID に集合され、〈意外〉のニュアンスが生じる。また、「サルモ木から落ちる」のような文では、「サル」は木登りが得意だと思われているので、「サル」も「木から落ちる」ことは、極端例示である。つまり、われわれの考えでは、木登りが得意な「サル」は、「木から落ちる」可能性が極めて低い。そのため、「サルが木から落ちる」は極端例示である。また〈詠嘆〉は、例えば、「君も大きくなったな」では、人間が成長するのは自然の摂理で、君は話者にとって特別な存在であるが、ID「人間なら時間とともに成長する」の例外ではない。したがって、取り立てられたものも、恒常性という ID に集合され、これによって〈詠嘆〉のニュアンスが生じる。〈やわらげ〉は、「君もしつこいな」が例として挙げられる。話者は、「君」は、「しつこくない」と考えていったが、実際は、「君」は「しつこい」の ID に集合されている。取り立てられたものが恒常性を有している点で、〈やわらげ〉と〈詠嘆〉は共通している。〈全面肯定〉と〈全面否定〉は、ともに「不定語+モ」の形式が用いられている点で共通している。例えば、「どこのお店モいっぱいだ」のように、R に不定語がある場合、いずれも「モ」の結果の ID（「いっぱいだ」）に集合されている。したがって、ID が無限に拡張される。「不定語+モ+否定」の場合、いずれも結果の ID に集合されないことから、ID は失われる。つまり、ID の無限性拡張は〈全面肯定〉で、ID の消失は〈全面否定〉に相当する。

逆接を表す「モ」文は、〈意外〉の拡張用法とみられる。異なる ID のメンバーR が、後件の ID に集合され、逆接の意を成していることが判断できる。例えば「善戦するモ惜敗」では、語義上相反する「善戦」と「惜敗」が結びついている。実際、逆接の「モ」文には、同じ結果が導かれるという特徴も見られる。つまり、逆接の「モ」文で現れる後件の結果は、「モ」文に先行する文の流れと一致している。このことを、例を用いて説明する。

- 1) 虎の先発エースの安藤司令官は初回を3者凡退で抑え、快調な立ち上がり。4回に犠牲フライで1点失うモ、要所をしっかりと締め追加点を許しません。

(Yahoo!ブログ:スポーツ) (再掲)

後件の結果（「追加点を許しません」）は、「モ」文に先行する文の流れと一致していることがわかる。したがって、異なる ID のメンバーR（「1点失う」、つまり、劣勢）が、同類の ID の結果（優勢）に導かれることから、逆接の「モ」文が成立している、といえるだろう。

## 1.2 「モ」から「テモ」への拡張

### 1.2.1 同類を示す「モ」から同類・同類条件を示す「テモ」への拡張

同類を示す「モ」と同じように、「テモ」にも、同類、さらには同類条件を示す機能がある。前掲した例を再度検討する。

- 2) 普段別に異常を感じないし、検診の結果を見テモ、やはり異常はなかった。

(丹羽 1998:24) (再掲)

例 2)では、「普段」も「検診」も、同じ結果「異常なし」に導かれている。つまり、同類を示す「テモ」文は、前件を経由してもしなくても同じ結果に導かれるのが特徴である。

同類条件を示す「テモ」文には、条件付けが含まれている。

3) …ここを押しテモ、スイッチが入ります。 (田中 2004:191) (再掲)

例 3)からは、「スイッチが入る」方法は、「ここ」だけではないことが読み取れる。ただし、「スイッチが入る」という結果は、前掲の「検診」の結果とは異なり、もともと存在している状態ではなく、いずれかの条件を経由しないと、結果に達成することはできない。したがって、「テモ」文では、同類を示すだけでなく、〈同類条件〉を示す機能もあるといえる。

### 1.2.2 対立、逆条件、並列逆条件、無条件の「テモ」への拡張

〈対立〉と〈逆条件〉の「テモ」は、それぞれ逆接の「モ」と極端例示の「モ」の拡張用法である。以下の例における「テモ」は〈対立〉である。

4) 日本語はできなくテモ、英語はできた。 (丹羽 1998:24) (再掲)

ここで、「できない」という ID のメンバー（「日本語」）と、「できた」という ID のメンバー（「英語」）結びつけることで、逆接が成立している。ただし、〈対立〉といっても、「テモ」文で際立たされるのは後件である。

また、「逆」の条件からも、順接条件と同じ結果に導かれる〈逆条件〉は、「テモ」文のもっとも典型的な特徴だと考えられる。

5) 彼が行かなくテモ私は行く。 (作例) (再掲)

例 5)は、「彼が行くなら、私も行く」という条件が前提となる。本来、後件 T と反する結果を導く逆条件の R は、実際は T を導いている。したがって、〈逆条件〉を表す「テモ」文では、同じ結果に導かれる条件の ID が、極端に拡張される。これは、逆条件の「テモ」は、極端例示の「モ」文の拡張用法と見なせる。並列逆条件の場合では、順接条件と逆接条件が〈正・反条件〉の形で現れ、同じ結果に導かれる。

6) 結婚すれば、悔恨あり。結婚しなくテモ、悔恨あり。(前田 2009: 193) (再掲)

この場合、結婚してもしなくても、同じ結果「悔恨あり」に導かれる。すると、「悔恨あり」という結果は、非条件的だと考えられる。

〈無条件〉の場合では、「テモ」文は「不定語」と共起する。なので、全面肯定と全面否定の「モ」文の拡張だと見なせる。「不定語+テモ」の形によって、同じ結果に導かれる条件の ID が無限に拡張される。「不定語+テモ+否定」の形式では、同じ結果に導かれる条件の ID が消失する。「不

定語+テモ」は全面肯定と類似し、結果の成立は必然的で、「不定語+テモ+否定」は全面否定と類似し、結果はどの場合でも成立しない、ということがわかる。

### 1.3 反復用法から並列系の「テモ」関連形式への拡張

「テモ」の並列系拡張用法を、以下の図 87 に示す。

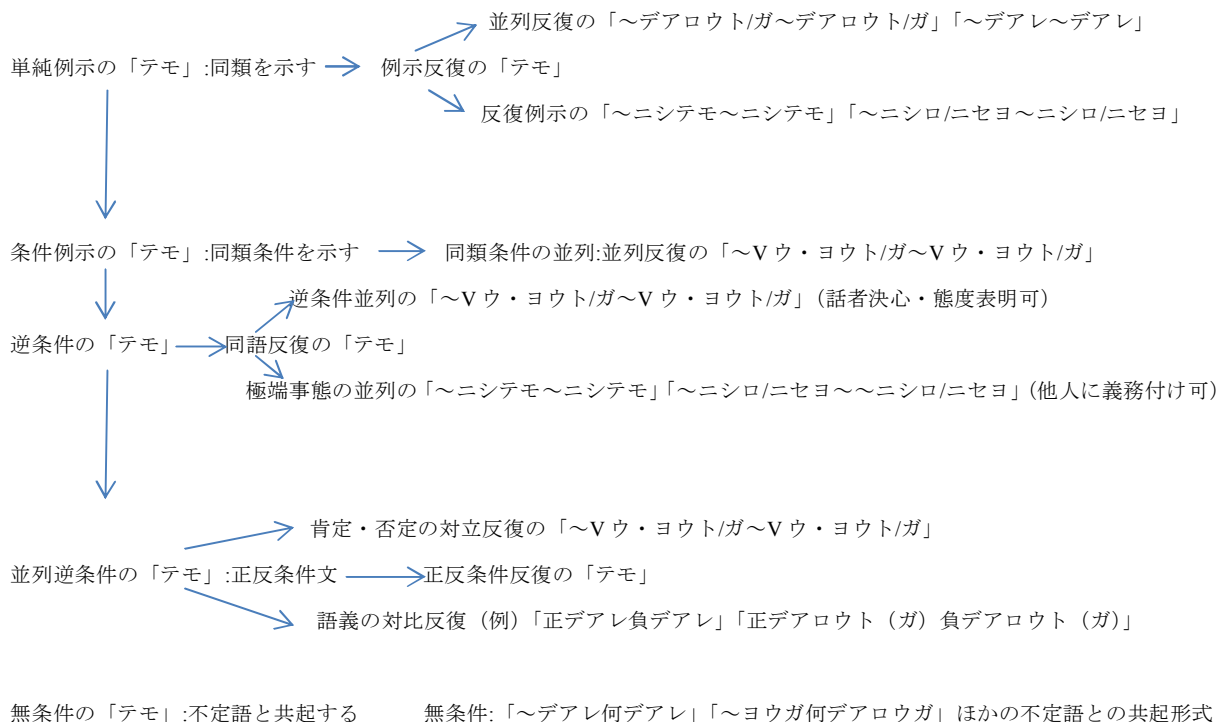


図 87 並列系への拡張

前節にあげた用法のほかにも、「テモ」文には、〈反復〉もあり、さらに、〈例示反復〉、〈同語反復〉と〈対比反復〉に分けられる。

- 7) 明るいネオンの下にいテモ広い通りの真ん中にいテモ高いビルの間を歩いていテモ、不意と寂しさが顔を出す。〈例示反復〉 (田中 2004,199:『北国通信』) (再掲)
- 8) 食べテモ食べテモ太らない。〈同語反復〉
- 9) 食べテモ食べナクテモ太らない。 (前田 2009:188) (再掲)

〈例示反復〉は、単純例示の「テモ」(同類を示す「テモ」)の反復から拡張した用法と見なせる。例 7)では、場所が三つ挙げられるが、どこにいても同じ結果「不意と寂しさが顔を出す」に導かれる。他にも並列反復の「～デアロウト/ガ～デアロウト/ガ」、「～デアレ～デアレ」、反復例

示の「～ニシテモ～ニシテモ」「～ニシロ（ニセヨ）～ニシロ（ニセヨ）」が〈例示反復〉の類似した用法としてある。これらは、いずれも、名詞か名詞節に接続し、並列を表す「モ」文の形式「AモBモ～」と最も近い表現だと見なせる。

条件提示の拡張用法として、〈並列反復〉の「～Vウ・ヨウト/ガ～Vウ・ヨウト/ガ」がある。

- 10) さわの小唄の会が三越劇場で行ナワレヨウト、大舞台の演舞場で行ナワレヨウガ、井熊はただの一度も顔を見せようとしない。 (『たそがれ迷子』) (再掲)

例 10)では、「三越劇場で行われる」ことと、「演舞場で行われる」場合は、同じ結果「井熊はただの一度も顔を見せようとしない」を導いている。同類条件を示す「テモ」文も、短縮すると反復文に言い換えられる。つまり、「そこを押しテモ、ここを押しテモスイッチが入る」のような文となる。「テモ」文では、条件の唯一性が否定されるので、条件を並列して提示できる。他にも、〈同語反復〉の「テモ」文が挙げられる。例えば、「食べテモ食べテモ太らない」では、「食べた太る」という条件付けがある。この条件付けをもとに、「食べテモ太らない」という逆条件文が成立する。また、反復用法「食べテモ食べテモ太らない」の場合も同様である。したがって、条件付け（〈因果関係〉）そのものが否定されている。これと類似し、逆条件の並列「～Vウ・ヨウト（モ）/ガ～Vウ・ヨウト（モ）/ガ」、極端事態の並列「～ニシテモ～ニシテモ」「～ニシロ（ニセヨ）～ニシロ（ニセヨ）」が挙げられる。「～Vウ・ヨウト（モ）/ガ～Vウ・ヨウト（モ）/ガ」の場合、話者が自分の決心や態度を後件で表明することが多く、「～ニシテモ～ニシテモ」「～ニシロ（ニセヨ）～ニシロ（ニセヨ）」の場合では、相手に義務付ける用法が多く見られる。さらに、並列逆条件の「テモ」文の拡張として、対義語反復の「テモ」、さらに肯定・否定反復の「～Vウ・ヨウト/ガ～Vウ・ヨウト/ガ」、語義の対比反復「～デアレ～デアレ」「～デアロウト（ガ）～デアロウト（ガ）」が挙げられる。対義語の反復、あるいは肯定・否定の反復はすべての条件を取り立てていて、そのため後件の結果は非条件的、あるいは、必然的だと考えられる。一方、並列系の「テモ」の関連形式は、不定語と共起し、無条件も表せる。このように、並列系への拡張は、同じ結果に導かれる条件のIDの拡張を示している。

#### 1.4 量的表現と共起する「モ」から注釈系への拡張

さらに「テモ」系構文には、注釈系の「テモ」とその関連形式がある。これは、量的表現と共起する「モ」文に類似した用法だといえる。

まず、副助詞の「モ」は、量的表現と共起する。

- 11) 東京モ西の外れ。 (『新明解国語辞典』) (再掲)

例 11)の「モ」は〈程度・段階〉を示している。参照点モデルで示すと、Rは「東京」で、Tは「西の外れ」で、両者は包含関係である。丹羽(1994)はこれと類似する用法を〈程度量型〉と定義しており、本研究はそれを量的表現と共起する「モ」の拡張と見なす。

前掲の図 86 では、係助詞の「モ」から周辺的な用法及び逆接の「モ」への拡張を示した。同類



ID の拡張と見なせるが、包含関係の場合は、ID の再規定する過程が観察される。包含関係は、さらに程度差が見られる。「 $R > T$ 」の場合、前件 R の過大評価に控え目を与える T を示す「トイッテモ」と、前件 R という認識へ再注釈する T を示す「ニシテモ」が挙げられる。「トイウ+テモ」系列は、前件は常に他人が言っている内容の引用となるが、「スル+テモ」の場合では、前件は仮説と見なされる。「 $R > T$ 」の場合では、「トイッテモ」も「ニシテモ」も、前件 R と比べて、後件 T の方が一般性を示していることがわかる。 $R < T$  の場合では、前件 R の補足 T を示す「トハイエ」と、前件 R という認識の再把握を示す「ニシテモ」が挙げられる。「トハイエ」は、前件 R を認めながら、R のフレームを超過する T を示しているのに対し、「ニシテモ」の場合では、部分より全体的に把握する姿勢が見られる。さらに、R、T は対等的相反関係となっている場合では、「トハイエ」が用いられ、前件 R と後件 T の両立を提示する機能が果たされている。ただし、「トハイエ」の場合、両立を認めながら、前件 R より T のほうに思う傾向が観察される。

量的表現のほかに、逆条件の「テモ」から、注釈系の「テモ」関連形式への拡張が見られる。この場合では、R と T は包含関係ではなく、因果関係が含意されている。前件 R の因果関係から逸脱する T を示す「トハイエ」、前件理由 R の不適格を示す T の「カラトイッテ」、前件から影響を受けず T が成立する「カラトイッテモ」が挙げられる。「カラトイッテモ」は「カラトイッテ」より、後件の恒常性が強く観察される。

「ニシテモ」文では、前件 R における認識への再注釈、あるいは後件 T の適用性が示される。T の適用性を示す形として、一般例証と極端条件例証が挙げられる。

## 12) 家を買うニシテモ、まずお金を貯めてからだ。(『現代日本語文法』2008:150) (再掲)

例 12)では、「家を買う」だけではなく、「車を買う」場合、「海外旅行へ行く」場合にも、後件 T 「まずお金をためてからだ」が適用できる。これは、単純例示の「テモ」(同類を示す)の拡張用法と考えられる。また、極端条件例証は、逆条件にも T が適用できるという例証過程が見られる。極端条件例証は、逆条件の「テモ」の拡張用法と考えられる。

注釈系の「テモ」の関連形式も、不定語と共起し、無条件を表せる。「注釈系」の拡張用法を以下の図 88 に示す。

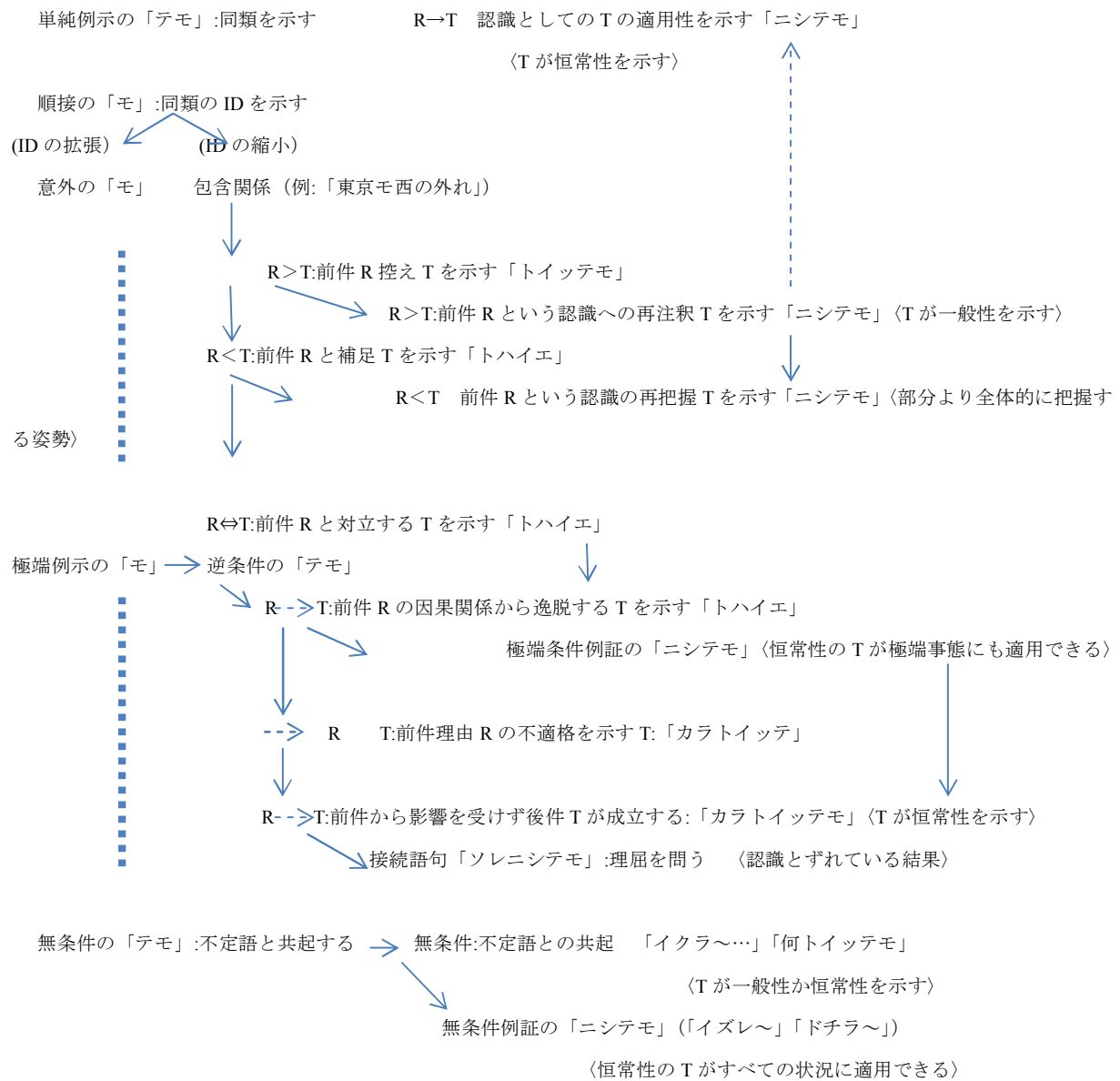


図 88 注釈系への拡張

以上のように、注釈系の「テモ」の関連形式は、後件の T に一般性があり、話者は「テモ」を用いて、T の一般性を際立たせている。また、T が恒常性を示している場合は、あらゆる条件に適用できる。したがって、注釈系も、前件がいかに変化しても、後件 T に導かれるという「テモ」系構文の特徴を有しているといえるだろう。

### 1.5 「テモ」文における条件 ID の拡張

最後に、「テモ」文における条件 ID の拡張の図示する。ID の拡張には、条件の撤去、有利条件の無効化（不利条件の有効化）、極端事態の発生などが挙げられる。これらはいずれも、逆条件の

「テモ」と見なせる。条件の撤去には、一般条件の撤去と必要条件の撤去がある。例えば、「V ナカッタトシテモ」「V ナクテモ」「V ナク (ズ) トモ」といった形式がある。条件の撤去には、許容表現「ナクテモイイ」も挙げられる。条件が撤去されても、結果は変わらず成立している。また、有利条件の無効化 (不利条件の有効化) の形式は「テモ」「トシテモ」である。さらに、極端事態の発生の形式は、「テモ」「トシテモ」「ニシテモ (ニシロ・ニセヨ)」、また、「V ウヨウガ/ト (モ)」である。他にも、慣用表現として、「間違ッテモ」「トイッテモ過言デハナイ」もある。

他にも、条件接続辞「ト、デハ、カギリ」と併用し、条件の競合性を示す例も多く見られる。無条件の場合、「テモ」の関連形式はすべて「不定語」と共起できる。最後に、打消しの「モ」の拡張として、打消しの「テモ」文 (「V タクテモ V ヨウガナイ」「V テモ～V ナイ)」、意志の不実現を示す「テモ」の関連形式「V ウ・ヨウトシテモ」「V ウ・ヨウニモ」がある。この場合、打消しや、意志の不実現によって、後件結果が変わらないことが示されている。

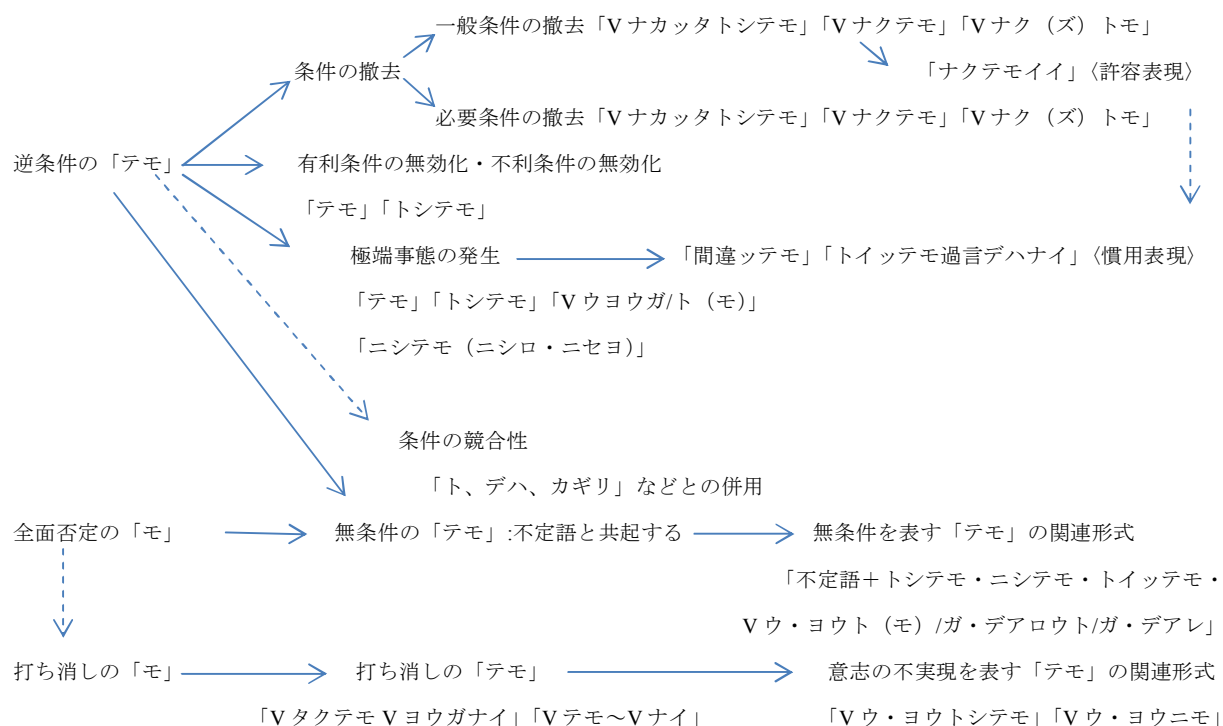


図 89 条件 ID の拡張

以上のように、条件の ID がいかに拡張しても、同じ結果に導かれることが明らかになった。これが、「テモ」系構文の特徴である。

## 2. 事実系逆接構文の用法と拡張

「ノニ」系構文は、前件・後件とも事実となっているのが一般的である。後件は、前件から常識に基づく推論によって導かれるものとは、相反していることから、前件と後件は逆接関係である。「テモ」系構文では、常識が背景としてあっても、それに反して結果に導かれる主観が覗える。

それに対して、「ノニ」系構文では、常識による推論と背反する事実に対し、話者の違和感が読み取れる。つまり、話者は、事実が常識による推論と一致すべきだ、と考えていることがわかる。「ノニ」文と「クセニ」文の関わり合いは、図 90 のように示すことができる。

## 2.1 「ノニ」、「クセニ」の用法の関わり合い

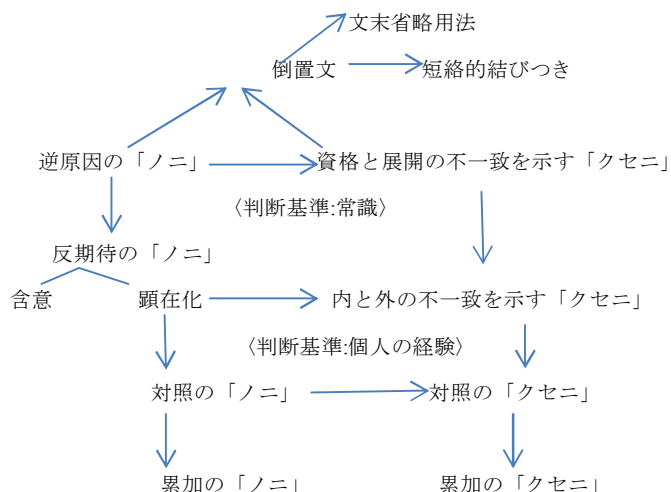


図 90 「ノニ」「クセニ」の用法の関わり合い

図 90 のように、「ノニ」文のもっとも典型的な構文的特徴は逆原因である。逆原因と関連し、「クセニ」文では、〈資格と展開の不一致〉という特徴が見られる。〈資格と展開の不一致〉も、逆原因も、判断基準が常識である。常識が判断基準となり、さらに倒置文用法の「ノニ」文と「クセニ」文も現れる。倒置文の場合では、先行する文は結果事実となり、「ノニ」節や「クセニ」節の R から、常識による推論と反していることがわかる。さらに、文末省略用法と短絡的結び付きのような、話者の情緒が曖昧な部分となる場合と、直接後件にあらわれている場合がある。

「ノニ」文のもう一つの類型は反期待である。反期待の「ノニ」文では、判断の基準は個人の経験である。また、反期待の「ノニ」文には、期待そのものが前件となる場合と、期待が含意される場合がある。期待そのものが前件となる場合(期待の顕在化)、前件と後件は対比関係である。〈期待の顕在化〉と関連し、内と外の不一致を示す「クセニ」がある。期待の顕在化の相反関係と類似し、単純対照を示す「ノニ」文と「クセニ」文がある。対照用法の上、累加の「ノニ」文(礼儀的な用法)と累加の「クセニ」文(非難+非難)が挙げられる。

以上のように、逆原因だけではなく、反期待という形で、前件と後件は逆接関係を成している。対比の「ノニ」には、前件と後件に意味上の対立が見られるが、累加の「ノニ」には、順接関係が見られる。

「ノニ」文と「クセニ」文では、話者の違和感、不満などのニュアンスが読み取れる。「クセニ」には、「ノニ」よりも、主観性がさらに強く、さらに聞き手への働きかけも現れる。「ノニ」文は常識や、期待の結果を要求される特徴があり、「クセニ」文は、〈資格と展開〉の一致や〈内と外〉の一致が要求されている。「クセニ」文の前件・後件の条件付けは「ノニ」文より、話者の個人的

な論理が示されている。「クセニ」文における〈要求〉は、相手の存在が必要とされる。さらに対比的逆接の場合では、「ノニ」文も「クセニ」文も、前件が焦点となり、後件の対立している事実を前件に統一したい傾向が読み取れる。

## 2.2 事実系逆接構文の拡張

事実系逆接構文の拡張もまた、逆原因の「ノニ」と反期待の「ノニ」の2種類に分けられる。まず、逆原因の「ノニ」文と類似した反推論の「ナガラ」文がある。「ナガラ」文では、前件 R から推論された結果と相反した後件 T が成立している。そして、資格と展開の不一致を示す「クセニ」文と類似した、前件状況と相応しくない事態を示す「ナガラ」文がある。さらに、内と外の不一致を示す「クセニ」文と類似した、矛盾を示す「ナガラ」文がある。資格と展開の不一致を示す「クセニ」文と関連して、前件 R を再吟味する「モノノ」文がある。それに、前件 R の既定価値を崩す「トコロデ」文もあるが、既定価値を崩す場合、逆原因のように既定の〈因果関係〉を崩す場合と、前件 R を再吟味する「モノノ」のように前件 R の既定価値を再吟味する「トコロデ」がある。前件 R を再吟味する「モノノ」と関連し、消極的容認の「ナガラ」があげられる。「ノニ」文と「クセニ」文と異なり、「ナガラ」文は、前件と後件の共存を際立てている。「モノノ」文は前件 R の再吟味となり、ある程度で「トイッテモ」文と類似しているが、前件を否定する意は含まれていない。さらに、既定価値を崩す「トコロデ」文では、前件が未実現の場合もあることから、「テモ」系構文と類似しているが、話者は前件を際立て、現場を聞き手に共感し、その崩す過程を示す働きがある点で、「テモ」文とは異なっている。

反期待の「ノニ」文には、期待が含意される不本意を表す「ノニ」文もある。それと関連し、事態の自然進展が遮られる「トコロヲ」文がある。また、期待が顕在化される場合、反期待の「モノヲ」、「モノノ」、「ノヲ」が関連形式となる。期待が顕在化される「ノニ」文では、前件は判断や反事実仮想となる場合はあるが、「モノヲ」「モノノ」「ノヲ」は、反事実仮想のみの場合に用いられる。また、対比的逆接の「ノニ」文と関連し、対比の「トコロガ」、事態の変化を表す「ノガ」、場面の切り替えを示す「ノヲ」と本来の様子から逸脱する「トコロヲ」があげられる。「ノニ」文と較べて、対比的逆接の「トコロガ」「ノガ」「ノヲ」「トコロヲ」には、主観性が現れていない。

逆原因の「ノニ」と関連し、常識による推論の不適格を示す「ニモカカワラズ」文がある。また、反期待の「ノニ」と関連し、不利条件の無効を示す「ニモカカワラズ」文がある。「ノニ」とはことなり、「ニモカカワラズ」文では、話者は前件・後件の背反関係を客観的に捉え、主観性が文中に現れないことが特徴だといえる。事実系逆接構文の拡張を図 91 で示すことができる。

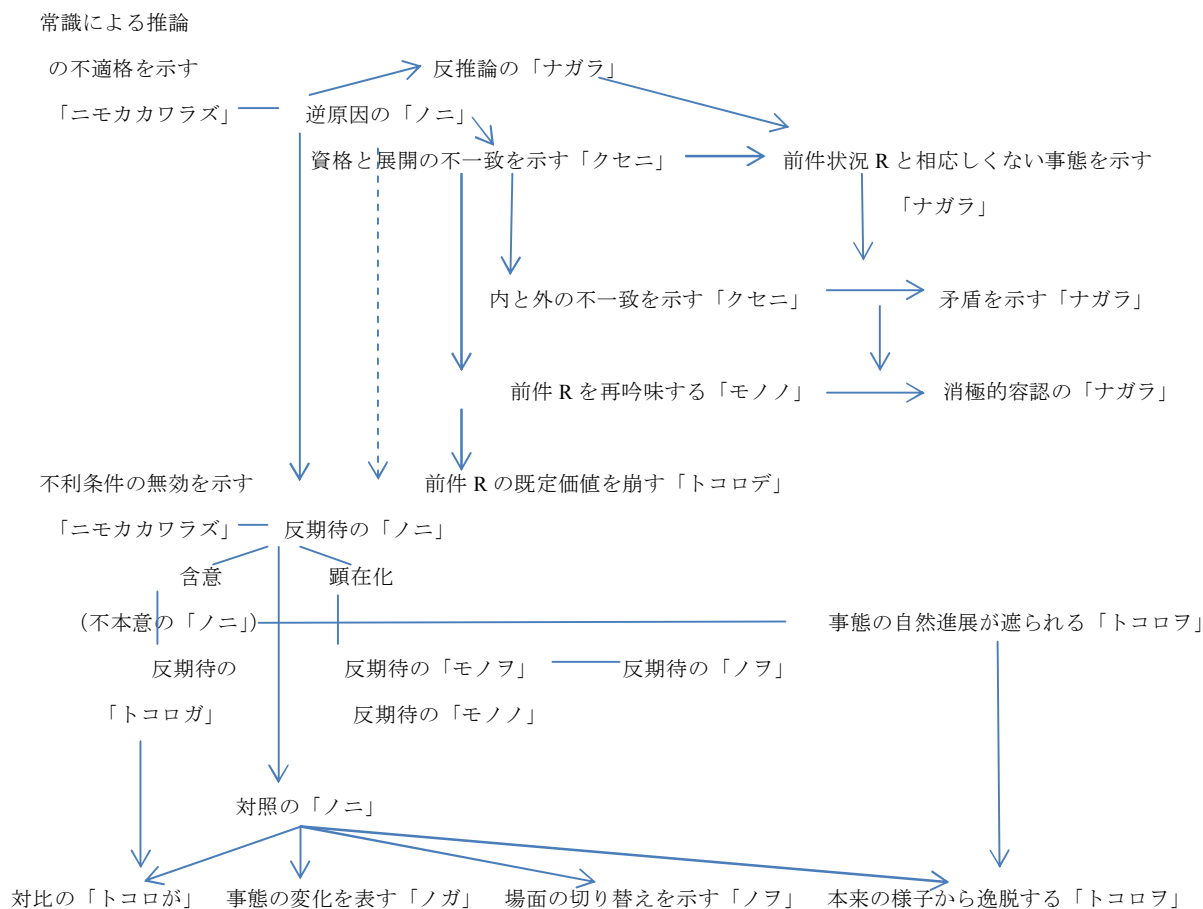


図 91 事実系逆接構文の拡張

「ノニ」文だけでなく、事実系逆接系構文においても話者は、常識による推論や期待と相反する結果事実に対し、不満や違和感を感じている。また、事実系逆接系構文には、話者の主観性が現れない対比的逆接構文と推論的逆接構文もあることが明らかになった。対比的逆接構文では、前件と後件は語義上対立していることから、逆接が成立しているが、推論的逆接構文は、ことから逆接が成立している。

### 3. 条件系逆接構文と事実系逆接構文のまとめ

本研究は、逆接構文を条件系と事実系に分けて考察を行った。条件系は、「テモ」系構文に相当し、事実系は「ノニ」系構文に相当する。条件系逆接構文では、前件条件がいかに変化しても（常識による推論と衝突しても）、同じ結果に導かれることが特徴であり、事実系逆接構文では、前件と後件は常識による推論、あるいは話者の期待によって背反関係となっていることが特徴である。条件系逆接構文では、話者の主観性は後件成立にあり、常識による推論と相反しているが、事実系逆接構文では、話者の主観性は前件にあり、常識による推論や期待と相反する現実の結果（後件事実）に対し、話者は違和感や不満などを感じている。ただし、事実系構文の中には、「ニモカ

カワラズ」といった特例もある。「ニモカカワラズ」文では、前件・後件が常識による推論と相反していても、話者はより客観的な角度で前後件事実を捉えている。

## 終章



## 終章

本章では、全体のまとめと今後の課題について述べる。

### 1. 本研究のまとめ

本節では、各章で明らかになったことを要約する。

序章では、研究の背景、研究の目的と論文の構成を紹介した。

第1章では、逆接構文に関する先行研究を概観し、問題の所在を述べた。そして、本研究の理論的枠組み、研究方法、研究の対象と調査資料について説明した。

第2章では、「テモ」系構文を分析した。「テモ」系構文については、取り立ての「モ」は順接であるから、逆接の「モ」と連続性があると考えられる。さらに「テモ」とその関連形式への拡張を考察した。「テモ」の関連形式には、「スル」＋「テモ」、「トイウ」＋「テモ」、「トモ・ドモ」があり、それぞれ第3、4、5節に分けて考察をした。「モ」と「テモ」の拡張用法について、以下に述べる。

ア.逆接の「モ」は、〈意外〉の用法から転成されたと考えられる。「モ」は、大きく、係助詞、副助詞、接続助詞に分けられる。その中で、「モ」の最もプロトタイプ的な用法は、〈同類を示す〉係助詞である。「モ」によって取り立てられた R の背景には、R と同類のメンバーが暗示されている。これらのメンバーによって、同類の ID が形成される。とりたての「モ」は〈同類を示す〉用法だけでなく、〈意外〉、〈極端例示〉、〈全面肯定・全面否定〉用法もある。〈意外〉の場合、異なる ID のメンバーが、同類の ID に集合されるため、〈意外〉のニュアンスが生じる。この場合、同類の ID が拡張される。〈極端例示〉用法の場合、対立する ID からメンバーが同類の ID に集合される。そのため、〈極端例示〉は〈意外〉用法に含まれる。〈極端例示〉の場合、同類の ID が極端に拡張される。〈全面肯定・全面否定〉の「モ」は、「不定語＋モ」あるいは、「不定語＋モ＋否定」の形で現れる。同類の ID が不定語によって無限に拡張され、否定の場合は ID が形成されないため、ID は失われる。逆接を表す「モ」文における前件と後件は、それぞれ異なる ID に存在している。「モ」によって、前件 R から後件 T に導かれる。異なる ID からのメンバー R も、先行する文と同じ結果 T を導かれる。つまり、同じ結果に導くという点で、「モ」の同類を示す機能は、全ての用法に共通している。

また、「モ」文には、推論的逆接と対比的逆接があり、両者には連続性がある。

ア①直接対立:R と T は、肯定・否定の対となっている。あるいは、R と T は語義の面に対立している。

ア②異なる領域の対立:R と T はそれぞれ、異なる ID に属している。R の入っている ID1 と T が入っている ID2 は、相反関係となっている。例えば、プラス評価とマイナス評価の対立が挙げられる。

ア③心的世界と現実世界の対立:ID1 は心的世界で、ID2 は現実世界である。R は ID1 に入っていて、T は ID2 に入っている。R と T が一致しないと、前後件が逆接関係を成す。

ア④予想と現実の対立:これは、上記③と類似している。ID1 は心的世界の代わりに、フレームと言い換える。フレームでは、R から推論の結果が存在している。その結果と T が対立している。推論の結果と実際の結果の対立から、逆接が形成している。

イ。「テモ」は、「モ」の拡張用法の一つである。「テモ」文の最も典型的な用法は、逆条件である。逆条件とは、「逆」の条件が取り立てられても、結果は変わらず成立することである。つまり、「テモ」文では、条件の唯一性が否定されている。話者は、前件条件がどのように変化しても、後件結果が変わらず成立する点に着目している。

「テモ」文には、〈単純同類提示〉、〈並列条件〉、〈逆条件〉、〈並列逆条件〉、〈無条件〉と〈対立〉がある。〈単純同類提示〉の場合、前件と後件の条件付けには、推論が含意されていない。〈並列条件〉は同類の条件を並べて提示する。逆条件は、〈有効条件の無効化〉と〈無効条件の有効化〉がある。並列逆条件では、結果の成立は必然的である。また、〈無条件〉は「不定語＋〈テモ〉」の形式を取り、後件の結果は、前件の条件と関係なく成立する。さらに〈対立〉は、前件の有利な条件、あるいは不利な条件があっても、後件前件から影響を受けず成立する。「テモ」文では、話者の主観性の焦点が後件にある。

ウ。「スル」＋「テモ」の形式には、「トシテモ」「ニシテモ」、また、「ニシテモ」の関連形式「ニシロ」「ニセヨ」がある。「スル」＋「テモ」の形式のプロトタイプ用法は〈仮説条件〉である。「トシテモ」は、〈反事実的用法〉、〈仮説的用法〉と〈非仮定的用法〉がある。いずれも、もともとな結果に導かれる。「トシテモ」の関連形式である「Vウ・ヨウトシテモ」は、〈意志の不実現〉を表し、結果は変わらない。そのため、「テモ」系構文に含まれる。「ニシテモ」は、前件Rに対する〈認識の再注釈〉と、〈結果の恒常性の例証〉がある。認識を再注釈する場合、前件Rと後件Tには、程度差、或いは包含関係がある。また、〈論理の例証〉は、〈反復例証〉、〈無条件例証〉にわかれる。〈反復例証〉の場合、「ニシテモ・ニシロ・ニセヨ」は、互換できる。また、〈結果の恒常性の例証〉の場合、順接にもなれる。以上に挙げた形式は、結果成立の一般性が示されている。

エ。「トイウ」＋「テモ」の形式において、後件は、前件に対する再注釈を表している。話者は、前件の成立を認め、なおかつ後件で留保的評価を与え、または追加補足する。関連形式として、「トイッテモ」「トハイエ」「カラトイッテ」が挙げられる。「トイッテモ」文において、後件は前件の〈留保的評価〉であり、「トハイエ」文では、話者は、前件の内容の成立を認め、それと対立側面を提示する機能があり、「カラトイッテ」文は、前件で提示された理由の不適格性を示している。「トイッテモ」文における後件は、前件より一般性を有している。「カラトイッテモ」文では、前件から影響を受けず後件が成立することが表される。「トハイエ」の関連形式に、「トハイエドモ」がある。「トハイエドモ」文では、前件と後件は、共に成立し、なおかつ後件が際立たされる。さらに、不定語との共起からみると、不定語と「モ」がともに現れる場合、構文的特徴には、無条件の意味的ニュアンスが読み取れる。

オ。「トモ・ドモ」は、常に「Vウ・ヨウト(モ)」の形で現れる。この「Vウ・ヨウト(モ)」の関連形式には、「Vウ・ヨウガ」、「デアロウト」、「デアロウガ」「デアレ」がある。「トモ・ドモ」の関連形式には、反復用法、「不定語」との共起、「タトエ」との共起が最も頻繁に見られる。この場合、いずれも無条件であり、結果の成立は必然的である。また、「デアレ」文は順接に近く、同じ結果に導かれる前件が列挙されている。「Vウ・ヨウトモ」は、逆条件の一種であり、有利条件の無効化される。また、「Vウ・ヨウトモ」と形態的に類似した「Vウ・ヨウニモ」は、「Vウ・ヨウトシテモ」と同じく、〈意志の不実現〉を表している。「Vウ・ヨウニモ」の表現形式は少な

く、本研究での調査では、「Vウ・ヨウニモ～ナイ」のみである。

第3章では、事実系逆接構文を分析した。具体的な分析対象は、「ノニ」、「クセニ」、「ナガラ・ツツ」、「モノノ・モノヲ・ノヲ・ノガ」、「トコロ節」、「ニモカカワラズ」である。事実系逆接構文の特徴を以下にまとめる。

ア。「ノニ」文には、期待そのものが前件に現れる場合と、期待が含意される場合がある。期待が含意される場合、逆原因文、〈不本意な事態が生み出される状況〉がある。逆原因の場合、「ノニ」文は後件発生の不合理性を示す特徴が見られる。〈不本意な事態が生み出される状況〉では、前件の進行が後件によって中止・邪魔される。さらに、対比的逆接の「ノニ」文では、話者の焦点は前件にあることから、後件も前件と同じ状態になってほしいと話者は考えている。

イ。「クセニ」文は、「ノニ」文と類似しているが、「クセニ」には、間主観性があることから、「ノニ」文と異なりが見られる。「クセニ」文は、禁止、命令文、からかい・揶揄を表す文で用いることができ、前後件とも、主語が一致している必要がある。「クセニ」文は、間主観性という働きかけの対象さえあれば、が成立する。また、「クセニ」文の特徴である〈非難〉が現れるのは、〈不一致〉が読み取れるからである。この〈不一致〉には、〈資格と展開の不一致〉や〈内と外の不一致〉、〈時間軸における前後の不一致〉などがあげられる。〈資格と展開の不一致〉には、文末省略、倒置文といった用法がある。「クセニ」文における〈不一致〉の判断する基準は、常識による推論でもあり、話者の個人的判断にもよる。

ウ。「ナガラ」文では、前件と後件の両立が特徴である。同時進行中で〈不一致〉となっている場合や、RとTが対等する事態の〈不一致〉、また、RとTが対等しない事態で、Rという難点があってもTという利点を容認する〈消極的容認〉が挙げられる。Rから推論された結論と反して、Tが成立する場合、RとTは矛盾する。この点で「ツツ」と「ナガラ」は類似している。

エ。「モノノ」「モノヲ」「ノヲ」「ノガ」は形態上似ているが、実際は、それぞれ特徴が異なる。「モノノ」にも、話者の期待が前件に現れる場合と、期待が含意される場合がある。期待が含意される場合、前件・後件の間に、程度差や包含関係が見られる。また、前件を再吟味し、後件で前件の程度や進度について説明する場合もある。前後件に程度差や包含関係が見られない場合、前後件はともに成立し、比較される。「モノヲ」文では、期待そのものが前件に現れ、その期待は反事実仮想である。「ナガラ」文とは異なり、「モノノ」「モノヲ」文には、話者の論理も見られる。

「ノヲ」「ノガ」の前件・後件は、ともに現実事態であり、「ノヲ」は場面の切り替えや詰問に用いられるのに対し、「ノガ」はただ事態が変化していることを表すのに用いられる。

オ。「トコロデ」「トコロヲ」「トコロガ」は、「トコロ節」の章節で分析した。実際「トコロデ」は、「テモ」系に分類され、「トコロガ」「トコロヲ」は「ノニ」系に分類されることが考えられる。「トコロデ」文では、〈既定価値を崩す〉特徴が見られる。「トコロデ」の関連形式には、「トシタトコロデ」「ニシタトコロデ」「トイッタトコロデ」がある。「トシタトコロデ」は〈逆条件〉、「ニシタトコロデ」は、一般条件や極端条件の例示と判断される。「トイッタトコロデ」は、「トコロデ」と同じく〈既定価値を崩す〉機能を果たしているが、前者の前件は引用された内容と見なされる。「トコロガ」文では、予想が含意される場合は、反期待を示すが、予想が含意されていない場合は、ただの対比関係を示している。「トコロヲ」文では、事態の自然進展が遮られたり、本来の様子から逸脱したりする場合が表せるが、RとTの切り替えから、逆接のニュアンスが読み取

れる。

カ、「ニモカカワラズ」文の前後件は、共に事実である。前件 R と後件 T の相反関係は、常識による推論に基づいたものである。前件 R には、常識や第三者の期待そのものが現れる。話者は、より客観的な視座で、前後件の関係を観察しており、「ニモカカワラズ」文は、より客観的な表現であるといえる。

以上のように、第3章では、事実系逆接構文の成立について分析した。前件・後件は常識による推論や、期待などが関係し、前件と後件は背反関係となっていることが分かった。「テモ」系と「ノニ」系構文の違いは、前後件の事実性が際立たされている。

第4章では、「テモ」系と「ノニ」系構文を体系的にまとめ、プロトタイプ用法と、拡張用法を分析した。

「テモ」系構文は、話者が後件成立に着目し、条件の唯一性が否定される点で、同類を示す「モ」の拡張用法であるといえる。〈同類を示す〉機能から、〈同類条件を示す〉、〈逆条件〉、〈無条件〉に拡張している。

条件の唯一性を否定する点から、並列系の「テモ」と関連形式にも拡張が見られる。また、並列系には、形式として、「テモ」、「Vウ・ヨウガ/ヨウト (モ)」、「デアロウガ/ト (モ)」、「デアレ」、「ニシテモ」、「ニシロ」、「ニセヨ」の反復があり、用法として逆条件の並列と一般例示の並列がある。なお、一般例示は、順接と類似しているといえる。

「テモ」系構文の拡張用法である注釈系は、量的表現と共起する「モ」と連続性が見られる。テモ系構文では、後件 T は、前件 R の再注釈として、一般性、あるいは恒常性を示している。形式には、「トイウ」+「テモ」系列の「ト (ハ) イッテモ」、「トハイエ」、「カラトイッテ (モ)」、「ニシテモ」がある。「トイウ」系列には、「トイウ」文の前件は、引用文が来る傾向があるのに対し、「ニシテモ」の場合、前件には、後件に関する仮説が見られる。

「テモ」系構文の条件 ID の変化は、「テモ」、「トシテモ」、「ニシテモ」、「ニシロ」、「ニセヨ」の文例から見られる。前件で示される条件は、有利条件や不利条件の無効化、条件の撤去など、あらゆる変化を示しているが、後件の結果は変わらないのが「テモ」系構文の共通した特徴と言える。

さらに「テモ」は、「不定語」と共起し、〈無条件〉を表せる。これは、〈全面肯定・全面否定〉の「モ」の拡張用法だといえる。

「ノニ」系構文における前件・後件とも事実であることから、前件・後件の関連付けへの考察が必要だと思われる。事実系逆接構文では、背反関係が肝要であり、これは〈常識による推論〉や〈期待〉と関わりがある。〈常識による推論〉や〈期待〉は、含意される場合と、そのものが前件に現れる場合がある。「ノニ」、「クセニ」文の場合、〈期待〉は、個人的な期待が現れ、「ニモカカワラズ」における〈期待〉は、「みな期待」、あるいは「第三者の期待」という、より客観的なものだと考えられる。また、〈常識による推論〉や〈期待〉が見られない場合、前件と後件は前掲した対比的逆接の典型的な形式—相反関係となっていることは判断出来る。これは逆接論理文の例外と見なせる。

「テモ」系構文に見られる主観性とは、前件からの常識による推論に関わらず、話者が、後件

が成立すると確信していることにある。これに対し、「ノニ」系構文（逆接論理文の場合）では、〈常識による推論〉や〈期待〉通りに沿って発生しない事実へは、話者は違和感を感じている。これが、「ノニ」系構文に見られる主観性である。

以上、条件系、事実系逆接構文のまとめを行った。逆接の接続機能辞には、他にも「ケド」や「ガ」などがあるが、これらは論理文以外のものも表せるので、本研究の考察外とした。他にも、「テモ」系の「タツテ」・「ニツケテモ」、「ノニ」系の「ニヒキカエ」・「ニタイシテ」も考察対象外とした。理由として、「タツテ」は口語に用いられやすく、また、その使用は「テモ」と最も類似していることが、また「ニツケテモ」などの表現は、「ニツケテモ」の形で構成されていて、「後置詞+モ」は、定着された形式とはいえないので、接続機能辞とは言い難い。単純対比を表す「ニヒキカエ」「ニタイシテ」は、論理文の考察対象外のものを見なす。

## 2. 本研究の方法論についての成果と今後の研究課題

本研究は、主観性という視点から、逆接構文における接続機能辞への考察を行った。参照点構造、ステージモデルを活用し、逆接構文の前件・後件の関連づけについて分析した。結論として、条件系逆接（「テモ」系）と、事実系逆接（「ノニ」系）の構文上の特徴が明らかになった。「テモ」系は、プロトタイプである「モ」から、「テモ」の関連形式を「スル」+「テモ」、「トイウ」+「テモ」、「トモ・ドモ」に分けて、考察を行った。また、「ノニ」系と関わり合いのある逆接構文として、〈反期待〉の「ノニ」、〈不一致に対する非難〉の「クセニ」、〈共存的逆接〉を表す「ナガラ（モ）・ツツ（モ）」、〈再吟味〉の「モノノ」、関連形式の「モノヲ」「ノヲ」「ノガ」、既定価値を崩す「トコロデ」及び関連形式の「トコロガ」「トコロヲ」、常識による推論と背反関係となる「ニモカカワラズ」を分析した。結論として、「テモ」系には、条件付けの唯一性を否定し、同じ結果に導かれる条件の ID の拡張を示すのが、「テモ」文のプロトタイプ的な用法である。また、「トイウ」系には、再注釈も見られ、後件には、一般性、恒常性を示している。「ノニ」系構文では、前件と後件は、常に背反関係である。その基準は、常識による推論や話者個人の判断・期待、第三者の期待などの形式になれる。また、「ノニ」系逆接構文は、対比的逆接と密接な関係がある。前件に期待や推論が現れる場合、前件と後件は対比的逆接にもなる。「テモ」系構文の主観性は、後件にあるのに対し、「ノニ」系構文の主観性は、前件にあることが明らかになった。つまり、「テモ」系は、同じ結果に導かれる条件 ID の拡張を示しているが、「ノニ」系は、前件 R と後件 T の相反関係が示されている。この相反関係には、顕在化された相反関係と、含意された相反関係がある。また、前件と後件では情報量に均等な場合と、均等ではない場合がある。このように、「テモ」系は〈真理帰結〉を重視するのに対し、「ノニ」系は〈矛盾〉を重視する。

逆接の体系には、周遍的な用法もある。例えば、「ニツケテモ」「ニヒキカエ」「ニタイシテ」「カトオモウト」「タツテ」などがある。「テモ」系構文と共通している「タツテ」は、話し言葉で、「テモ」の機能と類似し、ほぼ互換できるとされている。多様性を示すために、この形式を省略して、関連形式の「スル」+「テモ」、「トイウ」+「テモ」、「トモ・ドモ」を分析した。また、「ニツケテモ」「ニタイシテ」などといった、「ニツケル」+「モ」、「ニタイスル」+「モ」の形

式は、〈後置詞+モ〉と似ており、さらに、「カトオモウト」などのような、個別的な形式に属するものが挙げられる。一方、「ニヒキカエ」「ワリニハ」のような、「ノニ」系構文の個別的な形式も挙げられる。このような用法についても今後の課題である。

主観性の視点から逆接構文を分析した研究は多くはなく、本研究で行われた認知言語学的なアプローチが、今後の逆接構文の研究に貢献できればと思う。

「テモ」系構文と「ノニ」系構文の周辺的な用法までは、本研究では触れることができなかった。今後はさらに用例を広く収集し、考察範囲を広げ、後置詞形式、複合辞的形式、口語的用法も分析していきたい。

## 参考文献

- 安善柱(2001)『現代日本語の条件表現の論理構造』筑波大学 博士論文
- 安達太郎(1995)「シナイカとシヨウとシヨウカー勧誘文」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版 pp.226-234
- 池上素子(1997)「『のに』・『ながら』・『ものの』・『けれども』の使い分けについて」『北海道留学生センター紀要』1.北海道留学生センター.pp.18-38
- 池上嘉彦(2003)「言語における『主観性』と『主観性』の言語的指標(1)」『認知言語学論考 NO.3』ひつじ書房.pp.1-49
- (2005)「言語における『主観性』と『主観性』の言語的指標(2)」『認知言語学論考 NO.4』ひつじ書房.pp.1-60
- 庵功雄・中西久実子・高梨信乃(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文書店
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 伊藤勲(1987)「『ても』の用法」『国際学友会日本語学校紀要』12.国際学友会.pp.98-128
- (2005)『条件法研究—いわゆる接続助詞をめぐって—』近代文芸社
- 今尾ゆきこ(1993)「『ノニ』の機能」『名古屋大学人文科学研究』22.名古屋大学大学院文学研究科 pp.75-84
- (1994a)「条件表現各論—ガ/ケレド/ノニ/クセニ/テモ—談話語用論からの考察」『世界の日本語教育』4.国際交流基金. pp.92-103
- (1994b)「ケレド」と「ノニ」の談話機能 『世界の日本語教育』4.国際交流基金.pp.147-163
- 岩澤治美(1985)「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56. 国際交流基金.pp.39-50
- 江田すみれ(1985)「逆接『ながら』の意味と用法について」『ILTNEWS』78 早稲田大学語学研究所.
- 大堀壽夫(編)(2002)『シリーズ言語科学3 認知言語学 II:カテゴリー化』東京大学出版会
- 岡野ひさの(2010)「助詞『モ』の周辺の用法はなぜ周辺のなのか—『モ』の文の論理的解釈をもとに考える—」『福岡大学研究部論集』10(7).福岡大学.pp.213-222
- 岡本雅史(2006)「比喩表現における意味論的主観性と語用論的主観性」『日本語用論学会 第9回大会発表論文集』2.日本語用論学会.pp.9-16
- 沖森卓也(2012)『古典文法の基礎』朝倉書店
- 奥田靖雄(1986)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文—その体系性をめぐって—」『教育国語』87. 教育科学研究会国語部会.pp.2-19
- 尾谷昌則(2003)「主体化に関する一考察:接続詞「ケド」の場合—」『日本認知言語学会論文集』3. 日本認知言語学会.pp.85-95
- 小出慶一(1984)「接続助詞ガの機能について」『アメリカ・カナダ連合日本研究センター紀要』7. アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター.pp.30-43
- 加藤薫(1999)「『逆接』の接続詞についての一考察—『しかし』系の接続詞を中心にして」『国語

- 学研究と資料』15.国語学研究と資料の会.pp.33-45
- 加藤重広(2001)「照応現象としてみた逆接—『しかし』の用法を中心に—」『富山大学人文学部紀要』34.富山大学人文学部.pp.47-78
- 加藤理恵(2003)「逆接をあらわす『ところで』の意味記述」『世界の日本語教育』13.国際交流基金.pp.161-173
- 河上誓作(1996)『認知言語学の基礎』研究社出版
- 川口義一(1982)「日本語文型の構文論」『早稲田大学語学教育論集』1.早稲田大学語学教育研究所.pp.40-58
- 川端善明(1958)「接続と修飾—『連用』についての序説」京都大学文学部国語学国文学研究室(編)『国語国文』27(5).pp.296-322
- カッケンブッシュ寛子・尾崎明人(編)(1992)『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会
- 衣畑智秀(2001)「いわゆる『逆接』を表すノニについて—語用論的意味の語彙化—」『待兼山論叢文学篇』35.大阪大学文学部.pp.19-34
- (2003)「ノニ、クセニ、ニモカカワラズ」『日本語文法』3(1).日本語文法学会.pp.3-18
- 北原保雄(1984)『日本語文法の焦点』教育出版
- (2003)『朝倉日本語講座 文法Ⅰ』朝倉書店
- 楠本徹也(2000)「『トコロ』の意味と機能に関する一考察」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』26.東京外国語大学 留学生日本語教育センター.pp.77-87
- 国広哲弥(1992)「『のだ』から『のに』・『ので』へ—『の』の共通性」カッケンブッシュ寛子他(編)『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会, pp.17-34.
- 言語学研究会・構文論グループ(1985)「条件付けを表現するつきそい・あわせぶん(一)—その1.まえがき—」『教育国語』81.教育科学研究会国語部会.pp.19-31
- 言語学研究会・構文論グループ(1986)「条件付けを表現するつきそい・あわせぶん(四)」『教育国語』84.教育科学研究会国語部会.pp.49-68
- 小泉保(1987)「譲歩文について」『言語研究』91.日本言語学会.pp.1-14
- 甲田直美(1998)「関係表現の系譜」『滋賀大学教育学部紀要』2(48).滋賀大学教育学部.pp.143-155.
- 小金丸春美(1990)「相手の推論を否定する形式をめぐって『～トイッテモ』と『～カラトイッテ』」『梅花短大国語国文』3.梅花女子短期大学国語国文学会.pp.25-41
- 小林賢次(2005)「条件表現史にみる文法化の過程」『日本語の研究』1(3).日本語学会.pp.1-11
- 小林幸江(2000)「『トコロ』の意味と用法—文献に見る『トコロ』の統語的機能—」『東京外国語大学 留学生教育センター論集』26.東京外国語大学 留学生日本語教育センター.pp.221-229
- 才田いずみ(1980)「『のに』と『ても』」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』3.アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター.pp.37-47.
- 定延利之(1995)「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版.pp.227-260
- (1999)『よくわかる 言語学』アルク
- (2000)『認知言語論』大修館書店
- 坂原茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版会



- 坂原茂(編)(2000)『認知言語学の発展』ひつじ書房
- 佐久間鼎(1983a)『現代日本語の研究』くろしお出版
- 佐久間鼎(1983b)『現代日本語の表現と文法』くろしお出版
- 佐竹久仁子(1984)「～もので/～ものの/～ものを」『日本語学』3(10).明治書院.pp.162-185
- 佐藤直人(1997)「日本語ナガラ節の意味と位置相関」『言語科学』1.言語科学会.pp.63-74
- 澤田治美(1993)『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』ひつじ書房
- 澤田治美(編)(2011)『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』ひつじ書房
- 澤田美恵子(2004)「いわゆる詠嘆の『モ』について—対象再認識という心的処理」『日本語文法』4(2).日本語文法学会.pp.153-168
- 清水啓子(2010)「日本語における主観性表現」『Language Issues』Vol.17.Prefectural University of Kumamoto. pp.1-12
- 砂川有里子(2005)『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』くろしお出版
- 孫宇雷(2013a)「逆接条件文における主観性について—『テモ』を中心に—」『指向』10.大東文化大学外国語学研究科日本言語文化学専攻応用日本語研究会. pp.114-124
- (2013b)「逆接条件文における主観性について—『ニモカカワラズ』を中心に—」『語学教育研究論叢』30.大東文化大学語学教育研究所. pp.93-106
- (2013c)「逆接条件文における主観性について—『ノニ』をめぐって—」『外国語学研究』14.大東文化大学外国語学研究科. pp.203-209
- (2013d)「逆接条件文における主観性について—『クセニ』を中心に—」『外国語学会誌』42.大東文化大学外国語学科. pp.203-215
- (2014a)「逆接を表す『モ』の機能分析—典型的な『モ』の用法との連続性をめぐって—」『大学外语研究文集』15.长春出版社. pp.406-416
- (2014b)「逆接構文における主観性についての研究—『ヨウガ』『ヨウト』をめぐって—」『外国語学会誌』43.大東文化大学外国語学科. pp.261-271
- (2014c)「逆接構文における主観性の研究—『モノノ』『モノヲ』『ノヲ』『ノガ』の場合—」『外国語学研究』15.大東文化大学外国語学研究科. pp.183-190
- (2014d)「逆接構文における主観性についての—考察—『トコロデ』『トコロヲ』『トコロガ』の場合—」『語学教育研究論叢』31.大東文化大学語学教育研究所. pp.141-155
- 高橋太郎(1978)「『も』によるとりたて形の記述的研究」『研究報告週』1.国立国語研究所.pp.1-52
- (編)(2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 田窪行則(1984)「現代日本語の『場所』を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12 大阪外国語大学.pp.89-115
- (1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6(5).明治書院 pp.37-48
- 田中寛(1989)「逆接の条件文『ても』をめぐって」『日本語教育』67.日本語教育学会.pp.139-158.
- (1996)「『トコロ節』における意味の連鎖性」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』8.早稲田大学.pp.1-58
- (2004)『日本語複文表現の研究 接続と表現の構造』白帝社

- (2001)『日本語複文表現の態様』大東文化大学外国語学部(試用版)
- (2008)『日本語の心理構造—言語行動心理学序説—』
- (2010a)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- (2010b)「『言う』と『思う』の言語学—日本語の発話と思考の発想様式—」『言語学ワークショップ グローバリゼーションの中の日本語 その感性と活力』立命館大学国際言語文化研究所.pp.145-179
- (2011)『動詞性後置詞用例・用法辞典』(試用版)大東文化大学外国語学研究科日本語文化学専攻応用日本語学研究会
- (2012)『日本語文末機能辞用例・用法辞典』(試用版)大東文化大学外国語学研究科日本語文化学専攻応用日本語学研究会
- (2013)『複合辞で学ぶ日本語文法 中上級日本語文型の意味と用法 接続機能辞編』(試用版)大東文化大学
- (2014)『文章表現と理解のための日本語接続機能辞用例・用法辞典』(試用版)大東文化大学外国語学研究科日本語文化学専攻応用日本語学研究会
- 田野村忠温(1989)「不適条件表現に関する覚書—現代日本語の二種文法現象をめぐって—」『奈良大学紀要』17.奈良大学. pp.164-176
- (1991)「『モ』の用法についての覚書—『君もしつこいな』という言い方の位置づけ—」『日本語学』10(9).明治書院.pp.80-86
- 陳芬慧(1999)「接続助詞『～ながら』について—『～ても』と比較して—」『世界の日本語教育』9.国際交流基金.pp.163-175
- 塚原鉄雄(1958)「接続助詞—ば・と・ども・とも・と・て・つつ・で・を・に・が—」『国文学：解釈と鑑賞』23(4).至文堂 pp.73 - 92
- 角田三枝(2003)「日本語の節・文の接続とモダリティ」お茶の水女子大学.博士論文
- (2004)『日本語の節・文の接続とモダリティ』くろしお出版
- (2006)「譲歩節と「節接続とモダリティの階層」(その2)」『成城文芸』197.成城大学文芸学部.pp. 136-120
- 坪根由香里(1996)「終助詞・接続助詞としての『もの』の意味:『もの』『ものなら』『ものの』『ものを』」『日本語教育』91.日本語教育学会.pp.37-48
- 寺村秀夫(1978a)「『トコロ』の意味と機能」寺村 1992 所収.pp321-336
- (1978b)『日本語の文法(上)』国立国語研究所
- (1981)『日本語の文法(下)』国立国語研究所
- (1982)「日本語における単文、複文の認定問題」『講座日本語学 11』.明治書院. pp.202-220
- (1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- (1992)『寺村秀夫論文集Ⅰ』くろしお出版
- 時枝誠記(1955)『国語学言論 続編』岩波文庫
- 戸村佳代(1988)「日本語における二つのタイプの譲歩文—「ノニ」と「テモ」—」『文芸言語研究 言語篇』13.筑波大学文芸言語学系.pp.123-133
- 中右実・西村義樹(1998)『構文と事象構造』研究社

- 中尾有岐(2008)「並列事態が想定しにくいモについて」『日本語文法』8(1).日本語文法学会.pp.36-52
- 中崎温子(2006)「『もらう』系コミュニケーションにおける『話者主観性』ハイアラーキー」『言語と文化』24.愛知大学.pp.1-20
- 中里理子(1996)「逆接確定条件の接続助詞—ガ・ノニ・モノノ・テモ・ナガラについて—」『言語文化と日本語教育』13.御茶ノ水大学.pp.160-170
- 中溝朋子(2002)「ノニについて—接続的用法と副詞的用法—」『日本語教育』114.日本語教育学会.pp.20-29
- 中俣尚己(2008)「日本語のとりたて 助詞と並列助詞の接点—「も」と「とか」の用法を中心に—」『言語文化学研究 言語情報編』3.大阪大学人間社会学科言語文化学科. pp.153-176
- 中村芳久(1998)「認知類型論の際立ち vs.参照点」Proceedings of Kansai Linguistic Society. Vol.18. Kansai Linguistic Society.pp.252-62
- 中本敬子・李在鎬(編)(2011)『認知言語学研究の方法:内省・コーパス・実験』ひつじ書房
- 永野賢(1951)『国立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版
- 生越直樹(編)(2002)『系列言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会
- 生田目弥寿(1982)「接続の表現」『日本語教育事典』大修館書店.pp.211-214
- 西原鈴子(1985)「逆接表現における三つのパターン」『日本語教育』56.日本語教育学会. pp.28-39
- 仁田義雄(1987)「条件づけとその周辺」『日本語学』6(9).明治書院.pp.13-27
- (編)(1995)『複文の研究(上)(下)』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版
- (2008)『現代日本語文法6 複文』くろしお出版
- 丹羽哲也(1998)「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』50(10).大阪市立大学文学部.pp.743-777
- 沼田善子(1986)「第2章とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』.凡人社.pp.105-225
- (1994)「その後の『も』—『も』の意味を再考する—」『文芸言語研究言語編』25.筑波大学 pp.129-152
- (1995)「現代日本語の『も』」「も」の言語学』ひつじ書房.pp.13-76
- (2009)『現代日本語取り立て詞の研究』ひつじ書房
- 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則(2002)『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店
- 野田時寛(1979)「日本語の複文の分類について」『中央大学論集』18.中央大学. pp.13-27
- 蓮沼昭子(2001)『セルフマスター系列 条件表現』くろしお出版
- 早瀬尚子・堀田優子(2005)『認知文法の新展開』研究社
- 原田登美(1998)「逆接の接続助詞—『ケド』『ノニ』『クセニ』—」『言語と文化』2.甲南大学.pp73-84
- 久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 日野資成(2001)『形式語の研究—文法化の理論と応用—』九州大学出版会
- 藤井聖子(2002)「所謂『逆条件』のカテゴリー化をめぐる—日本語と英語の対比から—」生越直樹(編)『系列言語科学4 対照言語学』東京大学出版会.pp.249-280
- 藤田保幸(1998)「複合助辞『トイッテモ』『トイッテ』『トハイエ』について」『滋賀大國文』36.滋賀大学.pp.12 - 25

- 藤田保幸・山崎誠（編）(2006)『複合辞研究の現在』和泉書院
- 藤田保幸(2008)「複合接続形式『～(よ)うと/(よ)うが』をめぐって」『日本言語文化研究』12. 日本言語文化研究会.pp.13-28
- (2013)『形式言語論集』和泉書院
- 堀川智也(1994)「文の階層構造を考えることの意味」『日本語・日本文化研究』4.大阪外国語学大 学.pp.31-44
- 前田直子(1991a)「『論理文』の体系性—条件文・理由文・逆条件文をめぐって—」『大阪大学日本 学年報』10.大阪大学.pp.29-42
- (1991b)「条件文分類の一考察」『日本語学科年報』13.東京外国語大学.pp.55-79
- (1994a)「逆接条件文『～テモ』をめぐって」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』くろ しお出版.pp.149-167
- (1994b)「条件表現各論—テモ/タッテ/トコロデ/トコロガー—」『日本語学』13(9).明治書院 pp.104-113
- (1995a)「ケレドモ・ガとノニとテモ—逆接を表す接続形式—」宮島達夫・仁田義雄（編） 『日本語類義語表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版.pp.495-505
- (1995b)「逆接を表わす『ノニ』の意味・用法 J『東京大学留学生センター紀要』5.東京 大学留学生センター.pp.99-123
- (2002)「複文の種類と日本語教育」上田博人（編）『シリーズ言語学5 日本語と言語教育』 東京大学出版会.pp.249-272
- (2009)『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1989)『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- (1992)「表現の主観性と視点」『日本語学』11(9).明治書院.pp.28-34
- 益岡隆志（編）(1993)『日本語の条件表現』くろしお出版
- (1997)『新日本語文法選書 複文』くろしお出版
- 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎（編）(2006)『日本語文法の新地平 1—形態・叙述内容編—』くろ しお出版
- (2006)『日本語文法の新地平 2—文論編—』くろしお出版
- (2006)『日本語文法の新地平 3—複文・談話編—』くろしお出版
- (2013)『日本語構文意味論』くろしお出版
- 益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦（編）(2014)『日本語複文構文の研 究』ひつじ書房
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度の試み」『早稲田大学日本語研究センター紀要』2.早稲 田大学.pp.27-52
- 三上章(1953)『現代語法序説』くろしお出版
- (1993)『日本語の論理』くろしお出版（第11刷）
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- (1997)『現代日本語研究』三省堂

- 宮城信(2006)「ナガラ節の意味論的制約」『筑波日本語研究』11.筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室.pp.30-45
- 宮崎和人・野田春美・安達太郎・高梨信乃(著)(2002)『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 宮崎茂子(1984)「～たところで/～たところでは」『日本語学』13(10).明治書院.pp.35-41
- 宮島達夫・仁田義雄(編)(1995)『日本語類義語表現の文法(下) 複文・連文編』くろしお出版
- 宮地裕(1983)「二文の順接・逆接」『日本語学』2(12).明治書院.pp.39-47
- 三尾砂(1995)『話し言葉の文法』くろしお出版
- 睦宗均(2001)「『P ナガラ Q』節の意味と機能」『日本語・日本文化研究』11.大阪外国語学大学日本語講座.pp.85-96
- 村田美穂子(2005)『文法の時間』至文堂
- 靱山洋介(1989)「現代日本語『トコロ』の意味的・統語的・文体的特徴」Litteratura10.名古屋工業大学外国語研究室.pp.5-15
- (1992)「多義語の分析—空間から時間へ—」カッケンブッシュ寛子他(編)『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会.pp.185-199
- 靱山洋介(1993)「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐる—」『日本語・日本文化論集』1.名古屋大学留学生センター.pp.35-57
- 森重敏(1955)「接続助詞の分類」京都大学文学部国語学国文学研究室(編)『国語国文』24(2).pp.99-155
- 森田良行(1983)『日本語の表現』創林社
- 森山卓郎(2000)『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房
- 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』寶文館
- 山梨正明(1995)『認知文法論』.ひつじ書房.
- (2000)『認知言語学原理』くろしお出版
- (2004)『ことばの認知空間』開拓社
- 吉村公宏(1995)『認知意味論の方法:経験と動機の言語学』人文書院
- (2004)『はじめての認知言語学』研究社
- 渡部学(1995)「ケド類とノニ類—逆接の接続詞—」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義語表現の文法(下) 複文・連文編』くろしお出版.pp.557-564
- (2000)「逆接表現の記述と体系 ケド、ワリニ、ノニ、クセニをめぐる」『現代日本語研究』12.大阪大学大学院文学研究科.pp.112-133
- (2001)「接続助詞の語彙的な意味と文脈的な意味—クセニとノニの記述と分析を巡って—」『日本語科学』10.国立国語研究所.pp.34-55
- 渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房
- 和田礼子(1998)「逆接か同時進行かを決定するナガラ節のAspectについて」『日本語教育』97.日本語教育学会.pp.94-105

英文

- Bybee, J.L. (2010) *Language, Usage, and Cognition*. Cambridge UP.
- Chisato Kitagawa(1972) *Expressions of purpose, emotive response and contrariness to expectation:a study of Japanese No Ni constructions*.Thesis (Ph.D.) University of Michigan.
- Cruse, A. & Croft, W. (2004) *Cognitive Linguistics*. Cambridge UP
- Evans, V. & Green, M. (2006) *Cognitive Linguistics*. LEA
- Fillmore, C.J. (2003) *Form and Meaning in Language*. CSLI.
- Frawley, W. (1992) *Linguistic Semantics*. LEA.
- Heine, B. (1997) *Cognitive Foundations of Grammar*. Oxford UP.
- Holiday,M.A.K and Ruqaiya Hasan(1976) *Cohision in English*. London:Longman
- Kovecses, Z. et al. (2006) *Language, Mind, and Culture: A Practical Introduction*. Oxford UP
- Lakoff, Robin Tolmach(1971) “ If’s, and’s,and but’sabout conjunction”.In Fillmoreand Langendoen.Studies in Linguistic Semantics. pp.115–50.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*. 2 vols. Cambridge UP.
- (1982). “Deixisand Subjectivity:Loquor,ergo sum?”.In RobertJ.Jarvellaand Wolfgang Langacker,Ronald W. (1984) “Active-zones”.Proceedings of the Annual Meeting of the 10th Berkeley Linguistics Society.pp.172-188
- (1987)*Foundations of Cognitive Grammar Vol.1: Theoretical Prerequisites*.Stanford:Stanford University Press.
- (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter
- (1993) “Reference point of Constructions”.*Cognitive Linguistics*4,pp.1-38
- (1999) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- (2002) “Dixis and Subjectivity”.In Frank Brisard(ed.)*Grounding:The Epistemic Footing of Deixis and Reference*..Berlin:Mouton de Gruyter. pp.128-152
- (2006) “Subjectification, Grammaticalization and Conceptualarche types”.Inangeliki Athanasiadou,Coastas Canakisand Bert Cornillie(eds.)pp.17-40
- (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Klein(eds.)*Speech,Placeandaction:Studies in Deixisand Related Topics*. New York:Wiley.pp.101-124.
- Talmy,L. (1978).“Figure and Ground in complex sentences”. In *Universals of Human Language:Syntax*. Vol.4.Stanford: Stanford University Press.pp.25-49
- (2000) *Toward a Cognitive Semantics* 2 vols. MIT Press.
- Traugott, Elizabeth Closs (1982). “ From Propositional to Textual and Expressive Meanings:Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization”. In *Perspectives on Historical Linguistics*.pp.245-271
- (2010)“subjectivity and (Inter)subjectification:a Reassessment”.In Kristin Davidse,Lieven Vandelanotteand Hubert Cuyckens(eds.) pp.29-71

Sweetser, E. & Dancygier, B. (2005) *Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions*. Cambridge UP.

## 辞書

- グループジャマシイ (著) (1998) 『日本語文型辞典』 くろしお出版  
国立国語研究所 (編) (1951) 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』 秀英出版  
小学館国語編集部 (編) (2000) 『日本国語大辞典』 (第二版) 小学館  
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 (編) (2009) 『岩波国語辞典』 (第七版) 岩波書店  
日本語文法学会 (編) (2014) 『日本語文法事典』 大修館書店  
辻幸夫 (編) (2013) 『新編認知言語学キーワード辞典』 研究社  
林巨樹・安藤千鶴子 (編) (2001) 『全訳古語辞典』 大修館  
牧野成一・筒井道雄 (編) (1995) 『日本語基本文法辞典』 The Japan Times  
———(2008) 『日本語文法辞典』 The Japan Times  
益岡隆志・田窪行則 (編) (1992) 『基礎日本語文法改訂版』 くろしお出版  
松村明 (編) (2006) 『大辞林』 (第三版) 三省堂  
森田良行・松木正恵 (著) (1989) 『日本語表現文型—用例中心・複合辞の意味と用法—』 アルク  
山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 (編) (2011)  
『新明解国語辞典』 (第七版) 三省堂

## 用例出典一覧

### 言語コーパス

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』2012（中納言）国立国語研究所 <https://chunagon.ninjal.ac.jp>

『新潮文庫 100 冊』2014 新潮文庫 <http://100satsu.com/>

『日中対訳コーパス』2002,2003 北京日本学研究中心

### 新聞資料

〈電子版〉

『sports watch』 [http://news.livedoor.com/category/vender/sports\\_watch/](http://news.livedoor.com/category/vender/sports_watch/)

『日刊スポーツ』日刊スポーツ新聞社 <http://www.nikkansports.com/policy/copyright.html>

〈紙質版〉

『朝日新聞』朝日新聞社

### 小説

山崎豊子(2014)『約束の海』新潮社



## 論文初出掲載一覧

以下に、本研究の元となった論文を発表した。

- 第2章 第1節 「逆接を表す『モ』の機能分析—典型的な『モ』の用法との連続性をめぐって—」《大学外语研究文集》15号 pp.406-416 长春出版社 2014
- 第2章 第2節 「逆接条件文における主観性について—『テモ』を中心に—」『指向』10号 pp.114-124 大東文化大学外国語学研究科日本言語文化学専攻応用日本語研究会 2013
- 第2章 第5節 「逆接構文における主観性についての研究—『ヨウガ』『ヨウト』をめぐって—」『外国語学会誌』43号 pp.261-271 大東文化大学外国語学科 2014
- 第3章 第1節 「逆接条件文における主観性について—『ノニ』をめぐって—」『外国語学研究』14号 pp.203-209 大東文化大学外国語学研究科 2013
- 第3章 第2節 「逆接条件文における主観性について—『クセニ』を中心に—」『外国語学会誌』42号 pp.203-215 大東文化大学外国語学科 2013
- 第3章 第4節 「逆接構文における主観性の研究—『モノノ』『モノヲ』『ノヲ』『ノガ』の場合—」『外国語学研究』15号 pp.183-190 大東文化大学外国語学研究科 2014
- 第3章 第5節 「逆接構文における主観性についての一考察—『トコロデ』『トコロヲ』『トコロガ』の場合—」『語学教育研究論叢』31号 pp.141-155 大東文化大学語学教育研究所 2014
- 第3章 第6節 「逆接条件文における主観性について—『ニモカカワラズ』を中心に—」『語学教育研究論叢』30号 pp.93-106 大東文化大学語学教育研究所 2013

## 謝辞

このたび、ここ数年にわたる複文研究のなかで逆接構文についての論考をまとめることができた。日本語学研究を志すにあたり、筆者は、日中同形語の研究を一方で進めてきたが、大東文化大学大学院日本語文化学専攻田中寛教授の指導のもとで、複文研究に着手したのは三年前であった。以前からも複文については少なからぬ関心を抱いていたが、ここに逆接構文についての体系的な研究を著すことができたことを嬉しく思う。

まず論文執筆に当たり、精神的な面からも多大な励ましとご指導をいただいた田中寛教授に深甚の感謝の意を表したい。田中先生からは文法研究の方法論、用例の収集分析の方法など、基本的な研究の姿勢について、絶えず叱咤激励をいただいた。また、上村圭介准教授にはコーパス分析について貴重な提言、ご助言をいただいたことに心より感謝申し上げる。また、福盛貴弘准教授からは言語学研究についての重要な示唆をいただいたことに心より感謝申し上げる。また、中国言語文化学専攻の高橋弥守彦教授には、日中言語対照研究会例会で発表の機会をいただいただけでなく、貴重なご助言をいただいた。ここに心から感謝申し上げる。また、前田直子先生のご好意から、尾谷昌則先生（法政大学）と意見交換の場を持つことができた。パソコン関連の問題については、上地宏一先生（大東文化大学）から、また、神野智久さん（大東文化大学）には校正の段階で大変お世話になった。諸氏に重ね重ね御礼申し上げます。

大東文化大学大学院に進学して以来、大学院事務室の皆様には多大なご支持をいただいた。また、語学教育研究所の益子様にも励ましのお言葉をいただいた。また、中国から物心両面から私を支えてくれた両親、母校の大連外国語大学の関係者にも深く感謝申し上げます。

母校での日本語授業のため、しばしば中国と日本を行き来する研究生活が続いたが、職務を心配してくださり、便宜を図ってくださった田中寛教授に心から感謝申し上げます。また、東洋大学留学時代の東洋大学王亜新教授にも、種々の相談に乗っていただき、心から感謝申し上げます。

大学院後期課程在籍中は、同窓の院生との議論が非常に有益であった。大東文化大学大学院生を中心とした応用日本語学研究会を主宰してくださった田中寛教授、また日本語学会、関東日本語談話会、日本語／日本語教育研究会では諸先生から暖かいご助言をいただくことができた。これは私の留学時代の貴重な財産である。

本研究においてひとまず複文の研究の一端をまとめることができたが、残された問題は数多い。

一つの大きな問題は本研究で考察の母体となった主観性の概念である。この解明のために本研究では認知言語学の手法を一部援用したが、必ずしも十分ではなく、また有効かどうかも今後実証していく必要がある。そもそも「主観性」とは何か、日本文法でいうところの陳述、さらにモダリティとムードとどのような相関にあるのかを多くの研究から論究していかなければならない。これはまた、外国人日本語学研究者の背負って立つ大きな課題である。筆者はこの大きな目標に向かって、複文研究の視点から研究を続けていきたい。さらに、逆接と対極にある順接についても、並列、対比といった現象と合わせて広い視野から取り組まなければならない。

筆者、母校の大連外国語大学を卒業後、大学院に進み、かたわら日本語教師として研鑽をつんできた。これからも研究と教学の両輪のなかで、日本語教育のための文法研究を、本研究を出発点として進めていきたいと思う。

2014年10月末日